

東アジアにおける「声の伝承」と漢字の出会いについての研究：中国雲南省ペー族文化と日本古代文学

著者名(日)	遠藤 耕太郎, 岡部 隆志, 工藤 隆, 富田 美智江, 飯島 奨, 草山 洋平, 李莉
雑誌名	共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所紀要
巻	19
号	2
ページ	1-264
発行年	2013-02
URL	http://id.nii.ac.jp/1087/00002930/



共立女子大学・共立女子短期大学
総合文化研究所紀要
第19号 (3-2) 2013年

東アジアにおける「声の伝承」と
漢字の出会いについての研究
—中国雲南省ペー族文化と日本古代文学—

研究代表者	遠藤	耕太郎 (文芸学部・准教授)
研究分担者	岡部	隆志 (文科・教授)
研究協力者	工藤	隆 (大東文化大学・教授)
	富田	美智江 (流通経済大学・専任所員)
	飯島	奨 (専修大学・非常勤講師)
	草山	洋平 (大東文化大学・非常勤講師)
	李莉	

目 次

総序 (遠藤耕太郎)	(1)
I. 山花碑注釈集成	(7)
1. 研究の目的と方法 (遠藤耕太郎)	(8)
1-1. 山花碑研究の目的	(8)
1-2. 山花碑概要	(8)
1-3. 山花碑研究史	(10)
1-4. 漢字による自民族語表記システムの概要	(12)
2. 山花碑全訳 (古代の会編)	(15)
3. 山花碑注釈集成 (古代の会編)	(21)
付録. 山花碑拓本	(103)
II. ペー曲台本集成	(105)
1. 研究の目的と方法 (遠藤耕太郎)	(106)
2. ペー曲の起源 (飯島奨)	(107)
3. 「梁山伯と祝英台」とペー曲 (富田美智江)	(110)
4. ペー曲台本集成 (古代の会編)	(113)
4-1. 「柳蔭記」—趙丕鼎本〔ア〕	(114)
4-2. 「柳蔭記」—楊興庭本	(126)
4-3. 「柳蔭記」—楊正華本	(136)
4-4. 「柳蔭記」—釈読本 (趙丕鼎本〔イ〕)	(146)
4-5. 「柳蔭記」—楊漢本・趙丕鼎本〔ウ〕	(150)
4-6. 「月里桂花」—蘇貴本・剣川県芸文志本	(155)
5. 歌い手へのインタビュー集 (遠藤耕太郎・岡部隆志・富田美智江)	(164)
5-1. 2011年インタビュー集	(164)
5-2. 2012年インタビュー集	(173)
付録.	
1. 英台宝巻 (1906年版, 早稲田大学図書館蔵)	(183)
2. ペー曲台本の音仮名率 (富田美智江)	(185)
III. 南詔徳化碑訳注	(187)
1. 南詔徳化碑概説 (飯島奨・遠藤耕太郎)	(188)
2. 南詔徳化碑訳注 (古代の会編)	(193)
IV. 論考編	(215)
1. ペー曲から古事記を考える I—歌謡の表記— (遠藤耕太郎)	(216)
2. ペー曲から古事記を考える II—訓注の表記— (遠藤耕太郎)	(226)
3. 「山花碑」から万葉集を考える (遠藤耕太郎)	(233)
4. 白族の表記文字「ペー文」における声 (音) あるいは歌 (岡部隆志)	(244)
5. 中国古代の文字と『詩』——ペー文表記法の事例を通じて (富田美智江)	(255)

総序

古代日本において「声の伝承」は「文字（漢字）」といかに出会い、いかに変容したか。本研究は、同じく漢字文化圏にあって、「声の伝承」と「漢字によって声の伝承を表記する方法」をもつペー族における「声の伝承」と「文字」の関係性を、現地調査に基づく具体的素材による第一次資料として公開したうえで、アジア的規模のなかで古代日本における「声の伝承」と「文字」の関係について考察を加えたものである。

日本列島に暮らす人々は漢字をまずは呪符のようなものとして使いはじめ、古墳時代から推古朝にかけて、漢字を、ことばを表記する文字として認識するようになったことが金石文などから明らかにされている。さらに渡来人を通して、音仮名や訓字を用いる方法がもたらされ、こうした方法の定着によって8世紀には『古事記』、『万葉集』が記述されることになる。

「奈尔波ツ（難波津）」木簡（徳島県観音寺遺跡）や「阿佐可夜□（安積山）」木簡（紫香楽宮跡）をはじめとして続々と出土する一漢字一音の音仮名で表記された7世紀の木簡は、万葉以前に一定の歌が音仮名で表記されていたことを明らかにした。その結果、「柿本人麻呂歌集」のいわゆる略体・非略体の試みを経て奈良時代以降、歌を音仮名で表記する方法が開発されたという、ほぼ通説化していた歌の表記史（稲岡耕二『万葉表記論』塙書房、1976年、同『人麻呂の表現世界』岩波書店、1991年、他）は見直しを迫られ、歌が漢字で表記されることの多様なあり方やその根本的な意義の研究が求められることとなった。こうして、「声の伝承」と「文字（漢字）」がいかに出会い、いかに変容するのかという課題が日本文学研究の重要な位置を占めることとなった。

ところで、漢字をさまざまに工夫して使用することによって自民族語による歌や神話といった「声の伝承」を表記するのは、なにも古代日本の『古事記』や『万葉集』に限られるわけではない。同じことは、漢字文化圏におけるいくつかの中国少数民族や朝鮮、ベトナムでも行われてきた。中国少数民族ペー族、チワン族、トン族、ブイ族、ミャオ族、ヤオ族、ハニ族、シュイ族は、口誦の歌や神話を、漢字を用いて表記するという文化をもっている。

本研究はこのうち、ペー族の漢字による自民族語表記を体系的に捉えようとする試みである。ペー族は雲南省大理を中心に暮らすチベット系少数民族で、人口は160万人弱。言語（ペー語）はチベット・ビルマ語系と言われるが、語順は漢語に近く、また漢語からの借用語（借詞）も多い。大理は8世紀から13世紀にかけて、南詔・大理国の首都であり、ペー族の祖先はこの国家の構成員であった。

ペー語は独自の文字を持たなかったが、すでに南詔時代には、漢字の仮借用法によって自民族語を記す方法（音仮名表記）を持っており、808年には南詔王尋閣勅と宰相趙叔達の贈答詩（『全唐詩』巻732、遠藤耕太郎「アジア辺境国家の君主号—南詔国王の「星回節唱和詩」を読む—」『新

総序

しい漢字漢文教育」第53号、2011年、参照)には、音仮名表記が地名や動物名などに用いられている。その一方で、766年に建立された南詔の歴史を刻した「南詔徳化碑」は、すべて漢文で記されている。韻文には音仮名表記が交用されるのに対して、散文では純粋な漢文が用いられているのであり、こうした表記のありようは、記紀における歌謡と地の文の関係、「古事記」と「日本書紀」との関係などを考える際の有効なモデルになるだろう。本研究「Ⅲ. 南詔徳化碑訳注」は表記の側面から南詔徳化碑を捉えるための基礎資料として、南詔徳化碑全文の訳注を行ったものである。

明代には、音仮名、訓字、借詞(音読み)、新字(国字)を交えた詞が在地知識人によって創られ、多くの碑文に刻された。その一つに明代初期、景泰元年(1450)銘をもつ石碑「聖元西山記」の碑陰の、「詞記山花 詠蒼洱境」と題した詞(「山花碑」と通称されている)がある。ここには南詔・大理国以来醸成されてきたと思われる漢字によるペー語表記が、かなり洗練されたかたちで用いられている。本研究「Ⅰ. 山花碑注釈集成」は、これまで公刊されている「山花碑」の注釈書7本を集成し、特に漢字によるペー語表記の方法や工夫という点で注を加えた。

さらに少なくとも清代にはペー曲と呼ばれる語り芸「大本曲」「本子曲」の台本が記されている。ペー曲は現在も継承されているが、訓字主体表記の台本と一漢字一音の音仮名中心表記の台本があり、両者が地域性をもって並存している。また、それを伝承する人への直接の取材も可能であり、それぞれの表記の意義やその具体的な方法や効果を現場で調査することが可能である。その表記法は日本語の音読み、訓読み、音仮名、国字に相当する。本研究「Ⅱ. ペー曲台本集成」は、大本曲「柳蔭記(梁祝物語)」の一部について、これまでに公刊されている台本3本、及び2度にわたるフィールドワークで得た3本の台本を集成し、また本子曲「月里桂花」について、これまでに公刊された一本と今回のフィールドワークで得た一本を集成、特に、漢字によってペー語を表記する方法・工夫という視点からの分析を施したものである。

漢字によって自民族語の「声の伝承」を表記するという方法は、アジア辺境民族である日本とペー族に共通するのであり、古代日本のそれはこうした位相のなかで捉えるべき一つの現象である。ここで大事なのは、ペー族の人々は現在においても、歌掛けなどの「声の伝承」を維持しつつ、同時に「漢字」を用いてそれを記述する方法をもっているということである。今、我々はまさに「声の伝承」と「文字」の出会いの場に遭遇しているのである。こうした場でのフィールドワークによって打ち立てられる理論は、〈声の文化〉と〈文字の文化〉の断絶を強調する理論(W-J・オング『声の文化と文字の文化』桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳、藤原書店、1991年など)を、相互の関係性という、今その場で起きていることとして、ダイナミックな視点から捉え直していくことになるだろう。そして、こういうアジア規模の「声の伝承と文字の出会い」のなかに、日本古代のテキストを位置づけることによって、新たな研究の視野を開いていきたいと考える次第である。

(遠藤)

(付記)

本研究は、平成22年度、23年度共立女子大学総合文化研究所助成金を受けた。研究組織、活動

内容は以下のとおりである。

課題名

古代日本における音数律と漢字の出会いと変容についての研究

研究組織

研究代表者 遠藤 耕太郎 (文芸学部・准教授)

研究分担者 岡部 隆志 (文科・教授)

研究協力者 工藤 隆 (大東文化大学・教授)

富田 美智江 (流通経済大学・専任所員)

飯島 奨 (専修大学・非常勤講師)

草山 洋平 (大東文化大学・非常勤講師)

李莉

※なお、この7名は平成9年(1997)に研究会「古代の会」を結成し、継続して研究活動に取り組んでいる。本研究も「古代の会」の研究活動の一環である。

平成22年度活動内容

2010年4月17日 14:00~18:00 山花碑解釈 於共立女子大学1428演習室

5月22日 14:00~18:00 山花碑解釈 於共立女子大学1428演習室

6月12日 14:00~18:00 山花碑解釈 於共立女子大学1428演習室

7月18日 14:00~18:00 山花碑解釈 於共立女子大学1428演習室

7月31日 14:00~18:00 山花碑解釈 於共立女子大学1428演習室

8月7日 14:00~18:00 山花碑解釈 於共立女子大学1428演習室

8月8日 14:00~18:00 山花碑解釈 於共立女子大学1428演習室

8月10日~28日 中国雲南省での現地調査。

9月18日 14:00~18:00 山花碑解釈 於共立女子大学1428演習室

10月10日 14:00~18:00 山花碑解釈 於共立女子大学1428演習室

10月23日 アジア民族文化学会大会発表。*

12月18日 14:00~18:00 山花碑解釈 於共立女子大学1428演習室

2011年1月29日 14:00~18:00 山花碑解釈 於共立女子大学1428演習室

2月26日 14:00~18:00 山花碑解釈 於共立女子大学1428演習室

*中国雲南省での現地調査

8月10~11日 (遠藤, 出国・移動)

8月12~16日 (遠藤, モソ人の歌謡・神話調査)

総序

- 8月17日（遠藤，移動。岡部・富田，出国，移動）
8月18日～20日（遠藤・岡部・富田，ペー族山花碑調査）
8月21日（遠藤・岡部・富田，移動）
8月22～27日（遠藤・岡部・富田，国際シンポジウム）
8月28日（遠藤・岡部・富田，帰国）

★★アジア民族文化学会大会発表

遠藤耕太郎・富田美智江「山花碑」徹底解説

平成23年度活動内容

- 2011年4月30日 14:00～18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学1428演習室
5月21日 14:00～18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学1428演習室
5月29日 全国漢文教育学会口頭発表（遠藤）
6月18日 14:00～18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学1428演習室
7月30日 14:00～18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学1428演習室
8月9日～22日 中国雲南省での現地調査*
8月18日 楚雄師範学院開催シンポジウム口頭発表（岡部）
9月24日 14:00～18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学1428演習室
10月15日 14:00～18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学1428演習室
11月26日 14:00～18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学1428演習室
12月3日 14:00～18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学1428演習室
2012年1月28日 14:00～18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学1428演習室
2月25日 14:00～18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学1428演習室

*中国雲南省での現地調査（遠藤・岡部）

- 8月9日 成田→麗江
8月10～16日 大理にて大本曲調査
8月17～19日 楚雄師範学院にてシンポジウム
8月20日 大理にて大本曲調査
8月21日 大理→昆明
8月22日 昆明→成田

平成24年度活動内容（12月まで）

- 2012年4月21日 14:00～18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学1428演習室

- 4月21日 14:00~18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学 1428 演習室
5月26日 14:00~18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学 1428 演習室
6月30日 14:00~18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学 1428 演習室
7月 7日 古代文学会シンポジウム口頭発表*
7月28日 14:00~18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学 1428 演習室
8月13日~20日 中国雲南省で現地調査**
9月29日 14:00~18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学 1428 演習室
10月13日 14:00~18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学 1428 演習室
10月27日 アジア民族文化学会シンポジウム口頭発表***
11月3日 14:00~18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学 1428 演習室
12月22日 14:00~18:00 南詔徳化碑・「柳蔭記」精読 於共立女子大学 1428 演習室

*古代文学会シンポジウム口頭発表 (岡部・遠藤)

シンポジウム「芸能と書物—書物を作る身体/身体を作る書物—」のパネリストとして岡部、遠藤が参加。以下のテーマで発表。

岡部隆志：問答と芸能

遠藤耕太郎：芸能とテキスト

**中国雲南省で現地調査 (岡部・遠藤)

- 8月13日 成田→麗江
8月14日 麗江→劍川, 劍川にて本子曲調査
8月15日 劍川にて本子曲調査
8月16日 劍川→大理, 大理にて本子曲及び大本曲調査
8月17日 大理にて本子曲及び大本曲調査
8月18日 大理→鶴慶→麗江, 鶴慶にて漢調調査
8月19日 麗江→上海
8月20日 上海→羽田

***アジア民族文化学会シンポジウム口頭発表 (遠藤)

シンポジウム「アジアの歌と万葉集」のパネリストとして遠藤が参加。以下のテーマで発表。司会として岡部が参加。

遠藤耕太郎：ペー族語り芸から、原万葉の表記を考える

I. 山花碑注釈集成

1. 研究の目的と方法（遠藤耕太郎）	(8)
1-1. 山花碑研究の目的	(8)
1-2. 山花碑概要	(8)
1-3. 山花碑研究史	(10)
1-4. 漢字による自民族語表記システムの概要	(12)
2. 山花碑全訳（古代の会編）	(15)
3. 山花碑注釈集成（古代の会編）	(21)
付録. 山花碑拓本	(103)

1. 研究の目的と方法（遠藤耕太郎）

1-1. 山花碑研究の目的

円仁『入唐求法巡礼行記』によれば、838年の遣唐使派遣の際に唐に朝貢した5カ国のうち、南詔が第1位、倭国（日本）が第2位の席次であり、その他の使節は冠をつけず、背中は曲がり容貌は醜く、獣の皮や荒布を身につけていたという。

南詔（8世紀前半～902年）は、日本が隋や唐との関係性のなかで古代国家を形成する時期に、現在の中国雲南省大理地方において、同じく唐との関係性のなかで建国された。7世紀中ごろより唐朝に入貢、4代皮羅閣（在位728?～48年）が大理周辺の諸国を統一し、738年、唐朝より雲南王に封ぜられた。その後、唐と吐蕃との緩衝材の役割を負って国家経営を行い、特に6代異牟尋（在位779～808年）は王族や武将の子弟を成都に留学させ唐文化を摂取した。続いて大長和国（902～28年）などの短命王朝、さらに大理国（937～1254年）が建国されるが、元のフビライに滅ぼされ、以後、その中心民族であった人々は中原王朝の支配を受けつつ、現在の中国少数民族ペー族となった。

南詔中期には、南詔支配者層が漢字を仮借的に用いる音仮名を用いて詩を記していたことが、『玉溪編事』、樊綽『蛮書』等の諸記録により明らかになっている。このように南詔期より開始されたペー文表記（漢字を利用してペー語を記す表記）は、その後も大理国、元代には広く用いられたと考えられており、元代には『白古通』、『玄峰年運志』という歴史書がペー文表記によって記されていた（明・楊慎『滇載記』序）。しかし、明、清代の文化統制政策によりペー文表記は衰退を余儀なくされた。ただ、現代においても、ペー文表記はペー曲（祭や葬儀の際、民間の専門的歌手が台本を読みながら歌い聞かせる長篇歌謡）の台本として、あるいは民間宗教者の祭文として、広く使用されている。

このように文字を持たなかったペー族先民は、南詔以来、漢字の音読み、訓読み、仮借による仮名表記、変形漢字の作成を通して、自民族の歌を表記する工夫をしてきたが、そのなかに、南詔・大理国のペー文表記を継承した詞「詞記山花」が、明代初期（景泰元年＝1450年）の銘をもつ石碑に刻されて現存している。この詞をふつう「山花碑」と称している。

この研究は、山花碑の表記の工夫を具体的にとりあげることによって、アジアの周縁を生きる民族の歌のあり方の一端として、自民族の歌を漢字で表記するとはどういうことなのかを考える。

1-2. 山花碑概要

山花碑は「詞記山花 詠蒼洱境」という題のもと、520字の漢字及び変形漢字が楷書で刻された碑文である。高さ111cm、幅46.5cmの大理石に、縦13行、毎行40字、ただし第9行目は行頭を一字あげて「朝」字が刻されており41字、最終行が39字である。その周りを方形に曲線雲水紋が飾っている。

碑文はもともと大理市喜州慶洞庄西南の聖元寺観音殿内の石碑に刻されていた。観音殿はもともと

と陽溪楊氏の宗祠（宗廟）であり、そこに「重理聖元西山碑記」（「聖元西山記」と称される）なる石碑が建てられていた。楊森撰「聖元西山記」には、大明景泰元年の制作年の記載を伴って、楊氏宗族の源流から明初に聖元寺西山伽藍補修にいたる出来事が記されている。（「聖元西山記」本文は大理市博物館編「山花碑」に付録として掲載されている。）「詞記山花——詠蒼洱境」は、この「聖元西山記」の裏面に刻まれたものである。

清代の聖元寺補修にあたり、「詞記山花——詠蒼洱境」を大切に思った村人が、「聖元西山記」を観音殿の壁に嵌め込んだために破壊を免れてきた。そのため、「聖元西山記」は長らく見ることができず、石碑は本来は裏面であった「詞記山花——詠蒼洱境」のみが見えており、そのために一般的に「白文碑」、「白碑」と称されてきた。現在は大理市博物館に保存されている。

1940年代、華中大学傅懋勳、肖呂南らの研究、石鐘健『大理喜州訪碑記』を嚆矢として、山花碑の本格的な研究が開始された。これらの研究は碑文の読み及び解釈を中心とするものであり、40年代に成稿した徐嘉瑞『大理文化史稿』（1957）、張文勛『白族文学史』（1958・修訂版1983）、さらに徐琳・趙衍蓀「白文《山花碑》釈読」（1980）、趙櫓「白文《山花碑》訳釈」（1988）、大理市博物館『山花碑』（1989）、周祐『大理古碑研究』（2002）などの注釈に結実していった。また、段伶「白族民間詩歌音韻初探」（『雲南少数民族文学論集』第二版中国民間文芸出版社、1983）、「山花詞簡論」（甲斐勝二訳注「山花詞簡論」訳注—雲南白族の伝統文学について—）（『福岡大学総合研究所報』第144号、1992年10月）、『白族曲詞格律通論』（1998）、「白文古碑“山花詞”格律研究」（趙寅松主編『白族文化研究』民族出版社、2002）は、詞の形式（押韻や句切れ）を中心とした新たな研究を立ち上げている。

これらの先行研究により、次のようなことが明らかになってきた。

形式面においては、山花碑は7775音を1段として20段からなり、1段の第1、2、4句末及び2段以降20段までの2、4句末に[u] [v]音の脚韻を踏む詞形式によっている。その詞形式は現在ペー族民間で行われている歌掛け歌の曲調である花柳曲（ペー族調とも）、民間芸人の歌うペー曲（祭や葬儀において専門的歌人が台本を読みながら歌う長篇歌謡）のそれと一致しており、現在でもその曲調で歌うことが可能である。

読みの面では、山花碑は漢字及び漢字を変形した変形漢字によって記されているが、それらは借詞、訓字、仮借による音仮名、及びペー族独自の自造字によって記されており、これらを「ペー文」と呼んでいる。

解釈面においては、ある文字をどう読むかによって解釈は分かれるものの、おおよそ次のような内容的まとまりをもっている。第一段落（第1段～第8段）では作者の生まれ、また隠棲している大理地方（蒼山洱海）の風景が描写され、第二段落（第9段～第17段）ではこの地に息づいてきた祖先の徳を偲び、第三段落（第18段～第20段）では作者の修得した空の理論が展開される。

山花碑の作者は、詞中に登場する楊黼である。楊黼はおおよそ洪武十年（1377年）、現在の大理市湾橋郷下陽溪に生まれたと推定されている。明初の著名な学者、詩人であり、謝登瀛『滇略』、『明史・隱逸』、その他多くの大理地方志書にその事跡等が記されている。その祖先は「聖元西山

1. 山花碑注釈集成

記」によれば、九隆の末裔で、唐代より下陽溪に住む一族であった。遠祖楊連は大理国段氏総管期に重用された。また楊氏と聖元寺の関係は深く、創建、補修を行ってきた。

1-3. 山花碑研究史

1-3-1. ペー文表記を中心とする山花碑研究

ペー族先民は少なくとも8、9世紀、南詔時代中期（唐代）には漢字を仮借的に用いる音仮名によって自民族の言語を記していたことが、『玉溪編事』、樊綽『蛮書』等の諸記録により明らかになっている。1940年代には「山花碑」をはじめとする明代の碑文が発見され、さらに50年代には南詔大理国時代の書写仏典が大量に発見されることによって、その具体的な記述システムが解明されてきた。こうして白文は漢語とは異なる一種の独立した文字体系であるというのが現在では定説になっている。（王鋒「白族語言文字研究的重要課題及展望」『大理文化』58、2005年5月）

ペー文表記法は、ペー族をはじめとする中国人研究者（徐琳等編『白語簡志』民族出版社、1984年）によって、以下の4分類法が提示され、現在のところ大方の研究者に指示されている。以下に王鋒（「白族語言文字研究的重要課題及展望」『大理文化』58、2005年5月）の術語によってそれを示しておく。

- ①音読漢字…漢字の音によってペー語の意味を表す。
- ②訓読漢字…漢字の意味に従ってペー語の音で読む。
- ③漢語借詞…漢字の意味、音を直接漢字から借りる。
- ④自創白字…漢字の筆画を増減して新たなペー文字を作る。

こうした白文による書写システムについて王鋒は、読みにくいという欠点をもつといい、それは、音仮名表記が人によって異なる点、漢語借詞（音読み）と音読漢字（音仮名）の混合、訓読漢字（訓読み）と音読漢字（音仮名）のさまざまな混合によって生じるとし、こうした欠点を克服するための措置として、音読漢字が増えていくという。漢字式文字の発展について、周有光「漢字文化圏の文字演変」（『民族語文』1990年1期）は、伝播、仮借、模造、創造の順で4段階の発展をするというが、白語も同様の発展をしたにもかかわらず、創造段階の萌芽において発展は止まり、仮借段階に回帰した。すなわち、南詔・大理国時代の書写白文經典中に相当数使用されていた新字が、元、明、清各代の石碑においてその数を減少させ、音読漢字（音仮名）、訓読漢字（訓読み）、漢語借詞（音読み）によってペー語を表記する例が増加する。これはペー族が独立性を弱め、漢文化の中で生きることによって、その漢文能力をあげていったことによる。さらに現在の「大本曲」「本子曲」（ともに台本を伴った語り芸）の台本においては60%以上が音仮名になるように、漢字はペー語表記の符号としての性格を強めていったのだと王氏は述べている。（王鋒「方塊白文的歴史發展和現状」中国民族古文字研究会編『中国民族古文字研究第4輯』天津古籍出版社、1994年）

一方、そのような読みにくさの中にも、一定の規律性のあることを尹明挙は指摘する。すなわち、①ペー語の単音節の単純詞のなかで、漢字と対応関係のある詞は一般に音読み・訓読みで表記される。②ペー語の複音節の単純詞、あるいは漢語に対応関係がない詞は音仮名で表記される。こうし

た規律によってペー文は一定の流通性をもったということである。(尹明挙「従楊龔の《山花碑》看白族文字与白語詩歌格律」趙寅松主編『白族文化研究2007』民族出版社, 2008年)

「山花碑」の表記法は、ペー文の演変の一つのメルクマールとしての価値をもつ。それは南詔が唐、吐蕃との国際的な緊張関係の中で自らの言語を表記する方法を發展させ、その後、特に明代以後の漢文化への統一政策の中で衰退していく過渡期の表記システムを示している。と同時に、以降の音仮名中心の表記システムへの萌芽段階としても位置づけられるものである。

1-3-2. 詞の形式を中心とした山花碑研究

「詩歌というものは楽曲と結び付き伝えられるものであって、音楽から切り放されて書面の形式での視覚による伝搬は難しい」という認識に立って、山花碑をその音数律、押韻、平仄(韻字の声調)という形式から捉えるのが段伶氏の一連の研究である。段伶氏は、唐代に、楽曲に合わせて作られた曲子詞が流行し、文人らがさまざまな地方の楽曲に合わせた詞を次々と作成した時期に注目し、当時、南詔国の中心部(大理)においては、南詔の文人らがペー族の楽曲に従って漢語詞あるいはペー語詞を作成することが行われていたと推測する。また段氏は775形式は本来ペー族民間で行われていた楽曲の音数律であり、文人がその形式に当てはめて詞をなす時に、この形式を山花詞と称したとする。(甲斐勝二「資料と検討 中国語文学習の周辺 其二《“山花詞”簡論》訳注」『福岡大学総合研究所報』144号, 1992年10月及び2010年8月, 段伶氏より直接ご教示いただいた。)

尹明挙によれば、ペー族詩歌の場合、押韻はあるが平仄の区別はない。そのかわり、押韻に声調(漢語が四種類であるのに対して、ペー語は八種類ある)を関わせて、独自の韻律を作っているという。また、山花碑は一句内の句切れを漢詩のそれと違えているという。尹明挙はここにペー族詩歌独自のリズムを見、775形式が漢詩の直接の影響下に起こったのではないことを主張している。(尹明挙前掲論文)

これに対して、遠藤耕太郎は、775形式が南詔の文人らによって作成されたことを認めつつ、その5音、7音という音数律が、中原王朝の南、東に位置する周辺民族の音数律に普遍的に用いられていること、5、7音音数律が中原の詩や詞に連なる普遍性を持っていることが、南詔国内における王権の正統性を保証していること、ペー族の民間の歌掛けは現在は775形式で行われているが、古い歌掛けを残すといわれる西山地区における「打歌」は775形式ではなく、基本的には偶数音数律であることなどを勘案し、775形式そのものが、南詔国文人が中原より伝播した詞の流行の中で考案した南詔独自の歌の形式であったと考えている(遠藤耕太郎「アジア辺境国家の七五調」, 岡部隆志・工藤隆・西條勉編『七五調のアジア』大修館書店, 2011年所収)。

いずれにせよ、775音数律の詞形式は中原王朝との関係性の中で成立してくるという点は動かないところだろう。今後、中原王朝と周辺民族、周辺国家という関係性のなかから記載の歌(詞)がどのようにして生成してくるのかについての、歌の形式の側面からの研究、と同時に、口誦の歌掛け歌と記載の歌(詞)との関係性の研究、つまり中原王朝との関係性という普遍性と地域の歌文

I. 山花碑注釈集成

化の関係性のなかから、記載の歌が生成する様子が捉えられる必要がある。

1-4. 漢字による自民族語表記システムの概要

1-4-1. 漢字による漢語以外の民族語表記システム

唐の周辺に位置した南詔・大理国において、唐との関係性と地域文化との関係性、つまり普遍性と地域性の交差のなかから生成された記載の歌として山花碑はある。その生成のあり方が、ペー語文字の表記システムの内在的規律、文字のもった意味、文字の演変という読みと解釈の研究によって、また、歌（詞）の音節数や押韻、平仄などの形式面の研究などによって明らかにされようとしている。こうした研究は今後東アジアという視点からそれぞれの地域で進めていく必要があると考える。

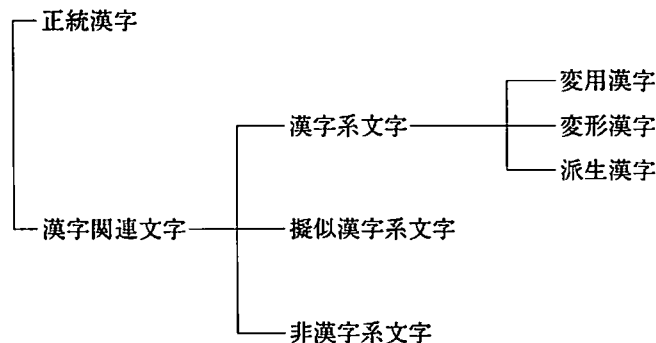
本研究はこうした山花碑研究の意義に基づき、東アジア規模でこうした研究を行っていくための基礎的研究の一つであることを目指している。そのためには、まず漢字によって漢語以外の民族語を表記するシステムを東アジア規模で概観できるような枠組みが必要である。そこで本研究では、西田龍雄「東アジアの文字」（西田龍雄編『講座言語第5巻 世界の文字』大修館書店、1981年）、西田龍雄『アジア古代文字の解説』（中央公論新社、2002年、もと『アジアの未解説文字』大修館書店、1982年）、吉池孝一「中国周辺の漢字関連文字」（『KOTONOHA』48号、古代文字資料館、2006年11月）による東アジア規模の表記システムを参考にして、以下のような統一した枠組みを用いる。なお、次節で詳述するが、ペー文表記システムはこのうち、正統漢字、変用漢字、変形漢字に相当する。

●正統漢字

漢語を表記するために造られた文字。時代・地域とともに字形と字数は変遷を重ねた。発音は各地域の発音でなされる。ペー族の「漢語借詞」（次節参照）、日本語の音読みなどがこれにあたる。

●変用漢字

正統漢字の字形を表音的に、或いは全く別の音価や意味を与えて使う文字であり、正統漢字の字形と字音を利用したもの、字形と字義を利用したものがある。ペー族の「音読漢字」、「訓読漢字」（次節参照）、中国西南部の少数民族ハニ族、トン族、リス族、『万葉集』の用字などがこれにあたる。



●変形漢字

正統漢字の偏・旁・冠などを自己の言語形に適合させて組み改め、変形した漢字。ペー族の「自創漢字」(次節参照)、中国西南少数民族チワン族の方塊字やミャオ族のミャオ文字、さらにベトナムのチュー・ナム(字喃)、日本の国字などがこれにあたる。

●派生文字

正統漢字の字形をもとに、それをくずして新しい字形を造り出した文字で、平仮名、片仮名や中国湖南省の女書がこれにあたる。

●擬似漢字

正統漢字の字形または構成原理を模倣して、新しく創造した文字であり、10世紀から12世紀にかけて、東アジア北方地域で国定の文字として造られた遼の契丹文字、西夏の西夏文字、金の女真文字などがこれに相当する

●非漢字系文字

正統漢字とは文字の系統を異にするが、文字組織のいずれかにおいて、漢字の影響を受けたり逆に漢字に何らかの影響を与えたりした文字であり、ソグド文字、パスパ文字、ハンゲルなどがこれに相当する。

1-4-2. ペー文表記システム

既述(1-3-1)したように、現在のところペー語研究者に広く支持されているのは、以下に掲載する4分類法である。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">①音読漢字…漢字の音によってペー語の意味を表す。②訓読漢字…漢字の意味に従ってペー語の音で読む。③漢語借詞…漢字の意味、音を直接漢字から借りる。④自創白字…漢字の筆画を増減して新たなペー文字を作る。 |
|--|

前節に示した東アジア規模の表記システムのなかにこれを位置づければ、①②が変用漢字、③が正統漢字、④が変形漢字に相当する。本研究では、ひとまずこの4分類法に則り、日本語表記分類との混乱を避けるために、以下の術語によって表すこととする。

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">①音仮名…漢字の音によってペー語の意味を表す。(万葉仮名のような用法)②訓字…漢字の意味に従ってペー語の音で読む。(訓読み)③借詞…漢字の意味、音を直接漢字から借りる。(音読み)④新字(自造字)…漢字の筆画を増減して新たなペー文字を作る。(国字) |
|--|

ただし、この4分類法は完全なものではないことは確認しておく必要がある。大理地方は新石器

I. 山花碑注釈集成

時代より中原と関係を持ち、漢代には洱海地区に郡県が置かれるなど中原王朝との密接な関係を持っていた。そのためペー語の基本語彙の6割は古漢語を受け入れているという。しかも両語はともに孤立語であり、基本的にSVO構造をとる点においても共通する。要するにとても近い言語関係にあるのであり、例えばペー語で「白豆花」は [peɪ44 tuu31 xuo35] と発音されるが、これは現代漢語 [bai3 dou4 hua1] と非常に近い音であるにもかかわらず、ペー語として認識され、この4分類法では訓字(訓読漢字)に分類される。ところが日本語の場合、漢語と日本語の関係は薄く、漢語音と日本語音には「ハクトウカ」と「しろまめはな」という違いがあり、日本語ではそれぞれを「音読み」、「訓読み」と分類して区別している。

仮に、全体の6割に達するという古漢語を受け入れた基本語彙(漢語由来の語彙)をすべてこの分類に従って訓字とすると、ペー語で [tian1] とともに [xe55] とともに発音される「天」はともに訓字となり区別ができなくなる。逆に日本語の「ハクトウカ」も「しろまめはな」も訓字になってしまう。漢字による自民族語表記システムを、東アジア規模で捉えようとする本研究の性質上、この差は無視できない。

そこで筆者は、日本語の音読み、訓読みの概念を基にして、漢語由来の語彙を借字に含めるべきだとの主張をした(「アジア辺境国家の歌表記—中国雲南省ペー族「山花碑」と万葉和歌の比較を通して—」『日本文学』2011年1月)。こうした筆者の分類に対して、立石謙治「中国雲南省大理白族の『大本曲』の概説と紹介—テキストを中心に—」(『國學院雑誌』第112巻第9号、2011年9月)は、元来は漢語由来の語彙であっても、大本曲の語り手はそれを借字(漢語)とは明確に区別して用いていること、また、すべての語彙を漢語由来語彙と固有語彙とに選別することは困難であることをあげ、現在の4分類法に則るべきことを説いた。

こうした指摘を踏まえ、将来的にペー語研究が漢語由来語彙と固有語彙とを選別できる段階に到達するまでは、現在の4分類法に則ることとした。将来的には訓字の多くが、借詞の一部分(ペー語と認識される借詞)に分類されることになると思われる。

2. 山花碑全訳 (古代の会編)

詞記山花 詠蒼洱境

山花体で記す詞 蒼洱境を詠む

第1段

(1) 蒼洱境鏘蹶不飽

蒼山洱海の地は賞美しきれない。

(2) 造化工迹在阿物

天地創造の跡はいたるところにある。

(3) 南北金鎖把天関

南北は、金鎖が天関を守り、

(4) 鎮青龍白虎

(東西は、) 青龍白虎が鎮めている。

第2段

(1) 山侵河處河鏡傾

山は湖面に斜めに影を落とし、

(2) 河侵山處山嶺遶

湖は山を遶る。

(3) 屏面西瀆十八溪

屏風のように蒼山の西から雪解け水が十八筋の溪流となって、

(4) 補東洱九曲

洱海の東の九つの湾に流れ込む。

第3段

(1) 伽藍殿閣三千堂

伽藍殿閣は三千堂、

(2) 蘭若宮室八百谷

蘭若宮室は八百谷。

(3) 雪染點蒼冬頭白

雪に染められた点蒼山は、冬、頭を白くし、

(4) 洱河秋面皺

洱海は、秋、湖面が波立つ。

I. 山花碑注釈集成

第4段

- (1) 五華侶你翹霄充
五華楼は天空に突き刺さり、
- (2) 三塔侶你穿天腹
三塔は天腹を貫き通す。
- (3) 鳳掖山高鳳凰栖
鳳掖山は高く、鳳凰が^が栖み、
- (4) 龍関龍王宿
龍関には龍王が^が住む。

第5段

- (1) 夏雲佐玉局山腰
夏の雲が玉局山の腰に（帯のように）巻き付き、
- (2) 春柳垂錦江道途
春の柳は錦江の大路に垂れさがる。
- (3) 四季色花阿園々
四季を通じて花々はあちこちに咲き、
- (4) 風与阿觸々
一陣の風雨が花を濡らす。

第6段

- (1) 跳仙人出克遊遊
跳ね踊る仙女がここに現れ出て遊び、
- (2) 勝姮娥入宮伽舞
（その姿は）姮娥の月宮での美しい舞に勝る。
- (3) 藪壓蜀錦出名香
幾声かの鐘の音が香しく立ち出で、
- (4) 哭崑無價宝
値のつけられないほどの宝と見なされている。

第7段

- (1) 奪西天南國趣陶
西天南国の趣を奪い、
- (2) 占東土北関称譜
東土北関の素晴らしさを占める。

(3) 秀雀翫景鳴囀々

きれいな小鳥の遊び鳴くさま、フーフーと、

(4) 蟬吟聲啾々

蟬の鳴く声、ジージーと。

第8段

(1) 金鳥駈散天上星

金鳥は天の星を蹴散らし、

(2) 玉兔打開霄面霧

玉兔は空の霧を押し開く。

(3) 黄鶯白鶴阿双々

黄鶯と白鶴は群れを成し、

(4) 對飛喀啄々

翼を並べて飛ぶ。

第9段

(1) 鍾山川俊秀賢才

山川が俊秀賢才な人物を集め、

(2) 涵乾坤灵台聖種

天地が靈力を宿す聖なる血筋の人物を育む。

(3) 曾登位守道結庵

この地で、仏道を守り庵を結び、

(4) 度生死病老

生死病老に思いをいたす。

第10段

(1) 尽日勤功把節操

終日勤勉に節操を守って経典を誦み、

(2) 連夜觀參修求好

日夜参禪して好福を修求する。

(3) 大夫在處栽松栢

大夫は居所に松柏を植え、

(4) 君子種梅竹

君子は梅竹を植える。

I. 山花碑注釈集成

第11段

- (1) 方丈丘焼三戒香
方丈のなかで三更の香をたき、
- (2) 覚苑中點五更燭
覚苑のなかで五更の燭を灯す。
- (3) 雲窓下拈大乘經
雲窓で大乘經を唱え、
- (4) 看公案語録
公案語録を読む。

第12段

- (1) 温爐茶水啜呼嗜
温かい茶を供え、
- (2) 直指心宗夢付囑
まっすぐな気持ちを捧げる。
- (3) 菩提達磨做知音
菩提達磨を知音とし、
- (4) 迦葉做師主
迦葉を師主とする。

第13段

- (1) 盛國家覆世功名
国家によって比類なき功名を与えられ、
- (2) 食朝廷尊貴爵祿
朝廷の尊い俸祿を食んできた。
- (3) 慈悲治理衆人民
慈悲によって多くの人民を治め、
- (4) 才等周文武
周の文王・武王に比せられた。

第14段

- (1) 恭承敬當母天地
誠実に父母、天地を敬い、
- (2) 孝養干子孫釋儒
孝養を尽くし、子孫に仏・儒を教える。

(3) 念礼不絶鍾磬聲

礼仏して鍾磬の音を絶やさず、

(4) 消災難長福

災難を払えば福は増す。

第15段

(1) 行仁義禮上不軽

仁義礼の行いを軽んぜず、

(2) 凶悪弊逆上不重

凶悪弊逆を重んじず。

(3) 三教經書接推習

三教の經書を絶えず伝習する。

(4) 漕溪水阿囉

谷川を流れる水がたくさんあり (絶えず流れるように)。

第16段

(1) 長尋細月白風清

若いころから清白な月や風を愛し、

(2) 不貪摘花紅柳緑

むやみに紅花や緑柳を摘み取ることはない。

(3) 用顔回道謔浮身

顔回の道をもって浮き世の身を捧げ、

(4) 得堯天法度

堯が治めていたころのような道德基準を得る。

第17段

(1) 遊翫在偽佞骨石

山崖急峻な岩場で遊び、

(2) 有去在威儀模草

また茅が繁茂する地に赴く。

(3) 風化経千古万代

よき伝統は千古万代を経、

(4) 傳万代千古

万代千古に伝わる。

第18段

- (1) 阿部遇時宜心歡
ある時は時流に乗って喜ばしいが、
- (2) 阿部逢劫催浪禿
ある時は災難に出会って悪路を進む。
- (3) 天堂是榮華新鮮
天堂は生き生きと榮えているが、
- (4) 漂散成地獄
あっという間に地獄になる。

第19段

- (1) 分数哽俸土成金
福運が豊かであれば土は金に成る
- (2) 時運車舛金成土
時運が悪くなれば金は土になる。
- (3) 聚散侶浮雲空花
離合集散は浮雲や空しい花のようだ。
- (4) 實阿芥無有
実に、ああ、すべては無である。

第20段

- (1) 有之識景上頭多
風景を知る臣下は多いけれども、
- (2) 但于知心上頭少
しかし心を知る臣下は少ない。
- (3) 楊鬪我穉空贊空
わたくし楊鬪は空をもって空を称え、
- (4) 寄天涯地角
天の果て地の果てにこれを送る。

3. 山花碑注釈集成 (古代の会編)

凡例

一、各注釈書の出典は以下のとおりである。なお、本文中では丸数字によってこれを示した。

- ① 白語調査組「山花碑」、徐嘉瑞『大理古代文化史稿』新知三聯書店、1978年所収)
- ② 徐琳・趙衍蓀「白文《山花碑》釈読」「民族語文」、1980年第3期
- ③ 張文勛『白族文学史(修訂版)』雲南人民出版社、1983年
- ④ 趙櫓「白文《山花碑》訳釈」雲南民族出版社、1988年
- ⑤ 大理市博物館印「山花碑」大理市博物館、1989年
- ⑥ 周祐「大理古碑研究」雲南民族出版社、2002年
- ⑦ 李正清『大理喜洲文化史考』雲南民族出版社、1998年

※ ②は1957年に記録された大理慶洞村郭純仁氏の読みをもとにしている。

※ ⑦は異説のみ併記。

二、表の原文は俗字と思われるものについては本字に直した。

三、音声記号は各注釈書の表記による。注釈書②③④は国際音声記号方式であり、声調記号は末尾に数字によって示した。33は中平調、42は高降調(緊喉)、31は中降調、55は高平調、35は中声調、44は次高平調(緊喉)、21は次低平調(緊喉)である。注釈書⑤⑥はピンイン方式であるが、声調記号は第一声から第四声までしかないため、ペー語の声調を正確に表せているわけではない。なお、ピンイン方式の声調は音声記号末尾に数字によって示した。

四、各注釈書の音声記号に基づいて、王鋒氏(中國社会科学院)にペー語表記の方法(読写方式)を記してもらった。その方法は1-4「漢字による自民族語表記システム」に従って、現行の4分類法(音仮名、訓字、借詞、新字・自造字)に従い、それぞれ「音・訓・借・自」として示した。読写方式欄の()は、当該の漢字を発音する際に、それと意味的に近い漢字を想像し、その漢字の借詞(音読み)、或いは訓字(訓読み)として発音したものであることを示す。例えば、23ページの題詞の「詞」を発音する際に、徐琳釈読①は、「詞」と意味的に近い「話」を想像し、それを訓字として[tou31]と発音しているということである。なお、「*」は王鋒氏が不明としたものである。

五、担当者は以下のとおりである。

題詞、第1・4・8・9・10・17・18段……遠藤耕太郎

第2・5・6・11・12・19・20段……飯島奨

第3・7・15・16段……草山洋平

原文、第5・6・7・11・12・13・14段……富田美智江

I. 山花碑注釈集成

山花碑原文

題詞：詞記山花 詠峯洱境

一段：峯洱境鏘翫不飽 造化工迹在阿物 南北金鎖把天関 鎮青龍白虎
 二段：山侵河處河鏡傾 河侵山處山嶺遶 屏面西澗十八溪 補東洱九曲
 三段：菴藍殿閣三千堂 蘭若宮室八百谷 雪染點蒼冬頭白 洱河秋面皺
 四段：五華侶你翫霄充 三塔侶你穿天腹 鳳戩山高鳳凰栖 龍関龍王宿
 五段：夏雲佐玉局山腰 春柳垂錦江道途 四季色花阿園々 風与阿觸々
 六段：跳仙人出克遊遊 勝姮娥入宮伽舞 藪壓蜀錦出名香 突崑無價宝
 七段：奪西天南國趣陶 占東土北闕称譜 秀雀翫景鳴囁々 蟬吟聲啾々
 八段：金烏馭散天上星 玉兔打開霄面霧 黄鶯白鶴阿双々 對飛喀啄々
 九段：鍾山川俊秀賢才 涵乾坤灵胎聖種 曾登位守道結菴 度生死病老
 十段：尽日勤功把節操 連夜觀叅修求好 大夫在處栽松柏 君子種梅竹
 十一段：方丈丘燒三戒香 竟苑中點五更燭 雲窓下拈大乘經 看公案語録
 十二段：熅煊茶水夢呼嗜 直指心宗夢付囑 菩提達磨做知音 迦葉做師主
 十三段：盛國家覆世功名 食朝廷尊貴爵祿 慈悲治理衆人民 才等周文武
 十四段：恭承敬當母天地 孝養千子孫釋儒 念礼不絶鍾磬聲 消災難長福
 十五段：行仁義禮上不輕 兗惡弊逆上不重 三教經書接推習 漕溪水阿喇
 十六段：長尋細月白風清 不食摘花紅柳緑 用顔回道謔浮身 得堯天法度
 十七段：遊翫在偽佞骨石 有去在威儀模草 風化經千古万代 傳万代千古
 十八段：阿部遇時宜心歡 阿部逢劫催浪秃 天堂是榮華新鮮 漂散成地獄
 十九段：分数哽俸土成金 時運車舛金成土 聚散侶浮雲空花 實阿朶不無
 二十段：有之識景上頭多 但于知心上頭少 楊鬪我諱空贊空 寄天涯地角

蒼：「蒼」の俗字と思われるが、類例なし。第3段第3句は「蒼」に作る。②③は両者の発音を分けるが、その他はみな同じ。

鎖：「鎖」の俗字と思われるが、類例なし。

虎：「虎」の俗字。明・章黼撰『重訂直音篇』に類例あり。

處：「處」の俗字。『宋元以来俗字譜』に類例あり。

伽：「伽」の俗字と思われるが、類例なし。第6段第2句の「伽」とは、みな発音を異にする。

霄：「霄」の俗字。北齊・石信墓誌に類例あり。

戩：「翼」の俗字。南朝梁『玉篇』に類例あり。

克：「克」or「充」の俗字。前者は漢・劉脩碑に、後者は明・梅膺祚撰『字彙』に類例あり。発音は「充」に近いが、他に第4段第1句に「充」に作る例がある。

遊：「遊」の俗字。北魏・鄭道昭書「雲峰山題字」に類例あり。

涵：「涵」の俗字。清・鉄珊輯『増広字学拳隅』に類例あり。

叅：「參」の俗字。『宋元以来俗字譜』に類例あり。

寔：「覺」の俗字。敦煌写本，『宋元以来俗字譜』に類例あり。

拊：「析」or「折」の俗字。⑥は「桴」の俗字とするが，根拠は不明。

𦉳：「些」の俗字である「𦉳」「𦉴」に似るが，類例なし。

兕：「兕」の俗字。『中国書法大字典』に類例あり。

𦉵：「惡」の俗字。隋・龍藏寺碑，敦煌写本に類例あり。

𦉶：「食」の俗字。北魏・侯剛墓誌に類例あり。

𦉷：「舛」の俗字。唐『干祿字書』に類例あり。

題詞

	詞	記	山	花
②	tou31	tɕi44	se35	xuo35
	詞（“話”）	借	訓	訓
③	tou31	tɕi44	se35	xuo35
	詞（“話”）	借	訓	訓
④	tsʰi31	tɕi44	se35	xuo35
	借	借	訓	訓
⑤				
⑥	ci1	ji1	she1	hual
	借	借	借	借

	詠	蒼	洱	境
②	ye55	tsʰa33	ɛɿ31	tɕi31
	*	借	借	訓（“地”）
③	ye55	tsʰa33	ɛɿ31	tɕi31
	*	借	借	訓（“地”）
④	ye55	tsʰu55	ɛ31	tɕi31
	*	*	借	訓（“地”）
⑤				
⑥	yo3	cuo4	er1	ji3
	借	訓	借	訓（“地”）

〈大意〉

① 詞を山花で記し 蒼山洱海を詠む（詞記山花 詠蒼洱境）

② 調を山花に寄せて 蒼山洱海の名勝を詠む（調寄山花 詠蒼洱勝境）

③ 調を山花に寄せて 蒼山洱海の名勝を詠む（調寄山花 詠蒼洱勝境）

I. 山花碑注釈集成

④ 調を山花に寄せて 蒼山洱海を詠む (調寄山花 咏苍洱境)

⑤ なし

⑥ 詞を山花で記し 大理を歌う (词记山花 歌咏大理)

〈語釈〉

④ 題詞中の「詞」字は、漢語の借語である。白族のことばには詩や詞などといった専用語がないために漢語を借りている。その音は [ts^hi31] で、漢語の音と近似しており、その意味もまた漢語と同じである。以下、漢語の借語はみなこの通りである。(题目中“词”字，系汉语借词，因白族语中并无诗，词之专称，故借汉语，其音读为 [ts^hi31]，与汉语音读相近，其意义则与汉字同。以下有汉语借词者，均同此。)

第1段第1句

	蒼	洱	境	遊	翫	不	飽
②	ts ^h a33	ɛɿ31	tɕw33	tuw21	kuɛɿ33	puw31	pu33
	借	借	借	*	* (“観”)	訓	訓
③	ts ^h a33	ɛɿ31	tɕw33	tuw21	kuɛɿ33	puw31	pu33
	借	借	借	*	* (“観”)	訓	訓
④	tsu55	ɛ31	tɕw35	tɕia33	ue31	pu	pu33
	*	借	借	自	自	訓	訓
⑤	Guo4	er1	ɿ3	qia1	we3	ben3	bu1
	*	借	* (“地”)	自	自	訓	訓
⑥	cuo4	er1	ɿ3	qia1	gue1	bou3	bu1
	訓	借	* (“地”)	自	自	訓	訓

〈大意〉

① 蒼山洱海の美しい景色は遊びきれない (蒼山洱海美境游不尽)

② 蒼山洱海の美しい景色は賞美しきれない (蒼洱景致观不尽)

③ 蒼山洱海の美しい景色は賞美しきれない (蒼洱景致观不足)

④ 蒼山洱海の美しい景色は遊びきれない (蒼洱景致不胜游)

⑤ 蒼山洱海の美しい景色は称えきれない (蒼洱美景赏不尽)

⑥ 蒼山洱海の美しい景色は称えきれない (蒼洱美景赏不厌)

〈語釈〉

「蒼洱」

② 蒼山・洱海を指す。(指苍山、洱海。)

④ 第一句目の「蒼」は [ts^ha33] ではなく、[ts^hw55] と読む。白族にとって「点蒼」山の古い読みは [tɕw33 ts^hw55] であり、現在でもそう発音している。(“苍”读 [tsu55]，不读 [ts^ha33]；因此乃白族对“点苍”山之古读为 [tɕw33 ts^hw55]，今亦如之。)

- ⑤ 大理の蒼山洱海に挟まれた大理盆地のこと。(即大理蒼山洱海之间的大理坝子。)
- ⑥ 大理の蒼山と洱海のこと。「蒼」はペー語で [cuo4] と読む。蒼山のフルネームは点蒼山という。ペー語では洱海を [er1 go3] と言う。(即大理的蒼山和洱海。“蒼”, 白語读 [cuo4], 蒼山全名叫点蒼山, 白語叫洱海为 [er1 go3]。)

「境鏘」

- ④ 「鏘」は [tɕia33] と読む。[tu21] と読むのは誤りである。(“鏘”读 [tɕia33], 有读 [tu21] 者, 非是。)
- ⑤ ペー語で地方の意。(白語为地方之意。)
- ⑥ ペー語では地方のことを [ji3 fu2] と言う。境鏘は古いペー語で、「地方」の意味である。(白語呼地方为 [ji3 fu2], 境鏘乃古白語, 亦即“地方”的意思。)

「翫」

- ④ 「翫」は [ueɿ31] と読み、「遊ぶ」の意である。(“翫”读 [ueɿ31], 意为“有耍”或“游玩”。)
- ⑤ 「玩」と同じで、遊ぶの意。(即玩, 游玩之意。)
- ⑥ ペー語で [guel] と読み、「遊び観賞する」の意味。(白語读 [guel], 即“游玩观赏”的意思。)

「不飽」

- ⑥ ペー語で [bou3 bul] と読む。ここでは「飽きない」と解釈する。(白語读作 [bou3 bul], 这里作“不厌”讲。)

第1段第2句

	造	化	工	迹	在	阿	物
②	ts ^h o55	xua55	ku33	tɕi35	tsu33	a31	ɣu33
	借	借	音	借	訓	音	音
③	ts ^h o55	xua55	ku33	tɕi35	tsu33	a31	ɣu33
	借	借	音	借	訓	音	音
④	ts ^h o55	xua55	ku33	tɕi35	tsu33	a31	ɣu33
	借	借	音	借	訓	音	音
⑤	Caol	hual	gu3	jl2	zoul	a4	vu3
	借	借	借	借	*	音	音
⑥	caol	hual	gu3	ji2	zoul	a4	vu1
	借	借	借	借	*	音	音

〈大意〉

- ① 自然の造化の功績はまことに不思議である (自然造化的功績真神奇)
- ② 造化の工跡がいたるところにある (造化工迹万千处)
- ③ 造化の工跡がいたるところにある (造化工迹万千处)

I. 山花碑注釈集成

- ④ 造化の工跡がいたるところにある（造化工迹万千处）
- ⑤ 天の生んだ奇観はここにある（天生奇景在此方）
- ⑥ 天然の名勝が数多い（天然胜迹万万千）

〈語釈〉

「造化」

- ⑤ 天が生じ地ができるの意。つまり大自然のこと。（天生地就之意，即大自然。）

「工迹」

- ④ 「工迹」は [ku33 tɕi35] と読み、「古跡」の意。（“工迹”读 [ku33 tɕi35]，意为“古迹”。）

「在阿物」

- ④ 「阿物」は [a31 pu42] とは読まない。「一抱え」の意味になってしまうからである。[a31 yu33] と読むべきで、意味は「一万」となる。ペー語では数の極みを言うことで、その多さを示す。（“阿物”，不读 [a31 pu42]，意为“一抱”；应读 [a31 yu33]，意为“一万”，白语言数之极，以示多也。）
- ⑤ 私（たち）のいるここ，大理を指す。（在我（们）这里，指大理。）

第1段第3句

	南	北	金	鎖	把	天	関
②	na21	pu44	tɕi35	sou33	peɿ33	xe55	kuɛɿ35
	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
③	na21	pu44	tɕi35	sou33	peɿ33	xe55	kuɛɿ35
	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
④	na42	pu44	tɕi35	sou33	ka33	xe55	kuɛɿ31
	訓	訓	訓	訓	*	訓	訓
⑤	na3	ben1	ji2	suol	bel	hei4	gue2
	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓
⑥	na3	boul	ji2	suol	bel	hei2	gua2
	訓	訓	訓	訓	訓	訓	借

〈大意〉

- ① 金鎖のような南北の自然の要害（金鎖般的南北天險）
- ② 南北は金鎖が自然の要害にある（南北金鎖据天險）
- ③ 南北は金鎖が自然の要害にある（南北金鎖据天險）
- ④ 南北は金鎖が自然の要害を守る（南北金鎖把天險）
- ⑤ 南北は金鎖が自然の要害にある（南北金鎖据天險）
- ⑥ 南北には青龍白虎がいる（南北有青龍白虎）

〈語釈〉

「南北」

- ② 南に下関が、北に上関があり、まるで天の関のように堅固であることを指している。(指南面有下关, 北面有上关, 好象天关一样牢靠。)
- ⑤ 南は龍尾関=下関を指し、北は龍首関=上関を指す。(南指龙尾关—下关; 北指龙首关—上关。)
- ⑥ ペー語で [na3 bou1] と読む。[na3] は漢語の「南」(nan2) の陽転陰である。[bou1] は漢語の「北」(bei3) の音に近い。(白语读作 [na3 bou1]。[na3] 为汉语“南”(nan2) 的阳转阴; [bou1] 与汉语“北”(bei3) 音相近。)

「金鎖」

- ④ 「金鎖」の「鎖」は名詞なので、[so33] とは読まず [sou33] と読む。(金锁之“锁”为名词, 故不读 [so33]; 而读 [sou33]。)
- ⑥ ペー語で [ji2 suo1] と読む。前者は漢語の「金」(jin1) の陽転陰で、後者は漢語の「鎖」(suo3) の変調である。『南詔野史』に「南に龍関、北には金鎖、東に洱水、西には点蒼」という句があり、ここはこれに基づいているかもしれない。(白语读作 [ji2 suo1]。前者是汉语“金”(jin1) 的阳转阴; 后者是汉语“锁”(suo3) 的变调。《南詔野史》有“南龙关对北金锁, 东洱水朝西点苍”之句, 语或本此。)

「把」

- ④ 「把」は [peɪ33] とは読まない。なぜなら [peɪ33] は「持つ」の意であるが、ここでの「把」は「守る」の意であるから、[ka33] と読むのが妥当である。(“把”不读 [peɪ33], 盖因 [peɪ33] 意为“持, 拿”; 而此句中“把”乃是“把守”之意, 故应读 [ka33] 较妥。)
- ⑥ ペー語で [beɪ] と読み、「守る」の意。(白语读 [beɪ], “把守”之意。)

「天关」

- ⑥ 天然の要塞のこと。ペー語で [hei2 gua2] と読むが、[hei2] は「昊」(hao4) の変音で、[gua2] は漢語の「関」(guan1) の対転。(即天然关隘。白语读 [hei2 gua2], [hei2] 是“昊”(hao4) 的变音, 是汉语“关”(guan1) 的对转。)

第1段第4句

	鎮	背	龍	白	虎
②	tsu42	tʰeɪ55	ny21	peɪ42	xu33
	訓	訓	訓	訓	借
③	tsu42	tʰeɪ55	ny21	peɪ42	xu33
	訓	訓	訓	訓	借
④	tsu42	tʰeɪ55	ny42	Peɪ42	Xu33
	訓	訓	訓	訓	借

I. 山花碑注釈集成

⑤	zhen1	qin1	Lu2	be2	hu3
	借	借	借	借	借
⑥	zhou1	qin4	lu3	be4	lo3
	*	借	借	借	訓

〈大意〉

- ① 青龍白虎が守っている（有青龙白虎镇守）
- ② 青龍白虎が鎮めている（镇青龙白虎）
- ③ 青龍白虎が鎮めている（镇青龙白虎）
- ④ 青龍白虎がいる（有青龙白虎）
- ⑤ 青龍白虎が鎮めている（镇青龙白虎）
- ⑥ 上下二つの関を鎮めている（镇上下俩关）

〈語釈〉

- ② 「鎮〔tsu42〕青龍白虎」は、青龍と白虎がいて守っているという意であり、青龍白虎を鎮めているということではない。原文と訳文は「鎮」字を前に移動させているが、それは「虎」字で押韻するためである。（「鎮〔tsu42〕青龙白虎」表示有青龙白虎镇守，而不是镇住青龙白虎。原文和译文把“镇”字移到前边，是为了用“虎”字押韵。）
- ④ 「鎮」は漢字を借りてペー語音を表しており、その意は「いる」である。したがって〔tsu42〕と読む。（“镇”，乃借汉字表白语音，其意为“有”，故读〔tsu42〕。）
- ⑥ 「鎮」はペー語で〔zhou1〕と読み、漢語の「鎮」（zhen4）の変音である。「青龍白虎」は漢語の借用語で、ペー語では〔qin4 lu3 be4 lo3〕と読む。（“镇”，白语读〔zhou1〕，汉语“镇”（zhen4）的变音。“青龙白虎”系汉语借词，白语读作〔qin4 lu3 be4 lo3〕。）

第2段第1句

	山	侵	河	處	河	鏡	傾
②	se35	ni44	ko21	ts ^h y31	ko21	keɿ33	k ^h ueɿ55
	訓	*	訓	訓	訓	訓	訓
③	se35	ni44	ko21	ts ^h y31	ko21	keɿ33	k ^h ueɿ55
	訓	*	訓	訓	訓	訓	訓
④	se35	tɕu55	ko42	ts ^h y31	ko42	kei42	k ^h ueɿ55
	訓	借	訓	訓	訓	訓	訓
⑤	shei2	qin4	go3	chu3	go3	ge1	kue4
	訓	借	訓	訓	訓	訓	訓
⑥	sei2	ni1	go3	chi3	go3	ge1	kue4
	訓	*	訓	訓	訓	訓	訓

〈大意〉

- ① 山の影は透き通った（洱海の）湖面に逆さに映り，湖面が傾斜する（山影倒映清澈的海里，海面傾斜）
- ② 蒼山の影が洱海の湖面に逆さに映って傾く（山影倒映海面傾）
- ③ 蒼山の影が洱海の湖面に逆さに映って傾く（山影倒映海面傾）
- ④ 山が海を抱き山の影が傾く（山抱海处山影斜）
- ⑤ 蒼山の影が洱海の湖面に逆さに映って傾く（山影倒映海面傾）
- ⑥ 山の影が湖面に映って傾く（山影映入海面傾）

〈語釈〉

「山」

- ⑥ ペー語で [shu2] もしくは [sei2] と読む。ここは後者をとる。（白語読 [shu2] 或 [sei2], 我们采用后者。）

「侵」

- ④ 漢語の借用語で、音義は漢語とほぼ同じ。だから [ni44] とは読まずに [tɕu] と読む。（“侵”系汉语借词，音，义略同于汉语，故不读 [ni44]；而应读 [tɕu]。）
- ⑤ 映りこむの意。（映入之意。）
- ⑥ ペー語で [ni1] と読み、「入る」の意味。（白語読 [ni1], “进入”的意思。）

「河」

- ⑥ ペー語で [go3] と読む。もとは漢語の「河」の古音。ここでは「海（洱海）」のことをいう。（白語読為 [go3], 本是汉语“河”的古音，这里当“海”讲。）

「處」

- ⑥ ペー語で [chi3] と読む。意味は漢語と同じ。（白語読 [chi3], 义同汉语。）

「河鏡」

- ④ 「鏡」は [kɛɪ33] とは読まない。その意味は「鏡」から派生した「影」であり、そのため [kɛɪ42] と読む。（“鏡”不读 [kɛɪ33], 其意乃是將“镜子”引申为“影子”，故应读 [kɛɪ42]。）
- ⑥ 「鏡」はペー語で [ge1] と読み、鏡の意。「河鏡」とは「海面」のこと。（“鏡”白語読 [ge1], 即“镜子”；“河鏡”，即“海面”。）

「傾」

- ⑤ 斜めのこと。（斜也。）
- ⑥ ペー語で [kue4] と読む。「傾斜」の意味。（白語読 [kue4], “傾斜”的意思。）

第2段第2句

	河	侵	山	處	山	嶺	透
②	ko21	ni44	se35	ts ^h y31	se35	tu21	zou33
	訓	*	訓	訓	訓	*	訓

I. 山花碑注釈集成

③	ko21	ni44	se35	ts ^h ɣ31	se35	tu21	zou33
	訓	*	訓	訓	訓	*	訓
④	Ko42	tɕu35	Se35	ts ^h ɣ31	Se35	ŋɛ1 33	zou33
	訓	借*	訓	訓	訓	訓	訓
⑤	go3	qin4	shei2	chu3	shei2	ngel	ruo1
	訓	借	訓	訓	訓	訓	借*
⑥	go3	ni1	shei2	chi3	sei2	ngel	ruo1
	訓	*	訓	訓	訓	訓	借*

〈大意〉

- ① (洱海の) 湖水はもえぎ色の蒼山の影を浴びて、(蒼山の) 山々が波打つ (海水沐浴着葱緑的山影, 山岭荡漾)
- ② 湖水は波打ち、蒼山はそのまわりをとりかこむ (海水荡漾山盘旋)
- ③ (洱海の) 湖水は波打ち、蒼山が(そのまわりを)めぐる (海水荡漾山回环)
- ④ 海が山を取り囲み、山々が(そのまわりを)めぐる (海环山处山峦绕)
- ⑤ (洱海の) 湖水は波打ち、蒼山は(洱海を)ぐるりと取り囲む (海水荡漾山环绕)
- ⑥ 山の峰が波とともにめぐり回っている (山岭随波在转旋)

〈語釈〉

「侵」

- ④ 第1句と同じく [tɕu] と読む。(同第一句, 应读 [tɕu]。)

「嶺」

- ④ [ŋɛ133] と読む。[tu42] と読むこともあるが妥当ではない。(读 [ŋɛ133]; 有读为 [tu42], 未妥。)
- ⑥ ペー語で [ngel] と読む。意味は漢語と同じ。(白语读 [ngel], 意同汉语。)

「遠」

- ⑤ 取り巻く, ぐるりと取り囲むの意。(通绕, 环绕之意。)
- ⑥ ペー語で [ruo1] と読む。意味は漢語と同じ。(白语读 [ruo1], 意同汉语。)

第2段第3句

	屏	面	西	酒	十	八	溪
②	pie133	mi42	se35	sua35	tsi42	pia44	tɕ ^h i55
	訓	訓	訓	自	訓	訓	訓
③	pie133	mi42	se35	sua35	tsi42	pia44	tɕ ^h i55
	訓	訓	訓	自	訓	訓	訓
④	Pie133	mi44	Se35	Sua31	tsi42	pia44	tɕ ^h i55
	訓	訓	訓	自	訓	訓	訓

⑤	pin4	mi2	sei1	xue3	zhl3	bia1	ql4
	訓	訓	訓	白	訓	訓	訓
⑥	piu4	mi2	sei2	xue3	zhi3	bia1	qi4
	*	訓	訓	白	訓	訓	訓

〈大意〉

- ① 18筋の溪流が屏風のような蒼山から下に流れている（十八条溪水由屏风似的苍山倾斜下来）
- ② 18筋の溪流が西から流れてくる（十八溪水从西来）
- ③ 18筋の溪流が西から流れてくる（十八溪水从西来）
- ④ 蒼山の岩壁の西から18筋の溪流が流れている（苍屏西泻十八溪）
- ⑤ 蒼山から18筋の溪流が流れている（苍山泻下十八溪）
- ⑥ 蒼山の岩壁の西から18筋の溪流が流れている（山屏西泻十八溪）

〈語釈〉

- ② 「屏面西泻十八溪」とは、屏風のような蒼山の上の雪解け水が集まって18本の川となっていることを指す。蒼山には19の峰があり、桃溪、隠仙溪、万花溪、青碧溪などが各々の峰の間に1本ずつ流れている。（“屏面西泻十八溪”，指屏风似的苍山上的溶雪汇成十八条水溪。苍山有十九峰，每峰之间有一溪，如桃溪，隐仙溪，万花溪，青碧溪等。）
- ④ 「泻」は〔sue31〕と読み、その意味は「速く流れる」である。〔sua35〕と読むこともあるが妥当ではない。（“泻”读〔sue31〕，其意为“泻”；有读为〔sua35〕，未妥。）
- ⑤ 「泻」は「傾き流れる」の意。「十八溪」とは、大理内に流れる18本の川。（“泻”，倾泻之意。“十八溪”，即大理境内的十八条溪水。）
- ⑥ 「西」はペー語で〔sei2〕と読む。「泻」はペー語で〔xue3〕と読む。「十八溪」はペー語で〔zhi3 bialqi4〕と読み、大理蒼山の18本の川のことを指している。（“西”，白语读〔sei2〕；“泻”，白语读作〔xue3〕。“十八溪”，白语读作〔zhi3 bialqi4〕，指的是大理苍山的十八条溪水。）

第2段第4句

	補	東	洱	九	曲
②	pu33	ty35	ko21	tɕu33	k ^h y44
	訓	訓	*	訓	訓
③	pu33	ty35	ko21	tɕu33	k ^h y44
	訓	訓	*	訓	訓
④	Pu33	ty35	Ko42	tɕu33	k ^h y44
	訓	訓	*	訓	訓
⑤	bu1	du2	er1	jiu1	kvu1
	訓	訓	借	借	訓

I. 山花碑注釈集成

⑥	bul	du2	er1	jiul	kul
	訓	訓	借	借	訓

※ ⑥は「洱」を「河」に作る。

〈大意〉

- ① 洱海東岸の9つの湾を引き立たせる（衬对着东海的九个海湾）
- ② 洱海の東の9つの湾に注ぐ（注东海九湾）
- ③ 洱海の東の9つの湾に注ぐ（注东海九湾）
- ④ 洱海東岸の9つの湾を補う（补东海九曲）
- ⑤ 洱海の東の9つの湾に注ぐ（注东洱九曲）
- ⑥ 9つの湾を補い満たす（把九曲补满）

〈語釈〉

「補」

- ④ [pu33] と読み、「補填する」の意。意味は漢語と同じで、音も近い。（读 [pu33]，即“填补”之意，其意同汉语，音读亦近似。）
- ⑥ ペー語で [bul] と読む。漢語の声調とやや異なる。（白语读 [bul]，与汉语声调稍异。）

「東洱」

- ⑥ 洱海の東側、ペー語で [du2 er1] と読む。[du2] は漢語の「東」(dong1) の陽転陰。（洱海的东面，白语读作 [du2 er1]，[du2] 是汉语“东”（dong1）的阳转阴。）

「九曲」

- ② 洱海東岸の18本の川に面している9つの湾のことを指す。（指洱海东面对着十八溪的九个海湾。）
- ⑥ ペー語で [jiul kul] と読む。漢語とは音がやや異なる。「曲」の韻母は「u」が唇齒音となっている。「九曲」は洱海東側の9つの湾。（白语读 [jiul kul]，与汉语音稍异，“曲”的韵母由“u”变读为唇齿音。“九曲”，是洱海东面的九个海湾。）

第3段第1句

	伽	藍	殿	閣	三	千	堂
②	tɕ ^h ɛɿ55	na21	ti55	ko35	sa55	tɕ ^h i55	t ^h a55
	訓	訓	借	借	訓	訓	訓
③	tɕ ^h ɛɿ55	na21	ti55	ko35	sa55	tɕ ^h i55	t ^h a55
	訓	訓	借	借	訓	訓	訓
④	tɕ ^h ɛɿ35	na42	ti55	Ko35	Sa55	tɕ ^h i55	t ^h a55
	訓	訓	借	借	訓	訓	訓

⑤	qie2	Lan2	dian4	go3	sa2	qian2	ta2
	借	借	借	借	借	借	借
⑥	qie2	lan2	dian2	go2	sa4	qian4	ta4
	借	借	借	借	借	借	借

〈大意〉

- ① 三千堂の莊嚴な伽藍仏殿 (三千堂庄严的伽蓝佛殿)
- ② 僧院仏殿三千堂 (僧院佛殿三千堂)
- ③ 僧院仏殿三千堂 (僧院佛殿三千堂)
- ④ 伽藍殿閣三千堂 (伽蓝殿阁三千堂)
- ⑤ 僧院仏刹三千堂 (僧院佛刹三千堂)
- ⑥ 三千堂の伽藍殿閣 (三千堂伽蓝殿阁)

〈語釈〉

「伽藍」

- ② 第1句の「伽藍」、第2句の「蘭若」は、ともに寺院の建物のこと。昔大理は古妙香国と称えられるほど(仏教が盛ん)で、莊嚴雄大な寺院が多かった。(第1句“伽藍”、第2句“兰若”、指寺院庙宇。过去大理有古妙香国之称，庄严宏伟的寺院很多。)
- ④ “伽藍”はもとは漢語の借用語。漢語では[tɕ^ha na]と読むが、ペー語では習慣的に[tɕ^he:155 na42]と読む。ここはペー語の俗音に従う。(“伽藍”本为汉语借词，汉读[tɕ^ha na]，而白语习惯读[tɕ^he:155 na42]，今从白语俗读。)

「三千堂」

- ⑥ ペー語で[sa4 qian4 ta4]と読む。[sa4]は「三」(san1)の対転。「堂」(tang2)の音が対転変音して[ta4]となり、「千」(qian1)の音に変音して[qian4]となった。(白语读作[sa4 qian4 ta4]。[sa4]是“三”(san1)的对转，“堂”的读音对转变音为[ta4]，“千”(qian1)的读音变音为[qian4]。)

第3段第2句

	蘭	若	宮	室	八	百	谷
②	na35	za31	ku33	si35	pia44	pe:144	xu35
	音	音	借	借	訓	訓	*
③	na35	za31	ku33	si35	pia44	pe:144	xu35
	音	音	借	借	訓	訓	*
④	na35	Za31	Ku33	Si35	Pia44	Pe:144	K ^h u35
	音	音	借	借	訓	訓	*

I. 山花碑注釈集成

⑤	La3	rei4	gu4	shl3	bia3	be3	gu3
	音	音	借	借	訓	訓	音
⑥	la3	rei2	gu2	shil	bial	bel	gul
	音	音	借	借	訓	訓	音

〈大意〉

- ① 八百座の見事な蘭若宮室（八百座玮丽的兰若宫室）
- ② 寺廟の建物八百谷（寺庙宫八百谷）
- ③ 寺廟の建物八百谷（寺庙宫八百谷）
- ④ 蘭若宮室八百屋（兰若宫室八百屋）
- ⑤ 寺廟宮室八百カ所（寺庙宫室八百处）
- ⑥ 八百カ所の蘭若道観（八百处兰若宫观）

〈語釈〉

「八百谷」

- ④ ペー語では川谷の「谷」は [k^hy35] と読み、「処、所」と同じ音である。だから [k^hy35] と読むべきである。[xu35] と読むこともあるが妥当ではない。（白语川谷之“谷”读 [k^hy35]，与“处、所”谐音，故应读为 [k^hy35]；有读为 [xu35]，未妥。）
- ⑤ 八百カ所のこと。（即八百处。）
- ⑥ 「八百カ所」のこと。「谷」はペー語で [gul] と読む。ペー語の「処所」の意味。（即“八百处”：“谷”白语读 [gul]，是白语“处所”的意思。）

第3段第3句

	雪	染	點	蒼	冬	頭	白
②	sue44	ze33	tɕu33	ts ^h ou55	ty35	tu21	peɪ42
	訓	訓	*	訓	訓	訓	訓
③	sue44	ze33	tɕu33	ts ^h ou55	ty35	tu21	peɪ42
	訓	訓	*	訓	訓	訓	訓
④	Sue44	Ze33	tɕu33	ts ^h u33	ty35	tu42	Peɪ42
	訓	訓	*	訓	訓	訓	訓
⑤	shul	reil	jin3	cuo4	du4	dou3	be2
	*	訓	*	訓	訓	訓	訓
⑥	shuil	reil	ji2	cuo4	du2	dou3	be3
	訓	訓	*	訓	訓	訓	訓

〈大意〉

- ① 冬の積雪が蒼山の頂を白く染める（冬天的积雪染白了苍山的头顶）

- ② 冬の雪が蒼山の頂を染める (冬雪染蒼山头)
- ③ 冬の雪が蒼山の頂を染める (冬雪染蒼山头)
- ④ 雪が点蒼山の冬の頂を白く染める (雪染点蒼冬头白)
- ⑤ 冬の雪が白く蒼山の頂を染める (冬雪染白蒼山头)
- ⑥ 冬になると点蒼山の頂が白くなる (冬来点蒼头顶白)

〈語釈〉

「點蒼」

- ② 蒼山のこと。点蒼山ともいう。(即蒼山, 也称点蒼山。)
- ④ 第1段第1句の説明を参照。[tɕu33 ts^hu33] と読む。(見前首联一句説明, 读为 [tɕu33 ts^hu33]。)

「雪」

- ⑥ ペー語で [shuil] と読む。漢語の「雪」(xue3) の古音。(白語读 [shuil], 是汉语“雪”(xue3) 的古读。)

「染」

- ⑥ ペー語で [reil] と読む。漢語の「染」の対転。(白語读 [reil], 为汉语“染”的对转。)

「頭」

- ⑥ ペー語で [dou3] と読む。漢語の「頭」(tou2) の無気音。(白語读 [dou3], 为汉语“头”(tou2) 的不送气。)

「白」

- ⑥ ペー語で [be3] と読む。漢語の白 (bai2) の古音。現在でも西南方言では「白」を [be2] と読む。声調がペー語と異なるだけである。『蛮書』にいうところの白蛮の「四声訛重」とは、おおむねこのような状況を指している。(白語读 [be3], 为汉语“白”(bai2) 的古读。今西南方言仍读“白”为 [be2], 惟声調与白語不同。《蛮書》说白蛮的“四声訛重”, 大概指的就是这类情况。)

第3段第4句

	涸	河	秋	面	皺
②	eɪ33	ko21	tɕ ^h u55	mi42	kv33
	訓	訓	訓	訓	訓
③	eɪ33	ko21	tɕ ^h u55	mi42	kv33
	訓	訓	訓	訓	訓
④	eɪ33	Ko42	tɕ ^h u55	mi42	tsu33
	訓	訓	訓	訓	*
⑤	er1	go3	qing4	mil	gu2
	訓	訓	訓	訓	訓

I. 山花碑注釈集成

⑥	er1	go3	qiu4	mi2	zhul
	訓	訓	訓	訓	借

〈大意〉

- ① 秋風が吹いて穏やかな海面に皺（波紋）をつくる（秋风吹皱了平静的海面）
- ② 海面に風が吹いて皺（波紋）をつくる（海面风吹皱）
- ③ 海面に風が吹いて皺（波紋）をつくる（海面风吹皱）
- ④ 洱海は秋風で皺（波紋）をつくる（洱海秋风皱）
- ⑤ 洱海に風が吹いて皺（波紋）をつくる（洱海风吹皱）
- ⑥ 洱海の秋は皺模様（洱海秋皱顔）

〈語釈〉

「洱河」

- ② 洱海のこと。（即洱海。）

「秋面皺」

- ④ 「秋面」は [tɕ^hu55 mi42] と読み、「秋風」の意味がある。また「皺」は [tsu33] と読み、意味は漢語と同じ。[ky33] と読むこともあるが、妥当ではない。（“秋面”读 [tɕ^hu55 mi42]，有“秋风”之意。又“皱”读 [tsu33] 意同汉语；有读为 [ky33]，未妥。）
- ⑤ 秋風が吹いて洱海の水面を皺だたせること。（即秋风吹皱了洱海水面。）
- ⑥ べー語で [qiu4 mi2 zhul] と読み、意味は秋になると水面上に波紋ができる（秋になると洱海の水面が風に吹かれて波紋ができる）ということ。[mi2] は「面」(mian4) の陽転陰、[qiu4] は「秋」(qiu1) の変調、[zhul] は「皺」(zhou4) の変音。（白语读作 [qiu4 mi2 zhul]，意即秋来脸上起了皱纹（秋来洱海面上被风吹起了皱纹）。[mi2] 是“面” (mian4) 的阳转阴，[qiu4] 是“秋” (qiu1) 的变调，[zhul] 是“皱” (zhou4) 的变音。）

第4段第1句

	五	華	侶	你	麗	得	充
②	u31	xua42	le31	ne31	ni44	k ^h v55	ts ^h v31
	借	借	自	*	自	*	音
③	u31	xua42	le31	ne31	ni44	k ^h v55	ts ^h v31
	借	借	自	*	自	*	音
④	u31	xua42	tɕou31	ne31	ni44	k ^h v55	ts ^h v31
	借	借	自	*	自	*	音
⑤	wu3	hua4	zl2	nl2	nl4	ku2	chu3
	借	借	自	借	自	*	音

⑥	wu3	hua2	zi2	ni4	ni1	ku2	chu3
	借	借	自	借	自	*	音

〈大意〉

- ① 崔巍の五華楼は高い空にまっすぐそびえ立つ（崔巍的五华楼矗立在高空）
- ② 五華楼は晴れた空に高く入る（五华楼高入晴空）
- ③ 五華楼は晴れた空に高く入る（五华楼高入晴空）
- ④ 五華楼は天空に昇るように（高い）（五华宛如凌霄汉）
- ⑤ 五華楼は晴れた空に高く入る（五华楼高入晴空）
- ⑥ 五華楼は天空を真っ直ぐ突き抜く（五华楼直冲霄汉）

〈語釈〉

「五華」

- ② 「五華」は五華楼を指す。南詔王豊祐の時に建立された。五華楼は規模が广大で、方広五里、高百尺、上可容万人、下可建五丈旗といわれる。現存しない。（“五华”，指五华楼，南詔王丰佑时所建。据说，原来的五华楼规模宏大，方广五里，高百尺，上可容万人，下可建五丈旗。今已无存。）
- ④ 大理城は南詔王国の閣羅鳳（在位 748～79 年）によって 764 年に開始された。陽苴咩城、紫城とも呼ぶ。その規模は『蛮書・六』に詳しく記されているが、五華楼については記されていない。第三重門に「門列戟，在有重楼」という記述があることから、これを五華楼とする説もあるが憶測に過ぎない。嘉靖年間（1521～66 年）の『大理府史・古跡』には「（五華楼は）廢址在今郡城（大理県城）中央，唐大中十年（856 年），南詔豊券祐（勸豊祐の誤り）所建，以会西南夷十六国。…公元三年（1266 年）嘗賜金重修。国初兵燹始廢」とある。また『蒙化府史』には「晟（勸）豊祐建五華楼于国中，以会西南十六国蛮夷之長」との記述がある。「廢址在今郡城中央」というのは、明代に陽苴咩城の「門楼外東南二里」に建設された新たな大理城の中央に五華楼の廢址があるということだ。つまり、勸豊祐によって建築された五華楼は陽苴咩城の東南二里の地点にあったということである。唐代の『蛮書』によれば、陽苴咩城の東南二里の地点には「来館」地区があり、「袤広五里，高百尺」であったという。これが五華楼であり、勸豊祐はここで西南十六国の長と会したのだろう。とすると、五華楼は明代初め（1368 年）にはすでに「兵燹始廢」となっていたのである。山花碑は 1450 年の銘をもつから、楊黼がこの詩を創った時点で、それはすでにかつてのように存在していたわけではなかった。しかし楊黼は幼少年期の印象のなかで、この天を貫くような五華楼の威容を形象化し、それを天に聳える三塔と南北に相対的に配置することによって、詩のなかに蒼山洱海の古跡として出現させたのではなかったか。（要約）
- ⑤ 大理城中の鼓楼で、五華楼と称す。（大理城中的鼓楼，称五华楼。）
- ⑥ 楼名で、大理古跡の一つ。（楼名，大理古迹之一。）

I. 山花碑注釈集成

「侶你」

- ② 現在のペー語でも [le31 ne31] と発音する。意味は「この」で、名詞の後に置き、数量詞として名詞を修飾する。これはイ語系言語に共通する構造で、楊燦然はこれを語気助詞とするが未だ確定していない。(現在白語仍说 [le31 ne31], 意思是“这个”, 放在名词后边, 作为数量词组, 修饰名词。这是彝语支语言的一种共同的结构形式, 杨灿然认为它是语助词, 不确。)
- ④ 「侶你」は [tɕou31 ne31] と読み、「まるで～のようだ」の意。[le31 ne31] と読む説があるが、おそらく「侶」(si4) 字を誤って「侶」(lu3) としたためだろう。原文は「似」字の古字である。(“侶你”读 [tɕou31 ne31], 意为“仿佛”; 有读 [le31 ne31], 盖因将“侶”字误为“侶”, 原诗实为“似”字之古写。)
- ⑤ ペー語の語気詞。(白語语气词。)
- ⑥ ペー語で [zi2 ni2] と読む。語気詞。(白語读作 [zi2 ni2], 语气词。)
- ⑦ [nel il] と読み、「也是(～もまた)」の意。([nel il], 也是。)

「罽」

- ② 意味は「入る」。(意思是“入”。)
- ⑥ ペー語で [ni1] と読み、「入る」の意。白文の形声字。(白語读 [ni1], “进入”之意。是白文的形声字。)

「霄充」

- ⑤ 天空のこと。(即天空。)
- ⑥ ペー語で [ku2 chu3] と読み、「天空」の意味。漢字の音義を借りて構成された言葉。(白語读作 [ku2 chu3], “天空”的意思。是借汉字音义构成的词。)

第4段第2句

	三	塔	侶	你	穿	天	腹
②	sa55	tʰa44	le31	ne31	tɕʰɛɿ44	xe55	fy44
	訓	訓	自	*	*	訓	訓
③	sa55	tʰa44	le31	ne31	tɕʰɛɿ44	xe55	fy44
	訓	訓	自	*	*	訓	訓
④	Sa55	tʰa44	tɕou31	ne31	tɕʰɛɿ44	Xe55	fy44
	訓	訓	自	*	*	訓	訓
⑤	sa4	ta2	zl4	ni4	chul	hei4	ful
	訓	訓	自	借	*	訓	訓
⑥	sa4	tal	zi2	ni4	chu4	hei4	ful
	訓	訓	自	借	*	訓	訓

〈大意〉

- ① 崇聖寺の三つの高い塔は空に挿し込む(崇聖寺的三座高塔插入云霄)

- ② 三つの塔はすどく天の中ほどを貫く (三座塔尖穿天腹)
- ③ 三つの塔はすどく天の中ほどを貫く (三座塔尖穿天腹)
- ④ 三塔は天の中ほどを真っ直ぐ貫く (三塔直是穿天腹)
- ⑤ 三塔は高くそびえ天の中ほどを貫く (三塔高耸穿天腹)
- ⑥ 三塔はそびえて雲間に入る (三座塔耸入云间)

〈語釈〉

「三塔」

- ② 三塔寺の三つの塔のことを指す。大理城西北蒼山蓮花峰の下にあり、唐代に建立された。(指三塔寺的三座塔。在大理城西北蒼山蓮花峰下，也建于唐代。)
- ④ 崇聖寺は南詔王国時代、勸豊祐執政期 836 年に創建された。明代に至っても徐霞客『滇遊日記』(1639)に「是寺在第十之下，唐開成中建，名崇聖寺。前三塔鼎立，而中塔最高，方形累十六層，故今名為三塔。…」と記されているほか、李元陽(1497~1580年)の『大理府史』などにも記述が残る。楊黼(山花碑は1450年)は彼らより前の時代を生きているから、当然その威容を目にしていたはずである。(要約)
- ⑤ 大理崇聖寺の三塔のことを指す。(指大理崇聖寺三塔。)
- ⑥ ペー語で [sa4 tal] と読む。漢語「三塔」の変音。三塔は大理崇聖寺の三塔のことで、8世紀の南詔期に建立された。(白語读作 [sa4 tal]，为汉语“三塔” 的变音。三塔，即大理崇聖寺三塔，建于公元8世纪的南詔时期。)

「穿」

- ⑥ ペー語で [chu4] と読む。漢語「穿」(chuan1)の陽転陰で、意味は漢語と同じ。(白語读为 [chu4]，为汉语“穿”(chuan1) 的阳转阴，意同汉语。)

「天腹」

- ⑥ ペー語で [hei4 ful] と読む。意味は漢語と同じ。(白語读作 [hei4 ful]，义同汉语。)

第4段第3句

	鳳	飛	山	高	鳳	風	栖
②	v31	ji35	se35	ka35	v31	yo31	ts ^h e55
	訓	自	訓	訓	訓	訓	訓
③	v31	ji35	se35	ka35	v31	yo31	ts ^h e55
	訓	自	訓	訓	訓	訓	訓
④	V31	ji35	Se35	Ka35	V31	yo31	ts ^h e55
	訓	自	訓	訓	訓	訓	訓
⑤	vu1	yl1	shei4	ga4	vu3	wo3	chei2
	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓

I. 山花碑注釈集成

⑥	vu3	yil	sei2	ga2	wu3	wo3	chei4
	訓	訓	訓	訓	訓	訓	訓

〈大意〉

- ① 高くそびえる鳳羽山には美しい鳳凰が棲む（高耸の凤羽山上有美丽的凤凰栖止）
- ② 鳳羽山は高く鳳凰が棲む（凤羽山高凤凰栖）
- ③ 鳳羽山は高く鳳凰が棲む（凤羽山高凤凰栖）
- ④ 鳳儀山は高く鳳凰が棲む（凤仪山高凤凰栖）
- ⑤ 鳳戩山は高く鳳凰が棲む（凤戩山高凤凰栖）
- ⑥ 鳳羽山は高く鳳凰が棲む（凤羽山高凤凰栖）

〈語釈〉

「鳳戩山」

- ② 鳳戩山とは洱源县にある鳳羽山のことである。鳳凰の羽がかつてこの山に落ちたためにこの名が付いたという。毎年7、8月にたくさんの鳥（百鳥）がこの山に集まるが、伝説ではここに落ちた羽毛を弔うためだといい、それで「鳥弔山」ともいう。（即凤羽山，在洱海县境内，据说凤凰的羽毛曾落在座山上，故此得名。每年七、八月间百鸟集于此山，传说是为凭吊落在这里的凤凰羽毛，因而也叫鸟吊山。）
- ④ 「鳳翼」は〔v31 ji35〕と読み、「鳳儀」のペー語音であるが、その後転訛して「鳳羽」となった。しかし、古ペー語音においても「鳳羽」は〔v31 ji35〕と発音されている。したがって詩中に用いられている「鳳翼」は現在の洱源县の「鳳羽」を指しており、今の「鳳儀」を指しているわけではない。（“凤翼”读〔v31 ji35〕，即“凤仪”之白语音读，后讹为“凤羽”；但古白语中犹称“凤羽”为〔v31 ji35〕。故诗中所称“凤翼”实指今洱源县之“凤羽”，并非今之“凤仪”。）
- ④ ペー族には鳳凰に関する神話伝説が多数伝えられているが、それは次のような神話の多様なバージョンとしてある。蒼山後方の羅坪山に毎年秋分のころたくさんの鳥が鳳凰に参詣していた。ある年、まさに百鳥が集まったとき天気が急に变化しすぐに大雪になった。鳳凰は百鳥が寒さに凍えるのを見かねて自分のすべての羽を抜き百鳥に分け与え、彼らがすぐに雪に閉ざされたこの山を飛び立ち故郷に帰れるようにした。鳳凰は赤裸となり身を覆う羽毛もなく寒さは体の芯まで達し、ついに羅坪山頂で凍死した。そこで百鳥は毎年秋分の前夜、万里を遠しとせず鳳凰を哀悼するために羅坪山に飛んでくるのだ。おそらく羅坪山は渡り鳥の飛翔経路になっており、夜間は天空に霧が出るのをさけて低空飛行するが、それを人間が発見し、かがり火でこれを誘い捕獲するというを行っていたのだろう。早く〔後漢書〕郡国志樸榆県条所引の〔広志〕に次のようにある。「有鳥弔山，県西北八十里，在阜山。衆鳥千百群共会，嗚呼啞嘶。每歲七月，八月晦望至，集六日則止。歲凡六至。雉鳥来弔特悲。其方人夜然火伺取，無嗜不食者以為義鳥。俗言鳳凰死于此山，故衆鳥来弔」。同様の記事は酈道元〔水経注〕にも見られる。従って、蒼山西北の阜山（羅坪山）では、毎年渡り鳥の群れが飛行するのが見られ、そこからペー族先民が作り出した

「百鳥朝鳳」神話が、千年以上前に中原に伝えられ諸文献に記載されたといえる。その後、ペー族での俗称「阜山」は「鳳儀」山となった。これは「有鳳来儀」の省略であり、楊黼は正しくそのペー語音を「鳳戩」と記したのである。後人がこれを「鳳戮」とし転訛して「鳳羽」となったのである。従って、蒼山後方の盆地を近代ペー語では「鳳戩郷」と呼び、これが「鳳羽郷」（現在洱源县に属す）と転訛したのである。

楊黼は蒼洱の間に生まれ育ったが、民間で盛んに語られていた鳳凰神話伝説に対して非常によく聞き及んでいただけでなく、「有鳳来儀」、「百鳥朝鳳」のたぐいの瑞祥にもさらに興味を持っていたのであった。こうしてここに鳳凰が詠み込まれたわけである。ただし、楊黼がここで鳳凰と竜とを併称したのは、ただ単に「百鳥朝鳳」の美しいペー族神話としてのみそれを用いたのではなく、さらに重要な意図は蒼洱の間に「竜鳳呈祥」の自然の造化を明らかに示すものであったのだ。（要約）

- ⑤ 現在の洱源县内にある鳳羽山のこと。鳳凰がこの地で儀死し、毎年8、9月の間に百鳥が群れをなして鳳凰を悼みにくると伝えられている。（即今洱海县境之凤羽山，相传凤凰来仪死于此，每年八，九月间百鸟成群来悼凤凰。）
- ⑥ 雲南省大理白族自治州洱源县にある。鳳凰が東の昆明碧鷄関に向かって飛んでいく途中、ここで休憩したところ、一片の羽が落ちた、それで鳳羽山と呼ぶと伝えられる。鳳戩はペー語で〔vu3 yil〕と発音する。『玉篇』によると、「戩」は「翼」と同じである。『広韻』は「戩」は「翼」の古字としており、後に誤って「戩」となった。（在云南省大理白族自治州洱海县。相传凤凰向东飞往昆明碧鸡关时，在这里栖息过，还落了一片羽毛，故称凤羽山。凤戩，白语读作〔vu3 yil〕。按《玉篇》，“戩”同“翼”。《广韵》“戩”，为“翼”的古字，后伪为“戩”。）

「高」

- ⑥ ペー語で〔ga2〕と読む。ペー語と唐音が同じである。『蛮書』卷八に例がある。（白语读〔ga2〕，与白语唐音吻合。《蛮书》卷八中有此例。）

「鳳凰」

- ⑥ 古ペー語で〔wu3 wo3〕と読む。（古白语读作〔wu3 wo3〕。）

「栖」

- ⑥ ペー語で〔chei4〕と読む。古無舌上音の規律に合致する。（白语读作〔chei4〕，符合古无舌上音的规律。）

第4段第4句

	龍	関	龍	王	宿
②	ny21	kueɿ35	ny21	yo31	sy44
	訓	訓	訓	訓	訓
③	ny21	kueɿ35	ny21	yo31	sy44
	訓	訓	訓	訓	訓

I. 山花碑注釈集成

④	ny42	Kueɿ55	ny42	yo31	Sy44
	訓	訓	訓	訓	訓
⑤	Lu3	gue4	lu3	wo3	shil
	借	訓	借	訓	訓
⑥	lu3	gue2	lu3	wo3	shil
	借	訓	借	訓	訓

〈大意〉

- ① 険しい竜関には竜王が休む（险峻的龙关上有龙王宿息）
- ② 竜関には竜王が宿る（龙关龙王宿）
- ③ 竜関には竜王が宿る（龙关龙王宿）
- ④ 竜関には竜王が宿る（龙关龙王宿）
- ⑤ 竜関には竜王が宿る（龙关龙王宿）
- ⑥ 竜王は竜関に宿る（龙王宿龙关）

〈語釈〉

「竜関」

- ④ 「竜関」は [ny42 kueɿ55] と読み、「竜の国、竜宮」、すなわち竜王の住む地を指す。また、「竜王」の「王」をペー語古音では [yo31] と読むが、[yo31] は「后」のことである。おそらくペー語は、古漢語において「王」を「后」と称していたのを借りたのであろう。上の句の「鳳凰」も [v31 yo31] と読むのは、「鳳后」すなわち「鳳王」の意である。このようにペー語にはなお古漢語との関係性が保存されていることが多々あり、それは「后」の発音 [yo31] に限ったことではない。（“龙关”读 [ny42 kueɿ55]，意为“龙国，龙宫”，乃龙王所居之地。又“龙王”之“王”，白语古音读 [yo31]，即“后”也，盖白语借古汉语称“王”为“后”者，如上句“凤凰”亦读 [v31 yo31]，是为“凤后”，亦即“凤王”之意，白语中，尚保留有古汉语间者，往往而是，不独后之读 [yo31] 而已。）
- ④ 竜は『礼記』礼運に鳳、麟、亀とともに四靈とされ、それが儒教思想に取り込まれ、天帝比徳の靈物とされた。しかし、楊黼の思想においては伝統的儒教思想における竜だけでなく、竜王が海底の竜宮に住むというようなインドのナカ（竜）思想の影響も含んでいる。（要約）
- ⑤ 大理の上関、下関を指す。（指大理上，下两关。）
- ⑥ ペー語で [lu3 gue2] と読み、大理の「上関」と「下関」を指す。古くは上関を「竜首関」、下関を「竜尾関」と呼んだ。（白语读作 [lu3 gue2]，指大理的“上关”和“下关”。古称上关为龙首关，下关为龙尾关。）

「宿」

- ⑥ ペー語で [shil] と読む。意味は漢語と同じ。（白语读 [shil]，义同汉语。）

第5段第1句

	夏	雲	佉	玉	局	山	腰
②	yo31	ŋy31	tʰue31	ju35	tɕu35	se44	jo35
	訓	訓	自	借	借	借	借
③	yo31	ŋy31	kʰo55	ju35	tɕu35	se35	jo35
	訓	訓	自	借	借	借	借
④	yo31	ŋy31	Kʰo55	ju35	tɕu35	Se44	jo35
	訓	訓	自	借	借	借	借
⑤	wo3	vu3	kuo4	yu4	ju2	shu2	yao1
	訓	訓	自	借	借	借	借
⑥	wo3	vu3	kou4	yu1	ju1	sei2	yi4
	訓	訓	自	借	借	借	訓

〈大意〉

- ① 夏の白い雲が玉局峰の中腹にまとわりつく（夏天的白云缠绕着玉局峰的山腰）
- ② 夏の雲が玉局山の中腹にまとわりつく（夏云绕玉局山腰）
- ③ 夏の雲が玉局山の中腹にまとわりつく（夏云绕玉局山腰）
- ④ 夏の雲が玉局山の中腹にかかる（夏云系玉局山腰）
- ⑤ 夏の雲が玉局山の中腹にまとわりつく（夏云绕玉局山腰）
- ⑥ 夏の雲が玉局山の中腹にかかる（夏云系玉局峰腰）

〈語釈〉

「夏」

- ⑥ ペー語で [wo3] と読む。今もペー語では「立夏」を [li1 wo3] という。（白語読 [wo3]。今之白語仍呼“立夏”为 [li1 wo3]。）

「雲」

- ⑥ ペー語で [vu3] と読む。（白語読 [vu3]。）

「佉」

- ② 郭は [tʰue31] と読む。これは「繫腰帶（腰帶を結ぶ）」の「繫」のことであり、現在のペー語では [kʰo55] と読む。徐嘉瑞『大理古代文化史稿』は範義田『雲南古代民族之史的分析』を引き「佉の音は靠 (kao4) で帶の意味」とする。音は合っているが、意味は間違っている。「佉」は動詞で、名詞ではない。第17段第1句では、「佉」を郭は [pʰiu55] と読み、「偽 [ue35]」とつなげて「屏風」の意味としている。（郭读作 [tʰue31]，指“系腰帶”的“系”，现在白語读 [kʰo55]。徐嘉瑞《大理古代文化史稿》所引范义田《云南古代民族之史的分析》一文对《山花碑》中的“佉”字的考释是：“佉音靠，帶也”。音注对了，但义却错了，“佉”是动词，不是名词。后文（17）节第一行里的“佉”，郭读为 [pʰiu55]，和“伪 [ue35]”连读表示“屏風”。）
- ④ 「佉」は [kʰo55] と読み、意味は「繫腰帶（腰帶を結ぶ）」の「繫」である。[tʰue31] と発

I. 山花碑注釈集成

音しないのは、これが動詞であって、名詞の「腰帯」の「帯」ではないからである。（“佉”读 [k^ho55], 意为“系”也系腰带之“系”；并非读 [tɕ^hue31], 因此为动词, 而非名词“腰带”之“带”者。）

- ⑤ つなぐの意味。（即系的意思。）
- ⑥ ペー語で [kou4] と読み, 「帯を結ぶ」の意味。『蛮書』に「直佉とは皮带のこと」とある。（白语叫 [kou4], “系带”的意思。《蛮书》上说：“直佉, 韦带也。）

「玉局山」

- ② 「玉局山 [ju35 tɕu35 se44]」は、蒼山十九峰の一つ。（“玉局山 [ju35 tɕu35 se44]”, 是苍山十九峰之一。）
- ④ 「玉」は [ju35] と読む。これは古ペー語音で、漢語の古音が「玉」を [ju35] と読むのと同じである。（“玉”读 [ju35], 是为古白语音, 亦如古汉语音读“玉”为 [ju35] 者然。）
- ⑤ 蒼山十九峰の第14峰。（苍山十九峰之第十四峰。）
- ⑥ 大理点蒼山の北から南に数えて14番目の峰。（大理点蒼山由北往南之第十四峰。）

第5段第2句

	春	柳	垂	錦	江	道	途
②	ts ^h ɣ55	ɣu33	tiou44	tɕu33	tɕa35	to42	t ^h u33
	訓	訓	訓	借	借	音	音
③	ts ^h ɣ55	ɣu33	tiou44	tɕu33	tɕa35	to42	t ^h u33
	訓	訓	訓	借	借	音	音
④	ts ^h ɣ55	ɣu33	tiou44	tɕu33	tɕa35	to42	t ^h u33
	訓	訓	訓	借	借	音	音
⑤	chu4	ou1	zhui1	jin3	gu2	duo3	tu2
	訓	訓	訓	借	訓	*	音
⑥	chu4	ou1	zhui3	jin3	gu2	duo3	tu1
	訓	訓	訓	借	訓	*	音

〈大意〉

- ① 春の緑の柳が大路の両側に垂れかかる（春天的绿柳垂挂在大路两旁）
- ② 春の柳が錦江の道に垂れる（春柳倒垂锦江道）
- ③ 春の柳が錦江の大通りに垂れる（春柳垂锦江大道）
- ④ 春の柳が錦江の大通りに垂れる（春柳垂锦江大道）
- ⑤ 春の柳が錦江の大通りに垂れる（春柳垂锦江大道）
- ⑥ 春の柳が錦江の大通りに垂れる（春柳垂锦江大道）

〈語釈〉

「春」

- ⑥ ペー語で [chu4] と読む。漢語の「春」(chun1) の陽転陰で、末尾の n 音が落ちている。(白語読 [chu4], 为汉语“春”(chun1) 的阳转阴, 去其韵尾 n。)

「柳」

- ⑥ ペー語で [ou1] と読む。(白語読 [ou1]。)

「垂」

- ④ 垂れ下がるの意。「シダレヤナギ(垂柳)」の様子を表している。(意为“下垂”, 言“垂柳”之态。)

- ⑥ ペー語で [zhui3] と読む。漢語の「垂」(chui2) の無気音である。(白語読 [zhui3], 为汉语“垂”(chui2) 的不送气。)

「錦江」

- ② 地名だが、どこを指すかはわからない。(是地方, 不知指什么地方。)

- ④ 錦江がどこを指すかは、ほとんどわからない。錦江は特定の溪谷や水を指すのではなく、十八溪全般を指すもので、さらに広義では蒼山・洱海の水を指していた。少なくとも当時は何にでも使えた。(要約)

- ⑥ ペー語では [jin3 gu2] と読む。つまり大理の「錦浪江」のこと。(白語読 [jin3 gu2], 即大理的“锦浪江”。)

「道途」

- ④ 「大通り(大路)」の意。ペー語の [to42] は、「大」のこと, [tʰu33] は「路」のこと。俗にこれを「官馬大道」という。(“大路”之意, 白語 [to42], 乃“大”也, [tʰu33] 乃“路”也, 俗称之曰“官马大道”。)

- ⑤ ペー語。大通りのこと。(白語, 即大路。)

- ⑥ ペー語で [duo3 tu1] と読む。「大通り」のこと。(白語読 [duo3 tu1], 即“大路”。)

第5段第3句

	四	季	色	花	阿	園	園
②	ci44	tei44	se35	xuo35	a31	sua35	sua35
	訓	訓	音	訓	音	訓	訓
③	ci44	tei44	se35	xuo35	a31	sua35	sua35
	訓	訓	音	訓	音	訓	訓
④	ci44	tei44	Se35	Xuo35	a31	Sua35	Sua35
	訓		音	訓	音	訓	訓
⑤	xil	ji1	shei2	huo2	a3	shua2	shua2
	訓	訓	音	訓	音	訓	訓
⑥	xil	ji1	sei2	huo3	a3	shua2	shua2
	訓	訓	音	訓	音	訓	訓

I. 山花碑注釈集成

※ ⑥は「色」を「山」に作る。

〈大意〉

- ① 四季を通して常に咲く庭園の花々（一園園四季常开的鲜花）
- ② 四季折々の山の花々が庭中を満たして咲く（四季山花满园放）
- ③ 四季折々の山の花々が庭中を満たして咲く（四季山花满园放）
- ④ 四季折々の花々が群れ咲く（四季鲜花一簇簇）
- ⑤ 四季折々の花々が庭中を満たして咲く（四季鲜花满园放）
- ⑥ 庭中に咲く四季折々の花々（一园园四季鲜花）

〈語釈〉

「色花」

- ④ 「色」は〔se35〕と読み、「新鮮な」の意。（“色”读〔se35〕，意为“鲜”。）
- ⑤ 四季の生花のこと。（即四季鲜花。）
- ⑥ 「山花」はペー語で〔sei2 huo3〕と読み，生花の意である。「四季山花」とはつまり四季の生花のことである。（“山花”，白语读〔sei2 huo3〕，意即“鲜花”。“四季山花”，即四季鲜花。）

「阿園園」

- ④ 「一簇簇（ひと群れ）」、「一片片（一面）」の意。ペー語で「園」は〔sua35〕と読むが，この句は〔a31 sua35 sua35〕を一組みとし，意味は「一園園」ではなく，「一簇簇」であり，その盛んな貌を言っている。（有“一簇簇”，“一片片”之意；白语“园”读〔sua35〕，但此句以〔a31 sua35 sua35〕为一词组用，其意即非实指“一园园”，而言“一簇簇”，状其盛貌。）
- ⑤ 「一園園」のこと。（即一园园。）
- ⑥ ペー語で〔a3 shua2 shua2〕と読み，「一園園」のこと。（白语读作〔a3 shua2 shua2〕，即一园园。）

第5段第4句

	風	与	阿	触	触
②	pi35	ɥ33	a31	tsu44	tsu44
	訓	自	音	*	*
③	pi35	ɥ33	a31	tsu44	tsu44
	訓	自	音	*	*
④	Pi35	ɥ33	a31	tsu44	tsu44
	訓	自	音	*	*
⑤	bi2	vu1	a3	zhu3	zhu3
	訓	自	音	*	*

⑥	bi2	vul	a3	zhul	zhul
	訓	自	音	*	*

〈大意〉

- ① 一陣の風雨の中であでやかさを競う (在一阵阵的风雨中争妍)
- ② 風雨の中であでやかに咲く (风雨中逞娇)
- ③ 風雨の中であでやかに咲く (风雨中逞娇)
- ④ 幾たびも風雨にさらされる (几经风雨催)
- ⑤ 風雨の中であでやかに咲く (风雨中逞娇)
- ⑥ 風雨の中であでやかさを競う (风雨中争妍)

〈語釈〉

- ② 「風与 [pi35 y33]」の意味は「風雨」。風は [pi35]。 (“风与 [pi35 y33]”, 意思是“风雨”, 风是 [pi35]。)
- ④ 「与」は同音の漢字である「雨」を借用して, ペー語の意味を表している。だからペー語で [y33] と読み, 意味は「雨」である。また「阿触触」は [a31 tsu44 tsu44] と読み, 意味は「一陣」もしくは「ひとたび」。(“与”乃借用同音汉字之“雨”, 以表白语之意, 故白语读 [y33], 意为“雨”也。意为“一阵阵”或“一番番”。)
- ⑤ 一陣の風雨のこと。「与」は「雨」と通じる。(即风雨一阵阵。“与”通“雨”。)
- ⑥ ペー語で [bi2 vul a3 zhul zhul] と読み, 一陣の風雨のこと。(白语读作 [bi2 vul a3 zhul zhul], 即风雨一阵阵。)

第6段第1句

	跳	仙	人	出	充	遊	遊
②	t ^h iou55	se35	ni21	ts ^h y44	ts ^h y31	jou35	kueɿ33
	借	訓	訓	訓	*	借	*
③	t ^h iou55	se35	ni21	ts ^h y44	ts ^h y31	jou35	kueɿ33
	借	訓	訓	訓	*	借	*
④	t ^h iou	Seɿ31	ni42	ts ^h y44	ts ^h y31	jou35	ueɿ31
	借	訓	訓	訓	*	借	*
⑤	tiou1	shei2	ni3	bei1	qi1	you1	guel
	訓	訓	訓	*	*	借	*
⑥	tiao1	shei2	nu3	bei1	qi1	you2	guel
	訓	訓	訓	*	*	借	*

〈大意〉

- ① 神仙が彼女たちの洞府から踊り出てきて遊びに出かける (神仙从她们的洞府跳出来遨游)

I. 山花碑注釈集成

- ② 神仙が洞府を出て遊びに出かける (神仙离洞府遊遊)
- ③ 洞府を出て神仙が遊びに出かける (离洞府神仙遊遊)
- ④ 巫覡が出てきて円を描いて舞う (巫覡出处且婆娑)
- ⑤ 洞府を出て神仙が遊びに出かける (离洞府神仙遊遊)
- ⑥ しとやかな仙女が遊びに出かける (绰约仙子出遊遊)

〈語釈〉

「跳仙人」

- ④ 巫覡が神を楽しませる舞を舞う意。だから「仙」は [se35] とは読まず, [seɪ31] と読む。
(意为巫师 [seɪ31 pou35] 跳娱神舞蹈; 故“仙”不读 [se35], 而应读 [seɪ31]。)
- ⑤ 「跳」は「挑」に通じ, からかうの意がある。(跳通挑, 有逗引之意。)
- ⑥ 美しくしなやかな仙女の意。(即窈窕的仙女。)

「出克」

- ② 「克」は漢語の「処」字の借用語である。(“克”, 即汉语借词“处”字。)
- ④ 「出処」のこと。場所に出てくるという意味がある。(即“出处”, 有出现场所之意。)
- ⑤ ペー語で「出ていく」の意味。(白語で“出去”的意思。)
- ⑥ ペー語で [beil qi1] と読む。「出ていく」という意味で, 漢字をペー音で読んでいる。(白語读 [beil qi1], 即“出去”的意思, 汉字白读。)
- ⑦ 「出」は [ye] と読み, 村の意。([ye], 村邑。)

「遊遊」

- ④ [jou35 ueɪ31] と読み, [jou35 kueɪ35] とは読まない。(读 [jou35 ueɪ31], 不读 [jou35 kueɪ35]。)
- ⑥ ペー語で [you2 gue1] と読み, 「遊ぶ」の意味。(白語读 [you2 gue1], “游玩”的意思。)

第6段第2句

	勝	姮	娥	入	宮	伽	舞
②	su33	ue33	yo35	ni44	zy35	tɕa33	u33
	音	*	訓	訓	*	音	音
③	su33	ue33	yo35	ni44	zy35	tɕa33	u33
	音	*	訓	訓	*	音	音
④	su33	ue33	yo35	ni44	Ku35	Kuo33	u33
	音	*	訓	訓	*	*	音
⑤	shai1	hen2	wo2	ni1	gu2	da3	gol
	*	*	訓	訓	訓	*	*
⑥	shai4	hen2	wo2	ni1	gu2	da3	gol
	*	*	訓	訓	訓	*	*

〈大意〉

- ① 軽やかに舞う姿は月の姮娥にも勝る (轻盈的舞姿胜过月里嫦娥)
- ② 姮娥は宮殿に入り美しく舞う (姮娥入宫舞窈窕)
- ③ 姮娥の宮殿での舞いにも勝る (胜姮娥入宫起舞)
- ④ 姮娥の月宮の舞踊にも勝る (胜嫦娥月宫舞蹈)
- ⑤ 姮娥の宮殿での舞いにも勝る (胜姮娥入宫起舞)
- ⑥ 姮娥の月宮での舞いにも勝る (胜过姮娥月宫舞)

〈語釈〉

「勝」

- ⑥ ペー語で [shai4] と読み, 「～に勝る」, 「～よりも優れている」の意味。(白語読 [shai4], “胜过”, “赛过” 的意思。)

「姮娥」

- ⑥ 漢語の借用語で, もとの漢語の通りに読む。(汉语借词, 读如本字。)

「宮」

- ④ 漢語の借用語で, [kw35] と読む。(系汉语借词, 读 [kw35]。)
- ⑥ ペー語で [gu2] と読む。漢語の「宮」(gong1) の陽転陰。(白語読 [gu2], 汉语“宮”(gong1) 的阳转阴。)

「伽舞」

- ④ 「伽」は [tɕa33] とは読まず, ここでは [kuo33] と読み, 「舞蹈」の意となる。ペー族は「踏舞」を [ta31 kuo33] という。だから「伽」は [kuo33] と読み, [u33] と合わさって [kuo33 u33] で一語となる。意味はこれも「舞蹈」である。(不读 [tɕa33], 在此应读如 [kuo33], 即“舞蹈”之意。白族呼“塔舞”为 [ta31 kuo33], 故“伽”读 [kuo33] 与 [u33] 组成 [kuo33 u33] 一词, 其意亦为“舞蹈”。)
- ⑤ 「跳舞(ダンス)」のこと。(即跳舞。)
- ⑥ ペー語で [da3 gol] と読む。「蛮書」に「舞は, これを伽傍と謂う」とある。(白語読 [da3 gol]。《蛮書》中有此例: “舞, 谓之伽傍。”)

第6段第3句

	蔽	歴	蜀	錦	出	名	香
②	su55	ja35	tsu35	tɕeɪ31	tsʰy44	mieɪ35	ɕou35
	自	音	借	訓	訓	訓	訓
③	su55	ja35	tsu35	tɕeɪ31	tsʰy44	mieɪ35	ɕou35
	自	音	借	訓	訓	訓	訓
④	Su55	ja35	tsu35	tɕeɪ33	tsʰy44	mieɪ35	ɕou35
	自	音	借	訓	訓	訓	訓

I. 山花碑注釈集成

⑤	chul	yal	shu4	jiē3	chul	mie4	xian4
	自	音	借	借	借	借	音
⑥	shul	yal	zhu2	jiē1	chul	miao4	xio2
	自	音	借	訓	訓	*	訓

〈大意〉

- ① はるか遠くより聞こえて来る古寺の沈鬱な鐘の音（从遥远的古寺中传来沉郁的钟声）
- ② 蜀の錦は今に至るまでその名が遠くに知れ渡っている（向来蜀锦扬名远）
- ③ 蜀の錦は今に至るまでその名が遠くに知れ渡っている（向来蜀锦扬名远）
- ④ 白き蜀の錦は香しい（素来蜀锦出名香）
- ⑤ 今に至るまで蜀の錦は美名が称えられている（向来蜀锦美名扬）
- ⑥ 数回ついた鐘の音が妙香から鳴る（几杵钟声出妙香）

〈語釈〉

「藪圧蜀錦」

- ② 「藪圧」は、郭は〔su55 ja35〕と読む。この音はペー語では具体的な意味が見つからないが、蜀錦を形容する言葉だろう。（“藪圧”，郭读〔su55 ja35〕。这个读音在白语里还找不到具体意思，但它是个形容蜀锦的词。）
- ④ 「藪圧」は〔su55 ja35〕と読み、「（頭を）押さえる」，「始めに数えられる」の意。また「蜀錦」は漢語の借用語で，〔tsu35 tɕɛɿ31〕と読み，音・意味ともに漢語と同じ。（“藪圧”读〔su55 ja35〕，「压盖」，「首数」之意，又“蜀锦”系汉语借词，读〔tsu35 tɕɛɿ31〕，音，义皆同汉语。）
- ⑤ ペー語で「これまで」，「今まで」の意。（白语，向来，从来之意。）
- ⑥ ペー語で〔shul yal zhu2 jiē1〕と読み，「数回ついた鐘の音」の意味。「藪圧」は「何度か」のこと，「蜀錦」は「鐘」のペー語音で，「錦」は語幹の後ろにつく助数詞。（白语读〔shul yal zhu2 jiē1〕，即“几杵钟声”的意思。“藪圧”，是“几下”；“蜀锦”，是“钟”的白语音，“锦”是词根的后附量词。）
- ⑦ 「藪」は〔sex〕と読み，手の意。「圧」は〔ya〕と読み，叩く意。「蜀錦」は〔avf jevx〕と読み，鐘のこと。ここでは繞三霊の時の楽器手拍子のことを指す。（藪：〔sex〕，手。压：〔ya〕，敲击。蜀锦：〔avf jevx〕，钟，这里指绕三灵时之导具手鼓。）

「出名香」

- ⑥ ペー語で〔chul miao4 xio2〕と読む。「名香」は「妙香」のこと，大理は仏教の妙香古国で，「出名香」とは，妙香古寺の中からひびいてくる鐘の音のことである。謝肇淛『滇略』に「崇聖寺に洪鐘有り，声の聞こゆること百里」といい，『徐霞客遊記』にまた「（鐘の）経は丈に余るべく，厚みは尺に及ぶ」という。明代の陳鼎によると，この鐘は重さ10万斤（約60トン）で，南詔建極3年（西暦872年）に造られた。大理の貴重な宝物の一つとして伝えられたが，清代の咸豊同治年間（1851年～1874年）に戦禍で破壊された。今既に再建され，鐘楼に安置されている。

ここで述べられている「蜀錦」とは、おそらくこの建極の大鐘を指しているのだろう。山花碑を研究する学者の中には、「蜀錦」を四川の錦と解釈しているが、やや妥当性を欠くようである。(白語読 [chu1 miao4 xio2]。 “名香”，即“妙香”，大理是佛教妙香古国，“出名香”是谈钟声由妙香古寺中传出。谢肇淛《滇略》云：“崇圣寺有洪钟，声闻百里。”《徐霞客游记》亦云：“(钟)经可丈余，而厚及尺。”据明代的陈鼎说，这口钟重十万斤，南诏建极三年(公元872年)造。相传为大理瑰宝之一，毁于清代咸同兵燹。今已重建，并贮钟楼。这里所说“蜀锦”作为四川的锦绸来理解，似乎有些欠妥。)

第6段第4句

	唵	崑	無	價	宝
②	ca31	na31	mu33	keɿ42	pu33
	自	自	訓	訓	訓
③	ca31	na31	mu33	keɿ42	pu33
	自	自	訓	訓	訓
④	ca31	na31	mu33	Keɿ42	Pu33
	自	自	訓	訓	訓
⑤	en1	nao1	vu4	jia2	bao1
	自	自	借	借	借
⑥	chou1	nia4	mu2	ge2	bao3
	自	自	訓	訓	借

※ ⑥は「崑」を「良」に作る。

〈大意〉

- ① その響きは西天でもこのような景色は得難い (响亮在西天也难得有这样的景色)
- ② 値のつけられないほどの宝と称えられている (号称无价宝)
- ③ 値のつけられないほどの宝と称えられている (号称无价宝)
- ④ 値のつけられないほどの宝と称えられている (堪称无价宝)
- ⑤ 値のつけられないほどの宝と称えられている (看俺无价宝)
- ⑥ 値のつけられないほどの宝と称えられている (号称无价宝)

〈語釈〉

「唵崑」

- ② 蜀錦の貴重さを形容している。南詔時代，唐と南詔双方に戦争があり，南詔は成都から腕の立つ工人を大量に捕らえ，最良の蜀錦が生産できるようになった。この蜀錦は貴重な品で，値のつけられぬ宝と称えられた。(形容蜀锦的珍贵。在南诏时，唐，南双方曾发生战争，南诏从成都俘虏了一批能工巧匠，也能织出最好的蜀锦，这种蜀锦是珍贵的产品，称无价宝。)
- ④ 意味は「よく響く」で，そこから敷衍して「～に勝る」，「～よりも優れている」の意となった。

I. 山花碑注釈集成

〔意为“响亮”，引申为“胜过”，“赛过”之意。〕

- ⑤ ペー語で，意味は「～と呼ばれる」，「～と称えられる」。(白语，意为“叫做”，“号称”。)
- ⑥ 「哭」は白文の形声字で，[chou1]と読み，「見る」の意味。「良」は，ペー語で[nia4]と読み，「我々」の意味。「無価宝」は漢語の借用語で，建極大鐘を指す。(“哭”，是白文の形声字，读[chou1]，“看”的意思。“良”，白语读[nia4]，“我们”的意思。“无价宝”汉语借词，指建极大钟。)
- ⑦ [jid nao]と読み，唱われている山歌のこと。([jid nao]，所唱的山歌。)

第7段第1句

	奪	西	天	南	國	趣	陶
②	tʰa31	se35	xe55	na21	kuɛ133	kʰu33	tu21
	* (“搶”)	訓	訓	訓	訓	*	*
③	tʰa31	se35	xe55	na21	kuɛ133	kʰu33	tu21
	* (“搶”)	訓	訓	訓	訓	*	*
④	tʰa31	Se35	fy35	na42	Kuɛ133	tʰy55	he142
	* (“搶”)	訓	* (“方”)	訓	訓	音	*
⑤	do2	xil	tian1	na3	gue4	qu4	te2
	借	借	借	訓	訓	音	*
⑥	do2	xil	tian1	na3	gue2	qu4	tao4
	借	借	借	訓	訓	音	音

〈大意〉

- ① たとえ西天でもこのような景色は得がたい (即使在西天也难得有这样的景色)
- ② 南国の美景は西天に勝る (南国美景胜西天)
- ③ 西天南国の美景を奪う (夺西天南国美景)
- ④ 西天南国の趣陶を尽くす (尽西天南国趣陶)
- ⑤ 西天南国の美景を奪う (夺西天南国美景)
- ⑥ 西天南国の情趣があり (有西天南国情趣)

〈語釈〉

「奪」

- ⑥ 語気詞で，「たとえ～でも」，「かりに～でも」の意味。(语气词，“即使”，“就是”的意思。)

「西天」

- ④ 「西天」は [se35 fy35]と読む。本来「西天」，「南国」ともに漢語の借用語で，[se35 xe55]やその他の読みでも構わない。ただ，ペー語では西竺，西天佛国のことを [se35 fy35]と読むので，ここもその方がよいだろう。(“西天”读 [se35 fy35]，本来“西天”，“南国”均为汉语借词，不另读为 [se35 xe55]或其他异读；不过，白语将西竺，西天佛国，往往读为 [se35 fy35]，此

处亦然。)

- ⑥ ペー語中の漢語の借用語。以下の「南国」, 「東土」, 「北阙」も同じく漢語の借用語。(白語中の汉语借詞。下文中的“南国”, “东土”, “北阙”同为汉语借词。)

「趣陶」

- ④ 「ユーモア」の意味。これも漢語から借りた語で、音も意味も漢語に近い。だがペー族はこれを長く使っているの、敷衍して「面白いこと」として用いる。「ユーモア」と同じように、「趣陶がある」というが、「趣陶がない」とはいわない。(意为“风趣”, 亦为借汉语词, 音, 义皆近于汉语, 但因白族袭用之较久, 引申为“趣事”用。如有“风趣”之事, 称为“有趣陶”; 否则称为“无趣陶”。)

- ⑤ 情趣の意。(情趣之意。)

- ⑥ ペー語で [qu4 tao4] と読み、「情趣」の意味。(白語读 [qu4 tao4], “情趣”的意思。)

第7段第2句

	占	東	土	北	阙	称	諧
②	tse44	tu33	t ^h u31	peɿ35	tɕ ^h ueɿ35	su55	p ^h u33
	訓	借	借	借	借	*	音
③	tse44	tu33	t ^h u31	peɿ35	tɕ ^h ueɿ35	su55	p ^h u33
	訓	借	借	借	借	*	音
④	tse44	tu33	t ^h u31	peɿ35	tɕ ^h ueɿ35	tɕ ^h u55	p ^h u33
	訓	借	借	借	借	音	音
⑤	zau1	du4	tu1	ben1	que1	chuo4	pul
	借	借	借	訓	借	*	音
⑥	zan4	du2	tu1	bou1	que2	chou4	pul
	借	借	借	訓	借	*	音

〈大意〉

- ① 美麗な東土でもこの地ほどの美しさは珍しい (就是走遍美丽的东方也难和这里媲美)
 ② 東土北阙は福をことごとく納める (东土北阙尽纳福)
 ③ 東土北阙の風物を占める (据东土北阙风物)
 ④ 東土北阙の称頌を享く (享东土北阙称頌)
 ⑤ 東土北阙の風物を占める (据东土北阙风物)
 ⑥ 北阙東土の美しさに匹敵する (可媲美北阙东土)

〈語釈〉

「占」

- ④ 意味は「つく」, 「受ける」。(意为“沾”或“蒙受”。)
 ⑤ 占有すること。(即据。)

I. 山花碑注釈集成

⑥ 語気詞で、意味は「～さえも」と同じ。(语气词, 意同“就是”。)

「称讃」

④ 「称」は [su55] と読み、「称賛する」の意がある。「讃」は [p^hu33] と読み「ほめる」の意がある。だから「称讃」の一語で [su55 p^hu33] と読み、「賛美」、「称揚」の意味となる。(“称”读 [su55], 有“称誉”之意; “讃”读 [p^hu33], 有“夸赞”之意。故“称讃”一词, 读 [su55 p^hu33], 意为“赞美”, “赞扬”。)

⑤ 風物の意。(风物之意。)

⑥ べー語で [chou4 pul] と読み、「勝るとも劣らない美しさ」という意味。(白语读 [chou4 pul], “相称媲美”的意思。)

第7段第3句

	秀	雀	翫	景	鳴	囀	囀
②	ɕou35	tsou44	kueɿ33	tɕu31	meɿ21	xu35	xu35
	音	訓	自	借	訓	音	音
③	ɕou35	tsou44	kueɿ33	tɕu31	meɿ21	xu35	xu35
	音	訓	自	借	訓	音	音
④	ɕou35	tsou44	ueɿ31	tɕu31	meɿ42	xu35	xu35
	音	訓	自	借	訓	音	音
⑤	xiu4	zuo1	wo4	ge1	me3	hu1	hu1
	音	訓	自	訓	訓	音	音
⑥	xiu2	zuo1	wu3	ge1	me3	hu1	hu1
	音	訓	自	訓	訓	音	音

〈大意〉

- ① 鳥は風景を愛でてチャーチャーと鳴く (鸟儿赏玩风景叫查查)
- ② 美しい雀は風景を愛でてフーフーと鳴く (华雀赏景叫查查)
- ③ 美しい雀は風景を愛でてフーフーと鳴く (华雀赏景叫查查)
- ④ 小さな雀のさえずる様が耳に心地よい (小雀噪景歌宛转)
- ⑤ (秀)雀は風景を愛でフーフーと鳴く (秀雀赏景叫轰轰)
- ⑥ 秀雀は影を見てフーフーと鳴く (秀雀顾影叫查查)

〈語釈〉

「秀雀」

④ 意味は「小雀」。特定の鳥類を指すのではなく、広く一般を指している。(意为“小雀”, 并非专指某种飞禽, 而是泛指。)

⑥ べー語で [xiu2 zuo1] と読み、美しい小鳥のこと。(白语读 [xiu2 zuo1], 意即美丽的小鸟。)

「翫景」

- ⑥ 「景」は「影」と同じ。「翫景」はペー語で [wu3 ge1] と読み、「影を振り返る」の意味。
 (“景” 同影, “翫景”, 白语读 [wu3 ge1], 是“顾影”的意思。)

「囁囁」

- ② 鳥の声を表す。(表示鳥叫声。)
 ④ 多くの鳥が互いに鳴いている声を表す。(意为众鸟相鸣之声。)
 ⑤ 鳥の鳴き声。(鳥鳴声。)
 ⑥ ペー語で [hul hul] と読み, 鳥の鳴き声。(白语读 [hul hul], 鳥鳴声。)

第7段第4句

	蟬	吟	聲	啾	啾
②	ta21pi21		tʰɛ̃55	zu33	zu33
	訓		訓	音	音
③	ta21pi21		tʰɛ̃55	zu33	zu33
	訓		訓	音	音
④	ta42pi42		tsi55	Zu33	Zu33
	訓		*	音	音
⑤	da3	bl4	che4	yul	yul
	訓	訓	訓	音	音
⑥	ds3	yin2	che4	yul	yul
	訓	訓	訓	音	音

〈大意〉

- ① 蟬の声はズーズー (知了声姿姿)
 ② 蟬の鳴く声はズーズー (蟬吟声欲欲)
 ③ 蟬の鳴く声はズーズー (蟬吟声欲欲)
 ④ 蟬の鳴くことズチューチュー (蟬吟自啾啾)
 ⑤ 蟬の鳴く声はユーユー (蟬吟声欲欲)
 ⑥ 蟬の鳴く声はユーユー (蟬鳴声幽幽)

〈語釈〉

「蟬吟」

- ② 「蟬」は [ta31 pi21] と読み, 一文字が二音節で表される。「吟」字は字はあっても無音なので, この一句は結局5つの音節で構成されることになる。(“蟬”, 读 [ta31 pi21], 一个单字代表两个音節; “吟” 字在句中有字无音, 所以这一行仍然由五个音節组成。)
 ④ 「蟬」は [ta31 pi42] と読む。「蟬」の漢字は本来単音節だが, ペー語は [ta31], [i42] の二音節とする。この句は五音節なので, ペー語で読む時は「吟, 声」の二文字を省略し, 無字の音である [tsi55] の一音節を加えて, 全句を [ta31 pi42 tsi55 zu35 zu35] の五音節で読む。第3

I. 山花碑注釈集成

句との関係から、無字の〔tsi55〕(自)を加え、それで「吟、声」二字の意味を表した。漢語でもペー語でも詩歌中にはこうしたことがよくある。(“蝉”读〔ta31 pi42〕, “蝉”汉字本单音节字、而白语为〔ta31〕, 〔i42〕两个音节。此句乃五音节句式, 故白语音读时, 将其中“吟、声”两字略去, 加入无字之声〔tsi55〕一音节, 读全句为〔ta31 pi42 tsi55 zu35 zu35〕五个音节; 与第三句相连, 加入无字之〔tsi55〕(自), 足以表“吟、声”两字之意。不论汉语或白语诗歌中, 往往有之。)

「啾啾」

- ② 蝉の鳴き声を表す。(表示蝉鸣声。)
- ⑤ 蝉の鳴く声。(蝉吟声。)
- ⑥ 「欲欲」(yu4 yu4)と読む。蝉の鳴き声。(读作“欲欲”, 蝉鸣声。)

第8段第1句

	金	烏	駈	散	天	上	星
②	tɕe35	tsou44	tɕe42	sa42	xe55	no33	ɕeɿ35
	訓	*	自	訓	訓	訓	訓
③	tɕe35	tsou44	tɕe42	sa42	xe55	no33	ɕeɿ35
	訓	*	自	訓	訓	訓	訓
④	tɕu33	u44	tɕe42	Sa42	Xe55	no33	ɕeɿ35
	借	借	自	訓	訓	訓	訓
⑤	nia1	pi3	ji3	sha2	hei4	no1	xie2
	*	*	自	訓	訓	訓	訓
⑥	ji4	wu2	ji3	sha2	heil	no1	xie4
	借	借	自	訓	訓	訓	訓

〈大意〉

- ① 朝の太陽は天上の星を蹴散らす(朝阳驱散天上星星)
- ② 朝日は天上の星を追い散らす(朝阳驱散天上星)
- ③ 朝の太陽は天上の星を蹴散らす(朝阳驱散天上星)
- ④ 金烏は天上の星を追い散らす(金乌驱散天上星)
- ⑤ 朝日は天上の星を追い散らす(朝阳驱散天上星)
- ⑥ 金烏は天上の星を蹴散らす(金乌驱散天上星)

〈語釈〉

「金烏」

- ④ 漢語の借用語。音・意味ともに漢語と同じで、「日」を指す。次の句の「玉兔」も同じで、「月」を指す。(汉语借词, 音, 义均与汉语同, 指“日”; 下句中“玉兔”亦然, 指“月”。)
- ⑤ 「金烏」, 「玉兔」は漢語と同じで, 太陽, 月を指す。(金乌, 玉兔: 同汉语, 指太阳, 月亮。)

「駁」

- ② 意味は「追い散らす, 追いかける」。(意思是“驱散, 追赶”。)
- ④ 「追い払う, 追いかける」の意味がある。(有“驱, 赶”之意。)
- ⑤ 「駁散」は「追い散らす」と同じ。(駁散: 同驱散。)
- ⑥ 「追い散らす」の意。陸機「文賦」に「紛として葳蕤として以て駁逐たり, 唯だ毫素の擬する所なり」とある。『説文』は「馬行して相い及ぶなり」とする。音は「駁」(tal)。ここでは楊黼が「追い払う」の意味に借用している。(“驱散”之意。见陆机《文赋》“粉葳蕤以駁逐, 唯毫素之所拟”。《说文》, “马行相及也”。音“駁”。这里是杨黼借用作“驱赶”的意思。)

「天上星」

- ⑥ ペー語で [heil nol xie4] と読み, 意味は漢語と同じ。[xie4] は漢語の「星」(xing1) の対転。(白语读作 [heil nol xie4], 意同汉语。[xie4] 为汉语“星”(xing1) 的对转。)

第8段第2句

	玉	兔	打	開	霄	面	霧
②	ye35	tʰu55	teɿ44	kʰu55	xe55	vu33	tʰu33
	借	借	訓	訓	*	*	*
③	ye35	tʰu55	teɿ44	kʰu55	xe55	vu33	tʰu33
	借	借	訓	訓	*	*	*
④	ye35	tʰu55	teɿ35	kʰu35	Xe55	mi42	Vu33
	借	借	訓	訓	*	訓	訓
⑤	ml4	wal	de ·	kou4	hei4	nol	vu1
	*	*	訓	*	*	*	訓
⑥	yul	to4	de1	kou2	ku4	mi2	vu1
	借	*	訓	*	*	訓	訓

〈大意〉

- ① 月は天山の雲を突き抜ける (月亮冲出天山的云围)
- ② 昇る月は空中の霧を突き破る (新月冲破空中雾)
- ③ 新月は天空の雲を突き抜ける (新月冲破空中雾)
- ④ 玉兔は空中の霧を突き破る (玉兔冲破空中雾)
- ⑤ 昇る月は夜空の霧を突き破る (新月冲破夜空雾)
- ⑥ 玉兔は雲層を突き抜ける (玉兔冲出了云层)

〈語釈〉

- ④ 「霄面霧」は [xe55 mi42 vu33] と読み, 意味は「空中の霧」である。[xe55 vu33 tʰu33] と読み, その意味を「天上の道」とする説もあるが, 妥当ではない。(“霄面霧”读 [xe55 mi42 vu33], 意为“空中雾”。有读 [xe55 vu33 tʰu33], 其意为“天上路”, 未妥。)

I. 山花碑注釈集成

- ⑤ 「打開霄面霧」とは、空の雲霧を押し開くこと。(打开霄面霧：即打开天空的云雾。)
 ⑥ 「打開霄面霧」は天空の雲霧を押し開く意。(打开霄面霧：意即打开空中的云雾。)

第8段第3句

	黄	鴛	白	鶴	阿	双	双
②	ɲy21	jeɿ35	peɿ42	xo35	a31	sy35	sy35
	訓	訓	訓	訓	音	訓	訓
③	ɲy21	jeɿ35	peɿ42	xo35	a31	sy35	sy35
	訓	訓	訓	訓	音	訓	訓
④	ɲy42	jeɿ35	Peɿ42	Xo35	a31	Sv35	Sv35
	訓	訓	訓	訓	借	訓	訓
⑤	ngu3	yuan1	be2	huo2	a3	shu4	shu4
	訓	借	訓	訓	音	訓	訓
⑥	ngu3	yuan1	be3	huo2	a3	shu4	shu4
	訓	訓	訓	訓	音	訓	訓

〈大意〉

- ① 一群の黄鴛と白鶴 (一群群的黄鴛和白鶴)
 ② 黄鴛と白鶴は群れを成して飛ぶ (黄鴛白鶴成群飛)
 ③ 黄鴛と白鶴は対をなす (黄鴛白鶴一双双)
 ④ 黄鴛と白鶴は対をなす (黄鴛白鶴一双双)
 ⑤ 黄鴛と白鶴は対をなす (黄鴛白鶴一对对)
 ⑥ 対となった黄鴛と白鶴 (一双双黄鴛白鶴)

〈語釈〉

「黄鴛白鶴」

- ⑥ 漢語の借用語で, [ngu3 yuan1 be3 huo2] と読む。漢語と音がやや異なる。(汉语借词, 读作 [ngu3 yuan1 be3 huo2], 与汉语音稍异。)

「阿双双」

- ⑤ 一对のこと。(即一对对。)
 ⑥ 一对のこと。ペー語で [a3 shu4 shu4] と読む。(即一双双, 白语读作 [a3 shu4 shu4]。)

第8段第4句

	對	飛	啞	啄	啄
②	tue42	fy35	mɛɿ35	ty44	ty44
	訓	訓	自	訓	訓

③	tue42	fy35	meɿ35	ty44	ty44
	訓	訓	自	訓	訓
④	tue42	fy35	k ^h ɿ35	ty44	ty44
	訓	訓	自	訓	訓
⑤	dul2	fu2	keɿ	zol	zol
	訓	訓	自	*	*
⑥	dui3	fu2	keɿ	zol	zol
	訓	訓	自	*	*

〈大意〉

- ① 対になって高らかに歌う (成双成対地高声歌唱)
- ② 一斉に飛んでチューチューと鳴く (齐飞叫啄啄)
- ③ 一斉に飛んでゾゾと鳴く (齐飞叫啄啄)
- ④ 翼を並べて飛ぶ (比翼兼兼飞)
- ⑤ 並び飛んでゾゾと鳴く (双飞叫啄啄)
- ⑥ 翼を並べて飛び鳴く (在比翼飞鸣)

〈語釈〉

- ② 「喀」は、郭は [meɿ35] と読み, 「呼ぶ, 鳴く」を表す。「啄啄」は鳴き声を表す。(“喀”, 郭读 [meɿ35], 表示“叫, 鸣”。“啄啄”, 表示叫声。)
- ④ 「喀啄啄」は [k^hɿ35 ty44 ty44] と読み, 比翼兼兼, 長さの違う翼を並べて飛ぶさまの意である。「喀」を [meɿ35] と読み, [ty44 ty44] を鳥の声とする説もある。しかし「喀」は [k^hɿ35] と読み, 「鳴く」, 「唱う」とは無関係のようであるから, [meɿ35] と読むのは妥当ではない。(“喀啄啄”读 [k^hɿ35 ty44 ty44], 为比翼兼兼, 比翼参差之意。有读“喀”为 [meɿ35], 则 [ty44 ty44] 为鸟声; 然“喀”读 [k^hɿ35], 似与“鸣”, “唱”无关, 读 [meɿ35], 未妥。)
- ⑥ 「対飛喀啄啄」は、ペー語で [dui3 fu2 keɿ zol zol] と読み, 対になって飛び鳴くという意。(对飞喀啄啄: 白语读作 [dui3 fu2 keɿ zol zol], 意即一对对飞鸣。)

第9段第1句

	鍾	山	川	俊	秀	賢	才
②	tsu35	se35	sy42	ka35	ts ^h y 44	ɕɿ35	ts ^h e55
	借	訓	*	*	*	借	借
③	tsu35	se35	sy42	ka35	ts ^h y 44	ɕɿ35	ts ^h e55
	借	訓	*	*	*	借	借
④	tsu35	Se35	ko31	ka35	ts ^h y 44	ɕɿ35	ts ^h e55
	借	訓	*	*	*	借	借

I. 山花碑注釈集成

⑤	zhu1	shei2	chul4	jun2	xiu2	xian2	cei4
	借	訓	訓	借	借	借	借
⑥	zhu1	sei2	chui4	jun2	xiu2	xian2	cei4
	借	訓	訓	借	借	借	借

〈大意〉

- ① 大自然の靈氣集まる山川は賢才を育む（钟灵毓秀的山川产生了贤能的人才）
- ② 山川は秀麗にして英傑を出だす（山川秀丽英豪出）
- ③ 山川は秀麗にして英傑を出だす（山川秀丽英豪出）
- ④ 山川は大自然の靈氣を集め賢才が集まる（山川毓秀贤才钟）
- ⑤ 山川は麗しくして賢才が集まる（山川俊秀钟贤才）
- ⑥ 山川は秀明にして賢才が集まる（山川明秀钟贤才）

〈語釈〉

- ④ 「鍾」は〔tsu35〕と読み、漢語の借用語。音・意味とも漢語と同じで、「集まる」の意。また「俊」は〔ka35〕と読み、「高く険しい」こと。「秀」は〔ts^hy 44〕と読み、「秀丽」なこと。どちらも漢語の借用語。（“钟”读〔tsu35〕，系汉语借词，音読み，义同汉语，意为“汇集”。“俊”读〔ka35〕，“高峻”也；“秀”读〔ts^hy 44〕，“秀丽”也，均为汉语借词。）
- ⑥ この句のペー語読みは基本的に漢語と同じ。ただ、「鍾」（zhong1）は変化して〔zhu1〕と、「賢才」は〔xian2 cei4〕と読んでいるだけである。（此句白语读法基本与汉语同，只是“钟”（zhong1）变读为〔zhu1〕，“贤才”读〔xian2 cei4〕而已。）

第9段第2句

	涵	乾	坤	灵	胎	聖	種
②	ka21	xe55	tɕi31	li55	t ^h e55	su55	tsy33
	訓	訓(“天”)	訓(“地”)	*	借	借	訓
③	ka21	xe55	tɕi31	li55	t ^h e55	su55	tsy33
	訓	訓(“天”)	訓(“地”)	*	借	借	訓
④	ka42	Xe55	tɕi31	li55	t ^h e55	Su55	tsy33
	訓	訓(“天”)	訓(“地”)	*	借	借	訓
⑤	ga3	hei2	ji3	lin4	tai1	shen2	zhu3
	訓	訓(“天”)	訓(“地”)	借	借	借	訓
⑥	ga3	hei2	ji3	lin2	tai1	shen4	zhu1
	訓	訓(“天”)	訓(“地”)	借	借	借	訓

〈大意〉

- ① 天地の精華が靈胎聖種を生み育てる（天地的精英孕育了灵胎圣种）

- ② 靈胎聖種を天地が包む (灵胎圣种天地包)
- ③ 靈胎聖種を天地が包む (灵胎圣种天地包)
- ④ 靈胎聖種を天地が育む (灵胎圣种天地育)
- ⑤ 靈胎聖種を天地が育む (灵胎圣种乾坤育)
- ⑥ 天地は聖胎を育む (天地位育种圣胎)

〈語釈〉

「涵」

- ④ 漢語の借用語で、「収容する」の意がある。(系汉语借词, 有“包容”之意。)
- ⑥ ペー語で [ga3] と読む。(白語読 [ga3]。)

「乾坤」

- ④ 意味は「天・地」, つまり世界のこと。(意为“天、地”, 即宇宙也。)
- ⑤ 漢語と同じで, 天地を指す。(同汉语, 指天地。)
- ⑥ 天地の意味。ペー語で [hei2 ji3] と読む。(天地的意思, 白語読作 [hei2 ji3]。)

「靈胎聖種」

- ⑥ 大理国王らを神聖化したもので, 漢語の借用語。ペー語で読む時には, 声調がやや異なる。
(是把大理国王们神圣化, 汉语借词, 白語読時, 声調稍异。)

第9段第3句

	曾	登	位	守	道	結	菴
②	tsu31	tu44	ue55	sou31	to55	tɕeɿ35	a35
	訓	借	借	借	借	借	借
③	tsu31	tu44	ue55	sou31	to55	tɕeɿ35	a35
	訓	借	借	借	借	借	借
④	tsu31	tu44	ue55	Sou31	to55	tɕeɿ35	a35
	訓	借	借	借	借	借	借
⑤	zen1	dou2	wei4	shou3	do4	jie2	an1
	訓	音	音	借	借	借	借
⑥	zen1	dou3	wei1	xiu2	duo3	dei1	an2
	訓	音	音	*	*	訓	訓

〈大意〉

- ① ただ誠実に大経巻を念誦しさえすれば (只要诚心念诵大经卷)
- ② 登壇守道し茅屋を結ぶ (登坛守道结茅屋)
- ③ 登壇守道し茅屋を結ぶ (登坛守道结茅屋)
- ④ この地に茅屋を結んで道を守る (结茅守道于此土)
- ⑤ ここで道を守り庵を結ぶ (在这里守道结庵)

⑥ ここに庵を建て道を修める（在这里建庵修道）

〈語釈〉

- ④ 「曾登位」は〔tsu31 tu44 ue55〕と読み、「この地で」の意。（“曾登位”读〔tsu31 tu44 ue55〕，意为“在此地”。）
- ⑤ 「曾登位」はペー語で、「ここで」の意。（曾登位：白语，意为“在这儿”，“在这里”。）
- ⑥ 「曾登位」は、ペー語で「ここで」の意。「守道」はペー語で〔xiu2 duo3〕と読み、「修行」，「修道」のこと。「結庵」は、ペー語で〔deil an2〕と読み、「寺廟を建立する」の意。（“曾登位”，白语“在这里”的意思。“守道”，白语读作〔xiu2 duo3〕，即“修行”，“修道”。“结庵”，白语读〔deil an2〕，即“建立寺庙”之意。）

第9段第4句

	度	生	死	病	老
②	ty21	xɛɪ55	ci33	peɪ31	ku33
	訓	訓	訓	訓	訓
③	ty21	xɛɪ55	ci33	peɪ31	ku33
	訓	訓	訓	訓	訓
④	ty42	xɛɪ55	ci33	peɪ31	Ku33
	訓	訓	訓	訓	訓
⑤	du1	he2	xɪ1	be3	gu1
	訓	訓	訓	訓	訓
⑥	du1	he4	xɪ1	be3	gu1
	訓	訓	訓	訓	訓

〈大意〉

- ① 人間の生病死の苦しみを超えることができる（就可超度人間生死病老的痛苦）
- ② 生死病老に思いをいたす（度生死病老）
- ③ 生死病老に思いをいたす（度生死病老）
- ④ 生死病老に思いをいたす（度生死病老）
- ⑤ 生死病老に思いをいたす（度生死病老）
- ⑥ 生死病老に思いをいたす（度生死病老）

〈語釈〉

- ④ 「度」は〔ty42〕と読み、漢語の借用語。意味・音ともに漢語と同じで、「過ごす」の意。（“度”读〔ty42〕，系汉语借词，义，音均同汉语，即“消度”之意。）
- ⑥ 「度生死病老」はペー語で〔du1 he4 xɪ1 be3 gu1〕と読み、詩句の意味は漢語と同じ。（度生死病老，白语读〔du1 he4 xɪ1 be3 gu1〕，诗句意思同汉语。）

第10段第1句

	尽	日	勤	功	把	節	操
②	pe21	ni44	tɕ ^h u55	tɕu31	peɿ42	tɕeɿ35	ts ^h o55
	*	訓	訓	* (“謹”)	訓	借	借
③	pe21	ni44	tɕ ^h u55	tɕu31	peɿ42	tɕeɿ35	ts ^h o55
	*	訓	訓	* (“謹”)	訓	借	借
④	pe21/tɕeɿ31	ni44	tɕ ^h u55	tɕu31	peɿ42	tɕeɿ ^(マ) 35	ts ^h o55
	* / 訓	訓	訓	* (“謹”)	訓	借	借
⑤	zha4	ni1	qin1	gu4	ga1	jie4	ten4
	訓	訓	借	借	訓	借	*
⑥	zha4	ni1	qu4	gu2	be1	jie2	chao4
	訓	訓	*	借	訓	借	借

〈大意〉

- ① 終日勤勉に経書を念誦する（要終日勤苦地念誦经书）
- ② 終日勤勉に節操を守る（整日勤苦守节操）
- ③ 終日勤勉に節操を守る（整日勤苦守节操）
- ④ 日頃から勤勉に節操を持つ（尽日勤謹持节操）
- ⑤ 終日勤勉に経書を書き写す（整日勤功把经抄）
- ⑥ 終日勤勉に経書を念誦する（整日勤苦把经誦）

〈語釈〉

「尽日」

- ④ [pe42 ni44] と読み、「平日」、「普段」の意。また [tɕeɿ31 ni44] とも読み、その場合は「一日中」の意。（读 [pe42 ni44]，有“平日”，“素日”之意；亦可读 [tɕeɿ31 ni44]，即“整日”。）
- ⑤ 一日中のこと。（即整天。）
- ⑥ ペー語で [zha4 ni1] と読み、「一日中」の意。（白语读作 zha4 ni1，即“整天”。）

「勤功」

- ⑥ 勤勉に努力する。（勤苦练功。）

「把節操」

- ④ 「把」は [peɿ42] と読み、「持つ、執る」の意。（“把”读 [peɿ42]，“持、执”之意。）
- ⑤ 経書を書き写すという意味。「操」は「抄」に通じる。「節」はペー語で経書のこと。（即把经书抄写。操通抄。节：白语，即经书。）
- ⑥ 意味は「経典を念誦する」。「節」は、ペー語では経典のことを [ji4] というので、ここでは「節」と書き（その意を表している）。（把节操：意为把经书诵读。“节”，白语经书叫 [ji4]，这里写作“节”。）

I. 山花碑注釈集成

※王鋒氏は施注者の誤りとしたが、「尽」を〔pe42〕と読む過程は次のようになるだろう。すなわち、「尽日」という表記を見て、漢語「尽日」（ことごとく毎日）の意味から漢語「平日」を想起し、「平日」を訓字として〔pe42 ni44〕と読んだのである。もし「平日」という表記を〔pe42 ni44〕と読めばそれは訓字だが、ここには「平日」を想起するために表記されるのは「尽日」だということであり、これを単に訓字とするのは難しい。中国語でも実は同じようなことは起きていて、たとえば「一」を〔yil〕ではなく〔yaol〕と発音する。〔yaol〕は「幺」（幼い、小さい）という意味から「一」が派生したもの。他にも「二元」を〔liang2 kuai4〕と読むこともある。つまり、ある漢字を別の漢字の音で読むわけだが、中国ではこれを「訓読み」というらしい。日本でも、「漁（ぎょ）」が、「捕獲」の意味をもつことから「獺（獺）」をイメージさせ、結局、「漁（りょう）」と音読みされたりする。別の漢字の字音が別の漢字の音読みで表されるのは昔からあり、「尉（い）」「掾（えん）」「判官」が、まとめて「丞（じょう）」と音読みされていた。当該個所にもどる。「尽日」を「平日」に変換し、それを訓字として発音する。つまり、ある漢字を同義の別の漢字に変換し、その音で発音するのであるから、漢語内での変換後の訓字ということになるだろう。また、「整日」〔tɕeɪ31 ni44〕と読む場合も、「尽日」という表記から漢語「整日」（終日）を想起し、それを訓字として発音しているといえる。

第 10 段第 2 句

	連	夜	觀	參	修	求	好
②	ni35	jo31	a33	sa44	ɕu35	tɕ ^h ou55	xu55
	訓	訓	*（“看”）	*	*（“行”）	音	訓
③	ni35	jo31	a33	sa44	ɕu35	tɕ ^h ou55	xu55
	訓	訓	*（“看”）	*	*（“行”）	音	訓
④	ni35	jo31	a33	Sa44	ɕu35	tɕ ^h ou55	xu55
	訓	訓	*（“看”）	*	*（“行”）	音	訓
⑤	nei2	yo2	guan1	chan1	xiu2	qiu2	hu3
	訓	訓	借	借	訓	音	訓
⑥	nei2	yo2	gua2	chan1	xiu2	qiu4	hu1
	訓	訓	借	借	訓	音	訓

〈大意〉

- ① 日夜欠くことなく好福を修求する（日夜不缺地修好求福）
- ② 昼夜參禪して善福を修む（昼夜參禪修善福）
- ③ 連夜參禪して善福を修む（連夜參禪修善福）
- ④ 連夜内省しても修めきれない（連夜内省修不足）
- ⑤ 連夜參拜して善福を祈る（連夜參拜祈善福）
- ⑥ 深夜に參拜して福祿を祈る（夤夜參拜祈福祿）

〈語釈〉

「連夜」

⑥ ペー語で [nei2 yo2] といい、意味は漢語と同じ。(連夜：白語叫 [nei2 yo2]、意同汉语。)

「観参」

④ [a33 sa44] と読み、「観察する」、「顧みる」の意。ここでは敷衍して「省察」、「内省」の意とする。(读 [a33 sa44]、有“观照”、“照顾”之意、在此处可引申为“省视”或“内省”。)

⑤ 仏祖を参拝すること。(观参：即参拜佛祖。)

⑥ 仏祖を参拝すること。(观参：即“参拜佛祖”。)

「修求好」

⑤ 善福を求めること。(修求好：即求善福。)

⑥ いずれも漢語の借用語で、漢字の通りに読む。(修求好：均系汉语借词、读如汉字。)

第10段第3句

	大	夫	在	處	栽	松	栢
②	ta55	fv33	ky42	ts ^h y31	tsv42	jou31	peɿ44
	借	借	訓	訓	訓	訓	訓
③	ta55	fv33	ky42	ts ^h y31	tsv42	jou31	peɿ44
	借	借	訓	訓	訓	訓	訓
④	ta55	fv33	ky42	ts ^h y31	tsy42	jou31	peɿ44
	借	借	訓	訓	訓	訓	訓
⑤	da4	fu1	zou1	chu3	ge3	yo3	be2
	借	借	*	訓	*	訓	訓
⑥	do3	fu1	zou1	chu3	ge2	yo3	be2
	訓	借	*	訓	*	訓	訓

〈大意〉

① 大夫は住む場所に松柏を植える (大夫在的地方要栽种松柏)

② 大夫は居る所に松柏を植える (大夫居处栽松柏)

③ 大夫は居る所に松柏を植える (大夫居处栽松柏)

④ 大夫は居る所に松柏を植える (大夫居处栽松柏)

⑤ 大夫は居る所に松柏を植える (大夫居处栽松柏)

⑥ 大夫は住む所に松柏を植える (大夫在处栽松柏)

〈語釈〉

「大夫」

⑤ 中国封建社会では、官吏の官等 (多くは榮譽的な肩書き) と官階は対応していた。光禄大夫、朝議大夫、通政大夫、奉政大夫などなど。よって「大夫」の二字は広く文官官吏のことを指す。

I. 山花碑注釈集成

(我国封建社会官员的品级(多为荣誉性的虚衔)与官阶相对应。如光禄大夫, 朝议大夫, 通政大夫, 奉政大夫等等, 故大夫二字泛指文官官员。)

⑥ 漢語の借用語で, 漢語の通りに読む。(大夫: 系汉语借词, 读如汉字。)

「在処」

④ [ky42 ts^hy31] と読み, 「居所」, 「住んでいる所」の意。(“在処”读 [ky42 ts^hy31], 意为“居处”, “住处”。)

⑥ べー語で [zoul chu3] と読む。(在処: 白语读作 [zoul chu3]。)

「栽松柏」

⑥ べー語で [ge2 yo3 be2] と読む。(栽松柏: 白语读作 [ge2 yo3 be2]。)

第 10 段第 4 句

	君	子	種	梅	竹
②	tcue33	tsi31	tsy42	tpe33	tsy44
	借	借	訓	訓	訓
③	tcue33	tsi31	tsy42	tpe33	tsy44
	借	借	訓	訓	訓
④	tcue33	tsi31	tsy42	tpe33	tsy44
	借	借	訓	訓	訓
⑤	jun1	zi3	zhu3	jian1	zhu1
	借	借	訓	訓	訓
⑥	jun1	zi3	zhu3	jian1	zhu1
	借	借	訓	訓	訓

〈大意〉

① 君子は住む場所に梅竹を植える (君子在的地方要栽种梅竹)

② 君子は梅竹を植える (君子种梅竹)

③ 君子は梅竹を植える (君子种梅竹)

④ 君子は梅竹を植える (君子种梅竹)

⑤ 君子は梅竹を植える (君子种梅竹)

⑥ 君子は梅竹を植える (君子种梅竹)

〈語釈〉

「君子」

④ 漢語の借用語で, 音・意味ともに漢語と同じ。(系汉语借词, 音, 义同汉语。)

⑥ 漢語の借用語で, 漢字の通り読む。(君子: 系汉语借词, 读如汉字。)

「種梅竹」

④ 「種」は [tsy42] と読み, 動詞。上句の「栽」が [tsy42] と読むのと同じである。ただし,

第2句の「聖種」の「種」は〔tsy33〕と読み、こことは異なる。何故ならあちらは名詞のであり、そのため声調が異なる。一方は高降調(42)、もう一方は中平調(33)という違いがある。漢語に同じ字でもその品詞によって声調を変えるものがあるように、ペー語にも同様の現象がある。(“种”读〔tsy42〕, 动词, 与上句之“栽”读〔tsy42〕同; 但与第二句“圣种”之“种”读〔tsy33〕不同, 因其为名词, 故读之声调不同, 一为高降调, 一为中平调之异, 汉语中同一字因其词性不同而异读, 白语中亦有之。)

- ⑥ ペー語で〔zhu3 jian1 zhu1〕と読む。〔zhu1〕は漢語「種植」の「種」(zhong4)の陽転陰。〔jian1〕, 〔zhu1〕は漢語の「梅」(mei2), 「竹」(zhu2)の変音。(白語读作〔zhu3 jian1 zhu1〕。〔zhu1〕, 为汉语种植的“种”(zhong4)的阳转阴; 〔jian1〕, 〔zhu1〕为汉语“梅”(mei2), “竹”(zhu2)的变音。)

※ ペー語で「植える(動詞)」は〔tsy42〕と読み、「種子(名詞)」は〔tsy33〕と読む。(ちなみに現代漢語では動詞は第2声、名詞は第3声。)すると、とりあえずこの「種」は訓字ということになるが、そもそも〔tsy〕は漢語 zhong の陽転陰と考えられ、声調の差により品詞を分けるというあり方を含めて、漢語的である。それだけペー語は漢語に近いということだ。ただ、ここまで突き詰めることはどこまで両語の関係を考えるかということにつながる問題であり、また明代のペー語音発音における訓字として借詞の違いに遡らなくてはならなくなる。整理すると次のようになる。

表記	読み方	
栽	〔tsy42〕	「栽」という表記から漢語「栽」(zai1)の意味「植える」を想起し、「種」(zhong4)に変換し、それを訓字として〔tsy42〕で発音する。
種	〔tsy42〕	「種」という表記から漢語「種」(zhong4)の意味「植える」を想起し、そのまま〔tsy42〕で読む。音、意味ともに漢語に近い。
種	〔tsy33〕	「種」という表記から漢語「種」(zhong3)の意味「種子」を想起し、そのまま〔tsy33〕で読む。音、意味ともに漢語に近い。

第11段第1句

	方	丈	丘	燒	三	戒	香
②	fa33	tsa33	teɿ44	tʰy55	sa55	tsv42	cou35
	借	借	*	*	訓	* (“炷”)	訓
③	fa33	tsa33	teɿ44	tʰy55	sa55	tsv42	cou35
	借	借	*	*	訓	* (“炷”)	訓
④	fa33	tsa33	xu31	Su55	Sa55	Kai55	cou35
	借	借	特定意義字	訓	訓	訓	訓
⑤	fa2	zha4	qiu4	shu4	sa4	ge2	xio2
	借	借	音	訓	訓	* (“更”)	訓

I. 山花碑注釈集成

⑥	fa2	zha1	qiu4	shu4	sa4	ge2	xio2
	借	借	音	訓	訓	* (“更”)	訓

※ 特定意義字…漢字の字形のみを借りて、ペー語独自の音と意味を表すものこと。

〈大意〉

- ① 古びた方丈で三本の線香をたく（当老方丈烧过了三柱香）
- ② 方丈で三本の線香をたく（方丈里烧三柱香）
- ③ 方丈で三本の線香をたく（方丈里烧三柱香）
- ④ 方丈で三戒の線香をたく（方丈内烧三戒香）
- ⑤ 方丈で三更の線香をたく（方丈里烧三更香）
- ⑥ 方丈（※ここでは人）が三更の香をたき尽くす（方丈尽烧三更香）

〈語釈〉

「方丈」

- ② 寺廟の長老、もしくは住職の居住する場所を指す。（指寺廟的長老或住持居住的地方。）
- ⑥ ペー語で [fā zhā] と読み、寺院の長老住職の意と同じ。（白語读 [fā zhā]，意同寺院中長老住持。）

「丘」

- ② 郭氏は [teɪ44] と読む。「丘焼」を郭氏は [teɪ44 tʰy55] と読み、「通じる」の意とするが、それでは文意に合わない。そこで我々は「丘」を [xu31] と読み、「(場所や時間を表す) 里边」の「里」（「内」の意）と解釈する。「方丈丘」とは、つまり「方丈（室）内」の意味である。別の白文碑文にもこの用法が見られる。例えば「至正二十五年丘」（『段信苴宝碑』）、「不期間丘」、「城南仙村丘矣」など。（方丈后的“丘”字，郭读 [teɪ44]：“丘烧”，郭读 [teɪ44 tʰy55]，意为“打通”。此解不合文意。我们让为“丘”应读 [xu31]，常作“(表示地点，时间的) 里边”的“里”讲。“方丈丘”就是“方丈〔室〕里”的意思。别的白文碑文中也有这种用法。如“至正二十五年丘”，“不期间丘”，“城南仙村丘矣”等。）
- ④ [xu31] と読み、「～の中」の意。この句の「方丈」は、漢語の借用語であり、もともとは寺院の住職、もしくは長老の住む所のことだったが、しだいに仏道修行する者を広く指すようになった。よってこの句の [xu31] も、方丈室内のことを言っている。（「丘」读 [xu31]，意为“里面”，此句指“方丈”系汉语借词，本为寺院住持，长老所居，渐演为泛指修持之，所此句之 [xu31]，言方丈室内也。）
- ⑥ ペー語で [qiu4] と読み、「完全に」、「尽きる」の意。（丘：白語读 [qiu4]，“完全”，“尽”的意思。）

「烧」

- ⑥ ペー語で [shu4] と読み、意味は漢語と同じ。（白語读，[shu4]，意同汉语。）

「三戒香」

- ④ 「三戒」は仏教用語で、[sa55 kai55] と読む。[sa55 tsy44] と読まないのは、「三柱」の線香

ではないからである。(“三戒”乃佛教术语, 读 [sa55 kai55]; 不读 [sa55 tsy44], 因并非“三柱”香。)

- ⑤ 三更の線香のこと。(即三更香。)
- ⑥ 「三戒」は、「三更」のこと。ペー語で [sa4 ge2] と読む。「香」は、ペー語で [xio2] と読む。(三戒香：“三戒”，即“三更”，白语读 [sa4 ge2]；“香”，白语读为 [xio2]。)
- ※ 日没から日の出までを五等分した時間のことを「更」という。一更は約2時間。三更はちょうど真夜中である。

第11段第2句

	覚	苑	中	點	五	更	燭
②	tɕo35	ue44	xu31	ni33	ŋy33	keɿ35	tsy44
	借	訓	訓	*	訓	訓	訓
③	tɕo35	ue44	xu31	ny33	ŋy33	keɿ35	tsy44
	借	訓	訓	*	訓	訓	訓
④	tɕo35	ue44	xu31	ke31	ŋy33	keɿ35	tsy44
	借	訓	訓	訓	訓	訓※	訓
⑤	jio4	weɿ1	zhu1	gei3	ngul	ge4	zhu1
	借	訓	借	訓	訓	訓	借
⑥	jio2	weɿ1	hou3	gei3	ngul	ge2	zhu1
	借	訓	*	訓	訓	訓	借

※ 音声記号に誤りあり

〈大意〉

- ① 浄室で五更の蠟燭がともされた後（在浄室里点过了五更烛之后）
- ② 書齋で五更の蠟燭をともし（书斋内点五更烛）
- ③ 禅院で五更の蠟燭をともし（禅院内点五更烛）
- ④ 覚苑で五更の燭をともし（覚苑中点五更烛）
- ⑤ 浄室で五更の蠟燭をともし（浄室内点五更烛）
- ⑥ 静室で五更の蠟燭をともし（静室燃点五更烛）

〈語釈〉

「覚苑」

- ② 浄室, 書齋を指す。(指浄室, 书斋。)
- ④ 仏教用語で [tɕo35 ue44] と読む。これもまた仏道修行する者の住居を広く指す。(乃佛教术语, 读 [tɕo35 ue44] 此亦为泛捐修持者之所居。)
- ⑤ 浄室を指す。(指浄室。)
- ⑥ ペー語で [jio2 weɿ1] と読み, 浄室のこと。

第11段第3句

	雲	窓	下	拈	大	乘	經
②	ŋv31	ts ^h o55	ɛ133	pe142	to31	ts ^h u55	tɕɛ135
	訓	訓	訓	自	訓	訓	訓
③	ŋv31	ts ^h o55	ɛ133	pe142	to31	ts ^h u55	tɕɛ135
	訓	訓	訓	自	訓	訓	訓
④	ŋv31	ts ^h o55	ɛ133	pe142	to31	ts ^h u55	tɕɛ135
	訓	訓	訓	自	訓	訓	訓
⑤	wo3	chua4	e1	be3	duo3	cheng4	jie2
	訓	訓	訓	自	訓	訓	訓
⑥	vu3	chua4	e1	be2	duo3	zhe3	jie2
	訓	訓	訓	自	訓	訓	訓

〈大意〉

- ① 雲窓の下で大乘經を拜む（就应该在云窗下拜大乘经）
- ② 雲窓の下で大乘經を読む（云窗下诵大乘经）
- ③ 雲窓の下で大乘經を読む（云窗下诵大乘经）
- ④ 雲窓の下で大乘經を読む（云窗下诵大乘经）
- ⑤ 雲窓の下で大乘經を読む（云窗下诵大乘经）
- ⑥ 雲窓の下で大乘經を拜む（云窗下拜大乘经）

〈語釈〉

「雲窓」

- ④ 「雲窓」は本来 [ŋv31 ts^ho55 xu33] と読む。何故なら「窓」一字を、ペー語では [ts^ho55 xu33] と二つの音節で読むからである。しかしここは一句七音節なので、[xu33] の音を省略し、[ts^ho55] だけで「窓」の意味を表している。（“云窗”应读 [ŋv31 ts^ho55 xu33]，因“窗”一字，白语读 [ts^ho55 xu33] 两个音节，今按本句七个音阶，故略去 [xu33] 之声，简读为 [ts^ho55] 以表“窗”。）

「拈」

- ② 「暗唱する」, 「拜読する」の意味。（“背诵”, “拜读”的意思。）
- ④ 「読む」, 「唱える」の意。ペー語では「經を唱える」ことを [pe142 tɕɛ135] という。（意为“念”, “诵”；白语“诵经”读为 [pe142 tɕɛ135]。）
- ⑤ ペー語。經書を声に出して読むことを「拈」と称す。（白语, “诵读经书”称“拈”。）
- ⑥ 「拜」の異体字。（“拜”的别体字。）

※「折」または「折」の異体字として「拈」は漢語中に存在するが、各注釈はそれには従わず、②③④は傍の「片」(pian4) の音を陽転陰でペー語読みしていると思われる。

第11段第4句

	看	公	案	語	録
②	xa55	ku33	a55	jue31	lu35
	訓	借	借	借	借
③	xa55	ku33	a55	jue31	lu35
	訓	借	借	借	借
④	a33	ku33	a55	jue31	lu35
	訓	借	借	借	借
⑤	a1	gu4	an1	yu3	lu1
	訓	借	借	借	借
⑥	a1	gu2	an1	yu3	lu3
	訓	借	借	借	借

〈大意〉

- ① 公案語録を見る (看公案语录)
- ② 公案語録を見る (看公案语录)
- ③ 公案語録を見る (看公案语录)
- ④ 公案語録を見る (看公案语录)
- ⑤ 公案語録を見る (看公案语录)
- ⑥ 公案語録を見る (看公案语录)

〈語釈〉

「公案語録」

- ② 仏教名詞で、先達の祖師が残した言行の模範事例と、仏教徒が記録した禅師の話のことを指す。
(是佛教名词, 指前辈祖师留下的言行范例, 佛教徒记录的禅师言谈。)

「看」

- ④ 「閲読」の意。古ペー語では「看」は [a33] と読み, [xa55] とは読まない。だから [xa55] というのは現代ペー語音である。(“阅读”之意, 古白语“看”读 [a33], 不读 [xa55]。因为 [xa55] 乃今读之白语音。)

第12段第1句

	罇	爐	茶	水	罈	呼	嗜
②	ue35	sua35	tso21	cue33	na55	u33	tsy35
	自	自	訓	訓	自	*	自
③	ue35	sua35	tso21	cue33	na55	u33	tsy35
	自	自	訓	訓	自	*	自

I. 山花碑注釈集成

④	uc35	Sua55	tso42	cuc33	Sa55	uu33	tsy35
	自	自	訓	訓	自	*	自
⑤	weil	xuan1	zhuo3	xu1	sa1	hu1	zuo1
	自	自	訓	訓	自	音	自
⑥	ngui2	xu2	zhuo3	xu2	suo2	hu2	zuo1
	自	自	訓	訓	自	音	自

〈大意〉

- ① 温かく芳しいお茶を一杯飲みましょう (喝一杯温馨的茶水吧)
- ② 熱い茶はちょうど良くあぶれて相対して飲む (热茶煨好相对饮)
- ③ ちょうど良くあぶれた熱い茶を相対して飲む (煨好热茶相对饮)
- ④ 茶水を沸かして互いを招く (热煮茶水相招呼)
- ⑤ 雪を火にくべ茶葉を煮るとサーファーと音がする (煨雪煮茶嘍呼响)
- ⑥ 温かく芳しいお茶を差し上げる (献上温馨的茶水)

〈語釈〉

「煨煨」

- ④ 「焼き煮る」の意。ペー族の茶の入れ方は、先に焼いてから煮る。だから「茶を焼きお湯を沸かす」という言い方がある。(意为“煨煮”，白族喝烤茶，先烤后煮，故有煨茶煮水之谓。)
- ⑤ ペー族独特の茶の飲み方を指す。つまり雪を使ってお湯を沸かしてから茶を煮る。味は芳醇である。「煨」はペー語の雪と同じ。(指白族特殊的饮茶方式，即用雪烧成开水后煮茶。味道醇美。煨：同白语雪。)
- ⑥ ペー語で [ngui2 xu2] と読み、「お湯」のこと。(白语读 [ngui2 xu2]，即“热水”。)

「嘍呼嘍」

- ② 第1, 2句の「嘍」を、郭は [na55] と読む。現在のペー語では「あなたたち」の意味になる。我々は「嘍」は [sa55] と読むべきだと考える。現在のペー語では、[sa55] は動詞の前に置かれて「お互い」の意味となる。他の碑文(「楊宗碑」など)の、「嘍」字の意味もこれと同じである。例えば、「嘍恭嘍敬」, 「嘍逢」, 「嘍送」など。(第一, 二句的“嘍”, 郭读 [na55], 在现在的白语中是“你们”的意思。我们让为“嘍”应该读 [sa55]。在现在的白语里, [sa55] 用在动词前边有互相的意思。在别的碑文中, “嘍”字的意义也如此。如: “嘍恭嘍敬”, “嘍逢”, “嘍送”。)
- ④ 「嘍」は [sa55] と読み、「お互い」の意がある。また「呼嘍」は [u33 tsy] と読む。「嘍呼嘍」とは「互いを招く」ことである。(“嘍”读 [sa55], 有“相互”之意。又“呼嘍”读 [u33 tsy], “嘍呼嘍”即“相招呼”也。)
- ⑤ 擬声語で、お湯が沸く時の音。(象声词, 水涨时的声音。)
- ⑥ 「呼」はペー語で [hu2] と読み、「送る」の意味。「嘍呼嘍」は、「差し上げる」の意味。(“呼”, 白语读 [hu2], “送”的意思; “嘍呼嘍”, “送上来”的意思。)

- ⑦ 「𦉳」は [zef] と読み、注ぐこと。「付」は [ex] と読み、飲むこと。(𦉳：[zef]、斟。付：[ex]、濁。)

第12段第2句

	直	指	心	宗	𦉳	付	囑
②	tsi35	tsi31	ɕu33	tsu33	na55	fy44	zu44
	借	借	借	借	自	借	借
③	tsi35	tsi31	ɕu33	tsu33	na55	fy44	zu44
	借	借	借	借	自	借	借
④	tsi35	tsi31	ɕu33	tsu33	Sa55	fy44	Zu44
	借	借	借	借	自	借	借
⑤	zhi4	zhi3	xin1	zhu1	sa1	fu4	zhu2
	借	借	借	借	自	借	借
⑥	zhi2	zhi3	xil	no1	zao1	fu2	zhu2
	借	借	借	*	自	借	借

〈大意〉

- ① 私たちの心の中を敬虔にさせるような言いつけ (让我们心中虔诚的嘱咐)
 ② 誠心誠意、互いに言い聞かせる (诚心诚意相嘱咐)
 ③ まっすぐに気持ちを互いに言い聞かせる (直把心意相嘱咐)
 ④ 直指心宗して互いに言い聞かす (直指心宗互嘱咐)
 ⑤ 私の心の暗闇を指して言い聞かせるようである (似指我心暗嘱咐)
 ⑥ 心の中でずっと祈りを捧げる (心中一直在祷告)

〈語釈〉

- ④ 「𦉳」字の音、意味は上の句と同じ。「付嘱」は [fy44 zu44] と読む。漢語の借用語で、意味は「言い聞かせる」と同じ。(“𦉳”字音、义同上句, “付嘱”读 [fy44 zu44], 系汉语借词, 义同“嘱咐”。)
 ⑥ 「心宗」とは、心の中のこと。「付嘱」は、言い聞かせるの意で、ここでは「祈りを捧げる」の意である。この句は、心の中で神仏にずっと祈りを捧げている、という意味である。(“心宗”, 即心中: “付嘱”, 即嘱咐, 这里是“祷告”的意思。全句意思是: 心中一直在祷告着。)
 ⑦ 「𦉳」は [zef] と読み、自分のこと。「付嘱」は思考のこと。(𦉳: [zef], 自己。付嘱: 思考。)

第12段第3句

	菩	提	達	磨	做	知	音
②	p ^h u55	t ^h i55	ta35	mo35	tsi55	tsi33	ju33
	借	借	借	借	訓	借	借

I. 山花碑注釈集成

③	p ^h u55	t ^h i55	ta35	mo35	tsi55	tsi33	ju33
	借	借	借	借	訓	借	借
④	p ^h u55	t ^h i55	ta35	mo35	tsi55	tsi33	ju33
	借	借	借	借	訓	借	借
⑤	pu4	ti4	da1	mo2	zhi4	zhi1	yin1
	借	借	借	借	訓	借	借
⑥	pi4	ti4	da2	mo2	zi4	zhi1	yin1
	借	借	借	借	訓	借	借

〈大意〉

- ① 私たちは達磨大師を知音とする（我们要和达磨祖师做知音）
- ② 菩提達磨を知音とする（菩提达磨做知音）
- ③ 菩提達磨を知音とする（菩提达磨做知音）
- ④ 菩提達磨を知音とする（菩提达磨做知音）
- ⑤ 達磨大師は知音である（达磨祖师是知音）
- ⑥ 菩提達磨を知音とする（菩提达磨做知音）

〈語釈〉

「菩提達磨」

- ② 中国仏教禪宗の創始者。（是中国的佛教禅宗的创始人。）
- ⑤ 達磨大師のことで、中国禪宗の創始者。（即达磨祖师，中国禅宗创始人。）
- ⑥ 「菩提」とは仏教名詞で、意識すると「悟り」「知恵」「道」などになる。「達磨」は、仏祖の名である。「菩提達磨」とは、有道の仏祖達磨のこと。（“菩提”，佛教名词，意译为“觉”，“智”，“道”等。“达磨”，是佛祖名。“菩提达磨”，即有道的佛祖达磨。）

「做」

- ④ 第3句、第4句はどちらも全て漢語の借用語で、その音、意味は漢語と同じ。ただ両句中の「做」字は、[tsi55]と読み、「～とする、～となる」の意。（两句皆为汉语借词，其音，义同汉语。惟两句中之“做”字，读 [tsi55]，有“作，为”之意。）

第12段第4句

	迦	葉	做	師	主
②	tsi33	se42	tsi55	si33	tsy31
	*	訓	訓	借	借
③	tsi33	se42	tsi55	si33	tsy31
	*	訓	訓	借	借
④	tsi33	Se42	tsi55	Si33	tsy31
	*	訓	訓	借	借

⑤	jial	she4	zhi4	shu(声調不明)	zhu3
	借	借	訓	訓	借
⑥	jial	she4	zi4	shu4	zhu1
	借	借	訓	訓	借

〈大意〉

- ① 迦葉天尊を拜して師とする (拜迦叶天尊为师主)
- ② 迦葉を師とする (迦叶做师主)
- ③ 迦葉を師とする (迦叶做师主)
- ④ 迦葉を師とする (迦叶做师主)
- ⑤ 迦葉を師とする (迦叶做师傅)
- ⑥ 迦葉を師とする (迦叶做师傅)

〈語釈〉

「迦葉」

- ② 釈迦の十大弟子の一人。また彼は中国禅宗が仏法を受け継いだ初代の師といわれている。(是釋迦十大弟子之一。又传说他是中国禅宗传承佛法的第一代师主。)
- ⑥ 釈迦の大弟子で、彼が鶏足山の道場を開いたと伝えられる。(釋迦大弟子，相传他开辟鸡足山道场。)

「師主」

- ⑤ ペー語で、師匠のこと。(师主：白语，即师傅。)
- ⑥ 師匠のことで、ペー語で [shu4 zhu1] と読む。(即师傅，白语读 [shu4 zhu1]。)

第13段第1句

	盛	國	家	覆	世	功	名
②	suu44	kueɿ35	tɕa44	pa33	ts ^h y44	ku35	miu35
	借	借	借	*	*	借	借
③	suu44	kueɿ35	tɕa44	pa33	ts ^h y44	ku35	miu35
	借	借	借	*	*	借	借
④	suu44	kueɿ35	tɕa44	kai55	si55	ku35	miu35
	借	借	借	* (“蓋”)	借	借	借
⑤	shou1	gue2	jial	gail	shi4	gul	miu2
	借	借	借	* (“蓋”)	借	借	借
⑥	shou4	gue2	jial	gail	shi4	gu4	miu2
	借	借	借	* (“蓋”)	借	借	借

I. 山花碑注釈集成

〈大意〉

- ① 国家の隆盛により功績と名声を得る（靠国家兴盛而得到功名）
- ② 比類なき功績と名声が国の歴史に刻まれている（盖世功名立国古）
- ③ 比類なき功績と名声が国の歴史に刻まれている（盖世功名立国古）
- ④ 国家の比類なき功績と名声を成す（成国家盖世功名）
- ⑤ 国家の比類なき功績と名声を享受する（享国家盖世功名）
- ⑥ 国家の比類なき功績と名声を受ける（受国家盖世功名）

〈語釈〉

「盛」

- ④ 「盛」は [su44] と読み、意味は「讓（～に…させる）」、つまり国家に力を尽くして国家を繁栄させたということである。また（“盛” 读 [su44]，意为“让”，即是效力于国家而让国家兴盛。）
- ⑤ 「受」の音を借りたもので、享受すること。（“受”之借音，即享受。）
- ⑥ 「受」の音を借りたもの。（“受”的借音。）
- ⑦ [zef] と読み、「生」の意。（[zef]，生。）

「覆世」

- ④ 「覆世」の「覆」は、[pa33] とは読まず、[kai55] と読むべきである。「覆世」を [kai55 ts^hy44] と読むことによって、漢語の「蓋世（世人にぬきんでる）」と音と意味が同じになる。（“覆世”之“覆”，不读 [pa33]，当读为 [kai55]；因“覆世”一词读 [kai55 ts^hy44]，与汉语“盖世”之音，义同。）
- ⑤ 世人にぬきんでること。（即盖世。）
- ⑥ 「覆」とは、「覆蓋（覆う）」のこと、「覆世」とは「蓋世（世人にぬきんでる）」のことである。（“覆”，即覆盖，“覆世”即“盖世”。）

「功名」

- ⑥ ペー語で [gu4 miu2] と読み、言葉の意味は漢語と同じ。（白語读作 [gu4 miu2]，词的意思同汉语。）

第13段第2句

	食	朝	廷	尊	貴	爵	禄
②	ju44	ts ^h o55	t ^h iu55	tɕue35	kue35	tɕo35	lu35
	訓	借	借	借	借	借	借
③	ju44	ts ^h o55	t ^h iu55	tɕue35	kue35	tɕo35	lu35
	訓	借	借	借	借	借	借
④	juu44	ts ^h o55	t ^h iuu55	tɕue35	kue35	tɕo35	lu35
	訓※	借	借※	借	借	借	借

⑤	yen1	chao2	tin2	zhun1	gull	jio4	Lul
	訓	借	借	借	借	借	借
⑥	you1	chao4	tiu4	zhun1	gui2	jio2	lu1
	訓	借	借	借	借	借	借

※ 音声記号に誤りあり

〈大意〉

- ① 朝廷の尊き俸禄を食む（食朝廷尊贵的俸禄）
- ② 朝廷で尊ばれ爵禄を受ける（尊贵朝廷受爵禄）
- ③ 朝廷で尊ばれ爵禄を受ける（尊贵朝廷受爵禄）
- ④ 朝廷の尊き爵禄を受ける（享朝廷尊贵爵禄）
- ⑤ 朝廷の尊き爵禄を食む（食朝廷尊贵爵禄）
- ⑥ 朝廷の尊き爵禄を食む（食朝廷尊贵爵禄）

〈語釈〉

- ④ 「食」は [ju44] と読み、(意味も)「食」と同じ。ただし敷衍して「所有する」,「享受する」の意となる。(“食” 读 [ju44], 亦同“食”; 但引申为“享有”, “享受”之意。)
- ⑥ 漢字をペー語読みする。(汉字白读。)

第13段第3句

	慈	悲	治	理	衆	人	民
②	ts ^h i55	pe35	tsi44	li33	tsu33	zu35	miu35
	借	借	借	借	借	借	借
③	ts ^h i55	pe35	tsi44	li33	tsu33	zu35	miu35
	借	借	借	借	借	借	借
④	ts ^h i55	pe35	tsi44	li33	tsa33	zu35	miu35
	借	借	借	借	訓	借	借
⑤	chi2	bei1	zhi1	li3	zhu4	ren2	miu2
	借	借	借	借	借	借	借
⑥	chi2	bei1	zhi4	li3	zhu4	ren2	min2
	借	借	借	借	借	借	借

〈大意〉

- ① 慈悲の心を持って人民を統治する（要慈悲为怀地治理人民）
- ② 多くの人民を仁慈で統治する（仁慈治理众人民）
- ③ 多くの人民を仁慈で統治する（仁慈治理众人民）
- ④ 多くの人民を慈悲深く統治する（慈悲治理众人民）
- ⑤ 多くの人民を慈悲深く統治する（慈悲治理众人民）

I. 山花碑注釈集成

⑥ 国の多くの人民を慈悲深く治める（慈悲治国众人民）

〈語釈〉

④ 「慈悲」は〔ts^hi55 pe35〕と読む。漢語の借用語で、音・意味は漢語と同じ、仏教用語である。

（“慈悲”读〔ts^hi55 pe35〕，系汉语借词，音义同汉语，佛教术语。）

⑥ 音・意味は漢語と同じ。（音义同汉语。）

第13段第4句

	才	等	周	文	武
②	ts ^h i55	tu44	tsou33	vu35	ɣ31
	訓	借	借	借	借
③	ts ^h i55	tu44	tsou33	vu35	ɣ31
	訓	借	借	借	借
④	ts ^h i55	tu44	tsou33	vu35	ɣ31
	訓	借	借	借	借
⑤	chai2	den3	zhu2	ven2	vu3
	借	借	借	借	借
⑥	chai2	dou3	zhu1	wen2	wu3
	借	借	借	借	借

〈大意〉

① 周文王・周武王と同じである（像周文王，周武王一样）

② 才能は周の文王・武王に比せられる（才比周文武）

③ 才能は周の文王・武王に比せられる（才比周文武）

④ 才能は周の文王・武王に等しい（才等周文武）

⑤ 才能は周の文王・武王に等しい（才等周文武）

⑥ 才能は周の文王・武王に等しい（才等周文武）

〈語釈〉

④ 全句全て漢語の借用語。（全句皆为汉语借词。）

⑥ 音・意味は漢語と同じ。（音义同汉语。）

第14段第1句

	恭	承	敬	當	母	天	地
②	ku35	tsu31	tcu33	tu35	mo33	xe55	tcɿ31
	音	*	訓	音	訓	訓	訓
③	ku35	tsu31	tcu33	tu35	mo33	xe55	tcɿ31
	音	*	訓	音	訓	訓	訓

④	ku35	tsu31	tu33	tu35	mo33	xe55	ɬi31
	音	*	訓	音	訓	訓	訓
⑤	gu2	zhen3	jing1	do2	mol	hei4	ji3
	音	*	訓	音	訓	訓	訓
⑥	gu2	zhou3	jin1	do2	mol	hei2	ji3
	音	*	訓	音	訓	訓	訓

〈大意〉

- ① 忠実に父母天地を崇敬する（忠诚地崇敬父母天地）
- ② 天地父母を忠実に敬う（忠实敬天地父母）
- ③ 天地父母を忠実に敬う（忠实敬天地父母）
- ④ 父母天地を謹み敬う（恪恭敬父母天地）
- ⑤ 天地父母を謹み敬う（虔诚敬天地父母）
- ⑥ 父母天地を謹み敬う（虔诚敬父母天地）

〈語釈〉

「恭承」

- ② 意味は「誠実，誠意」。(意思是“老实，诚心”。)
- ④ 「敬虔」，「慎み深い」の意。(“恭承”读 [ku55 tsu31]，意为“虔诚”，“恭谨”。)
- ⑤ 敬う，慎み整っていること。(恭承：即恭敬，恭整。)
- ⑥ 「承」は「整（整う）」のこと。(“承”即整。)

「当母」

- ④ 「当」は [tu35] と読み，ペー語の古音。「父，母」と続けて言う時は，[tu35 mo33] と読む。
だから「当」は [tu] と読み，「父」を指す。(“当”读 [tu35]，白语之古音，当称“父，母”连用时，即读为 [tu35 mo33]，故“当”读 [tu] 乃指“父”。)
- ⑤ ペー語で，父母のこと。(白语，即父母。)
- ⑥ ペー語で [do2 mol] と読み，父母のこと。全句の意味は父母天地を謹み敬うということ。
(白语读 [do2 mol]，即父母。全句意为虔诚敬父母天地。)

第14段第2句

	孝	養	干	子	孫	釋	儒
②	cou33	ja44	jy31	tsi44	sua55	ci35	zy33
	訓	借	*	訓	訓	*	借
③	cou33	ja44	jy31	tsi44	sua55	ci35	zy33
	訓	借	*	訓	訓	*	借

I. 山花碑注釈集成

④	cou33	ja44	ka35	tsi44	sua55	ci35	Zy33
	訓	借	音	訓	訓	*	借
⑤	xiol	ya3	ga2	zi1	zhua2	sul4	ru3
	訓	借	音	訓	訓	訓	借
⑥	xiol	ya1	ga2	zi1	shua4	shi2	ru1
	訓	借	音	訓	訓	借	借

※ ①は「干」を「干」に作る。

〈大意〉

- ① 子孫が父母に孝養を尽くすのと同じように先儒を崇拝する（像子孙孝养父母一样的崇拜先儒）
- ② 子孫に仏・儒を尊ぶことを教える（教育子孙尊僧儒）
- ③ 子孫に仏・儒を尊ぶことを教える（教育子孙尊僧儒）
- ④ 孝養を尽くし子孫に仏・儒を教える（孝养教子孙释儒）
- ⑤ 子孫に仏・儒を尊ぶことを教える（教育子孙尊释儒）
- ⑥ 子孫に仏・儒を尊び重んじることを教える（教子孙尊重释儒）

〈語釈〉

② 「干」字は、郭は [jy31] と読むが、解釈しにくい。我々は [ka35] と読み、「教育」の「教」に相当すると考える。（“干”字，郭读 [jy31]，不好解释。我们认为应该读 [ka35]，相当于“教育的“教”。）

※ ②の郭音は「干」を「于」(yu2) と読んだためではないかと思われる。

④ 「干」は [ka35] と読み、その意味は「教育する」、「指導する」。(jy31) と読む説もあるが、それは誤って「干」を「養」とつなげて一語としたためで、[ja44 jy31] というのは妥当ではなく、「孝養」を一語と見なすべきである。「干」は全句の主要動詞であり、[ka35] と読む。（“干”读 [ka35]，其意为“教育”，“教导”：有读 [jy31]，乃误将“干”字与“养”连为一词素，故 [ja44 jy31] 未妥，应将“孝养”视一词，而“干”则为全句主要动词，当读为 [ka35]。）

⑤ 干：ペー語で、教育、指導の意。（干：白语，教育，教导之意。）

⑥ 「干」は、ペー語で [ga2] と読み、「教え導く」、「教育する」の意味。全句の大意は、子孫に父母に孝養を尽くすように釈迦と孔子を崇敬することを教えるということである。（“干”，白语读 [ga2]，“教导”，“教育”的意思。全句大意思：教导子孙就像孝养父母一样地崇敬释迦和孔子。）

第14段第3句

	念	礼	不	絶	鍾	啓	啓
②	ne35	li31	pu31	tsue42	tsy35	tu21	t ^h ei35
	借	借	訓	*※	訓	*	訓

③	ne35	li31	pu31	tsue42	tsy35	tu21	tʰe35
	借	借	訓	*※	訓	*	訓
④	ni35	li31	pu31	tsue42	tsy35	tʰu35	tʰe35
	借	借	訓	*※	訓	*	訓
⑤	yo3	Lei3	bou3	zhul1	zhul	qin4	shen1
	訓(“詠”)	訓	訓	訓	借	借	借
⑥	yo3	li2	bou3	zhul1	zhul	qin4	che4
	訓(“詠”)	借	訓	訓	借	借	訓

※ 音声記号に誤りあり

〈大意〉

- ① 絶え間ない鍾磬の音の中で礼拝し念仏を唱える (在不断的钟磬声中礼拜念佛)
- ② 利を念じて鍾磬の音を絶やさない (念利不绝钟磬声)
- ③ 念じ拝み鍾磬の音を絶やさない (念礼不绝钟磬声)
- ④ 仏を拝み鍾磬の音を絶やさない (礼佛不绝钟磬声)
- ⑤ 利を念じて鍾磬の音を絶やさない (念利不绝钟磬声)
- ⑥ 仏を拝み鍾磬の音を絶やさない (礼佛不绝钟磬声)

〈語釈〉

- ④ 「念礼」は [ne42 li31] と読み、意味は仏の名を唱えながら「礼仏 (仏を拝む)」すること、
 仏教用語である。(“念礼”读 [ne42 li31], 意为唱佛号“礼佛”, 佛教术语。)
- ⑥ 絶え間ない鍾磬の音の中で経を唱え仏を拝む。(在不断的钟磬声中念经礼佛。)

第14段第4句

	消	災	難	長	福
②	ɕo35	tse44	na55	tso42	xu33
	借	借	音	訓	訓(“好”)
③	ɕo35	tse44	na55	tso42	xu33
	借	借	音	訓	訓(“好”)
④	ɕo35	tse44	na55	tso42	xu33
	借	借	音	訓	訓(“好”)
⑤	xio1	zai1	na3	zhuo3	fu1
	借	借	訓	訓	借
⑥	xio2	zhai1	no3	zhuo3	fu1
	借	借	訓	訓	借

〈大意〉

- ① 災いをはらい長く福をもたらす (就可以消灾长福)

I. 山花碑注釈集成

- ② 災難をはらい福を増す（消灾难添福）
- ③ 災難をはらい福を増す（消灾难添福）
- ④ 災難をはらい福を増す（消灾难添福）
- ⑤ 災いをはらいまた福を増す（消灾又添福）
- ⑥ 災いをはらい長く福をもたらす（消灾宜长福）

〈語釈〉

- ② 「長福 [tso42 xu33]」の意味は「長く好い」である。（“长福 [tso42 xu33]”，意思是“长好”。）
- ④ 「長福」は [tsa21 xu33] と読み，意味は「福を増やす」である。「長」を [tso42] と読まないのは，長短の長ではないからである。[tsa42] と読むということは，つまり増長の長ということである。（“长福”读 [tsa21 xu33]，意为“添福”。故“长”不读 [tso42]，即非长短之长：而读 [tsa42]，乃增长之长也。）
- ⑤ 「難」はペー語で，再び，またの意味。（难：白语，再，又之意。）
- ⑥ 「難」は，ペー語で [no3] と読む語気詞で，漢語の「哪」に相当する。全句の意味は，災いをはらい幸福な生活を長く享受するということである。（“难”，白语读 [no3]，语气词，相当于汉语的“哪”。全句意思是消灾而长享幸福生活。）

第15段第1句

	行	仁	義	禮	上	不	輕
②	ɕu35	zu35	ji44	li31	sa55	pu31	ts ^h ɛɿ55
	訓	借	借	借	借	訓	訓
③	ɕu35	zu35	ji44	li31	sa55	pu31	ts ^h ɛɿ55
	訓	借	借	借	借	訓	訓
④	u35	zu35	ji44	li31	no55	pu31	ts ^h ɛɿ55
	訓	借	借	借	訓	訓	訓
⑤	xin2	ren2	yl4	Lei1	no1	bou1	che4
	訓	借	借	訓	訓	訓	訓
⑥	xiu2	rou2	yi4	lei4	no1	bou3	che4
	訓(“修”)	借※	借	訓	訓	訓	訓

※ 音声記号に誤りあり

〈大意〉

- ① 互いに仁義礼を多くもって対峙する（互相之間要多以仁義礼相持）
- ② 努めて仁義を行い礼儀を重んじる（力行仁义讲礼义）
- ③ 努めて仁義を行い礼儀を重んじる（力行仁义讲礼义）
- ④ 仁義を行ない礼を重んじる（行仁义礼上不轻）
- ⑤ 自ら仁義を行ない礼儀を重んじる（躬行仁义讲礼义）

⑥ 仁義を行い礼節を重んじる (行仁义礼节不轻)

〈語釈〉

- ④ 「礼上」は [li31 no55] と読み、意味は漢語の「礼上」と同じ。「上」を [sa55] と読む説があるが、妥当ではなく、[no55] と読むべきである。この句は「3・4」あるいは「3・2・2」式に分かれる。「4・3」あるいは「2・2・3」式ではない。よって「礼上」で一節となる。(“礼上” 读 [li31 no55], 其义与汉语“礼上”同; 有读“上”为 [sa55], 未妥, 当读为 [no55]。此句分节为“三、四、”或“三、二、二、”式句; 并非“四、三、”或“二、二、三、”式句。故“礼上”为一节。)
- ⑥ 「行」は、ペー語で [xiu2] と読み、意味は漢語と同じ。「仁義」は漢語の借用語だが、ペー語はやや異なる。「礼上不軽」は、ペー語で [lei4 no1 bou3 che4] と読み、意味は漢語と同じ。(“行”, 白语读 [xiu2], 义同汉语。“仁义”, 汉语借词, 白语音稍异。“礼上不轻”, 白语读 [lei4 no1 bou3 che4], 义同汉语。)

第15段第2句

	凶	恶	弊	逆	上	不	重
②	su33	yo35	pi55	ne35	sa55	pu31	ty33
	借	借	借	借	借	訓	訓
③	cu33	yo35	pi55	ne35	sa55	pu31	ty33
	借	借	借	借	借	訓	訓
④	Su33	yo35	pi55	ne35	no55	pu31	ty33
	借	借	借	借	訓	訓	訓
⑤	xiu1	ngo2	bi4	ni1	no1	bo3	zhu1
	借	借	借	借	訓	訓	訓
⑥	xiu1	ngo2	bi4	ni1	no1	bou3	zhu1
	借	借	借	借	訓	訓	訓

〈大意〉

- ① 互いにわずかな弊害も加えあわない (互相之間一點兇惡弊逆不要相加)
- ② 凶悪と弊逆をほしいままにしない (不逞凶惡和弊逆)
- ③ 凶悪と弊逆をほしいままにしない (不逞凶惡和弊逆)
- ④ 凶悪逆上をほしいままにすることは軽い (逞凶惡逆上不重)
- ⑤ 凶悪と弊逆をほしいままにしない (不逞凶惡和弊逆)
- ⑥ 悪弊を除き懲罰は軽い (除惡弊懲罰不重)

〈語釈〉

- ④ 「逆上」は [ne35 no55] と読み、意味は漢語の「逆上」と同じ。よって「上」も [sa55] とは読まない。この句の構成は第1句と同じ「3・4」式である。(“逆上” 读 [ne35 no55], 其义与汉

I. 山花碑注积集成

语“逆上”同；故“上”亦不读〔sa55〕。其句式结构，亦同第一句为“三、四、”式句。）

- ⑥ 「凶」は、ペー語で〔xiu1〕と読み、「処罰」の意味。「凶恶弊」は、違法者を懲罰すること。「逆上」は、ペー語で〔nil nol〕と読み、語気詞。漢語の「那也是（それもまた）」に当たる。「不重」は、ペー語で〔bou3 zhu1〕と読み、意味は漢語と同じ。全句の大意は、罪を犯した人の懲罰もできるだけ寛大にする、ということ。（“凶”，白语读〔xiu1〕，“惩处”的意思。“凶恶弊”，即惩罚违法的人。“逆上”，白语读〔nil nol〕，语气词，相当于汉语的“那也是”。“不重”，白语读〔bu3 zhu1〕，义同汉语。全句大意是：对待犯错误的人的惩罚，也尽量从宽。）

第 15 段第 3 句

	三	教	經	書	接	推	習
②	sa44	tɕou55	tɕu33	sy33	tɕu33	tɕ ^h ue31	ɕi35
	借	借	借	借	*	*	借
③	sa44	tɕou55	tɕu33	sy33	tɕu33	tɕ ^h ue31	ɕi35
	借	借	借	借	*	*	借
④	sa44	tɕou55	tɕu33	sy33	tɕu35	tɕ ^h ue31	ɕi35
	借	借	借	借	*	*	借
⑤	sa2	jiao4	jie4	shi4	jia1	tui2	x11
	借	借	訓	訓	訓	借	借
⑥	sa1	jiao2	jie2	shi2	jia1	tui1	xi2
	借	借	訓	訓	訓	借	借

〈大意〉

- ① 三教の經書を絶えず学ぶ（三教的經書要不断的傳習）
- ② 三教の經書を代々伝える（三教书经代代传）
- ③ 三教の經書を代々伝える（三教书经代代传）
- ④ 三教の經書を時には研鑽する（三教经书时研读）
- ⑤ 三教の經書を代々伝える（三教书经代代传）
- ⑥ 三教の經書を常に学ぶ（三教经书常传习）

〈語釈〉

- ② 「三教」は儒教・道教・仏教を指す。（三教，指儒教、道教、佛教。）
- ④ 「推習」は「研鑽する」・「究読（追究して読む）」の意。（“推习”，“钻研”、“究读”之意。）
- ⑤ 「接」は、絶えず続けること。（接：即接连不断。）
- ⑥ 「接」は、ペー語で〔jia1〕と読み、「絶えず続ける」という意味。「推習」は「習う」こと。（接，白语读〔jia1〕，“接连不断”的意思。“推习”即“传习”。）

第15段第4句

	漕	溪	水	阿	喇
②	ts ^h o55	tɕ ^h i44	ɕue33	a31	ɤ33
	訓	訓	訓	音	*
③	ts ^h o55	tɕ ^h i44	ɕue33	a31	ɤ33
	訓	訓	訓	音	*
④	ts ^h o55	tɕ ^h i44	ɕue33	a31	ɤ33
	訓	訓	訓	音	*
⑤	cuo4	qi4	xu1	a3	hu1
	訓	訓	訓	音	借
⑥	cuo4	qi2	xu1	a3	wol
	訓	訓	訓	音	訓

〈大意〉

- ① 溪流のように長く途絶えない（像漕溪水一樣長流不斷）
- ② 谷川を流れる水は休むことがない（漕溪水不息）
- ③ 谷川を流れる水は休むことがない（漕溪水不息）
- ④ 曹溪（慧能）の流れをくむ（曹溪水一勺）
- ⑤ 谷川を流れる水は休むことがない（漕溪水不息）
- ⑥ 山の洪水（鉄砲水）のようでは駄目だ（山洪般不好）

〈語釈〉

- ② 「阿喇」は、郭は [a31 ɤ33] と読み、第1段第2句の「阿物」と同じく、「たくさん」の意味とする。我々は「阿喇」の「喇」を [kɤ35] と読み、河川の量詞である「条」の意味と考える。『白国因由』に、観音が羅刹を捕らえるのに、張敬の助けを借りた時、事が終わってから張に感謝して、「点苍山の峰の桃溪水は、洱海の東山から湧き出て賓居（洱海の東方の地名）との境界となり、一方を灌漑する」と言ったことが載っている。「漕溪水阿喇」の「漕溪」は、広く（蒼山）十八溪を指している。（「阿喇」，郭读 [a31 ɤ33]，和（1）节第二行的“阿物”读法一样，是“许多”的意思。我们认为“阿喇”的“喇”应读 [kɤ35]，是河流的量词“条”的意思。《白国因由》一书说观音收罗刹，得张敬帮助，事成后谢张“点苍中峰桃溪水一派，自洱河东山涌出宾居地界，灌漑一方。”“漕溪水阿喇”，“漕溪”泛指十八溪。）
- ④ 「阿喇」は、「一滴」「一勺」の意味、つまり漕溪（曹溪）一勺の流派のことをいう。（「阿喇」意为“一滴”，“一勺”，即言：分得漕溪（曹溪）一勺之流也。）
- ⑤ 漕溪水のように長く流れてやまないこと。（意为象漕溪水一样长流不息。）
- ⑥ ペー語で [cuo4 qi2 xu1 a3 wol] と読む。「漕溪水」とは「山洪水（山の洪水）」のこと、「阿喇」は「不好（よくない）」の意である。この句の上の句とつなげた意味は、「三教の経書を途絶えることなく習い伝え、山の洪水のようにひとたび湧き出ただけで止まってしまふことを好しと

I. 山花碑注釈集成

しない。「阿喇」を「阿囉」と書く人もいるが、これは伝写の誤りである。「漕溪水」を仏教の「漕溪一勾」の解釈する人もいるが、上の句で三教の経書をいい、ここではただ仏教教典をいうというのは妥当ではない。(白語読作 [cuo4 qi2 xu1 a3 wo1]。"漕溪水" 即 "山洪水"; "阿喇", "不好" 之意。这句连同上句的意思是: 三教的经书要不断地传习, 像山洪水那样一涌即停不好。"阿囉", 有些人误作 "阿囉", 那是传抄之误。"漕溪水", 有人释作佛教的 "漕溪一勾", 但上文即言三教经书, 这里单说佛教典故是不妥当的。)

⑦ 「斛」は [huf] と読み, 「杯」の意。(喇: [zef], 杯。)

第 16 段第 1 句

	長	尋	細	月	白	風	清
②	tso21	ji21	ci44	ɲua44	peɿ35	pi35	tɕʰeɿ 55
	訓	訓	音	訓	訓	訓	訓
③	tso21	ji21	ci44	ɲua44	peɿ42	pi35	tsʰeɿ 55
	訓	訓	音	訓	訓	訓	訓
④	tso42	ji42	ci44	ɲua44	peɿ42	pi35	tɕʰeɿ 55
	訓	訓	音	訓	訓	訓	訓
⑤	zhuo3	yl3	jl3	wal	be1	bl2	qie4
	訓	訓	*	訓	訓	訓	訓
⑥	zhuo3	yi3	xi4	ɲuaɿ	be3	bi1	qie4
	訓	訓	音	訓	訓	訓	訓

〈大意〉

- ① 常に四月の清白な風を追い求める (時常追尋四月清白的風)
- ② 常に月明風清を求める (常寻找月明風清)
- ③ 常に四月のすがすがしい風を求める (常寻四月和風清)
- ④ 常に月白風清を探し求める (常寻觅月白風清)
- ⑤ 常に月白風清を探し求める (常寻求月白風清)
- ⑥ 若い時から月白風清を愛す (早已爱月白風清)

〈語釈〉

- ④ 「長」は [tso42] と読み, 意味は「常」。また「細」は [ci44] と読み, 意味は「尋覓 (探し求める)」の「覓」である。また「月」は [ɲua44] と読む。ペー語では1月2月の「月」は [ɲua44] と読み, 「月亮 (天体の月のこと)」は [mi35 ɲua44] と読む。但し略して [ɲua44] と読むことも可能である。(“长” 读 [tso42], 意为“常”。又“细” 读 [ci44], 意为寻觅之“觅”。又“月” 读 [ɲua44], 白语一月两月之“月” 读 [ɲua44], “月亮” 读 [mi35 ɲua44], 但简读 [ɲua44] 亦可。)
- ⑤ 「長尋細」は「常に探し求める」という意味。「月白風清」は高尚な情操を指す。(长寻细: 经

常寻找之意。)

⑥ 「長尋」は、ペー語で [zhuo3 yi3] と読み、漢語の「早已 (早くから)」の意。「細」は語気詞。

「月白風清」は、意味は漢語と同じ。(“长寻”, 白语读 [zhuo yi], 汉语“早已”之意。“细”, 语气词。“月白风情”, 义同汉语。)

※ 「月白風清」とは、白い月と清風の意で静かで美しい夜の形容。宋・蘇軾「後赤壁賦」を始めとして、「水滸伝」や「三国演義」などにも使われている成語。

第16段第2句

	不	貪	摘	花	紅	柳	綠
②	pu31	t ^h a33	tse44	xuo35	ts ^h e:44	ɣu33	ly44
	訓	借	訓	訓	訓	訓	訓
③	pu31	t ^h a33	tse44	xuo35	ts ^h e:44	ɣu33	ly44
	訓	借	訓	訓	訓	訓	訓
④	pu31	t ^h a33	tse44	xuo35	ts ^h e:42	ɣu33	ly44
	訓	借	訓	訓	訓	訓	訓
⑤	bou3	ta4	zhei1	huo2	che1	ou1	lv1
	訓	借	訓	訓	訓	訓	訓
⑥	bou3	ta4	zhei1	huo2	che1	ou1	lv
	訓	借	訓	訓	訓	訓	訓

〈大意〉

- ① 紅花緑柳をむやみに摘み取らない (不要貪摘紅花緑柳)
- ② 紅花緑柳をむやみに摘み取らない (不貪摘花紅柳緑)
- ③ 紅花緑柳をむやみに摘み取らない (不貪摘花紅柳緑)
- ④ 紅花緑柳をむやみに摘み取らない (不貪摘花紅柳緑)
- ⑤ 紅花緑柳をむやみに摘み取らない (不貪摘花紅柳緑)
- ⑥ 紅花緑柳をむやみに摘み取らない (不貪摘花紅柳緑)

〈語釈〉

⑥ 意味は漢語と同じ。(义同汉语。)

第16段第3句

	用	顔	回	道	謔	浮	身
②	zy31	je35	xue35	to33	cue33	fo33	su35
	訓	借	借	音	音	音	音
③	zy31	je35	xue35	to33	cue33	fo33	su35
	訓	借	借	音	音	音	音

I. 山花碑注釈集成

④	zy31	je35	Xue35	to33	cue33	fo33	su35
	訓	借	借	音	音	音	音
⑤	yu3	yan2	hui2	duo3	xu1	bou3	chi2
	訓	借	借	音	音	訓	訓
⑥	ri3	yan2	hui2	duo3	xu1	bou3	shou2
	訓	借	借	音	音	訓	訓

〈大意〉

- ① 顔回の己に克ちたる厳格な精神をもつことによって（要有顔回克己的嚴格精神）
- ② 顔回の高尚な徳行を用いる（用顔回高尚徳行）
- ③ 顔回の高尚な徳行を用いる（用顔回高尚徳行）
- ④ 顔回の道をもって短い幻のような人生を捧げる（以顔回道許浮生）
- ⑤ 顔回の高尚な品德を学ぶ（学顔回高尚品德）
- ⑥ 顔回の道德精神を学ぶ（学顔回道徳精神）

〈語釈〉

- ④ 「讒」は、〔cue33〕と読み、「許（身を捧げる）」のこと。（“讒”读〔cue33〕，即“许”也。）
- ⑤ 「道讒」は徳行のこと。（道讒：徳行。）
- ⑥ 顔回の貧に安んじて道を楽しむ道德思想をもって自らを鍛錬するという意味。（意思是用顔回安贫乐道的道德思想磨练自己。）

第 16 段第 4 句

	得	堯	天	法	度
②	te135 借	jou31 借	xe55 訓	fa35 借	tu33 借
③	te135 借	jou31 借	xe55 訓	fa35 借	tu33 借
④	te135 借	jou31 借	Xe55 訓	fa35 借	tu33 借
⑤	dou1 *	yao4 借	tiao1 借	fa4 借	du2 借
⑥	dou1 *	yao2 借	hei4 訓	fa2 借	du4 借

〈大意〉

- ① 堯舜時代の道德基準を得ることができる（才能得到堯舜時代的法定度）
- ② 堯の世のような道德を得る（得堯天法定度）
- ③ 堯の世のような道德を得る（得堯天法定度）

④ 堯の世のような道徳を得る (得尧天法度)

⑤ 堯の世のような道徳を得る (得尧天法度)

⑥ 堯の世のような道徳を得る (得尧天法度)

〈語釈〉

⑥ 堯舜時代のような道徳を得られるということ。(就可以得到尧天舜日的法度。)

第17段第1句

	遊	翫	在	偽	佞	骨	石
②	jou35	kue33	tse55	ue35	p ^h iu55	kua44	tsou42
	借	訓(“観”)	借	音	自	訓	訓
③	jou35	kue33	tse55	ue35	p ^h iu55	kua44	tsou42
	借	訓(“観”)	借	音	自	訓	訓
④	jou35	ueɿ31	tse55	us35	k ^h o55	kua44	tsou42
	借	訓	借	音	自	訓	訓
⑤	you2	gue1	hen4	wei2	kuo4	gual	zhuo3
	借	訓(“観”)	*	音	自	訓	訓
⑥	you2	gue1	zou1	wei2	kou2	gual	zhuo3
	借	訓(“観”)	*	音	自	訓	訓

〈大意〉

① 屏風に囲まれたような険しい絶壁でも遊ぶ (不论游玩到围屏似的巉岩峭壁)

② 険しい絶壁で遊ぶ (游玩在峭壁巉岩)

③ 深い谷や絶壁で遊ぶ (游玩在深谷峭壁)

④ 断崖絶壁で遊び休む (游息于危崖绝巘)

⑤ 放光石を鑑賞する (刚刚赏过放光石)

⑥ 屏風のような絶壁で遊ぶ (游玩在屏山绝壁)

〈語釈〉

② 第1句の「偽佞骨石 [ue35 p^hiu55 kua44 tsou42]」と第2句の「威儀模草 [ue35 ji44 mo35 ts^hu33]」は、断崖絶壁と生い茂るチガヤを指す。『大理文化史稿』は范義田『雲南古代民族之史的分析』中の「山花碑」小注を引いて、「偽佞骨石」と「威儀模草」をとともに地名とするが、確かではない。(第一行“伪佞骨石 (ue35 p^hiu55 kua44 tsou42)” 和第二行的“威仪模草 [ue35 ji44 mo35 ts^hu33]”，指石壁巉崖和茂盛的茅草。《大理文化史稿》引范义田《云南古代民族之史的分析》一文中《山花碑》的碑词小注云：“伪佞骨石”，“威仪模草”均“地名”，不确)。

④ 「翫」は [ueɿ31] と読み、意味は「遊ぶ」。また「偽佞」は [ue35 k^ho55] と読み、その意味は「危険、険しい」。「骨石」は [kua44 tsou42] と読み、その意味は「岩肌が見えている」こと。「偽佞骨石」は断崖絶壁のことを言っている。(“翫”读 [ueɿ31]，意为“游玩”，“游耍”。又“伪

I. 山花碑注釈集成

佉 读 [ue35 k'ho55], 其意为“危险, 陡峭”; “骨石” 读 [kua44 tsou42], 其意为“石骨嶮嶮”。“佉骨石” 言危崖绝嶮也。

- ⑤ 「佉骨石」は放光石のことを指す。『聖元西山記』碑は楊龕を讃えて、「鷄足（山）では夏が終わると放光石が現れる」という。碑はまた「ある晴れた日に、洱海に石が湧き出た。祥雲がたなびき、これが仏教でいう大日遍照のことだとわかった。……力を入れずとも軽々と持ち帰ることが出来た。しばしば靈験を表し、ついに聖元寺西山の蘭若に安置された」という。これが放光石である。（佉骨石：指放光石。《聖元西山記》碑称杨龕：“入鸡足结夏而放光石现”，碑中又述：“一日天晴气朗，洱面涌出一石，祥云缭绕，乃知是佛中之大日遍照也。……惟连不用力而轻抱归家，屡显灵异，遂于圣元寺西西兰若以奠之”。所指放光石。）
- ⑥ 「佉佉」は、べー語で [wei2 kou2] と読み、屏風のこと。「骨石」は [gual zhuo3] と読み、断崖絶壁のこと。（佉佉：白语读 [wei2 kou2], 即围屏。骨石：白语读 [gual zhuo3], 即悬崖峭壁。）
- ⑦ 「佉」は [weiz] と読み、ひき臼の台のこと。「佉」は [kaol] と読み、溝（水路）のこと。「骨石」は絶壁のこと。

第17段第2句

	有	去	在	威	儀	模	草
②	la31 * (“又”)	pe44 訓	tu44 * (“得”)	ue35 音	ji44 音	mo35 音	ts'hu33 訓
③	la31 * (“又”)	pe44 訓	tu44 * (“得”)	ue35 音	ji44 音	mo35 音	ts'hu33 訓
④	la31 * (“又”)	Pe44 訓	tu44 * (“得”)	ue35 借 (“葳”)	jue31 借 (“葵”)	mo35 音	ts'hu33 訓
⑤	le3 * (“又”)	nge3 訓 (“行”, “走”)	pial * (“到”)	wei2 音	n11 音	mo2 音	cuo1 訓
⑥	li3 * (“又”)	nge3 訓 (“行”, “走”)	pial * (“到”)	wei2 音	ni1 音	mo2 音	cuo1 訓

〈大意〉

- ① 生い茂ったチガヤの中にも行く（不论走到茂密的茅草丛中）
- ② また生い茂ったチガヤの中にも行く（又到茂密茅草间）
- ③ また生い茂ったチガヤの中にも行く（又到茂密茅草间）
- ④ 生い茂ったチガヤの中を歩く（漫步在葳葵茅草）
- ⑤ また草むらに行き祖堂を探す（又去草丛觅祖堂）
- ⑥ またチガヤの草むらに行く（又去到茅草丛间）

〈語釈〉

- ④ 「威儀」は [ue35 jue31] と読み、意味は「生い茂る、繁茂する」。また「模草」は [mo35

ts^hu33]と読み,「チガヤ」のこと。(“威儀”读 [ue35 jue31], 意为“葳蕤, 茂盛”。又“模草”读 [mo35 ts^hu33], 即“茅草”。)

- ⑤ 「威儀」は, 草木が繁茂する意。「模草」は, チガヤのこと。荒れた草むらの中で先祖の祖堂を探すことを意味する。(威儀: 草木茂盛之意。模草: 即茅草。意即: 在荒草中寻找先世的祖堂。)
- ⑥ 「有去」は, ペー語で [li3 nge3]と読み, 行くこと。「威儀」は, 「葳蕤(生い茂る)」で, ペー語で [wei2 nil]と読み, 「草木が繁茂する」の意。「模草」は, ペー語で [mo2 cuol]と読み, チガヤのこと。(有去: 白语读 [li3 nge3], 即又去。威儀: 即“葳蕤”, 白语读 [wei2 nil], “草木繁茂”之意。模草: 白语读 [mo2 cuol], 即茅草。)
- ⑦ 「威儀」は [awei fin]と読み, 繁栄の意。「模」は墓, 「草」は場所の意。

第17段第3句

	風	化	經	千	古	万	代
②	fo33	xua44	tcu33	ts ^h i55	ku33	va33	te31
	借	借	借	訓	訓	訓	訓
③	fo33	xua44	tcu33	ts ^h i55	ku33	va33	te31
	借	借	借	訓	訓	訓	訓
④	fo33	Xua44	tcu33	ts ^h i55	ku33	Va33	te31
	借	借	借	訓	訓	訓	訓
⑤	fou1	hua1	jin1	qian1	gu1	vang2	dei4
	借	借	借	借	借	借	借
⑥	fou2	hua1	jin1	qian1	gu3	vang4	dei3
	借	借	借	借	借	借	借

〈大意〉

- ① 百年千年とはでやかな世界で過ごしても (但亲经过千百年的浮华世界)
- ② 千年万代を経た風采 (经千年万代风华)
- ③ 千年万代を経た風采 (经千年万代风华)
- ④ 徳化は千古万代を経る (风化经千古万代)
- ⑤ 風雨の中万代に伝わる (风雨之中传万代)
- ⑥ 徳化は千古万代を経る (风化经千古万代)

〈語釈〉

- ④ 「風化」は [fo33 xua44]と読み, 漢語の借用語。音, 意味は漢語と同じで, 「風俗, 教化」をいう。また「千」は [ts^hi55]と読み, 意味は漢語と同じ。(“风化”读 [fo33 xua44], 系汉语借词, 音, 义与汉语同; 言“风俗, 教化”。又“千”读 [ts^hi55], 意与汉语同。)
- ⑥ この(第3, 4句の)二つの句は楊黼の感慨の言葉で, 大理国の偉大な業績もすでに荒れ果て蔓草に覆われてしまったが, その徳化は万代千秋にながく伝わるだろう, という意味。(这两句

I. 山花碑注釈集成

是杨黼感概之词，意思是：尽管大理国的伟业丰功已付与荒烟蔓草，但它的风化应该是永垂万代千秋的。)

第 17 段第 4 句

	傳	万	代	千	古
②	ts ^h ue55	va33	te31	tɕ ^h i55	ku33
	訓	訓	訓	訓	訓
③	ts ^h ue55	va33	te31	tɕ ^h i55	ku33
	訓	訓	訓	訓	訓
④	ts ^h ue55	Va33	te31	tɕ ^h i55	ku33
	訓	訓	訓	訓	訓
⑤	chul4	vang2	dei4	qian1	gu3
	訓	借	借	借	借
⑥	chuil	vang4	dei3	qian1	gu3
	訓	借	借	借	借

〈大意〉

- ① この道理を万古千秋にまで伝えよう（也要把这些道理流传到万古千秋）
- ② 万古千年に伝える（传万古千年）
- ③ 万古千年に伝える（传万古千年）
- ④ 万古千年に伝える（传万古千年）
- ⑤ 万古千年に伝える（传万古千年）
- ⑥ 万古千年に伝える（传万古千年）

第 18 段第 1 句

	阿	部	遇	時	宜	心	歛
②	a31	pu31	ye33	tu44	ni31	ɕi35	xua35
	音	音	借	* (“得”)	借	訓	訓
③	a31	pu31	ye33	tu44	ni31	ɕi35	xua35
	音	音	借	* (“得”)	借	訓	訓
④	a31	pu31	ye33	tsi31	ni31	ɕi35	xua35
	音	音	借	訓	借	訓	訓
⑤	a3	bu3	yul	zhl3	nl4	xl3	hua2
	音	音	借	訓	借	訓	訓
⑥	a3	bu3	yal	zhi3	nil	xil	hua1
	音	音	借	訓	借	訓	訓

〈大意〉

- ① ある時は喜ばしい出来事に会う (有时遇到令人喜欢的事)
- ② 一歩歩けば嬉しいことに会う (一步遇上欢喜事)
- ③ 一歩歩けば嬉しいことに会う (一步遇上欢喜事)
- ④ ある時は心喜ぶ (一旦逢时心欢喜)
- ⑤ 一時の幸運に喜ぶ (一时幸运心欢喜)
- ⑥ よいことがあったからとて喜ぶな (莫交好运就欣喜)

〈語釈〉

- ② 「阿部 [a31 pu31]」の意味は「一歩」。(“阿部 [a31 pu31]”, 意思是“一步”)
- ④ 「阿部」は [a31 pu31] と読み, 意味は「一歩」, 「ひとたび」。また「遇時」は [ye33 ts31] と読み, 漢語の借用語。音と意味はともに漢語と同じで, 幸運に出会うこと。(“阿部”读 [a31 pu31], 意为“一步”, “一旦”。又“遇时”读 [ye33 ts31], 汉语借词, 音义均同汉语, 即逢好运也。)
- ⑤ 「阿部」はペー語で, 一歩, 一時の意。(阿部: 白语, 一步, 一时之意。)
- ⑥ 「阿部」は, ペー語で [a3 bu3] と読み, 「～するな」の意。「宜」は, 漢語の言葉で, [ni1] と読み, 「すぐに」の意。全句の大意は, 幸運に出会ったからとてすぐに浮かれて喜ぶな, ということ。(“阿部”, 白语读 [a3 bu3], “不要”之意: “宜”, 汉语词, 读 [ni1], “就”之意。全句大意是: 不要碰上好运就高兴得欢天喜地。)

第18段第2句

	阿	部	逢	劫	催	浪	禿
②	a31	pu31	ye33	tu44	tɕɛ135	na55	tʰu33
	音	音	* (“遇”)	* (“得”)	*	音	音
③	a31	pu31	ye33	tu44	tɕɛ135	na55	tʰu33
	音	音	* (“遇”)	* (“得”)	*	音	音
④	a31	pu31	tɕo35	tɕɛ135	tsʰue35	na55	tʰu33
	音	音	* (“交”)	借	音	音	音
⑤	a3	bu3	yu1	jie2	chul4	na4	tu1
	音	音	借	借	音	音	音
⑥	a3	bu3	yu1	jie2	cui4	na4	tu1
	音	音	借	借	音	音	音

〈大意〉

- ① ある時はまた苦難の道に出会う (有时又遇到艰难的路途)
- ② 一歩歩けばでこぼこ道に当たる (一步走上坎坷路)
- ③ 一歩歩けばでこぼこ道に当たる (一步走上坎坷路)
- ④ ある時は険しい道に阻まれる (一旦遭劫起难路)

I. 山花碑注釈集成

⑤ ひとたび不運になれば道はでこぼこになる (一度背时路坎坷)

⑥ 拒絶にあってもため息をつくな (莫碰钉子就嗟嘘)

〈語釈〉

② 「催浪秃 [tɕɛ135 na55 tʰu33]」の意味は、「険しい道, でこぼこ道」。(“催浪秃 [tɕɛ135 na55 tʰu33]”, 意思是“很难路, 坎坷路”)

④ 「逢劫」は [tɕo35 tɕɛ135] と読み, 「災難に遭う」の意。また「催浪秃」は [tsʰue35 na55 tʰu33] と読み, 「起難路 (険しい道)」の意がある。[tsʰue35] は「起」, [na55 tʰu33] は「難路」のこと。(“逢劫”读 [tɕo35 tɕɛ135], 意为“遭逢劫难”。又“催浪秃”读 [tsʰue35 na55 tʰu33], 有“起难路”之意, [tsʰue35] 起也, [na55 tʰu33] 难路也。)

⑤ 「逢劫」は, 不幸に遭う, 拒絶に遭うこと。「催浪秃」は, ペー語で, でこぼこ道の意味。(逢劫: 即遭不幸, 碰钉子。催浪秃: 白语, 坎坷路的意思。)

⑥ 「逢劫」は, ペー語で [yul jie2] と読み, 拒絶に遭うこと。「催浪秃」は, ペー語で [cui4 na4 tu1] と読み, ペー語で「あなたたち」の意味。「秃」は, ペー語では「道」のことを「途」といい, 「秃」は「途」の音仮名。全句の大意は, 拒絶にあっても立ち止まるな, ということ。(逢劫: 白语读作 [yul jie2], 即碰钉子。“催浪秃”, 白语读 [cui4 nu4 tu1]。浪, 白语“你们”的意思。“秃”, 白语叫“路”为途, “秃”是“途”的假借。全句大意是: 别在碰钉子后就停步不前。)

⑦ 「浪」は [naot] と読み, あなたの意。「秃」は悲観失意の意。

第 18 段第 3 句

	天	堂	是	荣	華	新	鮮
②	xe55	tʰa55	suw33	ju35	xua35	ɕu35	ɕɛ135
	訓	訓	訓	借	借	借	借
③	xe55	tʰa55	suw33	ju35	xua35	ɕui35	ɕɛ135
	訓	訓	訓	借	借	借	借
④	Xe55	tʰa55	Suw33	ju35	xua35	ɕu35	ɕɛ135
	訓	訓	訓	借	借	借	借
⑤	tian1	ta4	zhl4	yong2	hua2	xl4	shei2
	借	借	訓	借	借	訓	訓
⑥	tian1	ta4	zhi1	yong2	hua2	xil	shei2
	借	借	訓	借	借	訓	訓

〈大意〉

① 天国は榮華新鮮に見える (天堂看起来本事荣华新鲜)

② 天国には榮華があるとしても (纵然天堂有荣华)

③ 天国には榮華があるとしても (纵然天堂有荣华)

④ 天国は華麗であっても (天堂虽富丽堂华)

- ⑤ 天国は富貴榮華であつても (天堂虽荣华富贵)
 ⑥ 天国は榮華新鮮であつても (天堂虽荣华新鲜)

〈語釈〉

- ⑥ 「是」は、ペー語で [zhi1] と読む。全句の意味は漢語と同じ。(“是”, 白语读作 [zhi1]。全句的意思同汉语。)

第18段第4句

	漂	散	成	地	獄
②	p ^h io33	sa31	tseɪ31	tɕi31	ju33
	借	借	訓	訓	借
③	p ^h io33	sa31	tseɪ31	tɕi31	ju33
	借	借	訓	訓	借
④	p ^h io33	t ^h a55	tseɪ31	tɕi31	ju33
	借	*	訓	訓	借
⑤	pian4	sha3	zhe3	ji3	ngul
	借	借	訓	訓	訓
⑥	pian1	sha3	zhe3	ji3	ngul
	借	借	訓	訓	訓

〈大意〉

- ① たちまち散って地獄に変わる (但倏忽间有会飘散成地狱)
 ② 一瞬で地獄に変わる (转瞬成地狱)
 ③ 一瞬で地獄に変わる (转瞬成地狱)
 ④ 散って地獄に変わる (飘散成地狱)
 ⑤ 一瞬で地獄に変わる (转瞬成地狱)
 ⑥ 一瞬で地獄に変わる (片刻成地狱)

〈語釈〉

- ⑥ 「漂散」は、「片刻 (片時)」、「片晌 (短い時間)」の音仮名で、ペー語で [pian1 sha3] と読む。「地獄」は、ペー語で [ji3 ngul] (“漂散”, 乃 “片刻”, “片晌” (不多时间) 的假借, 白语读作 [pian1 sha3]。 “地獄”, 白语读作 [ji3 ngul]。)

第19段第1句

	分	数	哽	伴	土	成	金
①	fu35	fy44	ku33	ts ^h y31	t ^h u33	tseɪ21	tɕe35
	借	* (“份”)	自	* (“廻”)	借	訓	訓

I. 山花碑注釈集成

②	fu35	fy44	ku33	ts ^h y31	t ^h u 33	tse121	tce35
	借	* (“份”)	自	* (“処”)	借	訓	訓
③	Xu33	fy44	Ku33	mu33	t ^h u33	tse142	tce35
	借	* (“份”)	自	* (“処”)	借	訓	訓
④	fo2u	shu4	geu1	mo2	tu2	zhe3	ji2
	借	借	自	自	借	訓	訓
⑥	fou2	shu1	gou1	mo2	tu1	zhe3	ji2
	借	借	自※	自	借	訓	訓

※ 音声記号に誤りあり

〈大意〉

- ① 人は福に恵まれている時は土さえも金に変わる (人在福分厚时泥土也可以变成金子)
- ② 福に恵まれた時は土も金となる (福分厚时土成金)
- ③ 福に恵まれた時は土も金となる (福分厚时土成金)
- ④ 福に恵まれれば土も金となる (福份厚实土成金)
- ⑤ 福に恵まれた時は土も金となる (福分厚时土成金)
- ⑥ 福に恵まれれば土も金に変わる (福份厚实土成变金)

〈語釈〉

- ② 「哽侷」は、「厚い時」, 「厚い所」, 「(もし) 厚みがこの程度なら」の意がある。(哽侷: 有 “厚时”, “厚处”, “(如果) 厚到这样的程度” 之意。)
- ④ 「分数」は、「果報」の意。「哽」は「厚」, 「侷」は「~なら」である。「哽侷」の一語は、福が「厚ければ」土も金に変わることをいう。(分数: 意为 “福分”。哽: “厚” 也。侷: “方, 才” 也。“哽侷” 一词, 言福分 “厚时才能” 土变金。)
- ⑤ 「分数」は、果報を指す。「哽侷」は、ペー語で、厚いことを指す。(分数: 指福分。哽侷: 白语, 指厚实。)
- ⑥ 「分数」は、ペー語で、「果報」の意味。「哽侷」は、ペー語で「厚い」の意味。全句の意味は、福が厚ければ黄土も金に変わるということ。(分数: 白语, “福分” 的意思。哽侷: 白语 “厚实” 的意思。全句的意思是: 福分厚实黄土变成金。)
- ⑦ 「哽」は [gex] と読み、阻むこと。「侷」は [mux] と読み、否定形となる「不」。「哽侷」は、阻まれないという意。

第 19 段第 2 句

	時	運	車	舛	金	成	土
②	tsi21	ye33	ts ^h ei33	tsue31	tce35	tse121	t ^h u33
	訓	訓	音	借	訓	訓	借

③	tsi44	ye33	ts ^h ɛi33	tsue31	tɕe35	tseɪ21	t ^h u33
	訓	訓	音	借	訓	訓	借
④	tsi42	ye33	ts ^h ɛi33	kuɛi33	tɕe35	tseɪ42	t ^h u33
	訓	訓	音	* (“壞”)	訓	訓	借
⑤	zhi3	yuan1	chuo4	chun3	ji2	zhe2	tu1
	訓	訓	訓	借	訓	訓	借
⑥	zhi3	yuan2	chuo4	chun3	ji2	zhe3	tu1
	訓	訓	訓	借	訓	訓	借

〈大意〉

- ① しかし時運の悪い時は金も泥土に変わる (但时运坏时金子也会变成泥土)
- ② 悪い運が来た時は金も土となる (厄运来时金成土)
- ③ 悪い運が来た時は金も土となる (厄运来时金成土)
- ④ 時運が悪い時は金も土となる (时运差舛金成土)
- ⑤ 悪い運が来た時は金も土となる (厄运来时金成土)
- ⑥ 時運が悪い時は金も土となる (时运差舛金成土)

〈語釈〉

- ② 「車舛」の意味は、「車輪が逆に回ったら、運気が悪くなる」ということ。(车舛：意思是“车轮倒转，运气不好”。)
- ④ 「時運」は、漢語の借用語で、音、意味ともに同じ。「車舛」は、「乗舛 (誤りに乗る)」の意。(时运：系汉语借词，音义均同。车舛：即“乘舛”之意。)
- ⑥ 「車」は、ペー語音では「錯 (間違い)」に近い。「時運車舛」は、「時運が誤る」ということ。(“车”，白语音近“错”。“时运车舛”，即“时运错舛”。)
- ⑦ 「舛」は [zuiz] と読み、回るの意。

第19段第3句

	聚	散	侶	浮	雲	空	花
②	tɕue44	sa42	tsi55	tu21	tsi31	k ^h ɥ55	xuo35
	借	借	自	訓	訓	訓	訓
③	tɕue44	sa42	le31	pu21	ŋv31	k ^h ɥ55	xuo35
	借	借	自	訓	訓	訓	訓
④	tɕue44	sa42	y31	pu42	ŋv31	k ^h ɥ55	xuo35
	借	借	* (“像”)	訓	訓	訓	訓
⑤	ju3	sha3	zi2	po2u	vn3	k2	huo4
	借	借	自	訓	訓	訓	訓

I. 山花碑注釈集成

⑥	ju1	sha3	zil	po3	vu3	kv1	huo2
	借	借	自	訓	訓	訓	訓

〈大意〉

- ① 離合集散は浮雲や空花のようなものだ（聚散有如浮云空花一样）
- ② 離合集散は浮雲や空花のようなものだ（聚散如浮云空花）
- ③ 離合集散は浮雲や空花のようなものだ（聚散如浮云空花）
- ④ 離合集散は浮雲や空花のようなものだ（聚散似浮云空花）
- ⑤ 離合集散は浮雲や空花のようなものだ（聚散如浮云空花）
- ⑥ 離合集散は浮雲や空花のようなものだ（聚散似浮云空花）

〈語釈〉

- ④ 「偈」の意味は、「彷彿とさせる」、「似ている」。(偈：意为“仿佛”，“相似”。)
 - ⑥ 「偈」は、パー語の語気詞で、漢語の「呢」に当たる。(偈：白语语气词，相当于汉语的“呢”。)
 - ⑦ 「偈」は [ne] と読み、「～にすぎない」の意。
- ※ 「空花」は『般若経』などの仏典に多く使われる仏教用語。

第19段第4句

	實	阿	米	不	無
②	si35	a31	ɬ ^h ei55	pu31	mu33
	借	音	自	訓	訓
③	si35	a31	ɬ ^h ei55	pu31	mu33
	借	音	自	訓	訓
④	Si35	a31	ɬ ^h ei55	pu31	mu33
	借	音	自	訓	訓
⑤	shil	a1	nai1	bou3	mul
	借	音	自	訓	訓
⑥	shou1	a3	bei3	bou3	mul
	*	音	自	訓	訓

〈大意〉

- ① 最後には全てなくなる（到头来都是一无所有）
- ② 実は全てみな無である（实一切皆无）
- ③ 実は全てみな無である（实一切皆无）
- ④ 実は全てみな無である（实一切皆无）
- ⑤ 実は万事みな空である（实万事皆空）

⑥ 実はずべてみな無である (實一切皆無)

〈語釈〉

② 「阿芥」の意味は、「一切、全ての」。(阿芥：意思是“一切、所有的”。)

④ 「阿芥」の意味は、「一切」、「全ての」。(阿芥：意为“一切”，“所有的”。)

⑤ 「阿芥不無」は、ペー語で、何一つないことを指す。(阿芥不无：白语，指一无所有。)

⑥ 「阿芥」は、ペー語の感嘆詞。「不無」は、「何一つない」の意味。(阿芥：白语感叹词。不无：“一无所有”的意思。)

⑦ 「芥」(pie3) は [fvf] と読み、夢のこと。

第20段第1句

	有	之	識	景	上	頭	多
②	tsu33	na55	zu33	ci35	tou33	tu21	tce35
	訓	*	* (“認”)	* (“心”)	訓	訓	*
⑤	tsu	na55	zu33	ci35	tou33	tu21	tce35
	訓	*	* (“認”)	* (“心”)	訓	訓	*
④	tsu33	na55	Zu33	tɕu31	tou33	tu42	tce35
	訓	*	* (“認”)	借	訓	訓	*
⑤	zhen3	zhi1	shi2	ge1	den3	nuo1	ji2
	訓	音	音	訓	訓 (“頭”)	訓 (“上”)	*
⑥	zhou1	zhi1	shi3	ge1	gou3	nuo1	ji2
	*	音	音	訓	*	訓 (“上”)	*

〈大意〉

① 風景を楽しむことができる人は多いが (能够赏玩景色人多)

② 美しい景色を観賞する人は多い (赏玩欣赏良辰美景的人多)

③ 景色を観賞する人は多いが (赏玩景色人多)

④ 風光景物を知る者は多い (有之识景人众多)

⑤ 金と勢力のある時は友人が多い (有钱有势朋友多)

⑥ 知識のある者が以前は多かった (有知识的以前多)

〈語釈〉

④ 「識景」の意味は、「景色を観賞する」こと。「上頭」は、意味は漢語の「上頭」と近く、風光名物を鑑賞する「上頭」な人は多いということ。(识景：意为“赏景”。上头：意与汉语“上头”相近，在赏玩风光景物“上头”的人多。)

⑤ 「上頭多，上頭少」は、「頭上多，頭上少」とするべきである。両句の意味は、金や勢力がある時は、友はとても多いが、心を知るといえる友はとても少ない，ということ。(上头多，上头少：应读为头上多，头上少，两句的意思是当一个人处于有钱有势时，他的朋友就很多，但能够称

I. 山花碑注釈集成

得上知心朋友的就很少很少。)

- ⑥ 「之識」は、「知識」のこと。「景」は、ペー語で [ge1] と読み、語気詞。「上頭」の意味は、「以前」。(“之识”，即知识；“景”，白语读 [ge1]，语气词；“上头”，意即“从前”。)

第20段第2句

	但	于	知	心	上	頭	少
②	ti35	tsou42	zu33	ci35	tou33	tu21	cu33
	*	*	* (“認”)	訓	訓	訓	訓
③	ti35	tsou42	zu33	ci35	tou33	tu21	cu33
	*	*	* (“認”)	訓	訓	訓	訓
④	ti35	tsou42	Zu33	ci35	tou33	tu42	q33
	*	*	* (“認”)	訓	訓	訓	訓
⑤	dan4	yu2	shil	xin1	den3	nuo1	xiu1
	借	借	* (“識”)	借	訓	訓	訓
⑥	dan4	yu2	shil	xin1	do3u	nuo1	xiu1
	借	借	* (“識”)	借	訓	訓	訓

〈大意〉

- ① 風雲の変幻を知る者は少ない (而知道风云变幻的人少)
- ② 心を開ける人はいない (推心置腹人倒缺)
- ③ 心を開ける人はいない (推心置腹人倒缺)
- ④ しかし心を知る者はわずかである (但于知心能几人)
- ⑤ 真に心を知る者は希少である (真正知心却稀少)
- ⑥ しかし心を知る者はとても少ない (但是知心却很少)

〈語釈〉

- ④ 「但于」は、「但是 (しかし)」の意。(但于：即“但是”之意。)
- ⑥ 意味は漢語と同じ。(意同汉语。)

第20段第3句

	楊	鷗	我	祿	空	贊	空
②	ja42	fy33	go31	tsi55	k ^h y55	teɿ44	k ^h y55
	借	借	訓	自	訓	*	訓
③	ja42	fy33	go31	tsi55	k ^h y55	teɿ44	k ^h y55
	借	借	訓	自	訓	*	訓

④	ja42	fy33	ŋo31	tsi55	k ^h y55	ty44	k ^h y55
	借	借	訓	自	訓	*	訓
⑤	yang2	fu3	ngo3	zhi4	ku4	zal	ku4
	借	借	訓	自	訓	借	訓
⑥	yang2	fu3	ngo3	zhi4	ki4	da4	ki4
	借	借	訓	自	訓	借	訓

〈大意〉

- ① わたくし楊黼はここでも虚幻の心で虚幻の世界を讃える（我杨黼在这里也是用虚幻的心灵赞美虚幻的宇宙）
- ② わたくし楊黼は空^{くう}によって空^{くう}を讃える（杨黼我以空赞空）
- ③ わたくし楊黼は空^{くう}によって空^{くう}を讃える（杨黼我以空赞空）
- ④ わたくし楊黼は空^{くう}によって空^{くう}に対す（杨黼我乃空对空）
- ⑤ わたくし楊黼は空^{くう}によって空^{くう}を讃える（杨黼我以空赞空）
- ⑥ わたくし楊黼は空^{くう}によって空^{くう}を讃える（杨黼我以空赞空）

〈語釈〉

- ② 「隸」は、「用（～を用いて）、拿（～で）」の意味。舌と拿に従い、舌を使い話すことによって「用」と「拿」の意味を表している。（隸、表示“用、拿”的意思。从舌从拿，以用舌说话表示“用”和“拿”的意思。）
- ④ 「隸」の意味は、「拿（～で）」、「用（～を用いて）」。「賛」の意味は、「～に対して」。（隸：意为“拿”，“用”。賛：意为“对”。）
- ⑥ 「隸」は、白文の形声字で、語気詞。音はあるが意味はない。「空賛空」の意味は、空明な心で幻のような世界を賛美する、ということ。（隸：是白文的形声字，语气词，有声无意。空賛空：其意思是以空明的心灵赞美空幻的宇宙。）
- ⑦ 「隸」は [nei] と読み、「～と以て」の意。「賛」は [aod] と読む。

第20段第4句

	寄	天	涯	地	角
②	tɕi31	xe55	ky35	tɕi31	ky44
	訓	訓	*	訓	訓
③	tsi33	xe55	ky35	tɕi31	ky44
	訓	訓	*	訓	訓
④	tɕi31	xe55	ky35	tɕi31	ky44
	訓	訓	*	訓	訓

I. 山花碑注釈集成

⑤	pou3	hei4	bil	ji3	gvl
	訓	訓	* (“辺”)	訓	訓
⑥	pou3	hei4	yal	jil	yul
	訓	訓	借	訓	*

〈大意〉

- ① このようにこれを天のはて地のはてまで届けよう！（就这样把它寄到天涯地角吧！）
- ② 天のはて地のはてに届ける（寄天涯地角）
- ③ 天のはて地のはてに届ける（寄天涯地角）
- ④ 天のはて地のはてに届ける（寄天涯地角）
- ⑤ 天のはて地のはてに届ける（寄天涯地角）
- ⑥ 天のはて地のはてに届ける（寄天涯地角）

〈語釈〉

- ⑥ 意味はこの山花詞を天のはて地のはてに届け、長く伝えよう、ということ（意思就是把这篇山花词寄往天涯地角，使之传久传远。）

付録 山花碑拓本

詞記山花 詠卷洞鏡
 峇洞境鐫罷不飽 造佳工迹在阿初南北 鑿冠尺闕鎮青 謂曰元山 侵河巖鏡 傾河侵山 巖山崩透
 屏面西瀟十八溪 補束洱九曲 術藍殿閣 三十崇 崇若宮室 八百合 雲染點 蒼冬頭 白洱河 秋面 融五華
 伴你 劇宵充三燈 伴 你穿天 腹鳳 飛山 高鳳 鳳 樹 洞 龍 王 窟 夏 雲 佑 玉 局 山 腰 春 柳 垂 錦 江 道 途 四 季
 色花 阿 園 之 風 與 河 觸 之 跳 仙 人 出 克 以 廷 賜 姬 媼 一 官 伽 舞 發 雙 鬚 錦 出 名 香 與 農 無 價 室 奪 西 天 南
 國 趣 陶 占 束 土 北 關 稱 譜 秀 雀 既 景 鳴 舞 蟬 吟 聲 欲 金 烏 輒 散 天 上 星 玉 兔 打 開 宵 面 霧 黃 烏 白 鶴
 阿 雙 對 飛 客 啄 鍾 山 川 俊 秀 賢 才 灑 軋 地 戾 胎 聖 槿 喜 登 佳 守 道 結 卷 慶 生 死 病 老 盡 日 勤 砌 把 節
 操 連 夜 觀 恭 修 求 好 大 夫 在 處 裁 松 宿 子 種 鞠 竹 刀 丈 丘 燒 三 戒 香 菴 苑 中 點 五 更 燭 雲 窓 下 掛 於 萊
 經 有 公 案 語 錄 煙 煴 答 水 女 呼 着 直 指 心 宗 妙 付 器 苦 提 洗 磨 斷 知 音 迦 葉 做 師 主 或 國 家 覆 世 功 名 食
 朝 廷 尊 貴 爵 祿 慈 悲 治 理 衆 人 民 才 等 周 文 武 恭 承 敬 當 必 天 地 孝 養 干 子 孫 釋 儒 念 礼 不 絕 鐘 磬 聲 消 災
 難 長 福 行 仁 義 禮 上 不 輕 尤 惡 孽 逆 上 不 重 三 教 經 書 接 推 習 清 溪 水 阿 神 衣 尋 細 月 白 風 清 不 貧 摘 花
 紅 柳 綠 用 顏 面 道 誣 淨 身 得 先 天 法 度 遊 蹤 在 偶 佳 骨 石 有 去 在 威 儀 模 萃 風 化 紐 千 古 万 代 傳 万 代 千
 古 阿 部 遇 時 宜 心 歡 阿 部 逢 劫 催 浪 充 天 堂 是 榮 華 新 鮮 源 散 成 地 獄 分 數 便 伴 土 成 金 時 運 車 砧 金 成
 一 聚 散 倖 壽 雲 空 花 實 阿 來 不 無 有 七 識 景 土 頭 多 但 于 知 心 上 頭 少 揚 神 我 鋒 空 贊 空 寄 天 涯 地 角

(張錫祿・甲斐勝二主編「中国白族白文文献概説」 西師範大学出版社、二〇一一年より転載)

Ⅱ. ペー曲台本集成

1. 研究の目的と方法（遠藤耕太郎）……………(106)
 2. ペー曲の起源（飯島奨）……………(107)
 3. 「梁山伯と祝英台」とペー曲（富田美智江）……………(110)
 4. ペー曲台本集成（古代の会編）……………(113)
 - 4-1. 「柳蔭記」—趙丕鼎本〔ア〕……………(114)
 - 4-2. 「柳蔭記」—楊興庭本……………(126)
 - 4-3. 「柳蔭記」—楊正華本……………(136)
 - 4-4. 「柳蔭記」—釈読本（趙丕鼎本〔イ〕）……………(146)
 - 4-5. 「柳蔭記」—楊漢本・趙丕鼎本〔ウ〕……………(150)
 - 4-6. 「月里桂花」—蘇貴本・剣川県芸文志本……………(155)
 5. 歌い手へのインタビュー集
（遠藤耕太郎・岡部隆志・富田美智江）……………(164)
 - 5-1. 2011年インタビュー集……………(164)
 - 5-2. 2012年インタビュー集……………(173)
- 付録
1. 英台宝巻（1906年版，早稲田大学図書館蔵）……………(183)
 2. ペー曲台本の音仮名率（富田美智江）……………(185)

1. 研究の目的と方法

ペー曲（「大本曲」、 「本子曲」）は、漢民族の宝巻や戯曲がペー族居住地域に流入し、ペー族化した語り芸であるが、その成立は不明な点が多く、唐代、宋代、明代の各説が主張されている。現存するもっとも古い台本は、清・光緒年間（1875～1908年）に書写された『柳蔭記』（漢民族の梁祝伝説を題材とした語り芸）、『陳世美不認前妻』などである。

「大本曲」は、「大きな台本（「本子」）の曲」である。一本の台本は演唱に2～3時間を要する長大なもので、現在、148話が確認されている。「大本曲」の演唱の仕方は、3つの流派—洱海西岸の大理古城以北の「北腔」、古城南部の「南腔」、洱海東岸の「海東腔」—に分けられるが、なかでも洱海西岸の「北腔」と「南腔」が中心をなしている。演唱は漢民族伝来の語り芸のそれを踏襲し、「詩」、「白文（散文）」、「唱詞」の部分からなる。「詩」、「白文」は全くの漢語で語られ、「唱詞」のみがペー語によって歌われるが、これに対応して文字テキスト（台本）も、前者は漢文であるが、後者は漢字を用いたペー語表記—基本的には借字・訓字・音仮名を組み合わせた訓字主体表記—によって記される。

一方、大理の周縁に位置する劍川の「本子曲」は、「大本曲」に比べ演目数も少なく、一話の量もあらすじのように短いものが多い。また、演唱の仕方も、「詩」、「白文（散文）」はなく、すべて「唱詞」からなり、そのほとんどが歌会（歌垣）などで用いられる曲調—ペー族調—で歌われる。台本の表記は音仮名が極端に多い音仮名中心表記によって記される。また、石宝山の歌垣（歌会）などで掛け合われる歌の一部にも組み込まれたり、問答形式で歌われる場合があるなど、文字を介さずに流通している口誦の歌との交流も大きい。

洱海周辺のペー族の語り芸「大本曲」の文字テキスト（台本）は基本的に訓字主体表記で記され、「本子曲」のそれは音仮名主体表記で記されている。また、「大本曲」の中にあっても、その中心部（洱海西岸の北腔、南腔）では訓字表記が多く、その周縁に位置する洱海東岸（海東腔）では訓字主体表記とはいいながら音仮名使用率がかなり高い。さらに周縁に位置する劍川の「本子曲」は音仮名主体表記である。

こうした表記のありようは、すべて一字一音の音仮名で表記された記紀歌謡の表記、またその編纂資料となった古事記の原資料の表記、古事記の訓注をはじめとする音仮名による施注、あるいは人麻呂歌集略体歌・非略体歌・作歌と一字一音表記に近い万葉集第三期以降の表記との関わり等の日本文学の諸問題を考えるうえでも有効なモデルになると思われる。

ペー曲そのものの書記法を中心に資料を整理した研究は、張錫祿・甲斐勝二主編『中国白族白文文献釈読』広西師範大学出版社、2011年がその到達点を示している。同書には「梁山伯与祝英台（中集）」（『柳蔭記』とも）が収められているが、これは洱海西岸の北腔の中心的歌い手趙丕鼎氏の所蔵する台本を底本として国際音声記号と中国語訳を施したものである。その価値は十分に認められるが、ただ、述べてきたような研究目的からすると、未だ同書のレベルでは不十分である。つまり、趙丕鼎氏所蔵の台本と、洱海西岸の南腔の歌い手楊興庭氏の台本、さらに楊興庭氏の父であり

師匠であった楊漢氏の台本、洱海東岸の楊正華氏の台本はそれぞれ、異なる部分があり、また、劍川の台本曲はほとんど一字一音の音仮名で記されたり、台本を用いずに歌掛けの一部として歌われたりと、さまざまな差異があるのである。こうした差異に注目しながら、書記法と口頭で歌われる歌の関係を考察する必要があるのである。

そこで本研究は、『中国白族白文文献釈読』所収「梁山伯与祝英台（中集）」（趙丕鼎氏所蔵「柳蔭記〔イ〕」）、「二、山伯染病思英台 英台開單救山伯（山伯病となり英台を思い 英台処方箋を書き山伯を救う）」の一部を選択し、これに対応する数種のテキストを採集した。その結果、既に刊行されているテキストである楊漢氏旧蔵「柳蔭記」、趙丕鼎氏所蔵「柳蔭記〔ウ〕」の他に、2011年のフィールドワークによって、趙丕鼎氏所蔵「柳蔭記〔ア〕」、楊興庭氏所蔵「柳蔭記」、楊正華氏所蔵「柳蔭記」、劍川本子曲「月里桂花」を採集することができた。（なお、2012年フィールドワークにおいて、劍川本子曲「柳蔭記」のテキストを採集できたが、本報告書には時間的余裕がなく掲載できなかった。）次にこれらのテキストを集成した「ペー曲台本集成」を作成、その際、すべての文字がどのように発音されるのか（訓なのか音仮名なのか等の読写方式）を付記した。

（遠藤）

2. ペー曲の起源—宝巻との関係について—

大本曲とは大理周辺のペー族（白族）の口承文学で、歌と語りを含む。劍川地域では本子曲ともいう。

大本曲には地域や歌い手ごとに「曲本」と呼ばれるテキストがあり、これは漢字を用いて記録した白語の歌と語りの台本である。大本曲は各種の祭事で披露される。主に一人が歌と語りを担当し、もう一人が三線等の伴奏楽器を担当する。歌詞はペー語と漢語とが混じり合い、故に漢字で記載されてあっても、場合によっては、発音はペー語の発音で読みあげたり歌ったりする。

大本曲の起源は、ペー族土着の歌文化、例えば、現在石宝山歌会等で歌われるような男女の歌掛けや、或いは、明代にまで遡る『山花碑』のような7・7・7・5音のリズムをもつ韻文体と、漢民族の文化、例えば、唐代・明代に遡る「変文」「宝巻」などの仏教関係の説唱（語りと歌）文芸とが出会い溶け合う中で発展してきたものである。

従って、大本曲の起源を考える場合には、漢族文化の影響をたどる道筋と、ペー族土着の文化をたどる道筋とがあることになる。前者は、特に仏教の影響を強く受けており、後者は、無文字文化である口承文化の影響を受けていると言える。前者の場合、仏教だけでなく、そこから派生して発展した漢民族の様々な説唱文芸、戯曲や地方の語り芸なども含まれる。ここでは前者の、特に宝巻と大本曲との関わりについて述べてみたい。

宝巻とは、説唱文芸の一つで「善男信女の聴衆を前にしての『宣巻』とよばれる実際の演唱を予想して作られるもの」（澤田瑞穂『中国の庶民文藝—歌謡・説唱・演劇—』東方書店、1986年）であり、唐代の俗講に使用された変文、つまり、文字の読み書きができない民衆のために仏教の教えをやさしく説く際に用いられた語りものの文体の流れをもつ。

II. ペー曲台本集成

宝巻発生は明代初期と考えられる。この「宝巻」という名称は、澤田瑞穂によれば「これはほぼ明代中期以後に漸次に固まってきた名称らしく、当初からすべてが宝巻と称して行われたものではない」らしい（澤田瑞穂『増補 宝巻の研究』国書刊行会、1975年）。

澤田同書によれば、明代の宣講宝巻、いわゆる宣巻の形式は「はじめに焼香して十万諸仏の来臨を奉請し、念仏唱和し、懺主が出て表白し、五字句・七字句の偈（※引用者注…仏の教えをほめたたえる韻文体の経文で、多くは読経の最後の唱える）を念ずる」というもので、これが「古い宝巻の典型」であるという。このような宗教的な形式は大本曲にも見られ、例えば、演唱前に香炉壇を設置したり線香を立てたり、また花を供えたりする（董秀団『白族大本曲研究』中国社会科学出版社、2011年）。

宝巻の内容は、仏教や道教の教義を説いたもの、主人公の修行と成仏の因縁を語るもの、各種民間宗派の布教用のもの、小説や民間伝承などの物語を題材にしたものなどがある。澤田前掲書は様式の面から五種、つまり〈科儀巻／説理巻／叙事巻／唱曲巻／雑巻〉にわけているが、例えば、叙事巻と唱曲巻を見てみると、叙事巻は「神仏仙真の本生本録をはじめ、民間の一善男・一善女人が、現世の苦難を克服して成仏昇仙するまでの経緯を叙した記伝的・小説的結構をもつ作品」であり、孟姜女や祝英台などの民間の説話を題材としたものはこの種に含まれる。そして、唱曲巻は「宝巻はその構成上、散文と韻文の交互使用を本格とするが、中には歌曲だけから成る和讃式のものも見られ」ている。

宝巻の歴史の変遷であるが、明代以降は盛行時代と沈静時代を経るが、清朝による民間の邪教一掃と、それに伴う清朝の方針を説く教化主義に宝巻は影響を受け、次第に宝巻は宗教性が薄れ通俗性と道徳性を増していく。これを境として、それよりも以前を古宝巻時代、以後を新宝巻時代という。新宝巻時代からは、内容は宗教的なものから文学的なものへと移っていき、民間の伝説なども宝巻へ取り込まれていく。それにより、宝巻を説く宣巻の職業化・芸能化が進むことになるが、これは、大本曲の歌い手である歌師の専門性や芸能性と関わるであろう。

『珠塔宝巻』は、弾詞から改作されたものであり、民国期に入り作られた宝巻の中には、『絵図姉妹花宝巻』のように当時一世を風靡した映画を題材に作られたものもある。また、元、明代には宝巻は神仙故事や民間故事、或いは歴史故事の類にも広がった。

ちなみに、弾詞とは、明、清時代に流行した口承文芸の一つで、主に揚州、蘇州、長沙、桂林などの南方で流行し、「南詞」ともいわれる。三弦、琵琶などで弾き語りされ、曲調や歌い方には地方ごとに特徴があり、各地の方言で歌われる。

宝巻の形式は、主に三種の文体によって成り立っている。古宝巻を例にとれば、①講説の部分である散文、②節をつけて吟じ、七言・十言で、偈も含む韻文、そして、③曲調名をもつ曲子からなる。例えば、古宝巻の場合、散文は多くは冒頭にあり、節は伴わずに講説する部分であり、これを「白文」ともいう。「蓋聞…」などの言葉で始まるが、例えば『銷釈大乘宝巻』では「蓋聞大藏教中。參出一歩功案。百万行門由人所參」とある。偈を含む韻文は同じく同宝巻では「玄妙無生話 絲毫全不罣 參透早明心 撒手無牽掛」とある。

このような宝巻の文体形式は、大本曲の文体形式に近い。張錫祿・甲斐勝二主編『中国白族白文文献釈読』広西師範大学出版社、2011年所収「梁山伯与祝英台」から大本曲の形式を見てみよう。「一、忆旧谊山伯访友 吐真情英台食言」の冒頭の形式は下記の通りである。

山伯【詩】：三年读书在学堂，
每日留心做文章。
若凡手折月中桂，
一举成名天下扬。

【白】：小生梁山伯是也。祖籍江南苏州府卧龙岗人氏。父亲去世得早，多蒙母亲抚养，供给读书。上无兄下无弟。在杭州读书三年，与祝英台贤弟情投意合，我二人结拜为生死之交。如今离开学堂不觉半载有余。思想起来，好不叹伤人呐。

【唱】：1 自从往学堂回归，
2 咀闷本双心闷米。
3 英台双我话本声，
4 未知是实须。

ここには三種の文体があり、まず「詩」とされる七言詩の韻文、次に「白」とされる語りの散文、そして「唱」とされる7・7・7・5音の音数律で繰り返される歌の詞章がある。「詩」は演目の冒頭にあらわれるのが特徴である。『中国白族白文文献釈読』所収の大本曲、例えば「火烧磨房」でも、

【詩】：人到中年万事休，
七句来人能几秋。
记得少年骑竹马，
看看又是包头翁。

七言詩の形式が見られ、この「詩」のあとに「白」とされる語りがはいるのが大本曲の形式である。

また、表現方法の形式として、歌や語り以外に、「誦」というものもあり、例えば『中国白族白文文献釈読』所収「火烧磨房」の末尾には以下のような「誦」が付く。

【誦】：团圆团圆真团圆，荣华富贵两双全。做人今日团圆后，平安过百年。

「誦」とあるので、旋律にのせて歌うのではなく、声に出して唱えるというのに近いと思うが、

II. ペー曲台本集成

7・7・7・5音の音数律になっているので、「唱」の詞章に見られる音数律と同じように見える。

(飯島)

3. 「梁山伯と祝英台」とペー曲

「梁山伯と祝英台」(以下「梁祝」と略す)は、「孟姜女」「牛郎織女」「白蛇伝」と並ぶ中国四大民間説話の一つである。その伝承の淵源は古く、宋・張律『乾道四明図経』に唐・梁載言『十道四蕃志』を引き「義婦祝英台、梁山伯と冢を同じくす(義婦祝英台与梁山伯同冢)」とあるのが、現在確認できる中では最も早い史料である。明・張時徹『嘉靖寧波府志』は、その伝説を次のように語る。

晋代(4世紀)に梁山伯、字は処仁という人がおり、会稽に住んでいた。若い時に遊学し、その途中祝氏の子と会い、共に学んだ。三年して祝が先に帰り、その二年後に山伯が帰った。(祝の故郷である)上虞を訪れて初めて、祝が「英台」という名前の女子であることを知った。山伯は戻って父母に(英台に)求婚したいと告げたが、その時英台はすでに鄞城の馬氏に嫁ぐことが決まっており、(英台との結婚を)実現することができなかった。山伯はそれから鄞県の県令となったが、病気となり亡くなってしまった。彼の遺言により山伯は鄞城の西の清道源に葬られた。翌年、祝は馬氏に嫁いだが、舟が墓所を通り過ぎようとする時、風で波だつて前へ進むことができなかった。英台はそこに山伯の墓があると聞き、冢の前に行つて哀しみ嘆くと、地面が裂け英台はそこに飲み込まれた。馬は役所にこのことを届け、この話は朝廷にも伝わった。丞相の謝安は奏上して(その墓を)「義婦冢」とした。

梁祝説話の骨子は、①祝英台が女子であることを隠し、梁山伯とともに学ぶ、②帰郷した英台を山伯が訪ね、そこで英台が女子であることを知る、③相思相愛となるが、英台にはすでに親が決めた許婚があり、結婚できない、④山伯が死に、英台が山伯の墓に詣でると、地面が割れて英台は墓の中に飛び込む、というのだが、戯曲や宝巻などの題材として多く用いられていく過程で、話の内容も多種多様に展開していった。例えば『英台宝巻』(早稲田大学風陵文庫所蔵)では、山伯と英台は冥府の閻王の裁きで還魂し、めでたく結婚、念仏修行につとめたので夫妻は百歳の寿を保ち、子孫も高官となって繁栄したというように、二人の死後の話が新たに展開していくものも少なくない。

梁祝を題材とした戯曲の題名は「英台記」「還魂記」「同窓記」など様々あり、「柳蔭記」というのもその一つである。「柳蔭記」は四川省一帯の地方劇である川劇の代表的な演目でもあり、1953年にはその川劇の『柳蔭記』が馬彦祥によって京劇用に改編され演じられた。

四川の南に境を接する雲南地方の梁祝説話が『柳蔭記』と題されることが多いのは、この四川の川劇が影響している可能性も考えられる。本書で資料としてとりあげたペー族大本曲台本の中でも、楊正華本と楊興廷本は表紙に「柳蔭記」と書かれている他、雲南文山のチワン族などでも『柳蔭

記』と称されている。

1952年の第一回全国戯曲観摩大会で上演された川劇『柳蔭記』全十場は、以下のような内容となっている。

- 第一場：英台別家（祝英台が男装して杭州に遊学する決意を固める）
- 第二場：柳蔭結拜（杭州への途上で梁山伯と出会い、義兄弟の契りを交わす）
- 第三場：書館談心（杭州にて山伯と共に学ぶ）
- 第四場：山伯送行（帰郷する英台を山伯が送る）
- 第五場：説媒許親（帰郷した英台は、親に許婚を決められる）
- 第六場：英台思兄（英台が山伯を思う）
- 第七場：祝荘訪友（山伯が祝荘を訪れ、そこで英台が女子であったことを知る）
- 第八場：四九求方（英台を思い病となった山伯を救うため、山伯の従者の四九が英台に薬を求め
る）
- 第九場：馬家逼婚（馬家に嫁がされる途上、山伯の死を知る）
- 第十場：祭墳化鳥（英台が墓前で山伯を弔うと、墓が割れ、英台はその中に飛び込む。二人の魂
は鳥となって飛ぶ）

ペー曲の梁祝も同様ではなく、大本曲の中でさえ、北腔の趙丕鼎本、南腔の楊興庭本、海東腔の楊正華本でかなりの違いがあり、さらには楊興庭本と、楊興庭の父の楊漢本とでさえ違いがあることは、後掲の資料の通りである。そういう意味では梁祝は古典でありながら定型に縛られず、なお変化し続けている説話であるといえる。

そうした大小の差違が存在するが、ペー曲梁祝の一例として、本書で底本としている『白族白文文献釈読』（以下『釈読』と略す）所収の『梁山伯与祝英台』中集のあらすじを見てみたい。中集は、遊学から帰郷した英台を山伯が訪ねるところから始まる。（ちなみに、『釈読』所収の梁祝は趙丕鼎本を元にしたとされているが、現在趙丕鼎が所持している台本と若干の文字の異同が見られる。）

- 一：憶旧誼山伯訪友，吐真情英台食言（英台の妹を娶りに来てくれという英台の言葉を思い起こした山伯は英台を訪ねる。そこで英台こそが女子と知り、約束通り英台と結婚しようと山伯は喜ぶが、英台はすでに親の決めた許婚があり、山伯とは結婚できないと約束を違える。）
- 二：山伯染病思英台，英台開單救山伯（家へと戻った山伯は、英台への思いを断ち切れず病となる。そのことを知った英台は山伯を救うための薬の処方箋を書く。）
- 三：抑鬱傷情赴地府，梁母痛失独兒子（山伯は英台と結ばれないという悲しみからあの世へと旅立ち、山伯の母は一人息子を失い嘆き悲しむ。）

II. ペー曲台本集成

- 四：英台奔喪尽忠貞，声泪吊孝吟祭文（英台は梁家に行き、祭文を読み上げ涙ながらに山伯を弔う。）
- 五：魂魄夜訪心不甘，深情日思意難平（山伯の魂が英台の夢枕に立ち、その苦しみを訴える。）
- 六：擺闊迎親成泡影，梁祝化蝶天上飛（馬家は盛大な花嫁行列で英台を迎えに来る。英台は嫁ぐ前に山伯の墓参りを願い出るが、許されない。）
- 七：梁祝化蝶永相随，天地共憫留万世（梁祝は蝶となって永遠に寄り添い、天地は彼らを憐れんでこのことを万世に伝える。）

これを見ると、『釈読』梁祝・中集の内容は、前述の川劇の第七場から第十場に相当する。

本書は資料として特に英台が処方箋を書くシーンを取り上げた。川劇では第八場「四九求方」に相当する。ただ、1951年に華東戯曲研究院越劇実験劇団が北京で公演した梁祝は全十三場だが、「四九求方」に相当する場面はないなど、必ずしも全ての梁祝で語られるシーンではないようである。英台の処方箋は、東海竜王の角などの薬剤十種を要する。具体的な薬剤は台本により差異があるが、基本的にはとうてい入手不可能なものばかりが並ぶ。

梁祝は漢族から流伝してきた説話であることに間違いない。しかし、ところどころペー族の伝統に沿った内容に変化している個所がある。特に英台が山伯の墓前で祭文を歌うシーンは、そこだけ曲調や歌い方が変化する。それは、実際のペー族の葬式で歌われる祭文と同じ形式であるという。

最後に余談だが、英台の侍女の名は「銀心」であったり「人心」であったりする。例えば、『釈読』は「銀心」だが、京劇『柳蔭記』や四川遂寧蓮溪一帯に流伝している『柳蔭記』（周静書主編『梁祝文化大観・故事歌謡卷』中華書局、1999年所収）、四川花鼓の『梁山伯祝英台新歌書全本』（銭南楊『梁祝戯劇輯存』中華書局、2009年所収）などでは「人心」となっている。艾青「歌劇梁山伯与祝英台—談越劇『梁山伯与祝英台』・川劇『柳蔭記』」（周静書主編『梁祝文化大観・學術論文卷』中華書局、2000年所収）によると、川劇『柳蔭記』の台本では「銀心」となっていたようであるから、「銀心」というのがペー曲だけというわけでは決していない。しかしペー曲台本では、「人」の意味を表す音仮名として「良」字がよく使われる。これは「銀」の略字で、「銀」はペー語の「人」の音に近いためにそうした置き換えが起ったらしい。つまりペー語では「銀」と「人」が非常に近い関係を持っている。梁祝の「銀心」「人心」問題と直接的な関係があるとは思えないが、不思議な偶然ではある。

（富田）

4. ペー曲台本集成

凡例

- 一、音声記号は国際音声記号によって示した。声調の33は中平調、42は高降調（緊喉）、31は中降調、55は高平調、35は中声調、44は次高平調（緊喉）、21は次低平調（緊喉）である。
- 二、読写方式は、以下の4種類を基本として分類した。（詳細は本書「I. 山花碑注釈集成」1-4（12ページ）を参照のこと。）

- ①音仮名…漢字の音によってペー語の意味を表す。（万葉仮名のような用法）
- ②訓字…漢字の意味に従ってペー語の音で読む。（訓読み）
- ③借詞（借字）…漢字の意味・音を直接漢字から借りる。（音読み）
- ④新字・自造字…漢字の筆画を増減して新たなペー文字を作る。（国字）

資料においては、音仮名を「音」、訓字を「訓」、借詞（借字）を「借」、新字・自造字を「自」と略した。

また、漢字の意味・音に関係なく字形のみを借りてペー語を表す特殊な読みを「特定意義字」（「特」と略す）とした。例えば「丘」によって、「～のなか」([xu³¹])を表す例などがこれにあたる。

- 三、4-1 趙丕鼎本「柳蔭記」、4-2 楊興庭本「柳蔭記」、4-3 楊正華本「柳蔭記」及び4-6 蘇貴本「月里桂花」については、相当箇所の手本の写真を付した。また、演唱者、調査者、担当については各資料ごとに示した。

4-1. 「柳蔭記」—趙丕鼎本〔ア〕



「柳蔭記」を演唱する趙丕鼎氏（左）

【現地調査】

演唱：趙丕鼎（1942年生，大理市喜州鎮作邑村。1958年大理文芸幹校卒業）。

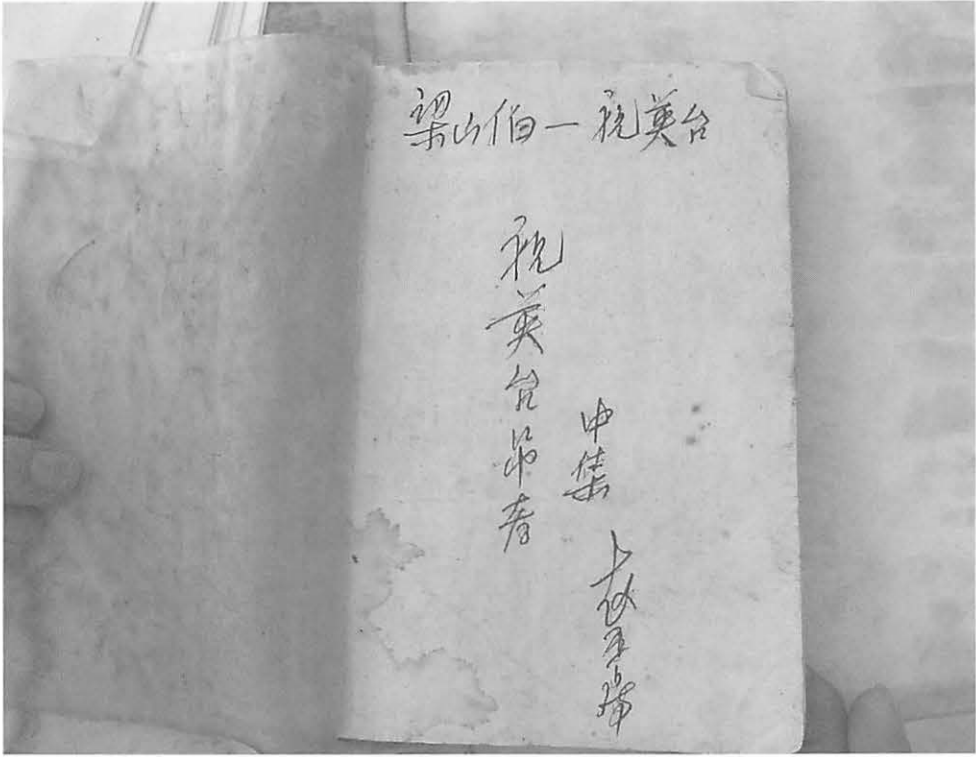
調査：富田美智江・岡部隆志・遠藤耕太郎・張錫祿・張正軍（通訳），2011年8月12日，於大理市喜州鎮作邑村趙丕鼎宅

【資料作成】

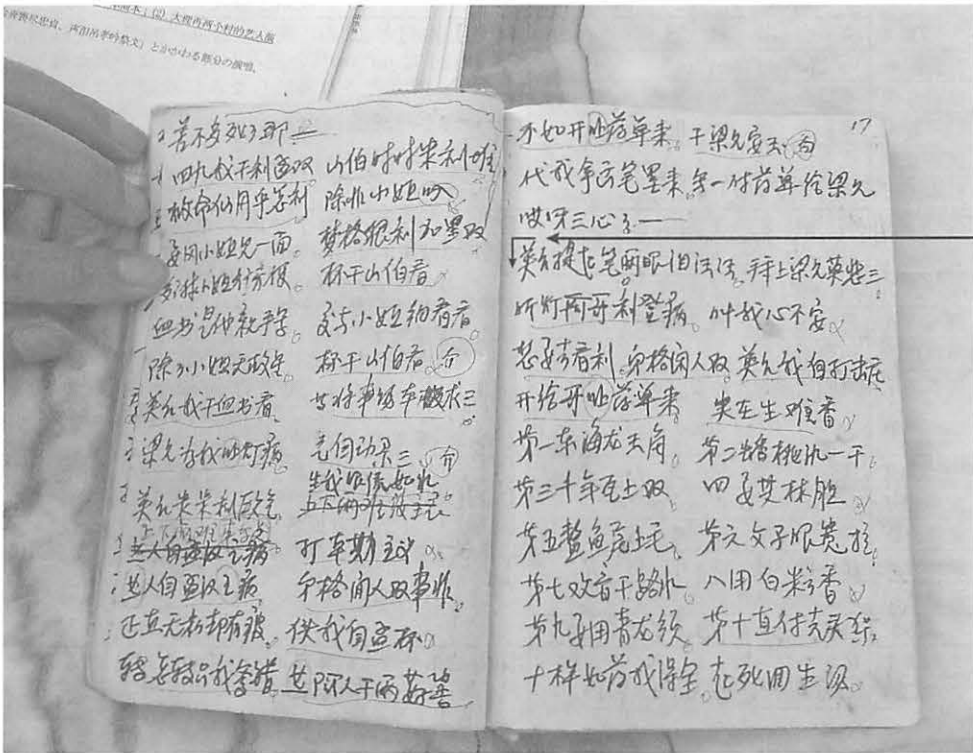
翻字・音声記号転写・漢語訳・読写方式：王鋒（中国社会科学院民族研究所），李雪巧（中央民族大学少数民族語言文学系2009級）

日本語訳：富田美智江

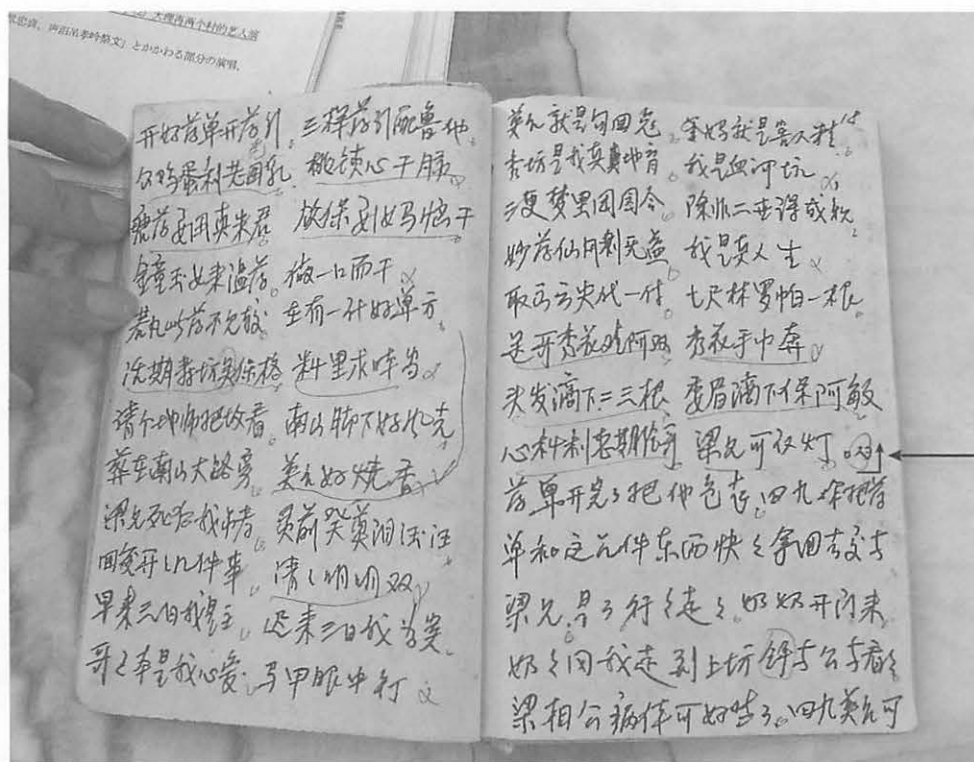
注釈・備注：王鋒・富田美智江・遠藤耕太郎



趙丕鼎氏所藏「柳蔭記」



II. ペー曲台本集成



序号	原文・音声記号・訳文	注釈・備注	
1.1	ペー文原文	英台提起笔	【富田】本句と2.3の「英台」はju ³⁵ the ⁵⁵ と読み訓、9.4と12.1はju ⁴⁴ the ⁴² と読み、本句とは声調が違うのみだが、借字とされる。ちなみに釈読ではju ³³ the ⁴² と読む。
	音声記号	ju ³⁵ the ⁵⁵ thi ⁴² tchi ³¹ pi ³⁵	
	漢語直訳	英台提起笔	
	読写方式	訓 借 借 借	
	漢語意識	英台提起笔。	
	日本語訳	英台は筆を取り上げた。	
1.2	ペー文原文	两眼泪汪汪	【遠藤】「眼泪」を借字で読んでいるが、楊正華本(1.2)では訓字で[mi ⁴² ci ⁴²]と読んでいる。この差は、この一句が借字を中心とする漢文脈か、訓字や音仮名を中心とする白語文脈かによっているだろう。「兩」はここでは借字であり、楊正華本は訓[ko ³³]になっている。その訓を決定していくのは、楊正華本の量詞「江」[ky ³⁵]（涙がふた筋といったときの「筋」）であるように思われる。ここは白語文脈に誘う量詞がないために、漢文脈、借字となった。
	音声記号	lia ³¹ je ³¹ lue ⁵⁵ ua ⁴⁴ ua ⁴⁴	
	漢語直訳	两眼泪汪汪	
	読写方式	借 借 借 借 借	
	漢語意識	两眼泪汪汪。	
	日本語訳	両眼に涙をためながら、	
1.3	ペー文原文	拜上梁兄莫悲三	【王】「三」应为「伤」。(「三」は「傷」とすべき。) 【富田】原文「悲三」は釈読では「悲伤[sə ³³ c u ³³]」。 【遠藤】「三」だけ音仮名を使ったのは、インタビューにあったように、画数の少ない字を使うという意識によるか。
	音声記号	pe ⁵⁵ sa ⁵⁵ lia ⁴² cou ⁴⁴ mo ³⁵ pe ⁴⁴ sa ⁴⁴	
	漢語直訳	拜上梁兄莫悲伤	
	読写方式	借 借 借 借 借 借 音	
	漢語意識	拜上梁兄莫悲伤。	
	日本語訳	拜啓梁兄 悲しまないでください。	
1.4	ペー文原文	听灯阿哥利登病。	【王】白語一些土語鼻音n-, n-和边音l-混读, 因此此处“利”表示ni ⁵⁵ 。(白語のある土着語は鼻音のn-,
	音声記号	tcher ⁵⁵ tu ⁴⁴ a ³¹ ko ⁴⁴ ni ⁵⁵ tu ⁴⁴ pei ³¹	

	漢語直訳	听 得 阿 哥 您 得 病	<p>n-と側音のl-とが混同するため、この「利」はni⁵⁵と表す。)</p> <p>【富田】原文「灯」は釈読では「到」。</p> <p>【遠藤】[tu⁴⁴]は「～できる」というくらの付属語。5.3では借字で「得」と表記している。こちらが白語文脈。5.3が漢文脈である。漢文脈においては付属語も借字で読まれるが、付属語を音仮名で記すことがこの一句を白語文脈であることを指示し、その結果、直前の「听」が訓読みされるということになる。楊興庭本(7.3)にも「登」は見られ、それが直前の動詞(「生」)が音仮名であることを指示している。</p> <p>[tu⁴⁴]は、この一句のなかで「灯」、「登」両様に音仮名として記される。変え字法の意識もあるだろう。変え字が白語文脈を指示しているともいえる。</p> <p>「利」が二人称の尊称(您)の音仮名として使われるのは、洱海西岸地域に広く共通する用法であり、東岸地域の楊正華本(2.1)は、「腦」[nɔ³¹]で二人称を表し、尊称は用いない。地域の方言差ということだが、これは漢語の概念が白語(二人称尊称に[ni⁵⁵])を作り(鑄直し)、その白語を表す音仮名として「利」は用いられるということ。これを音仮名として読ませるのは、地域的な統一感覚であろう。「利」が尊敬という付属語的な働きを示すものであることにも注意すべきだ。</p> <p>漢語として表記しようのない付属語が音仮名で記され、それがこの一句を白語文脈と指示することによって、どちらでも読める漢字の読みが決定される。</p>
	読写方式	訓 音 訓 訓 音 音 訓	
	漢語意識	听到哥哥您生病。	
	日本語訳	兄さんが病気になるって聞き。	
	ペー文原文	叫 我 心 不 安	
1.5	音声記号	tɕɔ ⁵⁵ ŋɔ ³¹ ɕu ³³ pu ³⁵ a44	
	漢語直訳	叫 我 心 不 安	
	読写方式	借 訓 借 借 借	
	漢語意識	叫我心不安。	
	日本語訳	私の心は落ち着きません。	
	ペー文原文	想 要 去 看 利	
2.1	音声記号	ca ³¹ nou ⁴⁴ ŋɛ ²¹ a ³³ ni ⁵⁵	
	漢語直訳	想 要 去 看 您	
	読写方式	訓 訓 訓 訓 音	
	漢語意識	想要去看您。	
	日本語訳	あなたの看病に行きたいのですが、	
	ペー文原文	弟 格 闲 人 双	
2.2	音声記号	ti ⁵⁵ keɻ ³⁵ ca ⁵⁵ ni ²¹ sua44	
	漢語直訳	又 怕 闲 人 说	
	読写方式	音 音 訓 訓 音	
	漢語意識	又怕外人说。	
	日本語訳	余人に何と言われるかが心配です、	
	ペー文原文	英 台 我 自 打 击 庄	
2.3	音声記号	ju ³⁵ the ⁵⁵ ŋɔ ³¹ tsɿ ⁵⁵ ta ³² ci ³⁵ tsua ⁴⁴	
	漢語直訳	英台我自打击庄	
	漢語意識	英台我自打击庄	
	日本語訳	英台我自打击庄	

II. ペー曲台本集成

	漢語直訳	英 台 我 做 打 击 转	ti ²¹ と歌うと、「ただ、しかし」の意味となるが、「自」と音義関係はなく、不確かなので、tsj ⁵⁵ と読むべきだろう。
	読写方式	訓 訓 訓 音 借 借 音	
	漢語意訳	英台急得团团转。	
	日本語訳	英台私はいてもたってもいられず、	【遠藤】歌い手がここで「自」を [ti ²¹] と発音したのは、前の句 (2.2) とのつながりとして、「人に噂されるのが心配だから、ただ思い歎くのみ」という内容的連なりが意識されたためであろう。歌い手の解釈が実際に記されている音仮名文字を乗り越えていくことがあることを示している。
2.4	ペー文原文	开 给 哥 吐 药 单 来	【富田】本句の「药」は jou ⁴⁴ と読み訓、5.3 は jo ⁵⁵ 、6.1・6.2・7.3・8.1・13.3 は jo ³⁵ 、7.1 は jo ⁴⁴ と読み借字とされる。「単」は本句では ta ³⁵ と読み訓、6.1・8.2 では ta ⁴⁴ と読み借字とされる。
	音声記号	khur ⁵⁵ ku ³¹ ko ⁴⁴ no ⁴⁴ jou ⁴⁴ ta ³⁵ le ²¹	
	漢語直訳	开 给 哥 助 词 药 单 个	【遠藤】「药」「単」は富田注にあるように、訓、借字両様の読みが可能である。この一句ではともに訓となっているが、それはこの一句が白語文脈であることによる。それを示すものとして、自造字「吐」や量詞 [le ²¹] を表記する音仮名「来」がある。音仮名だけでなく、自造字も一句の白語文脈を示し、結果、訓読みが指示される。
	読写方式	訓 訓 訓 自 訓 訓 音	
	漢語意訳	开个药单给哥哥。	
	日本語訳	兄さんに処方箋を書きました。	
2.5	ペー文原文	实 在 生 难 香	【遠藤】「生」は漢語から遠い訓、「難」は漢語から近い訓。釈読 (2.5) は「生難香」を「艱難極」と逐語訳している。白語で「とても」という副詞的な接尾語は、[ca ⁴⁴] と発音し、[○○ca ⁴⁴] で「とても○○」という形を取るのだろう。副詞的な接尾語が音仮名「香」で記されることで、「生難香」は白語文脈であることが指示されるが、それは同時に [xer ⁵⁵ na ²¹ ca ⁴⁴] 「とても生きにくい」という決まり文句でもあっただろう。
	音声記号	ʃj ⁵⁵ tse ⁵⁵ xer ⁵⁵ na ²¹ ca ⁴⁴	
	漢語直訳	实 在 活 难 杀	
	読写方式	借 借 訓 訓 音	
	漢語意訳	实在难死人。	
	日本語訳	本当に命災加なお人です。	
3.1	ペー文原文	第 一 东 海 龙 王 角	【遠藤】第三首以下、7775 形式。押韻は [a]。この処方箋の部分は、英台宝巻にも記されている。付録「英台宝巻」参照。
	音声記号	ti ⁵⁵ ji ³⁵ to ⁴⁴ xe ³¹ lu ⁴² ua ⁴² ko ³⁵	
	漢語直訳	第 一 东 海 龙 王 角	
	読写方式	借 借 借 借 借 借 借	
	漢語意訳	第一东海龙王角。	
	日本語訳	第一に東海竜王の角。	
3.2	ペー文原文	第 二 蟠 桃 汎 一 干	【王】「干」应为「缸」。(「干」は「缸」とすべき。)
	音声記号	ti ⁵⁵ er ⁵⁵ pha ⁴² tho ⁴² tou ³¹ ji ³⁵ ka ⁴⁴	【富田】原文「汎」は釈読では「酒 [to ³¹]」, 「汎」は「酒」の俗字。原文「干」は釈読では「缸 [ka ³³]」。
	漢語直訳	第 二 蟠 桃 酒 一 缸	【遠藤】「汎」, 「干」は音仮名ではなく、借字として用いた漢字を簡略化したものであり、白語文脈を作る音仮名ではなく、漢語文脈を作る借字とすべきである。借字の簡略化。
	読写方式	借 借 借 借 借 借 借	
	漢語意訳	第二蟠桃酒一缸。	
	日本語訳	第二に蟠桃酒ひと甕	
3.3	ペー文原文	第 三 千 年 瓦 上 双	【富田】原文「双」は釈読 (3.3) では「霜 [sua ⁴⁴]」。
	音声記号	ti ⁵⁵ sa ³³ tche ³³ ne ⁴² ua ³¹ sa ⁵⁵ sua ⁴⁴	
	漢語直訳	第 三 千 年 瓦 上 霜	
	読写方式	借 借 借 借 借 借 音	
	漢語意訳	第三千年瓦上霜	
	日本語訳	第三に千年瓦に積った霜。	
3.4	ペー文原文	四 要 其 林 胆	【王】“其林”应为“麒麟”。(「其林」は「麒麟」とすべき。)
	音声記号	ʃj ⁵⁵ nou ⁴⁴ tci ²¹ liur ³⁵ ta ³³	【富田】「要」は釈読では jo ⁵⁵ と借字風に読む。原文「其林」は釈読では「麒麟 [tohi ⁴² liur ⁴²]」。
	漢語直訳	四 要 麒 麟 胆	【遠藤】この部分は漢語文脈で読むのが正しいだろう。したがって王注の指摘するように、「麒麟」と表記すべきであった。が、この字の画数が多いために、「麒
	読写方式	借 訓 訓 訓 訓	
	漢語意訳	四要麒麟胆。	
	日本語訳	四つ目に麒麟の肝がいます。	

			を簡略化して「其」と記したのではないか。それに伴い、「麟」は「林」で代用された結果、この一句は白語文脈かという認識が働き、「要」が訓で発音されることになったのではないか。漢語文脈のなかにある借字の簡略化が音仮名を想起させ、結果、一句全体を白語文脈で発音させてしまうことがある。
4.1	<p>ペー文原文 第五螯魚尾上毛</p> <p>音声記号 ti⁵⁵ u³¹ ɔ³⁵ jy⁴² uc³¹ sa⁵⁵ mo⁴²</p> <p>漢語直訳 第五螯魚尾上毛</p> <p>読写方式 借借借借借借借</p> <p>漢語意識 第五螯魚尾上毛,</p> <p>日本語訳 第五に大亀の尾の毛,</p>		
4.2	<p>ペー文原文 第六蚊子眼窻拉</p> <p>音声記号 ti⁵⁵ lu³⁵vu⁴²tsɿ⁴⁴je³¹khua³³la³³</p> <p>漢語直訳 第六蚊子眼框框</p> <p>読写方式 借借借借借音音</p> <p>漢語意識 第六蚊子双眼眶,</p> <p>日本語訳 第六に蚊の眼のまぶた,</p>		<p>【富田】原文「文」は釈読では「蚊」、原文「窻」は釈読では「眶[kua³³]」。漢語直訳「框框(囲み)」は「眶眶(まぶた)」の誤りか。</p> <p>【遠藤】「文」は借字「蚊」の簡略化。「窻拉」の漢語直訳は「框框(囲み)」でよいのではないか。つまり、ペー語として、眼[je³¹]の囲み[khua³³la³³]が験なのである。身体語彙は音仮名で書くという書記法があるようだ。蚊の験を処方箋に入れるのはすでに英台宝巻に見られるところであるから、本来は漢語であったはずだ。が、それが身体語彙であるために白語化し、釈読の「眼眶[kua³³]拉」(借借音)を経て、この趙丕鼎本「眼窻拉」(借借音)、さらに楊興庭本で「為扣漏」(音音音)と表記されるというように音仮名表記を求めることになったか。</p>
4.3	<p>ペー文原文 第七观音甘露水</p> <p>音声記号 ti⁵⁵tchi⁴²kueɿ³³ju⁴⁴ka⁴⁴lu⁵⁵sue³¹</p> <p>漢語直訳 第七观音甘露水</p> <p>読写方式 借借借借借借借</p> <p>漢語意識 第七观音甘露水,</p> <p>日本語訳 第七に観音の甘露水,</p>		<p>【王】“干路”应为“甘露”。(「干路」は「甘露」とすべき。)</p> <p>【富田】原文「干路」は釈読では「甘露[ku³³lu⁵⁵]」。「水」は釈読では cy³¹、興廷版 5.1 では cy³³ と読む。</p> <p>【遠藤】「干路」は「甘露」の簡略表記。漢語文脈である。</p>
4.4	<p>ペー文原文 八用白糖香</p> <p>音声記号 pa³⁵jou⁵⁵pei³⁵tha⁴²ca⁴⁴</p> <p>漢語直訳 八用白糖香</p> <p>読写方式 借借借自借</p> <p>漢語意識 八用白糖香。</p> <p>日本語訳 八つ目に白糖の香。</p>		<p>【王】“白糖香”不可解，“香”或应为“霜”，属因误读而造成的别字。其他两个本子也同此。(「白糖香」の意は不明、「香」はあるいは「霜」とすべきで、誤読のため造られた別字かもしれない。他の二つの台本もこと同じ。)</p> <p>【富田】原文「耘」は釈読では「檀」。</p> <p>【遠藤】釈読が「檀」とするように、本来は「白糖香」であろう。「檀」字の簡略表記、あるいは誤写か。楊正華本(4.5)は「白糖香」。「唐」は「檀」の簡略表記か。</p>
5.1	<p>ペー文原文 第九要用青龙须</p> <p>音声記号 ti⁵⁵ʔou³¹jo⁵⁵jou⁵⁵tchur³³lu⁴²cy⁴⁴</p> <p>漢語直訳 第九要用青龙须</p> <p>読写方式 借借借借借借借</p> <p>漢語意識 第九要用青龙须,</p> <p>日本語訳 第九に青龍のひげが入り用で,</p>		<p>【遠藤】「要用」[jo⁵⁵jou⁵⁵]は借字。漢語文脈である。7.1は白語文脈であり、訓読み[nɔ⁴⁴zy³¹]される。</p>
5.2	<p>ペー文原文 第十直付光头架</p> <p>音声記号 ti⁵⁵sɿ³⁵tsɿ³⁵fɿ⁵⁵kua⁴⁴tu²¹tca⁴⁴</p> <p>漢語直訳 第十真蜂骨头架</p> <p>読写方式 借借訓音訓訓</p> <p>漢語意識 第十蜜蜂骨头架,</p>		<p>【富田】原文「头」は釈読では「等[tu²¹]」。</p> <p>【遠藤】釈読は「直付光等架」。楊正華本(4.2)は「直父吐光頭」(音音自音訓)。楊興庭本(6.1)は「父光頭」(音音訓)。蜜蜂をペー語で tsɿ³⁵fɿ⁵⁵ といい、動物名ゆえに音仮名で「直付」「直父」と表記している。「骨」はペー語で kua⁴⁴tu²¹、三本ともに音仮名(光)</p>

II. ペー曲台本集成

	日本語訳	第十に蜜蜂の骨格,	+訓(頭)と表記している。「骨」という身体呼称であるから、音仮名表記になるか。統一された表記である。
5.3	ペー文原文	十 样 如 药 找 得 全	【王】“如”字意义待考。(「如」字の意味は後考に待つ。) 【富田】原文「药」は釈読では「能(mu ⁴²)」。 【遠藤】釈読は「能」とするが、この趙丕鼎本〔ア〕では「药」で間違いない。楊正華本(5.1)は「薬単十様藥齊全」。英台宝巻は「若有十様真妙藥」。「得」はここでは音仮名「灯」(1.4)ではなく、借字になっている。漢語文脈だからだろう。
	音声記号	sɿ ³³ ja ⁵⁵ zɿ ³⁵ jo ⁵⁵ tsɔ ³¹ tɕi ³⁵ tshue ⁴²	
	漢語直訳	十 样 ? 药 找 得 全	
	読写方式	借 借 ? 借 借 借 借	
	漢語意識	只要找齐十样药,	
日本語訳	十種の薬を全て集めれば,		
5.4	ペー文原文	起 死 回 生 汤	
	音声記号	tchi ³¹ sɿ ³² xue ⁴² su ³³ tha ³³	
	漢語直訳	起 死 回 生 汤	
	読写方式	借 借 借 借 借	
	漢語意識	(就是)起死回生汤。	
日本語訳	起死回生のスープ(となります)。		
6.1	ペー文原文	开 好 药 单 开 药 引	【遠藤】副薬の部分、楊正華本にはない。
	音声記号	khe ³³ xo ³¹ jo ³⁵ ta ⁴⁴ khe ³³ jo ³⁵ ju ³¹	
	漢語直訳	开 好 药 单 开 药 引	
	読写方式	借 借 借 借 借 借 借	
	漢語意識	开好药方开药引,	
日本語訳	処方箋の次は副薬を書きます,		
6.2	ペー文原文	三 样 药 引 配 鲁 他	【王】“鲁”应为“拢”。(「魯」は「攏」とすべき。) 【富田】原文「魯」は釈読では「拢」、原文「他」は釈読では「它」。
	音声記号	sa ³³ ja ⁵⁵ jo ³⁵ ju ³¹ phe ⁵⁵ lo ³¹ tha ³³	
	漢語直訳	三 样 药 引 配 拢 他	
	読写方式	借 借 借 借 借 借 借	
	漢語意識	三样药引再配上,	
日本語訳	三種の副薬をそれに合わせます,		
6.3	ペー文原文	公 鸡 蛋 利 老 母 乳	【王】大理海西一带称“公鸡”为 tu ⁵⁵ pu ³³ , 较为特殊, 来源待考。其他各地白族都称为 ke ³⁵ po ³⁵ (直译为“鸡公”)。(大理の洱海西岸一带では「公鷄」を tu ⁵⁵ pu ³³ と読む、やや特殊であり、来源については後考を待つ。その他各地の白族はみな ke ³⁵ po ³⁵ と読む(直訳すると「鷄公」)。 【富田】原文「老母」は釈読では「老虎」[lo ³¹ mo ³³]。 【遠藤】「利」は2.1で [ni ⁵⁵]と発音し、二人称尊敬語の音仮名として用いられていた。ここでは、「~と」という助詞の音仮名として用いられている。 「老」は、白語文脈であり、虎を指すペー語 [lo ²¹]の音仮名表記である。なお、南詔国時代の応詔詩で「虎」は「波羅」と表記されている。
	音声記号	tu ⁵⁵ pu ³³ se ³² ni ⁵⁵ lo ²¹ mo ³³ pa ⁴²	
	漢語直訳	公 鸡 蛋 和 虎 母 乳	
	読写方式	訓 訓 訓 音 音 訓 訓	
	漢語意識	鸡蛋和老虎奶,	
日本語訳	おんどりの卵と虎の乳,		
6.4	ペー文原文	挑 锁 心 干 肺	【王】“干”应为“肝”。(「干」は「肝」とすべき。) 【富田】原文「挑锁」は釈読では「挑蚤[khua ³³ ci ⁴⁴]」、原文「干」は釈読では「肝」。 【遠藤】釈読(6.4)は「挑蚤[khua ³³ ci ⁴⁴]」として訓読みしている。ここは音仮名「挑锁」を用いて、漢語音で読むことを指示している。音仮名で漢語音を指示する(例えば「身体」という漢字に、しんたいとルビを振るような感覚か)ことがある。
	音声記号	thio ⁴⁴ suo ³³ ci ³⁵ ka ³⁵ phia ⁴⁴	
	漢語直訳	挑 蚤 心 肝 肺	
	読写方式	音 音 訓 訓 訓	
	漢語意識	挑蚤心肝肺。	
日本語訳	ノミの心臓・肝・肺。		
7.1	ペー文原文	塘 药 要用 真 朱 君	【王】“真朱”应为“珍珠”。(「真朱」は「珍珠」とすべき。) 【富田】原文「塘」は釈読では「打」[ta ²¹]、原文「真朱」は釈読では「真珠」[tsu ³³ tsy ³³]。
	音声記号	ta ²¹ jo ⁴⁴ no ⁴⁴ zy ³¹ tsu ⁴⁴ tsy ⁵⁵ tcy ³⁵	
	漢語直訳	熬 药 要用 珍 珠 草	

	<table border="1"> <tr><td>読写方式</td><td>訓 訓 訓 訓 借 借 音</td></tr> <tr><td>漢語意識</td><td>熬药要用珍珠罐。</td></tr> <tr><td>日本語訳</td><td>薬を煎ずるのに真珠のつぼが要り。</td></tr> </table>	読写方式	訓 訓 訓 訓 借 借 音	漢語意識	熬药要用珍珠罐。	日本語訳	薬を煎ずるのに真珠のつぼが要り。	<p>【遠藤】「要用」について、ここは訓字 [no⁴⁴zy³¹]。5.1では借字 [jo⁵⁵jou⁵⁵]。5.1は漢語文脈であるのに対し、ここは白語文脈である。原文「塘」を釈読は「打 [ta³¹]」と表記するが、[ta²¹] はさまざまな動詞を表す「する」という動詞であるために、一句は白語文脈となったか。</p>						
読写方式	訓 訓 訓 訓 借 借 音													
漢語意識	熬药要用珍珠罐。													
日本語訳	薬を煎ずるのに真珠のつぼが要り。													
7.2	<table border="1"> <tr><td>ペー文原文</td><td>饮 保 要 汝 马 脑 干</td></tr> <tr><td>音声記号</td><td>yu³³po³¹nou⁴⁴zy³¹ma³¹no³¹ka⁴⁴</td></tr> <tr><td>漢語直訳</td><td>喝 它 要 用 玛 瑙 缸</td></tr> <tr><td>読写方式</td><td>訓 音 訓 音 借 借 借</td></tr> <tr><td>漢語意識</td><td>喝它要用玛瑙缸。</td></tr> <tr><td>日本語訳</td><td>薬を飲むのに玛瑙の甕が要り。</td></tr> </table>	ペー文原文	饮 保 要 汝 马 脑 干	音声記号	yu ³³ po ³¹ nou ⁴⁴ zy ³¹ ma ³¹ no ³¹ ka ⁴⁴	漢語直訳	喝 它 要 用 玛 瑙 缸	読写方式	訓 音 訓 音 借 借 借	漢語意識	喝它要用玛瑙缸。	日本語訳	薬を飲むのに玛瑙の甕が要り。	<p>【王】「马脑干」应为“玛瑙缸”。(「馬腦干」は「瑪瑙缸」とすべき。) 【富田】原文「马脑干」は釈読では「玛瑙干」。 【遠藤】「马脑干」は借字の簡略表記。ここで [nou⁴⁴zy³¹] は、前句「要用」ではなく、「要汝」と訓と音仮名で表記している。なぜ「用」を「汝」と変えるのか。「马脑干」が借字であるため「要用」を漢語文脈で読んでしまうというミスを防ぐためか。あるいは変え字法によって、目移りを防止したか。</p>
ペー文原文	饮 保 要 汝 马 脑 干													
音声記号	yu ³³ po ³¹ nou ⁴⁴ zy ³¹ ma ³¹ no ³¹ ka ⁴⁴													
漢語直訳	喝 它 要 用 玛 瑙 缸													
読写方式	訓 音 訓 音 借 借 借													
漢語意識	喝它要用玛瑙缸。													
日本語訳	薬を飲むのに玛瑙の甕が要り。													
7.3	<table border="1"> <tr><td>ペー文原文</td><td>金 童 玉 女 来 温 药</td></tr> <tr><td>音声記号</td><td>tcu⁴⁴thu⁴²ji⁵⁵mi³¹le⁴²uc⁴⁴jo³⁵</td></tr> <tr><td>漢語直訳</td><td>金 童 玉 女 来 温 药</td></tr> <tr><td>読写方式</td><td>借 借 借 借 借 借 借</td></tr> <tr><td>漢語意識</td><td>金童玉女来温药。</td></tr> <tr><td>日本語訳</td><td>金童玉女が薬を温め。</td></tr> </table>	ペー文原文	金 童 玉 女 来 温 药	音声記号	tcu ⁴⁴ thu ⁴² ji ⁵⁵ mi ³¹ le ⁴² uc ⁴⁴ jo ³⁵	漢語直訳	金 童 玉 女 来 温 药	読写方式	借 借 借 借 借 借 借	漢語意識	金童玉女来温药。	日本語訳	金童玉女が薬を温め。	<p>【富田】原文「女」は釈読では自造字の「女 (ny³¹)」。興廷版4.4でも「玉女 (jou³⁵ny³¹)」と読んでおり、「女」を mi³¹ と読むのは訓読か？ 【遠藤】ここは借字で読むべきところだろう。</p>
ペー文原文	金 童 玉 女 来 温 药													
音声記号	tcu ⁴⁴ thu ⁴² ji ⁵⁵ mi ³¹ le ⁴² uc ⁴⁴ jo ³⁵													
漢語直訳	金 童 玉 女 来 温 药													
読写方式	借 借 借 借 借 借 借													
漢語意識	金童玉女来温药。													
日本語訳	金童玉女が薬を温め。													
7.4	<table border="1"> <tr><td>ペー文原文</td><td>做 一 口 而 干</td></tr> <tr><td>音声記号</td><td>tsj⁵⁵ji³⁵khou³¹er⁴²ka⁴⁴</td></tr> <tr><td>漢語直訳</td><td>做 一 口 而 干</td></tr> <tr><td>読写方式</td><td>訓 借 借 借 借</td></tr> <tr><td>漢語意識</td><td>一口就喝干。</td></tr> <tr><td>日本語訳</td><td>一口で飲み干します。</td></tr> </table>	ペー文原文	做 一 口 而 干	音声記号	tsj ⁵⁵ ji ³⁵ khou ³¹ er ⁴² ka ⁴⁴	漢語直訳	做 一 口 而 干	読写方式	訓 借 借 借 借	漢語意識	一口就喝干。	日本語訳	一口で飲み干します。	<p>【王】唱词中“做”按借词读法，读为 tsuo⁵⁵。此处应按训读，读为 tsj⁵⁵，为连词。(歌詞の「做」は借字と見なせば、tsuo⁵⁵ と読む。ここは訓読と見なし、tsj⁵⁵ と読み、接続詞とする。) 【富田】「做」は釈読では tsuo⁵⁵ と読む。 【遠藤】「做」について王は訓読 tsj⁵⁵ として「就」の意で解釈しているが、漢語文脈であることからすれば、釈読のように借字と解するのがよい。</p>
ペー文原文	做 一 口 而 干													
音声記号	tsj ⁵⁵ ji ³⁵ khou ³¹ er ⁴² ka ⁴⁴													
漢語直訳	做 一 口 而 干													
読写方式	訓 借 借 借 借													
漢語意識	一口就喝干。													
日本語訳	一口で飲み干します。													
8.1	<table border="1"> <tr><td>ペー文原文</td><td>若 凡 此 药 不 见 较</td></tr> <tr><td>音声記号</td><td>zuo⁵⁵fa⁴²tsj³¹jo³⁵pu³⁵tcə⁵⁵ɸə⁵⁵</td></tr> <tr><td>漢語直訳</td><td>若 凡 此 药 不 见 效</td></tr> <tr><td>読写方式</td><td>借 借 借 借 借 借 借</td></tr> <tr><td>漢語意識</td><td>万一此药不见效。</td></tr> <tr><td>日本語訳</td><td>もしこの薬に効果がなかったら。</td></tr> </table>	ペー文原文	若 凡 此 药 不 见 较	音声記号	zuo ⁵⁵ fa ⁴² tsj ³¹ jo ³⁵ pu ³⁵ tcə ⁵⁵ ɸə ⁵⁵	漢語直訳	若 凡 此 药 不 见 效	読写方式	借 借 借 借 借 借 借	漢語意識	万一此药不见效。	日本語訳	もしこの薬に効果がなかったら。	<p>【王】“效”，曲本原文误作“较”。(「効」は、原文では誤って「較」に作る。) 【富田】原文「较」は釈読では「效」。</p>
ペー文原文	若 凡 此 药 不 见 较													
音声記号	zuo ⁵⁵ fa ⁴² tsj ³¹ jo ³⁵ pu ³⁵ tcə ⁵⁵ ɸə ⁵⁵													
漢語直訳	若 凡 此 药 不 见 效													
読写方式	借 借 借 借 借 借 借													
漢語意識	万一此药不见效。													
日本語訳	もしこの薬に効果がなかったら。													
8.2	<table border="1"> <tr><td>ペー文原文</td><td>在 有 一 剂 好 单 方</td></tr> <tr><td>音声記号</td><td>ise⁵⁵jou³¹ji³⁵tei⁵⁵xə³¹ta⁴⁴fa⁴⁴</td></tr> <tr><td>漢語直訳</td><td>再 有 一 剂 好 单 方</td></tr> <tr><td>読写方式</td><td>借 借 借 借 借 借 借</td></tr> <tr><td>漢語意識</td><td>还有一剂好单方。</td></tr> <tr><td>日本語訳</td><td>もう一つよい処方があります。</td></tr> </table>	ペー文原文	在 有 一 剂 好 单 方	音声記号	ise ⁵⁵ jou ³¹ ji ³⁵ tei ⁵⁵ xə ³¹ ta ⁴⁴ fa ⁴⁴	漢語直訳	再 有 一 剂 好 单 方	読写方式	借 借 借 借 借 借 借	漢語意識	还有一剂好单方。	日本語訳	もう一つよい処方があります。	<p>【王】“再”误作“在”，“剂”误作“计”。(「再」は誤って「在」に、「剂」は誤って「計」に作る。) 【富田】原文「在」は釈読では「再」，原文「计」は釈読も同じく「計」。 【遠藤】「誤って」というより、借字の簡略表記ということだろう。「計」のように、その表記が一定の普遍性をもっている。</p>
ペー文原文	在 有 一 剂 好 单 方													
音声記号	ise ⁵⁵ jou ³¹ ji ³⁵ tei ⁵⁵ xə ³¹ ta ⁴⁴ fa ⁴⁴													
漢語直訳	再 有 一 剂 好 单 方													
読写方式	借 借 借 借 借 借 借													
漢語意識	还有一剂好单方。													
日本語訳	もう一つよい処方があります。													
8.3	<table border="1"> <tr><td>ペー文原文</td><td>活 期 寿 坊 买 保 格</td></tr> <tr><td>音声記号</td><td>xuo³⁵tchi³³sou⁵⁵fa⁴²mei³²po³¹kei³⁵</td></tr> <tr><td>漢語直訳</td><td>红 漆 寿 房 买 他 间</td></tr> <tr><td>読写方式</td><td>音 音 借 借 訓 音 音</td></tr> <tr><td>漢語意識</td><td>紅漆棺材买一口。</td></tr> <tr><td>日本語訳</td><td>紅漆の棺材を一つ買い。</td></tr> </table>	ペー文原文	活 期 寿 坊 买 保 格	音声記号	xuo ³⁵ tchi ³³ sou ⁵⁵ fa ⁴² mei ³² po ³¹ kei ³⁵	漢語直訳	红 漆 寿 房 买 他 间	読写方式	音 音 借 借 訓 音 音	漢語意識	紅漆棺材买一口。	日本語訳	紅漆の棺材を一つ買い。	<p>【王】“坊”应为“房”。(「坊」は「房」とすべき。) 【富田】原文「坊」は釈読も同じく「坊」。 【遠藤】「坊」は借字の簡略表記。「保格」について、釈読は「它口」と直訳し、「一口」と意訳している。楊興庭 (8.1) では「秀香花板買保付」で、直訳「～買它副」(～訓音訓)，意識「好好買副棺材板」とする。楊正華 (6.3) では「好寿板買保付」で、直訳「買它副」(訓自音)，意識「～一副好寿材」となっている。「格」[kei³⁵] は棺を数える量詞だろう。「保」は「それ」というくらの代名詞だろうか。この語順はペー語に対応しているか。</p>
ペー文原文	活 期 寿 坊 买 保 格													
音声記号	xuo ³⁵ tchi ³³ sou ⁵⁵ fa ⁴² mei ³² po ³¹ kei ³⁵													
漢語直訳	红 漆 寿 房 买 他 间													
読写方式	音 音 借 借 訓 音 音													
漢語意識	紅漆棺材买一口。													
日本語訳	紅漆の棺材を一つ買い。													
8.4	<table border="1"> <tr><td>ペー文原文</td><td>料 里 求 味 当</td></tr> </table>	ペー文原文	料 里 求 味 当	<p>【王】“里”应为“理”。(「里」は「理」とすべき。) 【富田】「里」は釈読も同じく「里」。</p>										
ペー文原文	料 里 求 味 当													

II. ペー曲台本集成

	音声記号	li ⁵⁵ li ³¹ t ^h ou ⁵⁵ pu ⁵⁵ ta ⁴⁴	【遠藤】「里」は借字の簡略表記。 [pu ⁵⁵ ta ⁴⁴]は「那里(そこ)」という意の指示語。指示語も音仮名になる。[t ^h ou ⁵⁵]は動詞に後置する接尾語だろう。接尾語も音仮名となる。
	漢語直訳	料理好那里	
	読写方式	借借音音音	
	漢語意識	事先准备好。	
	日本語訳	事前に準備をします。	
9.1	ペー文原文	请个地师把坟看	【遠藤】第9～14首は、ほぼ借字であり、漢語文脈。梁山伯死後の伏線となる部分。もとになる戯曲や宝巻の表現か。楊興庭本、楊正華本ともに、この部分は短く、この漢語文脈の6首をもつことが趙丕鼎本の特徴の一つになっている。
	音声記号	t ^h u ³¹ ko ⁵⁵ ti ⁵⁵ ɕi ⁵⁵ pa ³¹ fu ⁴² kha ⁵⁵	
	漢語直訳	请个地师把坟看	
	読写方式	借借借訓借借借	
	漢語意識	请位地师把坟看。	
	日本語訳	風水師に墓を見てもらいましょう。	
9.2	ペー文原文	南山脚下好风光	
	音声記号	na ²¹ sa ⁴⁴ t ^h ɕo ³⁵ ɕa ⁵⁵ xo ³² fu ³³ kua ⁴⁴	
	漢語直訳	南山脚下好风光	
	読写方式	訓借借借借借借	
	漢語意識	南山脚下好风光。	
	日本語訳	南山のふもとがよい景色。	
9.3	ペー文原文	葬在南山大路旁	
	音声記号	tsa ⁵⁵ tse ⁵⁵ na ⁴² sa ⁴⁴ ta ⁵⁵ lu ⁵⁵ pha ⁴²	
	漢語直訳	葬在南山大路旁	
	読写方式	借借借借借借借	
	漢語意識	葬在南山大路旁。	
	日本語訳	南山の大通りのそばに葬られれば、	
9.4	ペー文原文	英台好烧香	
	音声記号	ju ⁴⁴ the ⁴² xo ³¹ so ⁴⁴ ca ⁴⁴	
	漢語直訳	英台好烧香	
	読写方式	借借借借借	
	漢語意識	英台好烧香。	
	日本語訳	英台が線香をあげます。	
10.1	ペー文原文	梁兄死后我吊孝	
	音声記号	lia ⁴² ɕou ⁴⁴ ɕi ³¹ xou ⁵⁵ ŋo ³¹ tio ⁵⁵ ɕo ⁵⁵	
	漢語直訳	梁兄死后我吊孝	
	読写方式	借借借借借借借	
	漢語意識	梁兄死后我吊孝。	
	日本語訳	梁兄の死後私はお悔やみに行き、	
10.2	ペー文原文	灵前祭奠泪汪汪	
	音声記号	liu ⁴² t ^h ɕhe ⁴² t ^h ɕi ⁵⁵ tic ⁵⁵ lc ⁵⁵ ua ⁴⁴ ua ⁴⁴	
	漢語直訳	灵前祭奠泪汪汪	
	読写方式	借借借借借借借	
	漢語意識	灵前祭奠泪汪汪。	
	日本語訳	霊前で涙しつつ申いましょう。	
10.3	ペー文原文	回复哥哥几件事	
	音声記号	xue ⁴² fy ³⁵ ko ⁴⁴ ko ⁴⁴ t ^h ɕi ³¹ t ^h ɕe ⁵⁵ ɕi ⁵⁵	
	漢語直訳	回复哥哥几件事	
	読写方式	借借訓訓借借借	
	漢語意識	回复哥哥几件事。	
	日本語訳	兄さんにくっつかお返事します。	
10.4	ペー文原文	清清明明双	【遠藤】「双」は3.3では「霜」の音仮名として用いられている。

	音声記号	tʃheɿ ⁵⁵ tʃheɿ ⁵⁵ meɿ ²¹ meɿ ²¹ sua ⁴⁴	
	漢語直訳	清 清 明 明 说	
	読写方式	訓 訓 訓 訓 音	
	漢語意識	明明白白说。	
	日本語訳	はっきりきっぱり言いましょう。	
11.1	ペー文原文	早 来 三 日 我 是 主	
	音声記号	tso ³¹ le ⁴² sa ³³ zɿ ³⁵ ŋo ³¹ sɿ ⁵⁵ tsy ³¹ ,	
	漢語直訳	早 来 三 日 我 是 主	
	読写方式	借 借 借 借 訓 借 借	
	漢語意識	早来三日我是主。	
	日本語訳	三日早ければ私が主となり。	
11.2	ペー文原文	迟 来 三 日 我 为 宾	
	音声記号	tshɿ ⁴² le ⁴² sa ³³ zɿ ³⁵ ŋo ³¹ ue ⁴² piu ⁴⁴	
	漢語直訳	迟 来 三 日 我 为 宾	
	読写方式	借 借 借 借 訓 借 借	
	漢語意識	迟来三日我为宾。	
	日本語訳	三日遅ければ私が客となりましょう。	
11.3	ペー文原文	哥 哥 本 是 我 心 爱	【遠藤】64で「心(心臓の意)」は訓 [ci ³⁵]。ここは漢語文脈なので借字 [ɕu ³³]。
	音声記号	ko ⁴⁴ ko ⁴⁴ pu ³¹ sɿ ⁵⁵ ŋo ³¹ ɕu ³³ e ⁵⁵ ,	
	漢語直訳	哥 哥 本 是 我 心 爱	
	読写方式	借 借 借 借 訓 借 借	
	漢語意識	哥哥本是我心爱。	
	日本語訳	兄さんこそ私が心から愛する人で。	
11.4	ペー文原文	马 甲 眼 中 钉	【富田】「馬甲」は「馬家」の誤りか。
	音声記号	ma ³¹ tʃa ³⁵ je ³¹ tsou ⁴⁴ tiu ⁴⁴	
	漢語直訳	马 甲 眼 中 钉	
	読写方式	借 借 借 借 借	
	漢語意識	马甲眼中钉。	
	日本語訳	馬甲がかたきです。	
12.1	ペー文原文	英 台 就 是 勾 回 鬼	【王】“回”应为“魂”。(「回」は「魂」とすべき) 【富田】原文「回」は釈読では「魂 [xui ⁴²]」。 【遠藤】「回」は借字の簡略表記。借字の簡略表記と音仮名表記は、漢字の仮借用法という点では同じだが、それがペー語発音を表すのが音仮名、漢語発音を表すのが借字の簡略表記ということである。
	音声記号	ju ⁴⁴ the ⁴² tʃou ⁵⁵ sɿ ⁵⁵ kou ⁴⁴ xue ⁴² kue ³¹	
	漢語直訳	英 台 就 是 勾 回 鬼	
	読写方式	借 借 借 借 借 借 借	
	漢語意識	英台就是勾魂鬼。	
	日本語訳	英台はもはや魂さまよう幽霊で。	
12.2	ペー文原文	爹 妈 就 是 害 人 精	
	音声記号	ti ⁴⁴ ma ⁴⁴ tʃou ⁵⁵ sɿ ⁵⁵ xe ⁵⁵ zu ⁴² tʃu ⁴⁴	
	漢語直訳	爹 妈 就 是 害 人 精	
	読写方式	借 借 借 借 借 借 借	
	漢語意識	爹妈就是害人精。	
	日本語訳	父母は人を害する物の怪です。	
12.3	ペー文原文	秀 坊 是 我 真 地 育	【王】“秀坊”应为“绣房”。(「秀坊」は「绣房」とすべき) 【富田】原文「秀坊」は釈読では「秀房 [co ⁵⁵ fa ⁴²]」。 原文「地育」は釈読では「地獄 [ti ⁵⁵ jo ³⁵]」。 【遠藤】「育」も借字における簡略表記。釈読が「地獄」としているように、「地育」は漢語を表しているものであり、ペー語を表しているわけではない。
	音声記号	co ⁵⁵ fa ⁴² sɿ ⁵⁵ ŋo ³¹ tsu ⁴⁴ ti ⁴⁴ ju ³⁵	
	漢語直訳	绣 房 是 我 真 地 育	
	読写方式	借 借 借 訓 借 借 借	
	漢語意識	绣房是我真地獄。	
	日本語訳	部屋が私の本当の地獄で。	
12.4	ペー文原文	我 是 血 河 坑	【王】按佛教《血河经》, 阴司奈何桥下有血河, 有罪孽之人被打入血河内, 终日受苦刑。又名“血河坑”, “血

II. ペー曲台本集成

	音声記号	ŋo ³¹ ŋ ⁵⁵ sueɿ ³⁵ xo ⁴² khui ³³	河池”。(仏教の「血河経」によると、地獄の奈何橋の下に血の河があり、罪のある人は血の河に入れられ、一日中責め苦を受ける。「血河坑」・「血河池」ともいう。)
	漢語直訳	我是血河坑	
	読写方式	借借借借借	
	漢語意識	我是血河坑。	
	日本語訳	私は血の池地獄(いるようなものです)。	【遠藤】「我」はこれまで(1.3, 2.3…12.3など)訓とされてきたが、ここでは借字とされており、疑問。なお、釈説はここのみ[uo ³¹](借字)としている。
13.1	ペー文原文	三更梦里团圆会	【王】“团”应为“圆”。(「團」は「圓」とすべき。)
	音声記号	sa ³³ ku ⁴⁴ mu ⁵⁵ li ³¹ thua ⁴² jue ⁴² xue ⁵⁵	【富田】原文「团圆会」は釈説では「团圆合(thue ⁴² jui ⁴² xuo ⁵⁵)」。
	漢語直訳	三更梦里团圆会	【遠藤】「團」は「圓」の簡略表記。
	読写方式	借借借借借借借	
	漢語意識	团圆只在梦里。	
	日本語訳	会えるのはただ夢の中でだけ。	
13.2	ペー文原文	除非二世得成亲	【遠藤】漢語文脈のなかでは、「得」も音仮名ではなく借字となる。5.3と同じ。
	音声記号	tshy ⁴² te ³³ ci ⁵⁵ ŋ ⁵⁵ teɿ ³⁵ tshui ⁴² tchui ³³	
	漢語直訳	除非二世得成亲	
	読写方式	借借借借借借借	
	漢語意識	来世才能成夫妻。	
	日本語訳	来世でしか結ばれない。	
13.3	ペー文原文	妙药仙丹利无益	【遠藤】釈説では「利」を音仮名として「也」と直訳している。ここでは借字としているから、「効き目」というくらいで「利」を解釈していると思われる。この一句が漢語文脈であるからだろう。ただ、意識で「也」としているところからすれば、音仮名かとも思われる。なお、15.3は白語文脈であり、音仮名としている。
	音声記号	mi ⁵⁵ jo ³⁵ ce ³³ ta ⁴⁴ li ⁵⁵ vɿ ⁴² ji ³⁵	
	漢語直訳	妙药仙丹利无益	
	読写方式	借借借借借借借	
	漢語意識	妙药仙丹也无用。	
	日本語訳	妙薬仙丹も無用です。	
13.4	ペー文原文	我是真人生	【王】“人生”应作“人参”。(「人生」は「人参」とすべき。)
	音声記号	ŋo ³¹ ŋ ⁵⁵ tsui ⁴⁴ zu ⁴² su ³³	【富田】原文「人生」は釈説では「人参」。
	漢語直訳	我是真人参	【遠藤】「人生」は、借字における簡略表記。
	読写方式	借借借借借	
	漢語意識	我是真人参。	
	日本語訳	私が本当の人参です。	
14.1	ペー文原文	取出云央代一付	【王】“云央代”应为“鸳鸯袋”。(「雲央代」は「鸳鸯袋」とすべき。)
	音声記号	tchi ³¹ tshy ³⁵ jue ⁴⁴ ja ⁴⁴ te ⁵⁵ ji ³⁵ fy ⁵⁵	【富田】原文「云央代」は釈説では「鸳鸯带(jui ³³ ja ³³ te ⁵⁵)」, 原文「付」は釈説では「副」。
	漢語直訳	取出鸳鸯袋一付	漢語直訳「鸳鸯」は「鸳鸯」の誤りか。
	読写方式	借借借借借借借	漢語直訳「付」は「副」とし、音仮名とすべき?
	漢語意識	取出一对鸳鸯袋。	【遠藤】「云央」は「鸳鸯」の借字における簡略表記。「代」は「袋」の簡略表記ということになるが、釋説では「鸳鸯带」としている。14.3の靴の材料であり、「带」が正しいか。「付」は量詞で音仮名か。8.3参照。
	日本語訳	鸳鸯の袋一对と。	
14.2	ペー文原文	七尺林罗帕一根	【王】“林罗帕”应为“绫罗帕”。另按意义, “帕”或应为“带”。(「林羅帕」は「綾羅帕」とすべき。意味から考えれば、「帕」は「帯」とすべきかもしれない。)
	音声記号	tchi ³⁵ tshy ⁴² liu ⁴² luo ⁴² pha ⁵⁵ ji ³⁵ ku ⁴⁴	【富田】原文「林罗帕」は釈説では「綾羅帕(liu ⁴² luo ⁴² pha ⁵⁵)」。
	漢語直訳	七尺綾羅帕一根	
	読写方式	借借借借借借借	
	漢語意識	七尺綾羅帕一根。	
	日本語訳	七尺の綾絹一枚を取り出し。	
14.3	ペー文原文	送哥绣花鞋阿双	【富田】原文「鞋」は釈説では「鞋」。
	音声記号	sou ³³ ko ⁴⁴ tcheɿ ⁴⁴ xuo ³⁵ ge ²¹ a ³¹ ci ³³	漢語直訳「阿」は「一」とし、音仮名とすべき。
	漢語直訳	送哥绣花鞋阿双	【遠藤】「双」は「説」の音仮名(2.2, 10.4), 「鞋」の音仮名(3.3)としても用いられる。ここは、量詞として、訓読みされている。量詞が白語文脈を指示し、
	読写方式	訓訓訓訓自音訓	

	漢語意識	送哥一双绣花鞋,	結果、音仮名「阿」が用いられた。
	日本語訳	兄さんに刺繍靴一足と,	
14.4	ペー文原文	绣花手巾奔	【遠藤】「奔」は量詞で音仮名。一句を白語文脈と指示している。
	音声記号	tʃeɪ ⁴⁴ xuo ³⁵ su ³¹ tʃe ³⁵ pu ⁴⁴	
	漢語直訳	绣花手巾幅	
	読写方式	訓 訓 訓 訓 音	
	漢語意識	一条绣花帕。	
	日本語訳	刺繍の手巾一枚を送りましょう。	
15.1	ペー文原文	头发滴下二三根	【王】「滴」应读为 tiu ³⁵ , 更为准确。(「滴」は tiu ³⁵ と読めば、より正確。) 【富田】「滴」は釈説では ti ³⁵ , 「根」は釈説では ku ³⁵ と読む。 【遠藤】白語で「引く」「引き抜く」を [tɕ ⁴⁴] [tiu ³⁵] [ti ³⁵] と発音し、それを音仮名「滴」で表記している。「二」「三」をここでは訓読みしている。3.2, 3.3は漢語文脈であり、借字で発音された。「根」を釈説は [ku ³⁵] と発音するが、これは借字としての発音かもしれない。[tsu ³] は訓読みだろう。量詞であるから訓読みがよく、その結果一句は白語文脈となった。
	音声記号	tu ²¹ ma ³⁵ tɕ ⁴⁴ thu ⁵⁵ kou ³³ sa ⁵⁵ tsu ³ ,	
	漢語直訳	头发扯下两三根	
	読写方式	訓 訓 音 訓 訓 訓 訓	
	漢語意識	头发扯下两三根,	
	日本語訳	髪を二三本抜き,	
15.2	ペー文原文	委眉滴下保阿敏	【王】同上。(「滴」については同上。) 【遠藤】4.2「眼」の借字は [je ³¹], とすれば [ue ³³] はペー語発音だろう。仮借によりペー語発音を表すので音仮名。「保」は8.3で動詞 + [pɔ ³¹] + 量詞があった。動詞 + 音仮名 + 音仮名となる。量詞のまえに数詞がくる例は14.3にあり、「阿」は訓。[pɔ ³¹ a ³³ miu ³³] が一句を白語文脈と指示。
	音声記号	ue ³³ me ³⁵ tɕ ⁴⁴ thu ⁵⁵ pɔ ³¹ a ³³ miu ³³	
	漢語直訳	眼眉扯下它一撮	
	読写方式	音 借 音 借 音 音 音	
	漢語意識	眉毛拔下一小撮	
	日本語訳	眉を一つまみ抜きましょう。	
15.3	ペー文原文	心科利想期给哥	【富田】原文「心科」は釈説では「习科 [ci ³⁵ ko ³³]」。 【遠藤】音仮名の量詞「科」が「心」の訓読みを指示している。11.3参照。釋説が「习科 [ci ³⁵ ko ³³]」と音仮名表記するのは、より確実にペー語音で読むことを指示したもの。 「利」は13.3では漢語文脈で借字と捉えられたが、ここは白語文脈であるために「也」の音仮名として用いられている。「~でさえも」という副助詞的な語も音仮名表記される。「期」は「掏」(取り出す)の音仮名表記。
	音声記号	ci ³⁵ khuo ³³ li ⁵⁵ ca ³¹ tchi ⁴⁴ ku ³¹ ko ⁴⁴	
	漢語直訳	心颗也想掏给哥	
	読写方式	訓 音 音 訓 音 訓 訓	
	漢語意識	心儿也想掏您看,	
	日本語訳	心臓も取り出してあなたに見せた いくらいなのを,	
15.4	ペー文原文	梁兄可认灯	【富田】「梁兄」は1.3・10.1では lia ⁴² cou ⁴⁴ と読み、こと異なる。釈説では1.3・10.1・本句とも na ⁴² co ³³ と読む。 【遠藤】1.3, 10.1ともに漢語文脈であり、「兄」は借字 [cou ⁴⁴] として発音されるのに対し、ここは白語文脈であるために訓読み [zy ³⁵] される。 「灯」は1.4参照。補助動詞的な「~できる」という意の [tu ⁴⁴] は漢語文脈では「得」と記されるが、白語文脈では「灯」と音仮名表記される。ここはこの補助動詞の音仮名表記が一句が白語文脈であることを示し、直前の「認」を訓読みすることを指示している。
	音声記号	lia ³⁵ zy ³⁵ khɔ ³¹ zu ³³ tu ⁴⁴	
	漢語直訳	梁兄可认得	
	読写方式	借 訓 借 訓 音	
	漢語意識	梁兄可知道?	
	日本語訳	梁兄はご存知ですか?	

4-2. 「柳蔭記」—楊興庭本



「柳蔭記」を演唱する楊興庭氏（右）

【現地調査】

演唱：楊興庭（1937年生，大理市七里橋鄉大庄村），

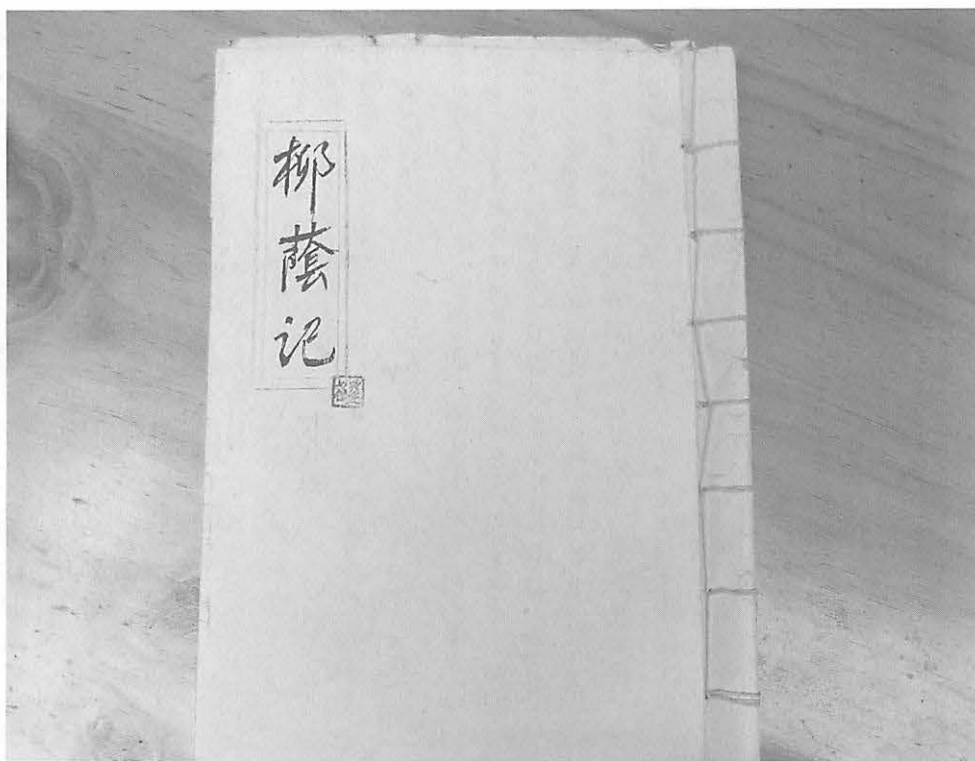
調査：富田美智江・岡部隆志・遠藤耕太郎・張錫祿・張正軍（通訳），2011年8月11日，於大理市七里橋鄉大庄村楊興庭宅

【資料作成】

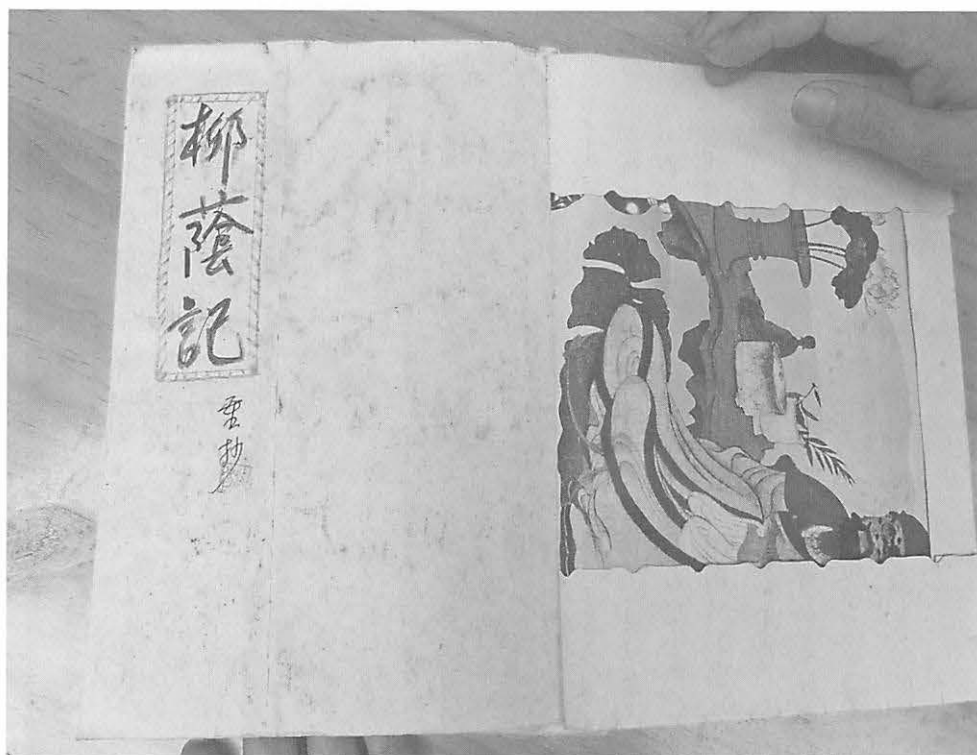
翻字・音声記号転写・漢語訳・読写方式：王鋒（中国社会科学院民族研究所），楊雄飛（中央民族大学少数民族語言文学系2010級）

日本語訳：富田美智江，遠藤耕太郎

注釈・備注：王鋒・富田美智江・遠藤耕太郎



楊興庭氏所藏「柳蔭記」



戛戛金刹，除非团圞入己，五不思不孝，丢父母，受命生
 两位山伯，下利米，保首自在，眼眼格别，四九夫妻，乃
 过良，再印英，台清替我，寄药单，子乃药生，英台次吐，出
 回九十，付停拿，去药，乃印，出白，知道，相公，吩咐，我马，上
 就送去，便了，唱，四九，我四十，付拿，容不，在我，我凌，如催，山伯
 指日，打发，我去，印英，台会，行了一，程，又一，程，卑，恨，河，里，有
 阿，里，越，千，山，而，过，万，水，听，水，响，气，三，十五，里，挑，花，店，四
 十五，里，香，花，村，卑，恨，阿，山，有，阿，山，而，气，利，卑，追，山，冷，快
 自，思，干，高，独，虎，子，卑，恨，孤，虚，心，种，格，洋，心，嘴，听，鱼，中
 气，河，头，响，作，弟，利，苗，头，响，作，利，胎，已，更，急，中
 将，之，响，列，胎，上，金，乃，不，觉，早，以，罢，问，人，心，站，在，大，门
 前，双，作，四，九，我，以，佬，回，冷，结，报，入，白，是，代，我，前，去，报，串，姓
 娘，在，上，四，九，来，到，快，快，叫，他，世，来，四，九，保，急，忙，忙，赶，来，不，知，为
 者，何，串，姓，娘，不，见，现，有，书，信，在，此，英，台，打，开，一，看，相，公，骂，到
 马，甲，就，走，眼，中，丁，套，眼，也，是，害，人，帮，果，乃，不，错，四，九，你
 回，去，替，我，言，明，弟，情，狂，狂，之，叫，他，莫，念，之，四，九，再，拜，姓，娘，
 可，有，什，么，妙，药，送，其，相，公，药，单，一，个，他，人，上，付，来，之，如，此，只
 得，提，笔，开，单，四，九，你，听，喝，提，起，笔，来，把，书，团，四，九，从，头，听
 原，故，药，单，子，来，开，给，佬，你，小，心，护，用，第，一，在，王，吹，单，方
 第，二，王，母，前，面，香，第，三，千，双，吐，拉，皮，雷，药，白，雷，香，四，要
 万，年，瓦，上，雷，霜，天，蝎，骨，快，白，引，音，第，五，套，雷，药，角，长，取，已
 药，汤，淡，我，是，他，的，救，命，丹，糯，糯，酒，干，团，第，六，金，雷，面，吐

四药堂，玉女把药送，观音吐花，瓶吐水，果兄病体，才有
 救，据，要，何，川，海，浪，停，要，等，喝，及，把，父，老，头，救，子，为，推，浦
 三，双，号，吐，雷，寿，堂，药，要，汝，在，在，居，气，雷，玻璃，六，肚，本，层
 味，本，心，乃，再，吐，雷，雷，岸，十，豆，黄，台，生，珍，哥，吐，病，相，公
 不，能，够，香，香，花，报，报，保，付，恐，果，果，兄，身，七，故，埋，花
 南，山，大，路，口，来，往，一，条，路，乃，甲，来，良，四，武，尼，我，去，本
 前，面，朵，香，四，九，央，去，回，上，付，怕，姓，命，难，救，白，姓，娘，这
 个，药，单，子，上，的，药，若，要，找，到，万，万，不，能，四，九，不，知，不，做，不，容
 我，若，要，团，团，除，非，上，天，入，地，是，这，样，的，拜，列，姓，娘，我
 告，辞，了，是，了，你，么，一，路，来，得，快，又，到，自，家，内，相，公，在，上
 差，上，药，单，子，代，我，山，伯，看，来，英，台，开，的，药，单，分，明
 无，处，寻，找，气，怒，人，果，果，山，多，安，人，我，的，回，去，病，房
 看，看，孩，儿，病，体，如，何，那，是，套，药，哭，山，伯，印，套，妈，双，忍，我
 若，后，手，敲，敲，英，台，开，正，药，单，子，佳，四，我，气，多，白，费，父，母
 心，心，功，那，些，忍，舍，危，看，昌，古，尼，斗，母，丢，世，格，次，吐，草
 利，花，山，伯，一，定，入，己，五，英，台，冷，心，再，作，拜，为，冷，吐，丢，父
 利，母，故，娘，罢，宗，三，英，台，早，已，我，转，良，我，生，死，利，印，佬，看
 年，孩，儿，的，保，养，身，子，可，是，英，台，早，不，是，你，的，爹，吗
 △斗，母，来，自，子，孝，子，柏，文，科，张，张，亮，利，安，回，英，台，一
 埋，在，五，台，的，南，山，孩，儿，做，鬼，也，灵，验，再，印，英，台，看，月，圆
 又，被，乌，云，破，花，正，开，时，遇，雪，霜，咽，喉，吐，起，三，分，气

序号	訳積項	原文・音声記号・訳文	注釈・備注
1.1	ペー文原文	提起笔来把书用	【王】“用”应为“修”。白语中无鼻音，且声母j-与c-有变读，故“修”误为“用”。（「用」は「修」とすべき。白語には鼻音が無く，また声母（音節初めの子音）のj-とc-は読みが変わることがあるため，「修」が誤って「用」となった。）
	音声記号	thi ⁴² lɔhi ³¹ pi ³⁵ le ⁴² pa ³¹ su ³³ jou ⁴⁴	
	漢語直訳	提起笔来把书修	
	読写方式	借借借借借借借	
	漢語意識	提起笔来把书修。	
日本語訳	筆を取り上げ手紙を書きます。		
1.2	ペー文原文	四九从头听原故	【王】“原故”应为“缘故”。（「原故」は「縁故」とすべき。） 【富田】中国語で「缘故」は「原故」ともいうので，「原」は借字のままでも問題ないと思われる。 【遠藤】楊漢本では「四九听我说原故」となっている。字句は写本間で変化する。
	音声記号	ɣi ⁵⁵ ɕou ³¹ ʃhou ⁴² thou ⁴² thiu ³³ juc ⁴² ku ⁵⁵	
	漢語直訳	四九从头听原故	
	読写方式	借借借借借借借	
	漢語意識	四九从头听原因。	
日本語訳	四九は最初からわけを聞きなさい。		
1.3	ペー文原文	药单子来开给咗	【王】白语某些词有n-, l-混读现象。多数地方“你”读no ³¹ ，此处读lo ³¹ 。（白語ではいくつかの語でn-とl-を混読する現象が見られる。多くの地域では「你」はno ³¹ と読むが，ここではlo ³¹ と読む。） 【富田】「咗 [lo ³¹]」と「你 [ni ³¹]」（1.4）を使い分けるのは何故か？ 「药」は本句・2.4・3.4・4.3・6.3・6.4ではjou ⁴⁴ と読み訓，4.4ではjo ³⁵ と読み借字とされる。趙本も同じ（趙2.4参照）。「单」は趙本ではta ³⁵ と読むときは訓読，ta ⁴⁴ と読むときは借字とされており，ひとまずそれに従う（趙2.4参照）。「子」は本句・6.1ともにɣi ⁴⁴ と読み訓とされるが，趙本4.2は同じくɣi ⁴⁴ と読み借字とする。 【遠藤】量詞 [le ²¹] の音仮名「来」が白語文脈を指示するため，仮に「你」と表記してもここは [ni ³¹] と借字で発音するのではなく，訓で [lo ³¹] と発音すべし。ここで自造字が用いられるのは，より厳密に白語文脈を意識し [lo ³¹] と発音させるための配慮だろう。楊漢本には「药单子来开与你」とあり，「你」で表記されている。テキストの音声化に慣れない場合に，音仮名が用いられる例と思われる。
	音声記号	jou ⁴⁴ ta ³⁵ ɣi ⁴⁴ le ²¹ khur ⁵⁵ kw ³¹ lo ³¹	
	漢語直訳	药单子个开给你	
	読写方式	調調調音調調自	
	漢語意識	这个药单开给你。	
日本語訳	この処方箋をあなたに書きます。		
1.4	ペー文原文	你小心护用	【遠藤】音仮名がなく漢語文脈なので，「你 [ni ³¹]」と発音する。楊漢本は「你小心服用」である。「护」は「服」の借字の簡略表記として，「気をつけて服用しなさい」とすべきか。
	音声記号	ni ³¹ ɕo ³¹ ɕu ³³ xu ⁵⁵ jou ⁵⁵	
	漢語直訳	你小心护用	
	読写方式	借借借借借	
	漢語意識	你小心护用。	
日本語訳	気をつけて守りなさい。		
2.1	ペー文原文	第一龙王吐单方	【富田】「单方」とは単一薬剤で処方された薬のこと。趙本8.2ではta ⁴⁴ fa ⁴⁴ と読み借字とされる。 趙本では「第一东海龙王角」。 【遠藤】趙丕鼎本2.4では「藥单」。「单方」は処方というほどの意か。 英台宝巻では「東海青龍肝」であったものが，趙丕鼎本では「東海の竜王の角」，ここでは「竜王の薬」とテキスト間での変更が起きている。
	音声記号	ti ⁵⁵ ji ³⁵ lu ⁴² uo ⁴² no ⁴⁴ ta ³² fa ³²	
	漢語直訳	第一龙王助词??	
	読写方式	借借借借借自??	
	漢語意識	第一龙王的。	
日本語訳	第一に竜王の薬。		
2.2	ペー文原文	第二王母前面香	【富田】趙本では「第二蟠桃洑（酒）一干（缸）」（興延本では第六）。蟠桃とは西王母の庭になる桃のことで，本句の王母も西王母（王母娘々）のこと。 【遠藤】楊漢本は「第二王母次吐方」，漢語訳は「第二王母身上香」。楊漢本に比べて，「前面香」という表記は，訓読みこそしているが漢語文脈的である。英台宝
	音声記号	ti ⁵⁵ ɕi ⁵⁵ ua ⁴² mu ³¹ tei ³² mi ³² ɕou ³⁵	
	漢語直訳	第二王母前面香	
	読写方式	借借借借借訓訓訓	
	漢語意識	第二王母面前香。	

II. ペー 出 台 本 集 成

	日本語訳	第二に王母の前（で焚かれる）香、	巻には「王母殿上香」とあり、漢語表現がテキストレベルで白語化されていく様子がうかがえる。
2.3	ペー文原文	第三千双吐拉灰	【富田】趙本では「第三千年瓦上双（霜）」（興延本では第四）。 「千」は趙本では tche ³³ と読み借字とする。「拉灰」の意味は不明。 【遠藤】[su ⁵⁵] は「灰」の訓だろう。「拉」[la ⁴⁴] は音仮名だろうが、不明。楊漢本は「第三用千双吐灰」と表記する。千年の灰を用いるということ。
	音声記号	ti ⁵⁵ sa ³³ tchi ⁵⁵ sua ⁴⁴ no ⁴⁴ la ⁴⁴ su ⁵⁵	
	漢語直訳	第三千岁的？灰	
	読写方式	借借訓訓自？訓	
	漢語意識	第三千年？？灰、	
	日本語訳	第三に千年（積もった）灰を、	
2.4	ペー文原文	当药白壇香	【王】唱词中“香”为训读，不押韵。应为借词读法 ca ⁴⁴ ，才能与第二句押韵。（歌詞の「香」は音読で、韻を踏まない。借字風に ca ⁴⁴ と読めば、第二句と押韻する。） 【富田】「白壇（檀）香」は趙本では「八用白耘」（檀）香）。 2.2の「香」も cou ⁵⁵ と読むので、このままで押韻すると思われる。趙本では ca ⁴⁴ と借字風に読む。 「当」は「煨」の意ではないかとされるが、「当」を「～に当たる（～とする）」の意にとれば、借字となる。 【遠藤】楊漢本では「再用白檀香」。英台宝巻で「王母殿上香」一句であったものが、それが千年の灰や白檀香などと具体的に語られている。声の文化の語りの方方法であろう。
	音声記号	ta ²¹ jou ⁴⁴ per ³⁵ tha ⁴² cou ⁵⁵	
	漢語直訳	煨药白壇香	
	読写方式	音訓借借訓	
	漢語意識	煨？药白壇香。	
	日本語訳	温めて白檀香の薬とします。 （白檀香の薬とします。）	
3.1	ペー文原文	四要万年瓦上霜	【富田】趙本では「四要其（麒）林（麟）胆」。「瓦上霜」は趙本では「第三千年瓦上双（霜）」。 【遠藤】趙丕鼎本 3.3 は「双」を音仮名として「霜」[sua ⁴⁴] を表記するが、ここは漢語文脈であるために「霜」を借字として用いる。
	音声記号	sj ⁴⁴ jo ⁵⁵ ua ⁵⁵ ni ⁴² ua ³¹ sa ⁵⁵ sua ⁴⁴	
	漢語直訳	四要万年瓦上霜	
	読写方式	借借借借借借借	
	漢語意識	四要万年瓦上霜、	
	日本語訳	四番目に万年瓦の上に（積もった）霜がおり、	
3.2	ペー文原文	天鹅蛋快白引吾	【富田】「引吾 [ju ³¹ xou ⁵⁵]」の発音は漢語由来の発音とは思えず意味が通じない。 【遠藤】量詞 [khue ⁵⁵] の音仮名「快」によって一句は白語文脈となる。
	音声記号	xe ⁵⁵ ou ²¹ se ³² khue ⁵⁵ per ⁴² ju ³¹ xou ⁵⁵	
	漢語直訳	天鹅蛋颗白？？	
	読写方式	訓訓訓音？？？	
	漢語意識	天鹅蛋？？？？，	
	日本語訳	白鳥の卵を？？？？，	
3.3	ペー文原文	第五套闹麦角长	【富田】「套闹麦」三語で「毛驴（背の低いロバ）」の音仮名か？ 【遠藤】「套闹麦」は音仮名。動物名、量詞「对」は、音仮名になる。ここまで楊漢本と基本的には同一句であったが、ここから順番が入れ替わる。楊漢本では、3.3に麒麟の角がきて、その後 7.1に「套闹明角长」と記される。「角」が同一であるために、テキスト間での改変があったことも考えられる。 英台宝巻に「角」は登場しないが、趙丕鼎本では「東海竜王角」、楊漢本では「麒麟角」（3.3）「ロバの角」（7.1）、楊興庭本では「ロバの角」（3.3）が薬劑とされる。
	音声記号	ti ⁵⁵ u ³¹ tho ⁵⁵ no ⁵⁵ mer ²¹ ky ⁴⁴ tsa ²¹	
	漢語直訳	第五毛驴角对	
	読写方式	借借音音音訓音	
	漢語意識	第五毛驴角一对、	
	日本語訳	第五にロバの角一对を、	
3.4	ペー文原文	取己药汤误	【王】唱词中“误”唱作 tou ⁵⁵ ，虽然意义相同，但“误”和 tou ⁵⁵ 之间无音义关系，不符白文读写规则，应唱为 u ⁵⁵ 或 ou ⁵⁵ ，方为“误”字音读。（歌詞の「誤」は tou ⁵⁵ と読み、意味は同じでも、「誤」と tou ⁵⁵ の間に音のつながりは無く、白文読写規則に合わない。u ⁵⁵ もしくは ou ⁵⁵ と読めば、「誤」字を音仮名とすることができる。）
	音声記号	tchj ³³ tci ³¹ jou ⁴⁴ tsɔ ²¹ tou ⁵⁵	
	漢語直訳	烧？拢药汤些	
	読写方式	音音訓訓音	
	漢語意識	和药汤同煮。	
	日本語訳	薬湯と一緒に煮ます。	

			<p>【富田】趙本6.2では「魯 [lo³¹」を「撓」の音仮名とする。「湯」は趙本5.4ではtha³³と読み借字とされる。</p> <p>【遠藤】楊漢本(3.4)は「奶已药汤悟」、漢語訳は「与药汤同用」。ここの「誤」は楊漢本の「悟」と同じく音仮名だろう。ということは、歌い手は「誤」を[tou⁵⁵]と発音しているのである。なぜこういうことが起ったのか。王鋒氏に確認したところ、[tou⁵⁵]には「液体少し(液体一些)」の意味があるので、その意味で読み間違えたのだとのことであった。</p>
4.1	<p>ペー文原文 我是他的救命丹</p> <p>音声記号 uo³¹si⁵⁵tha³³ti⁴²tcou⁵⁵miu⁵⁵ta⁴⁴</p> <p>漢語直訳 我是他的救命丹</p> <p>読写方式 借借借借借借借</p> <p>漢語意識 我是他的救命丹,</p> <p>日本語訳 私は彼の救命丹です,</p>	<p>【富田】「救命丹」に近い表現として、釈読9-2-2「賢妹是我救命(tco⁵⁵miu⁵⁵)星」, 釈読11-1-3「救命(tco⁵⁵miu⁵⁵)仙丹[ta³³]乎怎利(好有您)」がある。</p> <p>【遠藤】楊漢本(4.1)では「我是他的归命丹」。</p>	
4.2	<p>ペー文原文 蟠桃酒干用第六</p> <p>音声記号 pha⁴²tha⁴²tcou³¹ka³⁵jou⁵⁵ti⁵⁵lu³⁵</p> <p>漢語直訳 蟠桃酒缸用第六</p> <p>読写方式 借借借音借借借</p> <p>漢語意識 第六要用蟠桃酒,</p> <p>日本語訳 第六に蟠桃酒がいり,</p>	<p>【富田】趙本では「第六文(蚊)子眼宽拉(匪匪)」。「蟠桃酒」は趙本では「第二蟠桃丸(酒)一干(缸)」。【遠藤】「干」は借字「罐」の簡略表記で借字だろう。漢語文脈である。楊漢本(4.2)は「蟠桃酒汁用第六」。「蟠桃」は仙人の食べる桃。西王母の育てているモモで数千年に一度結実。不老不死になれる。「第六」を句末に置くのは押韻によるだろう。英台宝巻の「王母殿上香」が、王母関係の「蟠桃」, 「金童」(4.3), 「玉女」(4.4)へと拡大している。「王母」をキーワードとして連想されるものが歌いこまれていくのは声の文化のあり方だろう。テキストはそれを反映している。</p>	
4.3	<p>ペー文原文 金童面吐皿药堂</p> <p>音声記号 tcou⁴⁴thu⁴²micr⁴⁴no⁴⁴ka⁴⁴jou⁴⁴ta²¹</p> <p>漢語直訳 金童结构助词把药熬</p> <p>読写方式 借借音自特训音</p> <p>漢語意識 金童他呢来熬药,</p> <p>日本語訳 金童彼が薬を煎じ,</p>	<p>【富田】「金童」は趙本7.3では「金童玉女来温药」。</p> <p>【遠藤】[micr⁴⁴no⁴⁴] (面吐)は結構助詞である。漢語訳の「他呢」にあたる。「皿」は漢語「把」(~を)に相当するが、ここでは自造字が用いられ、次句では借字「把」が用いられる。この差は、こちらは音仮名、自造字の白語結構助詞があることにより白語文脈が指示され、一方、次句にはこれがないために漢語文脈が指示されるからだろう。ここには同じ助詞を繰り返すのではなく、変えていこうという意識が働いているが、それは一首の変化をつけるための工夫(変え字法)といっていいかもしれない。</p>	
4.4	<p>ペー文原文 玉女把药送</p> <p>音声記号 jou³⁵ny³¹pa³¹jo³⁵sou⁵⁵</p> <p>漢語直訳 玉女把药送</p> <p>読写方式 借借借借借</p> <p>漢語意識 玉女把药送。</p> <p>日本語訳 玉女が薬を届けます。</p>	<p>【王】唱詞中“送”按借词读法唱作 sou⁵⁵, 声调为高平调。或应按训读唱作 sou³³, 为中平调, 更符合大本曲押韵规则。(歌詞の「送」は借字風に読むと sou⁵⁵となり、声調が高平調となる。訓読風に読めば sou³³となり、中平調となるので、大本曲の押韻規則により合致する。)</p> <p>【富田】「玉女」は趙本7.3では jy⁵⁵mi³¹と読み、釈読では y⁵⁵ny³¹と読む。釈読1-2-2「女(ny³¹)伴(扮)」は「女」の読みが本句と同じ。</p> <p>【遠藤】「送」は、王注に言われるように、押韻の規則に準じれば訓読[sou³³]が望ましいのだが、実際には借字[sou⁵⁵]で発音されている。これは一句が漢語文脈であることによるだろう。押韻の規則は発音を指示するが、絶対的ではない。</p>	

II. ペー曲台本集成

5.1	ペー文原文	观音吐花瓶呷水	【富田】趙版は「第七观音干路(甘露)水」。「水」は趙版では <i>sue</i> ³¹ と読み、借字とされる。 【遠藤】「水」は、趙丕鼎本は漢語文脈であり借字、こは助詞を表す自造字によって白語文脈が指示され、訓読みされている。楊漢本(5.1)は「观音水瓶呷吐水」であり、「水瓶」「水」が訓読みされている。
	音声記号	<i>kua</i> ⁴⁴ <i>ju</i> ⁴⁴ <i>no</i> ⁴⁴ <i>xuo</i> ³⁵ <i>pie</i> ²¹ <i>xu</i> ³¹ <i>cy</i> ³³	
	漢語直訳	观音 助詞 花瓶 里 水	
	読写方式	借 借 自 訓 訓 自 訓	
	漢語意識	观音瓶中甘露水,	
	日本語訳	観音の花瓶のなかの水,	
5.2	ペー文原文	梁兄病体才有救	
	音声記号	<i>lia</i> ⁴² <i>çou</i> ⁴⁴ <i>piu</i> ⁵⁵ <i>lhi</i> ³¹ <i>tshc</i> ⁴² <i>jou</i> ³¹ <i>tçou</i> ⁵⁵	
	漢語直訳	梁兄病体才有救	
	読写方式	借 借 借 借 借 借 借	
	漢語意識	梁兄病体才有救,	
	日本語訳	梁兄の病体はきつと救われる,	
5.3	ペー文原文	想要阿川洋恨保	【王】唱詞中“恨”唱作 <i>tcei</i> ⁴² , 意为“见”, 音义都不合。或应为音读字, 读 <i>xu</i> ⁵⁵ , 意为“了, 掉”, 表示“抓”动作的完成。(歌詞中の「恨」を [<i>tcei</i> ⁴²] と歌っている。意味は「見る」だが、音義ともに合わない。或いは、「恨」は音仮名で [<i>xu</i> ⁵⁵] と発音し、「～し終わる」という意で、「抓」(うまくいく)という動作の完了を表しているか。) 【遠藤】楊漢本(5.3)はすべて音仮名で「忍保阿川抓恨保」と記されており、「叫他服完这剂药」と漢語訳されている。
	音声記号	<i>ca</i> ³¹ <i>nou</i> ⁴⁴ <i>a</i> ³¹ <i>tshua</i> ³³ <i>ja</i> ²¹ <i>tcei</i> ⁴² <i>po</i> ³¹	
	漢語直訳	想要一把抓见他	
	読写方式	借 訓 訓 音 音 音 音	
	漢語意識	想要一把都抓全,	
	日本語訳	一つまみですべてうまくいくでしょう。	
5.4	ペー文原文	要等嗯次扣	【王】此句意义不太好理解。(この句の意味はよくわからない。) 【遠藤】楊漢本(5.4)は、「要等我次扣」。漢語訳は「我身将他救」。「等」は音仮名で「救う」を表している。
	音声記号	<i>nou</i> ⁴⁴ <i>tu</i> ³³ <i>çur</i> ⁵⁵ <i>tsh</i> ⁵⁵ <i>khou</i> ⁵⁵	
	漢語直訳	要等 我的 身体	
	読写方式	訓 訓 音 音 音	
	漢語意識	要等我的人。	
	日本語訳	この私が必要なのです。	
6.1	ペー文原文	父光头蚊子为扣漏	【富田】趙本では、「第十直付(蜂)光(骨)头架」「第六文(蚊)子眼宽拉(眶眶)」。「付(蜂)光(骨)头」の読みは <i>fv</i> ⁵⁵ <i>kua</i> ⁴⁴ <i>tu</i> ²¹ で本句と同じだが、「文(蚊)子眼宽拉(眶眶)」の読みは、 <i>vu</i> ⁴² <i>tsj</i> ⁴⁴ <i>je</i> ³¹ <i>khua</i> ³³ <i>la</i> ³³ で多少異なる。ちなみに「白漢詞典」(剣川方言)によれば、 <i>fvnl</i> のみで蜜蜂の意。 【遠藤】「父光头」は蜜蜂の骨だが、趙丕鼎本(5.2)は「直付光头架」(音音音訓訓)、釈読(5.2)は「直付光等架」(音音音音訓)。楊正華本(4.2)は「直父吐光頭」(音音自音訓)。蜜蜂をペー語で <i>tsj</i> ³⁵ というが、 <i>[fv</i> ⁵⁵ <i>]</i> のみでも蜜蜂を表すか。動物名ゆえの音仮名表記。「骨」はペー語で <i>kua</i> ⁴⁴ <i>tu</i> ²¹ , 三本ともに音仮名(光)+訓(頭)と表記している。「骨」という身体呼称であるから、音仮名表記になるか。音仮名表記が統一された例である。「为扣漏」はまぶた。英台宝巻で「眼精匡」と記される漢語が、白語化する過程については、趙丕鼎本4.2参照。
	音声記号	<i>fv</i> ⁵⁵ <i>kua</i> ⁴⁴ <i>tu</i> ²¹ <i>mu</i> ⁴⁴ <i>tsj</i> ⁴⁴ <i>ue</i> ³³ <i>khou</i> ⁵⁵ <i>lou</i> ⁵⁵	
	漢語直訳	蜂 骨 头 蚊 子 眼 框	
	読写方式	音 音 訓 訓 訓 音 音 音	
	漢語意識	蜜蜂骨头, 蚊子眼眶,	
	日本語訳	蜜蜂の骨, 蚊の眼,	
6.2	ペー文原文	三双瓦号吐滑霜	【富田】3.1「四要万年瓦上霜」と内容がかぶっている。 【遠藤】趙丕鼎(3.3)は「瓦上双」, 釈読(3.3)は「瓦上霜」。ここは「上」を「吐」と自造字で表記したため、白語文脈となり、「霜」が音仮名表記された。趙丕鼎(3.3)参照。 楊漢本(6.2)は「三年瓦房上吐扯受」と記し、「三年瓦房上霜冻」と漢語訳する。「扯」は「凍る」を表す音
	音声記号	<i>sa</i> ⁵⁵ <i>sua</i> ⁴⁴ <i>uei</i> ³² <i>xo</i> ³¹ <i>no</i> ⁴⁴ <i>tçhc</i> ⁵⁵ <i>sou</i> ⁵⁵	
	漢語直訳	三年 瓦 房 上 滑 霜	
	読写方式	訓 訓 訓 音 自 訓 音	
	漢語意識	瓦房上面三年霜,	
	日本語訳	瓦屋の上の三年の霜,	

			<p>仮名か。 趙丕鼎 (33) は「千年瓦上双」を [tche³³ne42ua³¹su55sua44] と発音する。ここでは「三年」になっているのは、この「千」[tche³³] が「消寿」[tchei⁵⁵sou⁵⁵] に移ってしまったためだと思われる。ここには、文字を介さない記憶によって伝承される歌のあり方が、テキストを書き変えていくさまが伺える。</p>
6.3	<p>ペー文原文 堂药要汝住住居 音声記号 ta²¹jou⁴⁴nou⁴⁴zy³¹tsy⁵⁵tsy⁵⁵ty³⁵ 漢語直訳 熬药要用珍珠罐 読写方式 音訓訓音音音音 漢語意識 熬药要用珍珠罐。 日本語訳 薬を煮るには珍珠の壺を使います。</p>	<p>【遠藤】楊漢本 (6.3) は「弹药要汝柱柱君」と記され、「熬药要用珍珠罐」と漢語訳される。趙丕鼎本 (7.1) は「塘药要用真朱君」と記される。[ta²¹] は代動詞のため音仮名表記されるが、さまざまな文字が用いられている。</p>	
6.4	<p>ペー文原文 气药玻璃六 音声記号 tchi⁵⁵jou⁴⁴po⁴⁴li³⁵lu³⁵ 漢語直訳 倒药玻璃？ 読写方式 音訓借借音 漢語意識 玻璃杯？倒药 日本語訳 ガラスの杯で薬を注ぎます。</p>	<p>【王】“六”字意义不明确，待考。（「六」字の意味がよくわからない。） 【遠藤】杯（コップ）のペー語が [lu³⁵] であり、「六」はその音仮名ということだろう。楊漢本 (6.4) は「倒药玛瑙盂」と記し、「玛瑙盂服用」と漢語訳している。「盂」は「杯」であり訓読みされている。</p>	
7.1	<p>ペー文原文 肚本蛋快本心乃 音声記号 tu⁵⁵pu³³se³²khuc⁵⁵pu⁵⁵ci³⁵ne²¹ 漢語直訳 鸡蛋蛋颗它的心个 読写方式 借借訓音音訓音 漢語意識 鸡蛋蛋的蛋心心 日本語訳 雄鶏の卵の黄身</p>	<p>【王】“公鸡”，各地白语都称 ke³⁵po³⁵（直译为“鸡公”），唯大理海西一带称 tu⁵⁵pu³³，来源不明。（「雄鶏」を各地のペー語ではみな [ke³⁵po³⁵]（直訳すると「鶏雄」である）というが、大理洱海西側では [tu⁵⁵pu³³] という。所以は不明。） 【富田】本句の原文「本」は pu³³ と pu⁵⁵ の二通りの読み方をしている。後者は本来三人称所有格を表す自造字の「味」だったものを略したのではないか。趙本・華本は pu³¹ と読む。 【遠藤】楊漢本では 7.1, 7.2 にロバの角、母虎の乳が入る。当該句に相当するのは、7.3「再汝鸡博蛋水豆」であり、「再用公鸡下的蛋」と漢語訳される。[tu⁵⁵] は鶏の訓読み、[pu³³] は雄の音仮名だろう。ここでは「肚本」と音仮名で記されている（借借ではなく音音だろう）。白語文脈を指示するのが「本」や「快」。「本」「乃」によって表される性別や量詞、指示語である。</p>	
7.2	<p>ペー文原文 再汝苗皆岸十豆 音声記号 tse⁴⁴zy³¹mi³²ke³⁵a³⁵si³¹tu⁵⁵ 漢語直訳 再用驢鸡尿些 読写方式 訓音音音音音音 漢語意識 再用几滴驢鸡尿。 日本語訳 さらに数滴の驢鶏（去勢された鶏）の尿、</p>	<p>【遠藤】楊漢本 (7.3)「再汝鸡博蛋水豆」の「水豆」がこの「十豆」に当たるのだろう。「水」が [si³¹]（尿）の訓読み、量詞 [tu⁵⁵] が音仮名「豆」によって示されている。雄鶏の卵と尿は、楊漢本のように一句でも言えるし当該の 7.1, 7.2 のように二句でも言える。押韻も [tu⁵⁵] で踏んでいる。ここも口承の記憶の方法がテキストを変換する例である。 楊漢本は、この後、蚤の骨、蚊の骨、五六月の霜、竜宮で薬を煎じることが 7.4, 7.5, 8.1, 8.2 に述べられる。楊興庭本はその部分をカットしている。</p>	
7.3	<p>ペー文原文 英台生登哥吐病 音声記号 ju³⁵tche⁵⁵su³³tu⁴⁴ko⁴⁴no⁴⁴pe³¹ 漢語直訳 英台认得哥的病 読写方式 訓訓音音訓自訓 漢語意識 英台知道哥的病。 日本語訳 英台は兄の病を知っています。</p>	<p>【遠藤】趙丕鼎本 (1.4) に「助詞 [tu⁴⁴] は「灯」で表記されていた。 助詞が「登」（音仮名）と吐（自造語）で示されることで、一句は白語文脈となり、「登」の直前の動詞 [su³³]（知る）は、音仮名「生」で表記される。楊漢本は「英台认登哥吐病」と記す。助詞「登」の直前は訓読みされている。</p>	

II. ペー曲台本集成

7.4	ペー文原文	相 会 不 能 够	【遠藤】楊漢本 (8.4) はここと同じ。第7首の具体的な処方では異同があるが、楊漢本第8首末尾の二句、楊興庭本第7首末尾の二首がほとんど同一で終わっている。句の最終部をきちんと記憶しておけば、それ以前はいろいろに歌えるという、口承の記憶法がテキストを作っている例。
	音声記号	ca ⁴⁴ xue ⁵⁵ pu ³⁵ nu ⁴² kou ⁵⁵	
	漢語直訳	相 会 不 能 够	
	読写方式	借 借 借 借 借	
	漢語意訳	不能再相会	
	日本語訳	再び会うことはないでしょう。	
8.1	ペー文原文	秀 香 花 板 買 保 付	【王】“秀”字意义不明确，待考。「秀」字の意義は不明確。 【遠藤】楊漢本では、棺桶を買うモチーフの前に、これらの薬を全て探し出しさえすれば、死ななくて済む。探し出せなければ死ななくてはならない」という歎きのことが一首四句 (9.1~9.4) で記される。この部分は楊漢本の一つの聞かせどころだろうが、他の諸本はあっさりとし、もし薬がきかなかつたら、として棺桶モチーフに続いている。楊興庭本は、再び会うことはないから、棺桶を用意するという流れになっており、ここでの盛り上がりカットしている。芸の聞かせどころをどう作るかによって、テキストは自在に編集される。
	音声記号	cou ⁵⁵ cou ³⁵ xuo ³⁵ pe ³³ me ³² po ³¹ fy ³²	
	漢語直訳	秀? 香 花 板 买 它 副	
	読写方式	音? 訓 訓 訓 訓 音 訓	
	漢語意訳	好好买副棺材板。	
	日本語訳	準備よく棺材を買っておいてください。	
8.2	ペー文原文	恐 其 梁 兄 身 亡 故	【遠藤】楊漢本 (10.2) は「苦其梁兄身亡故」と記し、「若凡梁兄身亡故」と漢語訳する。「苦其」を「もし」を表す音仮名とみているのだろう。十分なペー語として「もし」は [khu ³¹ tchi ⁴²] と発音されているのだが、もともとこの語は漢語 (「恐其」) 由来のペー語であったか。であれば、ここは訓調、あるいは音音とすべきではないか。
	音声記号	khu ³¹ tchi ⁴² lia ⁴² cou ⁴⁴ su ³³ ua ⁴² ku ⁵⁵	
	漢語直訳	恐 其 梁 兄 身 亡 故	
	読写方式	借 借 借 借 借 借 借	
	漢語意訳	万一梁兄身亡故。	
	日本語訳	もし梁兄が亡くなってしまったら、	
8.3	ペー文原文	埋 在 南 山 大 路 口	【遠藤】楊漢本 (10.3) では「埋在南口五台山」、趙丕鼎 (9.3)、釈読 (9.3) では「葬在南山大路旁」、楊正華本 (8.2) では「安葬在南山」となっている。京劇の「柳蔭記」では、英台が「(唱散板) 若是病症无有望，迟早相见南山旁。生不同价死同葬，(哭頭) 不枉结拜一炉香」と歌っている。
	音声記号	me ⁴² tse ⁵⁵ na ⁴² sa ³³ ta ⁵⁵ lu ⁵⁵ khou ³¹	
	漢語直訳	埋 在 南 山 大 路 口	
	読写方式	借 借 借 借 借 借 借	
	漢語意訳	埋在南山大路口。	
	日本語訳	南山の分かれ道に埋めてください。	
8.4	ペー文原文	来 往 一 条 路	
	音声記号	le ⁴² ua ³¹ ji ³⁵ thio ⁴² lu ⁵⁵	
	漢語直訳	来 往 一 条 路	
	読写方式	借 借 借 借 借	
	漢語意訳	来往一条路。	
	日本語訳	行き来するのは一本道の。	
9.1	ペー文原文	马 甲 来 良 皿 武 尼	【王】“良”字白文文献一般表示“人”，读为 ni ²¹ ，此处唱词中读作 ju ³⁵ ，表示“来”，较少见。「良」字は白文文献では一般に「人」を表し、[ni ²¹] と発音する。ここで歌い手が [ju ³⁵] と発音して「来る」を表すのは異例である。
	音声記号	ma ³¹ tca ³⁵ ŋe ²¹ ju ³⁵ ka ⁴⁴ vɿ ³³ ni ⁴⁴	
	漢語直訳	马 甲 走 来 把 妇 入	
	読写方式	借 借 訓 特 自 音 音	
	漢語意訳	马甲结婚来迎亲。	
	日本語訳	馬家の人が私を迎えに着たら、	
9.2	ペー文原文	我 去 本 前 面 宋 香	【王】“本”原应读 pu ⁵⁵ ，意为“它的”(指坟墓)。唱词中唱作 ni ⁵⁵ ，意为“您”。意义都通，但按曲本原文应为前者。「本」は本来 [pu ⁵⁵] と発音し、「彼の(墳墓)」の意である。歌い手はここで二人称尊称 [ni ⁵⁵] と発音している。意味は通るが原文に則れば [pu ⁵⁵] と発音すべきである。 【遠藤】音仮名表記の意味が理解されたところで、それを「お墓の前で」と言わずに「あなたの前で」と読み換えている。ここに歌い手の表現力がある。演唱の
	音声記号	ŋo ³¹ ŋe ³¹ ni ⁵⁵ tci ³² mi ³² su ⁵⁵ cou ³⁵	
	漢語直訳	我 去 您 前 面 烧 香	
	読写方式	訓 訓 訓 訓 訓 音 訓	
	漢語意訳	我去您墓前烧香。	
	日本語訳	私はあなたの墓前で焼香します。	

			場における高揚のなかで、音假名が乗り越えられていく。 なお、楊漢本(112)は「我叭你面前送香」と記し、「我到坟前来进香」と漢語訳している。「あなたの前で」という表記が、お墓の前でと理解されている。
9.3	ペー文原文	四 九 央 去 卍 上 付	【遠藤】趙丕鼎本、釈読は馬家に嫁がされる自らを歎く場面が12~14句にわたって綿々と歌われるのに対して楊漢本、楊興庭本はあっさりとしている。
	音声記号	ʃ ⁵⁵ tʃou ³¹ ja ³² ŋeɪ ²¹ ka ⁴⁴ sa ³² fɥ ⁴⁴	
	漢語直訳	四 九 回 去 卍 上 付	
	読写方式	借 借 音 訓 自 音 音	
	漢語意識	四九回去多祈福。	
	日本語訳	四九、帰って福を祈りなさい。	
9.4	ペー文原文	怕 姓 命 难 救	【王】曲本原文“性”誤作“姓”。(原文は「性」を誤って「姓」に作る。)
	音声記号	pha ⁵⁵ ʃu ⁵⁵ miu ⁵⁵ na ⁴² tʃou ⁵⁵	
	漢語直訳	怕 性 命 难 救	
	読写方式	借 借 借 借 借	
	漢語意識	难救山伯命。	
	日本語訳	梁山伯の命を救うのは難しい。	

4-3. 「柳蔭記」—楊正華本



「柳蔭記」を演唱する楊正華氏（左）

【現地調査】

演唱：楊正華（1956年生，大理市海東鎮向陽江上村。初中文化）

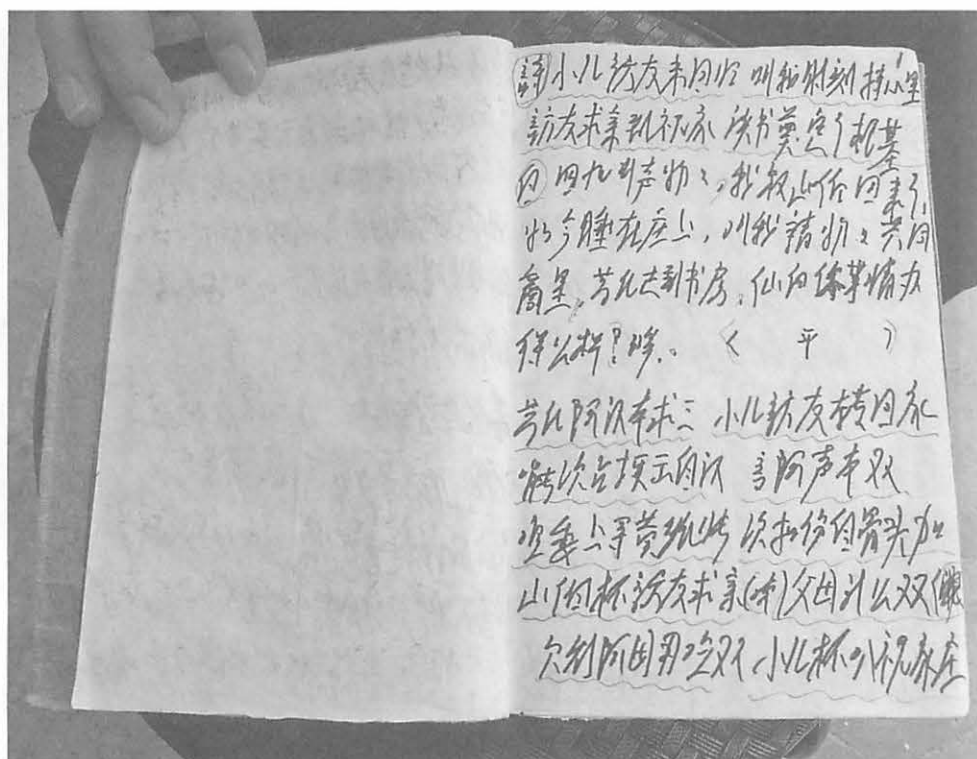
調査：富田美智江・岡部隆志・遠藤耕太郎・張錫祿・張正軍（通訳），2011年8月11日，於大理市歴史文化研究所（大理武廟会内）

【資料作成】

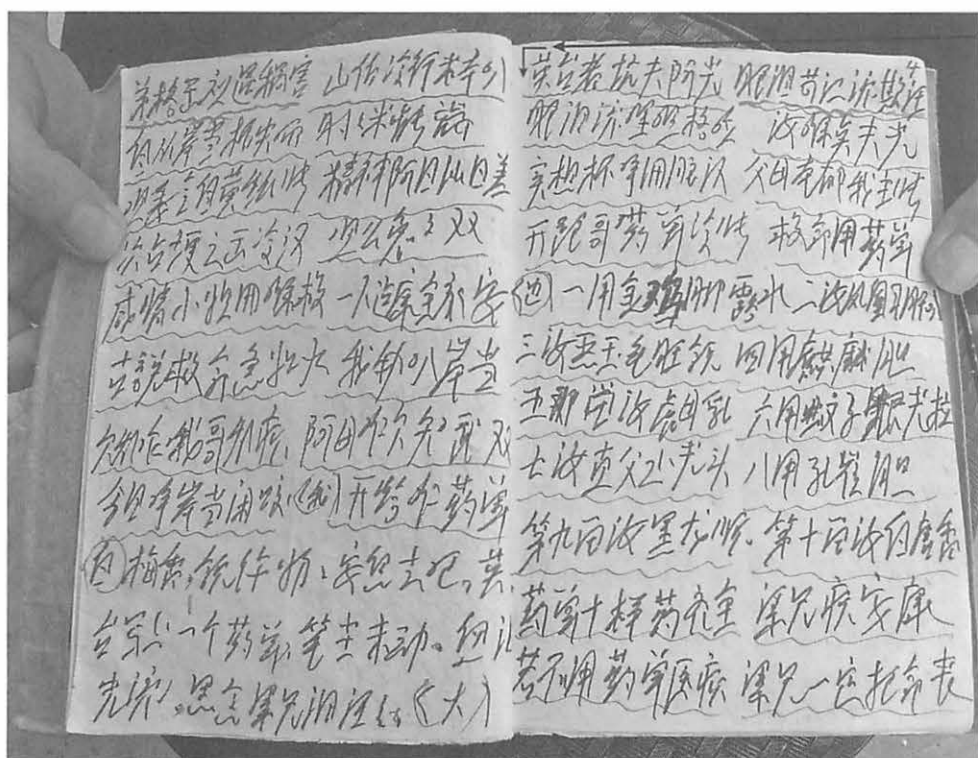
翻字・音声記号転写・漢語訳・読写方式：王鋒（中国社会科学院民族研究所），趙彥婕（中央民族大学少数民族語言文学系2010級）

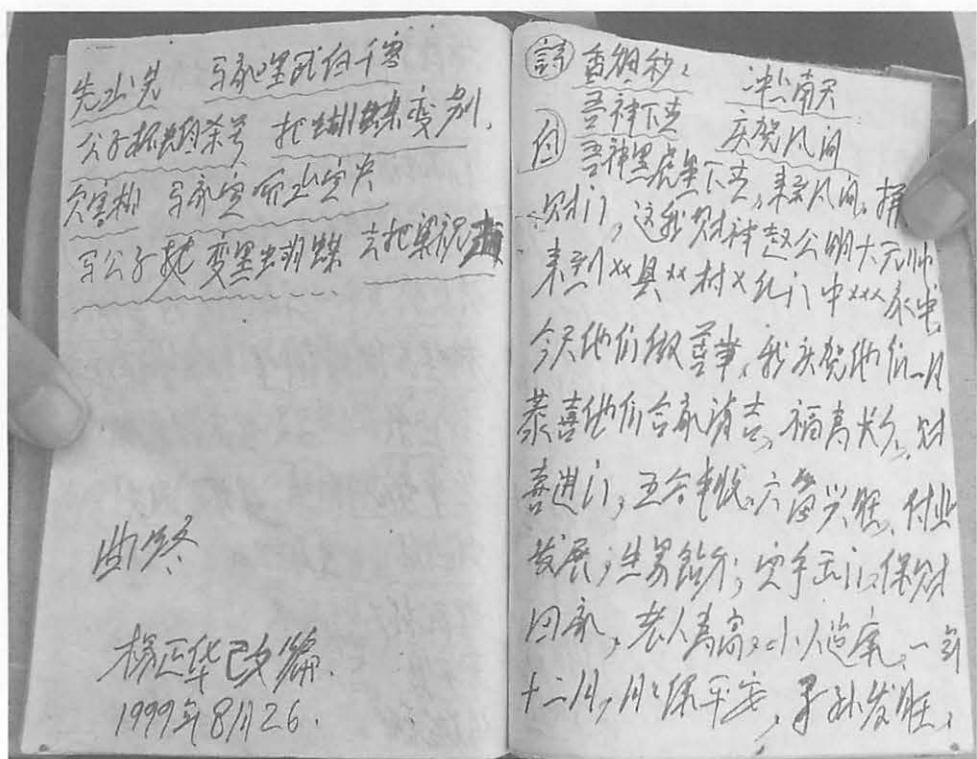
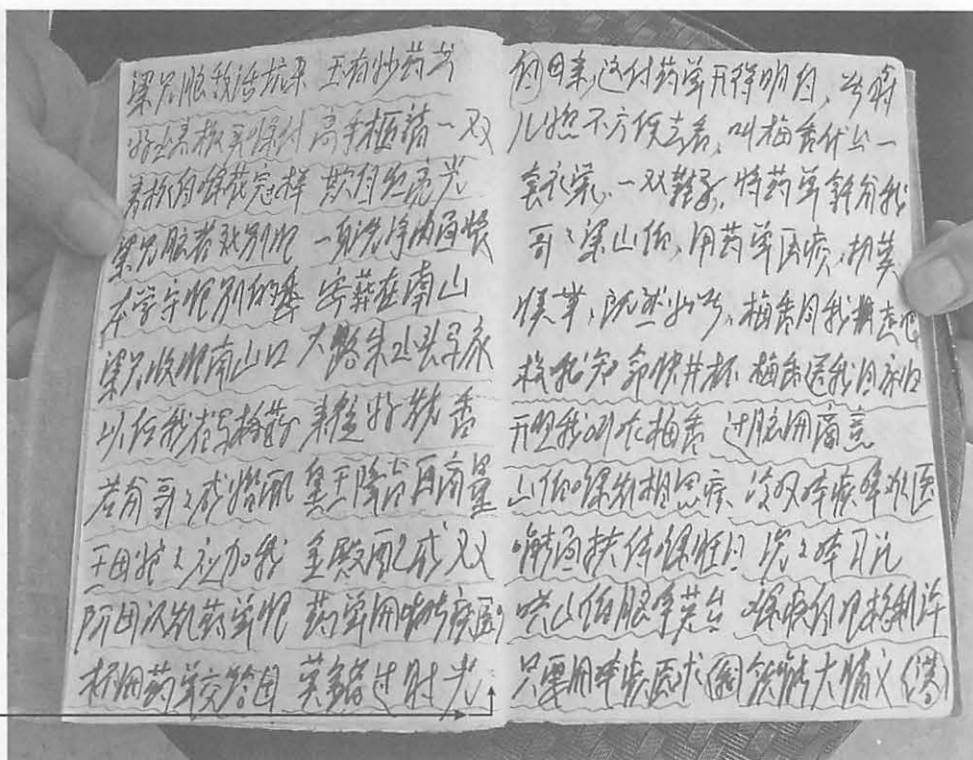
日本語訳：遠藤耕太郎

注釈・備注：王鋒・富田美智江・遠藤耕太郎



楊正華氏所藏「柳蔭記」





序号	訳積項	原文・音声記号・訳文	注釈・備注
1.1	ペー文原文	英 台 者 坑 夫 阿 光	【富田】趙本 1.1, 楊興庭本はともに筆の意を表すのに「笔」と借字を用い、pi ³⁵ と読むが、正華本は筆を「夫 [fy ⁴⁴]」と読み、発音がかなり異なる。ちなみに『白漢詞典』(劍川方言)では筆の意の語として bairx, fvr ^x の二種類が挙げられている。fvr ^x guanrt で一本の筆の意。 【遠藤】富田注の指摘の通り、ここは筆の意のペー語 [fy ⁴⁴] を音仮名表記している。この句にも端的に現れるように、楊正華本は全体的にペー語文脈が多い。
	音声記号	ju ³⁵ the ⁵⁵ tser ³¹ khur ⁴⁴ fy ⁴⁴ a ³¹ kua ⁴⁴	
	漢語直訳	英 台 拿 起 笔 一 支	
	読写方式	借 借 音 音 音 音 音	
	漢語意識	英台拿起一支笔。	
	日本語訳	英台は筆を取り上げた。	
1.2	ペー文原文	眼 泪 苟 江 流 欺 汪	【富田】原文「苟江 [ko ³³ ky ³⁵]」は、(両目から)ふた筋の意の白語。趙本 1.2 は「汪 [ua ⁴⁴]」を借字とする。 【遠藤】「英台宝卷」には処方箋の直後、梁老夫人が「接了英台小姐一封詩信。眼泪汪汪。」と白文で語られる場面がある。趙本のように涙があふれる様子としての「汪汪」がまずあり、声による伝承のあり方によって「外」の音仮名と理解されることになったのだろう。「眼泪」は訓読み。趙本 1.2 参照。
	音声記号	mi ⁴² ci ⁴² ko ³³ ky ³⁵ kuw ²¹ tchi ⁴⁴ ua ⁴⁴	
	漢語直訳	眼 泪 两 江 流 出 外	
	読写方式	訓 訓 音 訓 訓 音 音	
	漢語意識	两行眼泪往外流。	
	日本語訳	二筋の涙があふれ出し。	
1.3	ペー文原文	眼 泪 流 哩 咀 格 咂	【王】“哩”读 ni ⁴⁴ 。一些汉字在白语中 n-, l- 不分, 原读 l- 的汉字在白语中读为鼻音声母 n-。有些曲本中用“利”表示“您”, 也同此理。(「哩」は [ni ⁴⁴] と発音する。ペー語には [n-] と [l-] の区別がないため、漢語においてもともと [l-] と発音する漢字はペー語において鼻音化し [n-] と発音される。多くの曲本の中で、「利」によって「您」を表記するのもこの原理による。) 【遠藤】「眼泪」は訓読み、「咀格」は音仮名によって、身体語彙を表している。
	音声記号	mi ⁴² ci ⁴² kuw ²¹ ni ⁴⁴ ty ³³ ker ³⁵ xu ³¹	
	漢語直訳	眼 泪 流 入 嘴 巴 里	
	読写方式	訓 訓 訓 音 音 音 自	
	漢語意識	眼泪流进嘴巴里。	
	日本語訳	涙は流れて口に入った。	
1.4	ペー文原文	汝 唸 点 夫 光	【王】点笔: 又称“染翰”, 即以笔蘸墨。(「点笔」は「染翰」ともいう。墨水に筆をつけること。)
	音声記号	zy ³¹ po ³¹ tse ³¹ fy ⁴⁴ kua ⁴⁴	
	漢語直訳	用 它 蘸 笔 支	
	読写方式	音 自 訓 音 音	
	漢語意識	用它来蘸笔。	
	日本語訳	その涙を筆につけます。	
2.1	ペー文原文	实 想 杯 咄 咄 脑 汉	【王】曲本“咄”字应读 tsu ³⁵ , 意为“(走)来”。唱段中唱为 xu ⁵⁵ , 意为“(走)掉,了”, 应为误唱。(曲本の「咄」字は [tsu ³⁵] と発音すべきで、方向指示語「〜に・〜へ」の意。歌い手は [xu ⁵⁵] と発音しているが、それでは「〜してしまう」「〜した」を意味してしまう。おそらく誤って歌ったのであろう。) 【富田】見る(看)の意を表すのに、趙本は「看 [a ³³]」(2.1), 「看 [kha ⁵⁵]」(9.1) と訓説ないしは借字を用いる。 【遠藤】王注によれば、咄はペー語の方向指示語である。歌い手は方向指示語のようなペー語の付属語をかなり自由に他の語に入れ替えて歌っているということだ。意味はおかしくなるだろうが、そこに観客を納得させるような韻律的な言い切りの形が用いられたということかもしれない。
	音声記号	ʂi ³⁵ cia ³¹ pe ⁴⁴ tsu ³⁵ ka ⁴⁴ no ³¹ xa ⁵⁵	
	漢語直訳	实 想 走 来 把 你 看	
	読写方式	借 借 音 自 自 音 音	
	漢語意識	多想去把你看望。	
	日本語訳	あなたのお見舞いに行きたいけれど、	
2.2	ペー文原文	父 母 本 郁 我 主 张	【遠藤】「不」「让」のような付属語が音仮名表記される。
	音声記号	tou ³⁵ mɔ ³³ pu ³¹ jou ³⁵ ŋɔ ³¹ tsy ³¹ tsa ⁴⁴	
	漢語直訳	父 母 不 让 我 主 张	
	読写方式	訓 訓 音 音 訓 借 借	
	漢語意識	父母不准我主张。	
	日本語訳	父母は私の思いを許してくれない。	

II. ペー曲台本集成

2.3	ペー文原文	开 跟 哥 药 单 冷 张	
	音声記号	khui ⁵⁵ kuu ³¹ ko ⁴⁴ jou ⁴⁴ ta ³⁵ lu ³¹ tsou ³⁵	
	漢語直訳	开 给 哥 药 单 这 张	
	読写方式	借 音 借 借 借 音 訓	
	漢語意識	开个药单给哥哥。	
	日本語訳	処方箋を書いて兄さんに渡します。	
2.4	ペー文原文	救 命 用 药 单	
	音声記号	tsou ⁵⁵ miu ⁵⁵ jou ⁵⁵ jo ³⁵ ta ⁴⁴	
	漢語直訳	救 命 用 药 单	
	読写方式	借 借 借 借 借	
	漢語意識	救命要用它。	
	日本語訳	命を救うにはこれが必要です。	
3.1	ペー文原文	一 用 金 鸡 脚 露 水	【富田】以下、「用」と「汝」の使い分けについて、王鋒氏は歌い手の自由であり、厳密な使い分けがあるわけではないという。
	音声記号	ji ³⁵ jou ⁵⁵ tsui ⁴⁴ tsi ⁴⁴ tsou ³⁵ lu ⁵⁵ sui ³¹ .	
	漢語直訳	一 用 金 鸡 脚 露 水	
	読写方式	借 借 借 借 借 借 借	
	漢語意識	一用金鸡脚露水。	
	日本語訳	第一に金鶏の脚の露水。	
3.2	ペー文原文	二 汝 凤 凰 习 肝 呖	【富田】趙本 6.4 は「心干肺 [ci ³⁵ ka ³⁵ phia ⁴⁴]」とする。「习」を心臓の意の音仮名で用いる例は釈読 (5.3.3, 13.15.3) にも見られる。ただし釈読はここでは「心肝肺」(13.6.6) と書き借字。
	音声記号	ci ⁵⁵ zy ³¹ fu ⁵⁵ xua ⁴² ci ³⁵ ka ³⁵ phia ⁴⁴	
	漢語直訳	二 用 凤 凰 心 肝 肺	
	読写方式	借 音 借 借 音 借 自	
	漢語意識	二用凤凰心肝肺。	
	日本語訳	第二に鳳凰の心臓と胆と肺。	
3.3	ペー文原文	三 汝 恶 玉 毛 旺 领	【王】原文“恶玉”指整鱼，或系别字，但也可作音读解。(原文「恶玉」は「髓魚」をさす。あるいは別字かもしれないが、いずれにせよ音仮名である。) “领”应读 niu ³² ，文中误唱为 tsui ³¹ ，虽都为“根”的意义，但 tsui ³¹ 与曲本原文不符。(「领」は [niu ³²] と発音すべきだが、歌い手は [tsui ³¹] と発音している。両者ともに「根」の意であるが、[tsui ³¹] は曲本原本とは異なっている。【富田】趙本 4.1 は「毛」を mo ⁴² と読み、借字とする。趙本 15.1 に「二三根 [kou ³³ sa ⁵⁵ tsui ³¹]」とあり、そこは訓字とされる。【速藤】ペー語数量詞を音仮名で「領」と表記しながら、それを [tsui ³¹] と発音している。音仮名表記が口頭での表現の厳密さを求めて用いられるのではないことを表す例。
	音声記号	sa ³³ zy ³¹ o ³⁵ ji ⁴² ma ²¹ ua ⁵⁵ niu ³²	
	漢語直訳	三 用 整 鱼 毛 几 根	
	読写方式	借 音 音 音 訓 音 音	
	漢語意識	三用几根整鱼毛。	
	日本語訳	第三に数本の大魚の毛。	
3.4	ペー文原文	四 用 麒 麟 胆	【富田】趙本 3.4 は「其林肝 [tsi ²¹ liu ³⁵ ta ³³]」とする。【速藤】趙本 3.4 参照。
	音声記号	si ⁵⁵ jou ⁵⁵ tsh ⁴² liu ⁴² ta ³³	
	漢語直訳	四 用 麒 麟 胆	
	読写方式	借 借 借 借 訓	
	漢語意識	四用麒麟胆。	
	日本語訳	第四に麒麟の胆。	
4.1	ペー文原文	五 那 留 汝 虎 母 乳	【富田】「留」を「いる(要)」の意の音仮名として用いる例は、趙本・楊興庭本には見当たらない。そもそも楊正華本では原文に「要」字を用いる例がない。【速藤】富田注の指摘は、1.3に見られるようなペー語における n 音と l 音の区別のなさによるが、地域的に音仮名に使用する文字の使い分けがあることを示している。
	音声記号	u ³¹ nei ⁵⁵ niu ⁴⁴ zy ³¹ lo ²¹ mo ³³ pa ⁴²	
	漢語直訳	五 呢 要 用 虎 母 乳	
	読写方式	借 音 音 音 訓 訓 訓	
	漢語意識	五呢要用老虎乳。	
	日本語訳	第五には、虎の乳が入り用で。	

4.2	ペー文原文	六用蚊子眼光拉	【富田】原文「光」は、他(1.1, 1.2, 4.2, 7.2, 11.2, 趙本, 楊興庭本)は全て kua ⁴⁴ と読むが, このみ khua ³³ と読む。
	音声記号	lu ³⁵ ju ⁵⁵ vuu ⁴² tsj ³¹ je ³¹ khua ³³ la ⁴⁴	
	漢語直訳	六用蚊子眼框	
	読写方式	借借借借借音音	
	漢語意識	六用蚊子双眼框,	
日本語訳	第六に蚊の二つの眼,		
4.3	ペー文原文	七汝直父吐光头	【遠藤】楊興庭本 6.1 参照。
	音声記号	tchi ⁴⁴ zy ³¹ tsj ³⁵ fy ⁵⁵ no ⁴⁴ kua ⁴⁴ tu ²¹	
	漢語直訳	七用蜜蜂的骨头	
	読写方式	借音音音自音調	
	漢語意識	七用蜜蜂骨架子,	
日本語訳	第七に蜜蜂の骨格,		
4.4	ペー文原文	八用孔雀胆	
	音声記号	pa ³⁵ ju ⁵⁵ khu ³¹ tchi ³⁵ ta ³³	
	漢語直訳	八用孔雀胆	
	読写方式	借借借借調	
	漢語意識	八用孔雀胆。	
日本語訳	第八に孔雀の胆,		
5.1	ペー文原文	第九留汝黑龙须	【富田】趙本 5.1 は「青龙须 [tchiu ³³ lu ⁴² cy ⁴⁴]」と、「龍」を借字で読む。
	音声記号	ti ⁵⁵ tsj ³¹ niu ⁴⁴ zy ³¹ xu ⁴⁴ ny ²¹ cy ⁴⁴	
	漢語直訳	第九要用黑龙须	
	読写方式	借借音音調調借	
	漢語意識	第九要用黑龙须,	
日本語訳	第九に黒龍の鬚,		
5.2	ペー文原文	第十留汝白糖香	【王】「唐」应为“糖”, “香”应为“霜”, 后者为音误字。(「唐」は「糖」, 「香」は「霜」とあるべきところ。後者は発音を誤った文字遣いである。 【富田】原文「唐香」の読写方式は音仮名か。 【遠藤】「唐」は「檀」の簡略表記であり, 白檀の香だろう。この点につき王鋒氏は, 「白糖」は「石比霜」(亜ヒ酸)という甘い毒薬であるとした。
	音声記号	ti ⁵⁵ tsj ³⁵ niu ⁴⁴ zy ³¹ pcj ³⁵ tha ⁴² cia ⁴⁴	
	漢語直訳	第十要用白糖霜	
	読写方式	借借音音借借借	
	漢語意識	第十要用白糖霜。	
日本語訳	第十に白糖の霜。		
5.3	ペー文原文	药单十样药齐全	【富田】趙本 5.3 は「十样」を sj ³⁵ ja ⁵⁵ と読み, 借字とする。
	音声記号	jo ³⁵ ta ⁴⁴ tsj ⁴² ju ³⁵ jo ³⁵ tchi ⁴² shuc ⁴²	
	漢語直訳	药单十样药齐全	
	読写方式	借借調調借借借	
	漢語意識	药单十样药齐全,	
日本語訳	もし処方通りの十種の薬が揃ったら,		
5.4	ペー文原文	梁兄疾安康	【富田】趙本・楊興庭本は「梁兄」を lia ⁴² co ⁴⁴ と読み, 釈読は na ⁴² co ³³ と読む。 【遠藤】富田注の指摘は, ペー語の n 音 l 音の区別のなさに起因する。 趙本, 楊興庭本ともに, 副薬の記述が続くのだが, 楊正華本は副薬を記さない。これは「英台宝卷」と同様である。口承されていくなかで, 突飛もない薬の記述が膨らんでいったのが趙本, 楊興庭本であろう。
	音声記号	lia ⁴² ciou ⁴⁴ tci ³⁵ a ⁴⁴ kha ³³	
	漢語直訳	梁兄疾安康	
	読写方式	借借借借借	
	漢語意識	梁兄得安康。	
日本語訳	梁兄さんの病気は治るでしょう。		
6.1	ペー文原文	若不用药单医疾	【王】曲本为“疾”, 但唱词中为“病”(曲本中の「疾」を歌い手は「病」と発音している。 【富田】「病」字は借字では piu ⁵⁵ (楊興庭本 5.2), 訓読では pei ³¹ (趙本 1.4, 楊興庭本 7.3)と読む。 【遠藤】歌い手にとって, 「疾」字は「病」字と, 意味発音ともに同じということである。
	音声記号	zuo ⁵⁵ pu ³⁵ ju ⁵⁵ jo ³⁵ ta ⁴⁴ ji ⁴⁴ piu ⁵⁵	
	漢語直訳	若不用药单医病	
	読写方式	借借借借借借借	
	漢語意識	要是不用此药单,	
日本語訳	もし処方通りの薬が揃わなかったら,		

II. ペー曲台本集成

6.2	ペー文原文	梁 兄 一 定 把 命 喪	
	音声記号	lia ⁴² ciou ⁴⁴ ji ³⁵ tiau ⁵⁵ pa ³¹ miu ⁵⁵ sa ⁵⁵	
	漢語直訳	梁 兄 一 定 把 命 喪	
	読写方式	借 借 借 借 借 借 借	
	漢語意訳	梁兄一定把命喪。	
	日本語訳	梁兄さんはきっと命を落とします。	
6.3	ペー文原文	梁 兄 腦 敵 活 坑 朶	【遼藤】補助動詞「～できない」は音仮名表記。
	音声記号	lia ⁴² ciou ⁴⁴ no ³¹ ti ²¹ xer ⁵⁵ khur ⁴⁴ tuo ³³	
	漢語直訳	梁 兄 你 若 活 起 不 得	
	読写方式	借 借 音 音 訓 音 音	
	漢語意訳	梁兄你若不能活。	
	日本語訳	梁兄さんがもし生きられないのなら、	
6.4	ペー文原文	玉 有 妙 药 芳	【王】此处“玉”字难解，或为“无”。“芳”为“方”误字。按赵丕鼎本子，此处为“再有一剂好药方”。此曲本意义似与赵丕鼎不合。（この「玉」字は難解である。あるいは「无」か「芳」の誤字か。趙丕鼎本では「再有一剂好药方」となっている。この句は意味は趙本とは異なるようだ。） 【遼藤】王注は「玉」を「无」の誤字として解釈している。楊興庭本は「英台は兄の病を知っています。再び会うことはないでしょう」（7.3～4）とあった後に、棺材の話題に入るが、これと近い発想である。ただし、「无」とは読めない字であり、歌い手も[jy ⁵⁵]と発音している。「又」の音仮名などと解せば、趙丕鼎本の「再」と近い解釈になる。
	音声記号	ji ⁵⁵ jou ³¹ mio ⁵⁵ jo ³⁵ fa ⁴⁴	
	漢語直訳	? 有 妙 药 方	
	読写方式	? 借 借 借 借	
	漢語意訳	没(?)有好药方。	
	日本語訳	よい処方はありません。	
7.1	ペー文原文	好 吐 寿 板 买 呢 付	【王】寿板：即棺材板。原文“买”，应读mer ³² ，唱词中唱为tsj ⁵⁵ ，意为“做”。（「寿板」とは棺材板である。原文「买」は[mer ³²]と発音すべきであるが、歌い手は[tsj ⁵⁵]と発音している。これは代動詞「做」である。） 【富田】趙本8.3は「活期寿坊买保格[xuo ³⁵ tʰhi ³³ sou ⁵⁵ fa ⁴² mer ³² po ³¹ ker ³⁵]」で、漢語意訳は棺材の量詞を「口」としているが、楊興庭本8.1は「秀香花板買保付[cou ⁵⁵ cou ³⁵ xuo ³⁵ per ³³ mer ³² po ³¹ fy ³²]」で漢語意訳は量詞を本句と同じく「副」とする。楊正華本では棺桶を作る職人も二人である(6.4)こと、量詞の「副」は一對の意であることからすると、梁山伯の棺だけでなく、英台の棺も一緒に用意させた意となるか。
	音声記号	xu ³³ no ⁴⁴ sou ⁵⁵ pa ³¹ mer ³² po ³¹ fy ³²	
	漢語直訳	好的 寿 板 买 它 副	
	読写方式	副 自 借 借 副 自 音	
	漢語意訳	买上一副好寿材。	
	日本語訳	一幅のよい棺材を買ってください。	
7.2	ペー文原文	高 手 木 匠 请 一 双	
	音声記号	ko ⁴⁴ sou ³¹ mu ³⁵ tca ⁵⁵ tchiu ³¹ ji ³⁵ sua ⁴⁴	
	漢語直訳	高 手 木 匠 请 一 双	
	読写方式	借 借 借 借 借 借 借	
	漢語意訳	再请两位好木匠。	
	日本語訳	二人の優れた木匠を呼んで、	
7.3	ペー文原文	寿 板 自 呢 花 冠 样	【王】呢字应读po ³¹ ，唱词中唱为tsj ⁵⁵ ，意为“(做)成”。“冠”，应读kua ⁴⁴ ，唱词中唱为khou，可能误为“寇”字。（呢字は[po ³¹]と発音すべきだが、歌い手は[tsj ⁵⁵]と発音している。「(造り)あげる」という意。「冠」は[kua ⁴⁴]と発音すべきだが、歌い手は[khou]と発音している。おそらく「寇」字と語読しているか。）
	音声記号	sou ⁵⁵ pa ³¹ tsj ⁵⁵ po ³¹ xua ⁴⁴ kua ⁴⁴ ja ⁵⁵	
	漢語直訳	寿 板 做 它 花 冠 样	
	読写方式	借 借 音 自 借 借 借	
	漢語意訳	寿房做成花冠样。	
	日本語訳	棺桶を花の冠のように造ってもらい、	

7.4	ペー文原文	欺 自 红 亮 光	
	音声記号	tchi ³³ tsj ⁵⁵ xuo ³⁵ lia ⁴⁴ kua ⁴⁴	
	漢語直訳	漆 成 红 亮 光	
	読写方式	音 音 訓 訓 借	
	漢語意識	漆得红又亮。	
日本語訳	赤く明るく漆をかけてください。		
8.1	ペー文原文	梁 兄 脑 者 死 别 恨	【王】原文“脑”，唱词唱作 ni ³¹ （“你”）；“者”，唱词唱作 zuo ⁵⁵ （“若”）。“死别恨”，唱词唱作 sɿ ³¹ xou ⁵⁵ （“死后”），都直接用借词唱，与曲本原文不符。（原文「脑」を歌い手は [ni ³¹]（「你」）と発音している。「者」を [zuo ⁵⁵]（「若」）と発音している。「死别恨」を歌い手は [sɿ ³¹ xou ⁵⁵]（「死后」）と発音している。これらは歌い手が直接借詞として歌ったためであり、曲本原本とは異なっている。） 【遠藤】「死别恨」を漢語 [sɿ ³¹ xou ⁵⁵] で発音するということは、音仮名表記は絶対ではないということを示している。聞き手を意識して自由に変えることができるのだろう。リズムは3音節が2音節になるが、この点につき王録氏は問題ないという。
	音声記号	lia ⁴² ciou ⁴⁴ no ³¹ tsej ²¹ ci ³³ piej ³⁵ xu ⁵⁵	
	漢語直訳	梁 兄 你 若 死 掉 了	
	読写方式	借 借 音 音 訓 音 音	
	漢語意識	梁兄你若离人世。	
日本語訳	梁兄さんがこの世を去ってしまうなら、		
8.2	ペー文原文	一 身 洗 净 内 面 装	
	音声記号	ji ³⁵ sur ³³ ci ³¹ tsej ⁵⁵ lue ⁵⁵ mi ⁵⁵ tsua ⁴⁴	
	漢語直訳	一 身 洗 净 内 面 装	
	読写方式	借 借 借 借 借 借 借	
	漢語意識	洗净身子好装棺。	
日本語訳	体をきれいにして棺に安置してください。		
8.3	ペー文原文	本 学 守 恨 别 的 委	
	音声記号	pu ³¹ co ³⁵ sou ³¹ xu ⁵⁵ pi ³⁵ ti ⁴⁴ ue ³³	
	漢語直訳	不 消 葬 在 别 的 位 置	
	読写方式	音 音 音 音 借 借 音	
	漢語意識	墓地不用他处找。	
日本語訳	墓地はよそで探してはいけません。		
8.4	ペー文原文	安 葬 在 南 山	
	音声記号	a ⁴⁴ tse ⁵⁵ tse ⁵⁵ na ⁴² sa ⁴⁴	
	漢語直訳	安 葬 在 南 山	
	読写方式	借 借 借 借 借	
	漢語意識	就葬在南山。	
日本語訳	必ず南山に葬ってください。		
9.1	ペー文原文	梁 兄 收 恨 南 山 口	
	音声記号	lia ⁴² ciou ⁴⁴ sou ³² xu ⁵⁵ na ⁴² sa ⁴⁴ khou ³¹	
	漢語直訳	梁 兄 葬 在 南 山 口	
	読写方式	借 借 音 音 借 借 借	
	漢語意識	梁兄葬在南山口。	
日本語訳	梁兄さんは南山の峠道に葬られます。		
9.2	ペー文原文	大 路 朱 吐 头 马 家	【富田】趙本・楊興庭本・釈説は、馬家を「馬甲」と表記する。
	音声記号	to ³¹ thu ⁴⁴ ɰ ⁴⁴ no ⁴⁴ tu ²¹ ma ³¹ tcia ⁴⁴	
	漢語直訳	大 路 条 上 头 马 家	
	読写方式	訓 訓 音 自 訓 借 借	
	漢語意識	大路顶头是马家。	
日本語訳	通りの正面に馬家があります。		

II. ペー山台本集成

9.3	ペー文原文	以后我省马格莽	
	音声記号	ji ³¹ xou ⁵⁵ ɣo ³¹ su ³¹ ma ³¹ ke ³⁵ xo ³¹	
	漢語直訳	以后我给马家家	
	読写方式	借借訓音借音音	
	漢語意識	以后我嫁马家门。	
	日本語訳	私が馬家に嫁ぐことになったら、	
9.4	ペー文原文	来往好烧香	【富田】「好」の読みは、6.3ではxu ³³ 。趙本9.4は「好烧香 [xo ³¹ so ⁴⁴ ɕa ⁴⁴]」。趙本の「好」の読み方は、xo ³¹ とxo ³² の二種類ある。
	音声記号	le ⁴² ua ³¹ xo ³² so ⁴⁴ ɕia ⁴⁴	
	漢語直訳	来往好烧香	
	読写方式	借借借借借	
	漢語意識	来往好烧香。	
	日本語訳	行き滞りに線香をあげます。	
10.1	ペー文原文	若与哥哥成婚配	【遠藤】以下10.4までは、英台が来世での二人の結婚を夢想する場面であり、楊正華本特有の部分である。英台の死後、二人は再会して馬家に復讐するというペー族の柳蔭記下巻を先取りする内容である。
	音声記号	zuo ⁵⁵ ɣj ³¹ ko ⁴⁴ ko ⁴⁴ tshu ⁴² xue ⁴⁴ phci ⁵⁵	
	漢語直訳	若与哥哥成婚配	
	読写方式	借借訓訓借借借	
	漢語意識	若与哥哥成婚配。	
	日本語訳	もし兄さんと結婚できるなら、	
10.2	ペー文原文	皇王降旨再商量	
	音声記号	xua ⁴² ua ⁴² ɕia ⁵⁵ tsj ³¹ tse ⁵⁵ sa ⁴⁴ lia ⁴⁴	
	漢語直訳	皇王降旨再商量	
	読写方式	借借借借借借借	
	漢語意識	皇王降旨再商量。	
	日本語訳	皇王が勅諭を下し再び相談し、	
10.3	ペー文原文	王母娘娘应加我	【王】原文“应加我”，应读为ju ⁵⁵ ɕia ⁴⁴ ɣo ³¹ ，唱词直接唱为汉语借词“来接我”，与曲本原文不符。（原文「应加我」は[ju ⁵⁵ ɕia ⁴⁴ ɣo ³¹]と発音すべきであるが、歌い手は漢語を借りて「来接我」[le ⁴² ɕe ³⁵ uo ³¹]と発音している。）
	音声記号	ua ⁴² mu ³¹ nia ⁴² nia ⁴⁴ ju ⁵⁵ ɕia ⁴⁴ ɣo ³¹	
	漢語直訳	王母娘娘来接我	
	読写方式	借借借借音音訓	
	漢語意識	王母娘娘来接我。	
	日本語訳	西王母が私を迎えに来るでしょう。	
10.4	ペー文原文	金殿配成双	
	音声記号	ɕiu ⁴⁴ ti ⁵⁵ phe ⁵⁵ tshu ⁴² sua ⁴⁴	
	漢語直訳	金殿配成双	
	読写方式	借借借借借	
	漢語意識	金殿配成双。	
	日本語訳	金殿で私たちは結婚します。	
11.1	ペー文原文	阿母汉灯药单恨	
	音声記号	a ³¹ mo ³³ xa ⁵⁵ tu ⁴⁴ jo ³⁵ ta ⁴⁴ xu ⁵⁵	
	漢語直訳	阿妈看得药单了	
	読写方式	訓訓音音借借音	
	漢語意識	阿妈看到药单后、	
	日本語訳	お母様が処方箋を見たら、	
11.2	ペー文原文	药单而呢疾医叭	【王】原文“疾”，唱词唱作“病”pe ³¹ 。（原文「疾」を歌い手は「病」[pe ³¹]と発音している。）
	音声記号	jo ³⁵ ta ⁴⁴ ka ⁴⁴ nu ⁵⁵ pe ³¹ ji ⁴⁴ phia ⁴⁴	
	漢語直訳	药单把你的病医到	
	読写方式	借借特自訓借自	
	漢語意識	要拿药单治你病。	
	日本語訳	処方通りの薬を集めて病を治すかもしれません。	

11.3	ペ-文原文	杯 皿 药 单 交 答 母	【王】原文“答” ta ³² ，唱词唱作“给” ku ³² 。（原文「答」[ta ³²]を，歌手は[ku ³²]「给」と発音している。）
	音声記号	pe ⁴⁴ ka ⁴⁴ jo ³⁵ ta ⁴⁴ ɕi ⁴⁴ ta ³² mo ³³	
	漢語直訳	走 把 药 单 交 给 母	
	読写方式	音 特 借 借 借 音 訓	
	漢語意識	去把药单给母亲。	
	日本語訳	行ってこの処方箋をお母様に渡しなさい。	
11.4	ペ-文原文	莫 错 过 时 光	
	音声記号	mo ³⁵ ʃshuo ⁵⁵ kuo ⁵⁵ ʃ ⁴² kua ⁴⁴	
	漢語直訳	莫 错 过 时 光	
	読写方式	借 借 借 借 借	
	漢語意識	莫错过时光。	
	日本語訳	時間を無駄にはしてはいけません。	

4-4. 「柳蔭記」一釋読本（趙丕鼎本〔イ〕）

音声記号・中国語訳…段伶（張錫祿・甲斐勝二主編『中国白族白文文献釈読』広西師範大学出版社、2011年）

日本語訳…富田美智江

凡例 ペー語原文（白文）中、□は音仮名及び自造字を表す。

	原文／音声記号／漢語直訳	漢語意訳	日本語訳
1-1	英台提起笔, ju ³³ the ⁴² thi ⁴² tchi ³¹ pi ³⁵ 英台提起笔	英台提起笔,	英台は筆を取り上げた。
1-2	两眼泪汪汪。 na ³¹ je ³¹ le ⁵⁵ ua ³³ ua ³³ 两眼泪汪汪	两眼泪汪汪。	両眼に泪をためながら。
1-3	拜上梁兄莫悲伤, pe ⁵⁵ sa ⁵⁵ na ⁴² co ³³ mo ³⁵ sa ³³ cu ³³ 拜上梁兄莫悲伤	拜上梁兄莫悲伤,	拜啓梁兄 悲しまないでください。
1-4	听到阿哥[利登]病, tche ⁵⁵ tu ⁴⁴ ?a ³¹ ko ³³ ni ⁵⁵ tu ⁴⁴ pe ³³ 听到阿哥您得病	听到哥哥得了病,	兄さんが病気になるのと聞き。
1-5	叫我心不安。 tco ⁵⁵ ɲo ³¹ cui ³³ pu ³⁵ ?a ³³ 叫我心不安	叫我心不安。	私の心は落ち着きません。
2-1	想要去看[利], ca ³¹ no ⁴⁴ ɲe ³¹ ?a ³³ ni ⁵⁵ 想要去看您	想要去看你,	あなたの看病に行きたいのですが,
2-2	[弟]怕[利]人说。 ti ³¹ ke ³⁵ ca ³⁵ ni ³¹ sua ⁴⁴ 只怕闲人说	只怕闲人说。	余人に何と言われるかが心配です。
2-3	英台我[自]打击[利], ju ³³ the ⁴² ɲo ³¹ tsɿ ⁵⁵ te ⁴⁴ tci ³⁵ tci ⁴² 英台我则急得团团转	英台我急得团团转,	英台私はいてもたってもいられず,
2-4	开给哥[利]药单来, khu ⁵⁵ ku ³¹ ko ³³ no ³³ jo ⁴⁴ ta ³⁵ ne ³¹ 开给哥哥上一药单	开给哥哥一药单,	兄さんに処方箋を書きましたが,
2-5	实在[利]难[番]. sɿ ³¹ tse ⁵⁵ xe ⁵⁵ na ³¹ ca ⁵⁵ 实在艰难极	实在太难了。	それは本当に大変でした。
3-1	第一东海龙王角, ti ⁵⁵ ji ³⁵ to ³³ xe ³¹ lo ⁴² ua ⁴² ku ³⁵ 第一东海龙王角	第一东海龙王角,	第一に東海竜王の角,
3-2	第二蟠桃酒一缸, ti ⁵⁵ e ⁵⁵ pa ⁴² tho ⁴² tco ³¹ ji ³⁵ ka ³³ 第二蟠桃酒一缸	第二蟠桃酒一缸,	第二に蟠桃酒ひと甕
3-3	第三千年瓦上霜, ti ⁵⁵ sa ³³ tchi ³³ ne ⁴² ua ³¹ sa ⁵⁵ sua ³³ 第三千年瓦上霜	第三千年瓦上霜,	第三に千年瓦に積った霜,
3-4	四要麒麟胆。 sɿ ⁵⁵ jo ⁵⁵ tchi ⁴² liu ⁴² ta ³³ 四要麒麟胆	四要麒麟胆。	四つ目に麒麟の肝がいります。
4-1	第五鳌鱼尾上毛, ti ⁵⁵ u ³¹ yo ⁵⁵ y ⁴² vy ³¹ sa ⁵⁵ mo ⁴² 第五鳌鱼尾上毛	第五鳌鱼尾上毛,	第五に大亀の尾の毛,

4-2	第六蚊子眼眶眶。 ti ⁵⁵ lu ³⁵ vu ⁴² tsɿ ³¹ je ³¹ kua ³³ la ⁴⁴ 第六蚊子眼眶眶	第六蚊子眼眶眶。	第六に蚊の眼のまぶた。
4-3	第七观音甘露水。 ti ⁵⁵ tɕhi ³⁵ kua ³³ ju ³³ ka ³³ lu ⁵⁵ ɕy ³¹ 第七观音甘露水	第七观音甘露水。	第七に観音の甘露水。
4-4	八用白檀香。 pa ³⁵ jo ⁵⁵ pe ³⁵ tha ⁴² ɕa ³³ 八用白檀香	八用白檀香。	八つ目に白檀の香。
5-1	第九要用青龙须。 ti ⁵⁵ tɕo ³¹ jo ⁵⁵ jo ⁵⁵ tɕhuw ⁵⁵ lo ²¹ ɕy ³³ 第九要用青龙须	第九要用青龙须。	第九に青龍のひげが入り用で。
5-2	第十匣付光等架。 ti ⁵⁵ sɿ ³⁵ tsɿ ³⁵ fɿ ⁵⁵ kua ⁴⁴ tu ³¹ tɕa ⁴⁴ 第十蜜蜂骨架	十要用蜜蜂骨架。	第十に蜜蜂の骨格。
5-3	十样如能找得全。 sɿ ³³ ja ⁵⁵ zu ⁴² nu ⁴² tɕo ³¹ tu ³⁵ tɕhui ⁴² 十样如能找得全	十样如能找得全。	十種全部集めることができたなら。
5-4	起死回生汤。 tɕi ³¹ sɿ ³¹ xui ⁴² su ³³ tha ³³ 起死回生汤	起死回生汤。	起死回生のスープ (となるでしょう)。
6-1	开好药单开药引。 khe ³³ xo ³¹ jo ³⁵ ta ⁵⁵ khe ³³ jo ³⁵ ju ³¹ 开好药单开药引	开好药单开药引。	処方箋を書き終わったので服薬を書きましょう。
6-2	三样药引配拢它： sa ³³ ja ⁵⁵ jo ³⁵ ju ³¹ phe ⁵⁵ lo ³¹ tha ³³ 三样药引配拢它	三样药引配拢它：	三種の服薬をそれに合わせます：
6-3	公鸡蛋[利]老虎乳。 tu ⁵⁵ pu ³¹ se ³² li ⁵⁵ lo ³¹ mo ³³ pa ⁴² 鸡蛋和母虎奶	鸡蛋和母虎奶。	おんどの卵と虎の乳。
6-4	跳蚤心肝肺。 khu ³³ ci ⁴⁴ ci ³⁵ ka ³⁵ phia ⁴⁴ 跳蚤心肝肺	跳蚤心肝肺。	ノミの心臓・肝・肺。
7-1	煎药要用真珠罐。 ta ³¹ jo ⁴⁴ no ⁴⁴ zy ³¹ tsu ³³ tsy ³³ tɕy ³⁵ 煎药要用珍珠罐	煎药要用珍珠罐。	薬を煎じるのに真珠のつぼが要り。
7-2	吃药要用玛瑙杯。 ɿ ³¹ po ³¹ no ⁴⁴ zy ³¹ ma ³¹ no ³¹ ka ⁴⁴ 吃它要用玛瑙杯	吃药要用玛瑙杯。	薬を飲むのに玛瑙の杯が要り。
7-3	金童玉女来温药。 tɕu ³³ tho ⁴² y ⁵⁵ no ³¹ le ⁴² ui ³³ jo ³⁵ 金童玉女来温药	金童玉女来温药。	金童玉女(美少年美少女)が薬を温め。
7-4	做一口而干。 tsu ⁵⁵ ji ³⁵ kho ³¹ e ⁴² ka ³³ 做一口而干	做一口而干。	一口で飲み干します。
8-1	若凡此药不见效。 zu ⁴² fa ⁴² tɕhi ³¹ jo ³⁵ pu ³⁵ tɕie ⁵⁵ ɕo ⁵⁵ 若是此药不见效	若是此药不见效。	もしこの薬に効果がなかったら。
8-2	再有一[匣]好单方。 tse ⁵⁵ jo ³¹ ji ³⁵ tɕi ⁵⁵ xo ³¹ ta ³³ fa ³³ 再有一剂好单方	再有一剂好单方。	もう一つよい処方があります。
8-3	漆期寿坊买保格。 xu ³⁵ tɕhi ⁴⁴ so ⁵⁵ fa ⁴² me ³² po ³¹ ke ³⁵ 红漆棺材买它口	红漆棺材买一口。	紅漆の棺材を一つ買い。

II. ペー曲台本集成

8-4	料里求味当。 lio ⁵⁵ li ³¹ tcho ⁵⁵ pu ⁵⁵ ta ⁴⁴ 准备 好 那里	准备好后引。	葬儀の準備をします。
9-1	请个地师把坟看, tchu ³¹ ko ⁵⁵ ti ⁵⁵ si ³³ pa ³¹ fu ⁴² kha ⁵⁵ 请 个 地 师 把 坟 看	请个地师把坟看,	風水師に墓を見てもらってください。
9-2	南山脚下好风光。 na ⁴² sa ³³ tco ³⁵ ca ⁵⁵ xo ³¹ fu ³³ kua ³³ 南 山 脚 下 好 风 光	南山脚下好风光。	南山のふもとが景色がよいでしょう。
9-3	葬在南山大路旁, tsa ⁵⁵ tse ⁵⁵ na ⁴² se ³³ ta ⁵⁵ lu ⁵⁵ pha ⁴² 葬 在 南 山 大 路 旁	葬在南山大路旁,	南山の大通りのそばに葬られれば,
9-4	英台好烧香。 ju ⁵⁵ the ⁴² xo ³¹ so ³³ ca ³³ 英 台 好 烧 香	英台好烧香。	英台が線香をあげます。
10-1	梁兄死后我吊孝, na ⁴² co ³³ si ³¹ xo ⁵⁵ go ³¹ tio ⁵⁵ co ⁵⁵ 梁 兄 死 后 我 吊 孝	梁兄死后我吊孝,	梁兄の死後私はお悔やみに行き,
10-2	灵前祭奠泪汪汪。 liu ⁴² tchic ⁴² tci ⁵⁵ tie ⁵⁵ le ⁵⁵ ua ³³ ua ³³ 灵 前 祭 奠 泪 汪 汪	灵前祭奠泪汪汪。	霊前で弔い泪をためましょう。
10-3	回复哥哥几件事。 xui ⁴² fy ³⁵ ko ³³ ko ³³ tci ³¹ tci ⁵⁵ si ⁵⁵ 回 复 哥 哥 几 件 事	回复哥哥几件事,	兄さんにいくつかお返事します。
10-4	清清楚楚说。 tche ⁵⁵ tche ⁵⁵ me ²¹ me ²¹ sua ⁴⁴ 清 清 楚 楚 说	清清楚楚说。	はっきりきっぱり言います。
11-1	早来三日我是主, so ³¹ le ⁴² sa ³³ zi ³⁵ go ³¹ si ⁵⁵ tsy ³¹ 早 来 三 日 我 是 主	早来三日我是主,	三日早ければ私が主で,
11-2	迟来三日我为宾, tsh ⁴² le ⁴² sa ³³ zi ³⁵ go ³¹ ui ⁴² piu ³³ 迟 来 三 日 我 为 宾	迟来三日我为宾,	三日遅ければ私が客となるでしょう,
11-3	哥哥本是我心爱, ko ³³ ko ³³ pu ³¹ si ⁵⁵ go ³¹ cu ³³ e ⁵⁵ 哥 哥 本 是 我 心 爱	哥哥本是我心爱,	兄さんは私が心から愛する人だったので,
11-4	马甲眼中钉。 ma ³¹ tca ³⁵ je ³¹ tso ³³ tiu ³³ 马 甲 眼 中 钉	马甲眼中钉。	馬甲は目のかたきとしました。
12-1	英台就是勾魂鬼, ju ³³ the ⁴² tco ⁵⁵ si ⁵⁵ ko ³³ xui ⁴² kui ³¹ 英 台 就 是 勾 魂 鬼	英台就是勾魂鬼,	英台はもはや魂さまよう幽霊で,
12-2	爹妈就是害人精, ti ³³ ma ³³ tco ³⁵ si ⁵⁵ xo ⁵⁵ zu ⁴² tci ³³ 爹 妈 就 是 害 人 精	爹妈就是害人精,	(我が) 父母は人を害する物の怪です。
12-3	绣房是我真地狱, co ⁵⁵ fa ⁴² si ⁵⁵ go ³¹ tsw ³³ ti ⁵⁵ jo ³⁵ 绣 房 是 我 真 地 狱	绣房是我真地狱,	(我が) 部屋は私の本当の地獄で,
12-4	我是血河坑。 uo ³¹ si ⁵⁵ cue ³⁵ xuo ⁴² khu ³³ 我 是 血 河 坑	我是血河坑。	私は血河の穴です。
13-1	三更梦里团圆合, sa ³³ ku ³³ mu ⁵⁵ li ³¹ thuc ⁴² ju ⁴² xuo ³⁵ 三 更 梦 里 团 圆 合	三更梦里团圆合,	真夜中に夢で再会し,

13-2	除非二世得成亲, tshy ⁴² fe ³³ e ⁵⁵ ŋ ⁵⁵ te ³⁵ tshu ⁴² tshu ³³ 除 非 二 世 得 成 亲	除非二世得成亲,	来世で結ばれない限り,
13-3	妙药仙丹利无益, mio ⁵⁵ jo ³⁵ cie ³³ ta ³³ li ⁵⁵ vɣ ⁴² ji ⁵⁵ 妙 药 仙 丹 也 无 益	妙药仙丹也无益,	妙薬仙丹も無益です,
13-4	我是真人参。 ŋo ³¹ s ¹ tsu ³³ zu ⁴² su ³³ 我 是 真 人 参	我是真人参。	私は本当の人参です。
14-1	取出鸳鸯带一副, tshui ³¹ tsh ³⁵ jui ³³ ja ³³ te ⁵⁵ ji ³⁵ fy ⁵⁵ 取 出 鸳 鸯 带 一 副	取出鸳鸯带一副,	鸳鸯の帯一對と,
14-2	七尺绫罗帕一根, tchi ³⁵ tsh ³⁵ liu ⁴² luo ⁴² pha ⁵⁵ ji ³⁵ ku ³³ 七 尺 绫 罗 帕 一 根	七尺绫罗帕一根,	七尺の綾絹一枚を取り出し,
14-3	送哥绣花鞋阿双, so ³⁵ ko ³³ tsh ⁴⁴ xuo ³⁵ ŋe ³¹ ?a ³¹ tci ³³ 送 哥 绣 花 鞋 一 双	绣花鞋一双送给哥,	兄さんに刺繍靴一足と,
14-4	绣花手巾阿。 tsh ⁴⁴ xuo ³⁵ su ³¹ tciu ³⁵ pu ⁴⁴ 绣 花 手 巾 阿	绣花帕一床。	刺繍の手巾一枚を送りましょう。
15-1	头发阿下三根, tu ²¹ ma ³⁵ ti ³⁵ thu ⁵⁵ ko ³¹ sa ⁵⁵ ku ³⁵ 头 发 拔 下 两 三 根	头发拔下两三根,	髪を二三本抜き,
15-2	眉毛阿下保阿。 ui ³³ me ³⁵ ti ³⁵ thu ⁵⁵ po ³¹ ?a ³¹ miu ³¹ 眉 毛 拔 下 它 一 撮	眉毛拔起了一撮。	眉を一つまみ抜きましょう。
15-3	心儿利想阿给哥, ci ³⁵ ko ³³ li ⁵⁵ ca ³¹ tsh ⁴⁴ ku ³¹ ko ³³ 心 儿 也 想 掏 给 哥	心儿都想掏给哥,	心臓も取り出して兄さんに差し上げたいの。
15-4	梁兄可认灯? na ⁴² co ³³ ku ³¹ zu ⁴⁴ tu ⁴⁴ 梁 兄 可 知 道	梁兄可知道?	梁兄はお分かりですか?

II. ペー曲台本集成

4-5. 「柳蔭記」—楊漢本・趙丕鼎本〔ウ〕

採集・中国語訳：楊政業（楊政業『大本曲簡志』雲南民族出版社，2003年）

日本語訳：遠藤耕太郎

凡例 ペー語原文（白文）中，□は音仮名，〰は訓字を表す。

4-5-1. 楊漢本

（白）四九再拜姑娘，可有妙药，要与相公药单一个，他人尚付来了。如此提笔开单，四九你听——
（語り）四九は再び彼女のもとに伺った。よい薬がありますわ。あのお方に処方^レの仕方をお教えしましょう。あの人に飲ませてくださいね。このように処方箋^ヲを書きますから、四九、よく聞いて

（唱）：

（唱）：

1-1	（白語）提起笔来把书用， （汉义）提起笔来把书用， （日語）筆を執って書きましょう，	3-3	（白語）第五要用麒麟角， （汉义）第五要用麒麟角 （日）第五に麒麟の角を入れて，
1-2	（白語）四九听我说原故， （汉义）四九听我说原故， （日）四九，私の話をよく聞きなさい，	3-4	（白語） <u>奶已药汤</u> 同。 （汉义）与药汤同用。 （日）薬湯と一緒に飲んでください。
1-3	（白語）药单子 <u>采</u> 开与你， （汉义）这个药单开给你， （日）処方箋をあなたに書きますわ，	4-1	（白語）我是他的归命丹， （汉义）我是他的归命丹， （日）私はあの方の帰命丹，
1-4	（白語）你小心服用。 （汉义）要小心服用。 （日）注意してお飲みくださいね。	4-2	（白語）蟠桃酒汁用第六， （汉义）蟠桃酒汁用第六， （日）蟠桃酒を第六には入れて，
2-1	（白語）第一龙王 <u>正</u> 方， （汉义）第一要龙王单方， （日）第一には竜王の処方を，	4-3	（白語）金童 <u>密</u> 吐 <u>刚</u> 药温， （汉义）金童亲手来煮药， （日）金童が手ずから薬を煮て，
2-2	（白語）第二王母 <u>取</u> 正方， （汉义）第二王母身上香， （日）第二には王母のつける香料を，	4-4	（白語）玉女把药送。 （汉义）玉女把药端。 （日）玉女が薬を捧げます。
2-3	（白語）第三用千双 <u>正</u> 灰， （汉义）第三千年老灰尘， （日）第三には千年の古いほこりを入れ，	5-1	（白語）观音水瓶 <u>取</u> 吐水， （汉义）要用观音瓶中水， （日）観音の水瓶の水を入れたなら，
2-4	（白語）再用白檀香。 （汉义）再用白檀香。 （日）それから白檀香を入れます。	5-2	（白語）梁兄病体才有效， （汉义）梁兄病体才有救， （日）梁兄さまの病にきっと効きますわ，
3-1	（白語）四用万年瓦上箱， （汉义）四用万年瓦上箱， （日）第四に瓦の上の万年箱を入れ，	5-3	（白語） <u>忽</u> 保阿川 <u>抓</u> 恨 <u>恨</u> ， （汉义）叫他服完这剂药， （日）彼にこの薬を飲ませ終わったら，
3-2	（白語）天鵝蛋 <u>快</u> 乳自引， （汉义）药引要用天鹅蛋， （日）一緒に白鳥のたまごを飲んで，	5-4	（白語） <u>要</u> 等 <u>我</u> 次 <u>扣</u> ， （汉义）我身将他救。 （日）わが身が彼を救うのです。

6-1	(白語) 富光頭蚊子眼扣漏。 (漢義) 蜜蜂骨頭蚊眼眶。 (日) 蜜蜂の骨と蚊の目の縁を。	9-1	(白語) 只作剛刃打全限。 (漢義) 只要找全这剂药。 (日) これらの薬を全て探し出しさえすれば。
6-2	(白語) 三年瓦房上霜冻。 (漢義) 三年瓦房上霜冻。 (日) 三年の瓦屋根の上の凍った霜を。	9-2	(白語) 方才离别黄泉路。 (漢義) 方才离别黄泉路。 (日) きっと黄泉路から離れます。
6-2	(白語) 彈药要用珍珠罐。 (漢義) 弹药要用珍珠罐。 (日) 煎じるには真珠の壺で。	9-3	(白語) 只作找不全阿样。 (漢義) 如若一样找不全。 (日) もし全てを探せなければ。
6-4	(白語) 倒药玛瑙盅。 (漢義) 玛瑙盅服用。 (日) 服用するには玛瑙の湯のみで。	9-4	(白語) 要进阴司路。 (漢義) 要走阴间路。 (日) 陰路を行かねばなりません。
7-1	(白語) 套闹明角长。 (漢義) 用毛驴子角。 (日) ロバの角を入れ。	10-1	(白語) 宋香花板买保厨。 (漢義) 檀香棺木买一副。 (日) 檀香の棺材を一幅買ってください。
7-2	(白語) 虎母头奶圈。 (漢義) 母虎的乳汁。 (日) 母虎の乳汁を入れ。	10-2	(白語) 苦其梁兄身亡故。 (漢義) 若凡梁兄身亡故。 (日) もし梁兄さまが亡くなってしまったら。
7-3	(白語) 再放鸡撞蛋水园。 (漢義) 再用公鸡下的蛋。 (日) それから雄鶏の生んだたまごを入れ。	10-3	(白語) 埋在南口五台山。 (漢義) 埋在南口五台山。 (日) 南口五台山に埋めなさい。
7-4	(白語) 跳蚤光头要阿半。 (漢義) 跳蚤骨頭用一撮。 (日) 蚤の骨をひとつまみ。	10-4	(白語) 来往一条路。 (漢義) 来往一条路。 (日) 行き来するのは一本道の。
7-5	(白語) 彈药凤龙窟。 (漢義) 到龙宫熬药。 (日) 竜宮に行って煎じてください。	11-1	(白語) 马家他来刚妹迎。 (漢義) 马家他来把妹娶。 (日) 馬家の人が妹の私を娶りにきたら。
8-1	(白語) 蚊之光头用四两。 (漢義) 蚊子骨頭用四兩。 (日) 蚊の骨を四兩と。	11-2	(白語) 我凤你面前送香。 (漢義) 我到坟前来进香。 (日) 私はお墓の前で香を焚きます。
8-2	(白語) 五天汪啦要下受。 (漢義) 五六月霜要用够。 (日) 五六月の霜はたくさん。	11-3	(白語) 四九因去刚上付。 (漢義) 四九回去多上供。 (日) 四九、帰ってお伝えしなさい。
8-3	(白語) 英台认登哥旺病。 (漢義) 英台知道哥的病。 (日) 英台は兄さまの病を知っても。	11-4	(白語) 性命固难敌。 (漢義) 性命确难顾。 (日) 命はまったく氣にかけられないわ。
8-4	(白語) 相会不能够。 (漢義) 相会不能够。 (日) 十分に逢えないのでございます。		

II. ペー曲台本集成

4-5-2. 趙丕鼎本〔ウ〕

(白) 人心拿上笔墨来, 待我开上一副药单, 寄与梁兄, 哎呀, 好伤心!

(語り) 心をこめて筆に墨をつけます。わたしが処方箋を書きますから、梁兄さまに渡してちょうだい。アイヤ、ほんとうに悲しいことですわ。

1-1	(白语) 英台提起笔。 (汉义) 英台提起笔。 (日) 英台は筆を執り。	4-1	(白语) 第五鳄鱼尾上毛。 (汉义) 第五鳄鱼尾上毛。 (日) 第五に鰐の尾の毛を、
1-2	(白语) 两眼泪汪汪。 (汉义) 两眼泪汪汪。 (日) その目には涙が溢れています。	4-2	(白语) 第六蚊子眼眶拉。 (汉义) 第六蚊子の眼眶。 (日) 第六に蚊の目の縁を、
1-3	(白语) 拜上梁兄莫心伤。 (汉义) 拜上梁兄莫心伤。 (日) 梁兄さまにお逢いしても悲しみは癒えません。	4-3	(白语) 第七观音甘露水。 (汉义) 第七观音甘露水。 (日) 第七に観音の甘露水を、
1-4	(白语) 突听哥哥有疾病。 (汉义) 突听哥哥有疾病。 (日) 突然、兄さまの病をお聞きして、	4-4	(白语) 八用白檀香。 (汉义) 八用白檀香。 (日) 第八に白檀香を入れて、
1-5	(白语) 我心也不安。 (汉义) 我心也不安。 (日) 私は不安でたまりません。	5-1	(白语) 第九要用青龙须。 (汉义) 第九要用青龙须。 (日) 第九に背龍のあご鬚を入れて、
2-1	(白语) 要想同你。 (汉义) 要想去看你。 (日) あなたにお逢いしたいのですが、	5-2	(白语) 第十匱父光头鬃。 (汉义) 第十蜜蜂骨肋巴。 (日) 第十に蜜蜂の肋骨を、
2-2	(白语) 就怕有闲话。 (汉义) 就怕有闲话。 (日) 人のうわさが恐ろしく、	5-3	(白语) 十样如若找齐全。 (汉义) 十样如果找齐全。 (日) 十通りがもし全て揃ったら、
2-3	(白语) 英台我自打急转。 (汉义) 英台急得团团转。 (日) 英台は気をもみ続けています。	5-4	(白语) 起死回生汤。 (汉义) 起死回生汤。 (日) まさに起死回生のスープ。
2-4	(白语) 开给哥哥这剂药。 (汉义) 开给阿哥这剂药。 (日) あなたに薬の処方箋を書きますが、	6-1	(白语) 开好药单开药引。 (汉义) 开好药单开药引。 (日) 主薬の次には副薬の処方箋を書きましょう。
2-5	(白语) 实在生难。 (汉义) 实在是为难。 (日) お作りになるのは難しいのです。	6-2	(白语) 三样药引配拢它。 (汉义) 三样药引配拢它。 (日) 三種の副薬を調査します
3-1	(白语) 第一东海龙王角。 (汉义) 第一东海龙王角。 (日) 第一に東海に住む竜王の角を、	6-3	(白语) 公鸡蛋配虎母奶。 (汉义) 公鸡的蛋虎母奶。 (日) 雄鶏のたまごと母虎の乳汁、
3-2	(白语) 第二蟠桃酒一缸。 (汉义) 第二蟠桃酒一缸。 (日) 第二に蟠桃酒をひと缸を	6-4	(白语) 跳蚤心肝。 (汉义) 跳蚤心肝。 (日) 飛び跳ねる蚤の心臓、肺に胆。
3-3	(白语) 第三千年瓦上霜。 (汉义) 第三千年瓦上霜。 (日) 第三に瓦の上の千年の霜を、	7-1	(白语) 煎药要用珍珠罐。 (汉义) 煎药要用珍珠罐。 (日) 煎じるには真珠の壺で、
3-4	(白语) 四要麒麟胆。 (汉义) 四要麒麟胆。 (日) 第四に麒麟の胆を、	7-2	(白语) 喝药要用玛瑙缸。 (汉义) 喝药要用玛瑙缸。 (日) 服用するには瑪瑙の壺で、

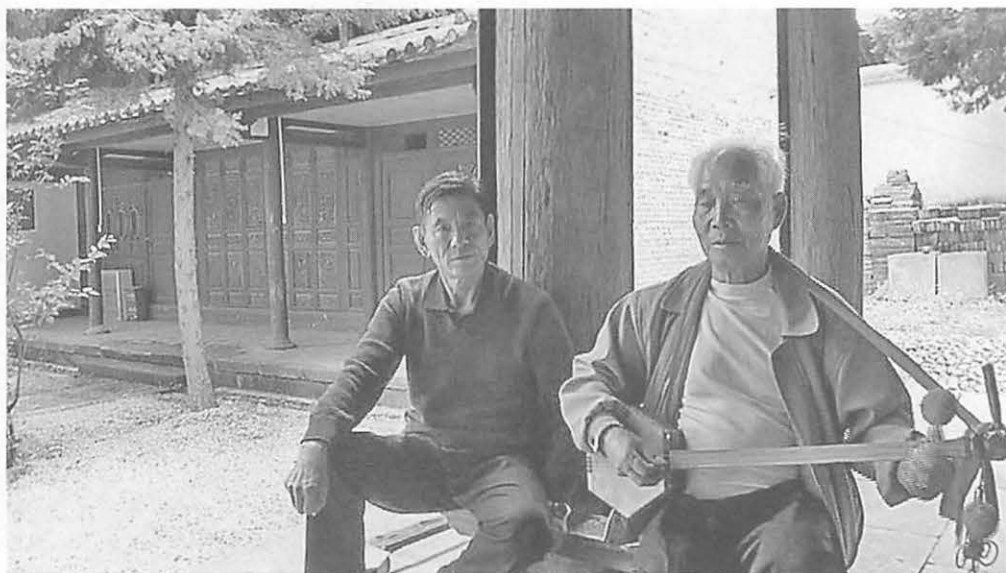
7-3	(白語) 金童玉女来煨药, (汉义) 金童玉女来煨药, (日) 金童玉女が薬を煮込み,	11-3	(白語) 哥哥本是我心爱, (汉义) 哥哥本是我心爱, (日) 兄さまが心から私を愛して下さるのなら,
7-4	(白語) 吃得噴鼻香。 (汉义) 吃得噴鼻香。 (日) 鼻を突くよな香りをたてる。	11-4	(白語) 马家眼中钉。 (汉义) 马家眼中钉。 (日) 馬家なんぞは、かたき同然。
8-1	(白語) 若凡此药不见效, (汉义) 若凡此药不见效, (日) もしこの薬の効果がなければ,	12-1	(白語) 英台就是勾魂鬼, (汉义) 英台就是勾魂鬼, (日) 英台はもう亡霊と同じです,
8-2	(白語) 再有一剂好药方, (汉义) 还有一剂好药方, (日) もう一つの処方があります,	12-2	(白語) 爹妈就是害人精, (汉义) 爹妈就是害人精, (日) 父も母も人情を解しませんでした,
8-3	(白語) 匣漆寿房买保格, (汉义) 红漆棺材买一口, (日) 紅漆の棺材を一口お買いなさい,	12-3	(白語) 绣房是我的地狱, (汉义) 绣房是我的地狱, (日) 閨房は私にとっては地獄,
8-4	(白語) 料理陸味当。 (汉义) 后事料理下。 (日) 死後の始末をいたしましょう。	12-4	(白語) 我是血火坑。 (汉义) 我是血火坑。 (日) 私は血の生き地獄なのです。
9-1	(白語) 请个地师把坟看, (汉义) 请个地师看坟地, (日) 風水師を呼び墓地を選ばせなさい,	13-1	(白語) 三更梦里团团圆圆, (汉义) 三更梦里得团圆, (日) 三更の夢の内にあなたに再会しましたが,
9-2	(白語) 南山脚下好风光, (汉义) 南山脚下好风光, (日) 南山の麓の風光のよい地を,	13-2	(白語) 除非二世得成亲, (汉义) 除非二世得成亲, (日) あの世でなければ夫婦にはなれません。
9-3	(白語) 埋在南山大路口, (汉义) 埋在南山大路口, (日) 南山の大きな辻に,	13-3	(白語) 妙药仙丹也无益, (汉义) 妙药仙丹也无益, (日) 妙薬仙丹は何の役にも立ちません,
9-4	(白語) 来往好上香。 (汉义) 来往好上香。 (日) 行き来に線香を立てましょう,	13-4	(白語) 我是真人生。 (汉义) 我是真人生。 (日) 私はこの世の人なのです。
10-1	(白語) 梁兄死后奴吊孝, (汉义) 梁兄死后奴吊孝, (日) 梁兄さまの死後は、私めが弔いましょう,	14-1	(白語) 取出鸳鸯袋一付, (汉义) 取出鸳鸯袋一副, (日) 鴛鴦の袋を一对取り出すと,
10-2	(白語) 灵前祭奠泪汪汪, (汉义) 灵前祭奠泪汪汪, (日) 霊前でご供養するにも目に涙をためて,	14-2	(白語) 七尺玲珑帕一根, (汉义) 七尺玲珑帕一根, (日) 七尺の精緻なハンカチ一枚,
10-3	(白語) 回复哥哥几件事, (汉义) 回复哥哥几件事, (日) 兄さまを回復させられたら,	14-3	(白語) 送哥绣花鞋阿几, (汉义) 送哥一双绣花鞋, (日) 兄さまにあげる一そろいの刺繍鞋,
10-4	(白語) 渣渣明明因。 (汉义) 说明心才安。 (日) 心を述べたら安心する。	14-4	(白語) 绣花手巾案。 (汉义) 绣花帕手巾。 (日) 刺繍はそのハンカチにも。
11-1	(白語) 早来三日我做主, (汉义) 早来三日我做主, (日) 三日早く来たら私が主人に,	15-1	(白語) 头发采下勾上争, (汉义) 采下三根金丝发, (日) 三本の金の糸を抜きとるや,
11-2	(白語) 迟来三日我为宾, (汉义) 迟来三日我为宾, (日) 三日遅く来たら私はお客に,	15-2	(白語) 眼眉采下保阿采, (汉义) 眉毛手巾一把抓, (日) 眉毛をハンカチで強く抓んで??

II. ペー曲台本集成

15-3	(白语) 愿科利想期给哥。
	(汉义) 想把心肝掏给哥。
	(日) 心も胆も取り出して兄さまに差し上げたい。

15-4	(白语) 梁兄可认登。
	(汉义) 梁兄可知晓。
	(日) 梁兄さまは分かってくれるかしら。

4-6. 「月里桂花」—蘇貴本・劍川県芸文志本



「月里桂花」を演唱する黄世代（左），蘇貴各氏

【現地調査】

演唱：蘇貴（1939年7月生，劍川県沙溪鎮東南村南門自然村）

調査：富田美智江・岡部隆志・遠藤耕太郎・張錫祿・張正軍（通訳），2011年8月15日，於劍川県沙溪鎮

【資料作成】

（上段）蘇貴本「月里桂花」

翻刻：富田美智江，李莉，遠藤耕太郎

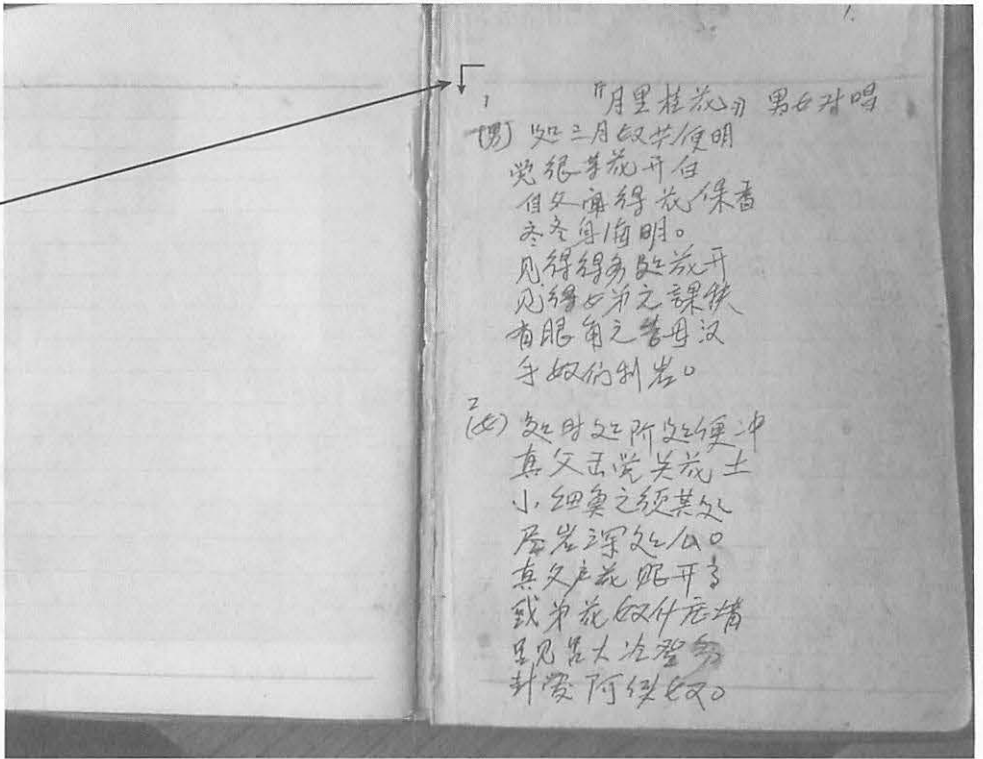
※なお，未判別字は□で示した。

（中，下段）劍川県芸文志本「月里桂花」（劍川県史志辦公室編『劍川県芸文志』雲南民族出版社，2010所収）

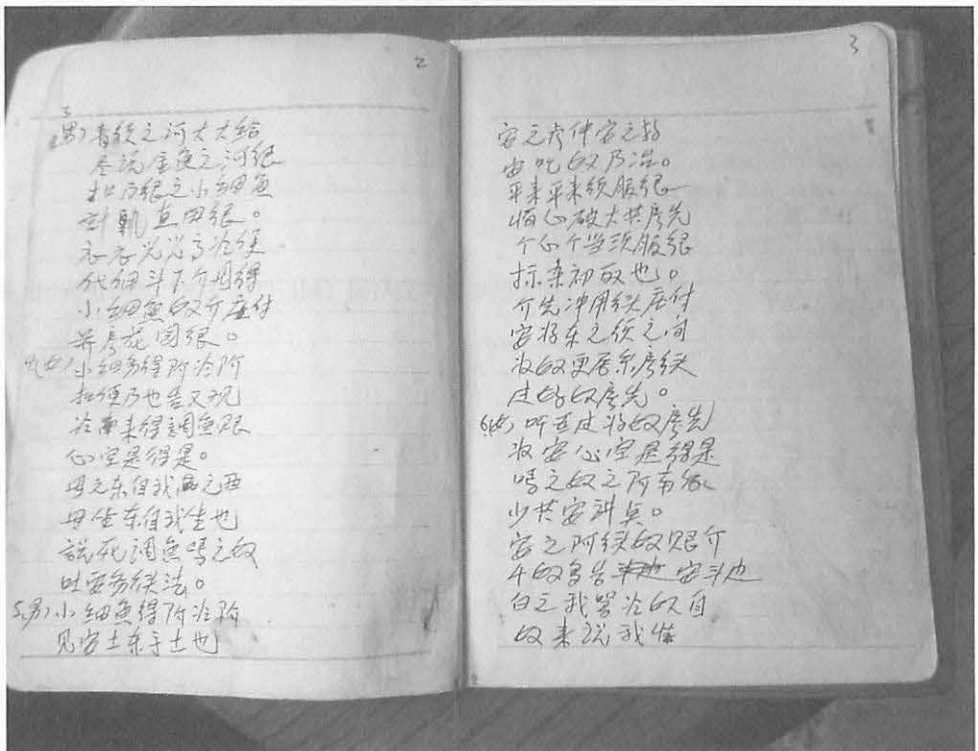
整理翻訳：張文・陳瑞鴻

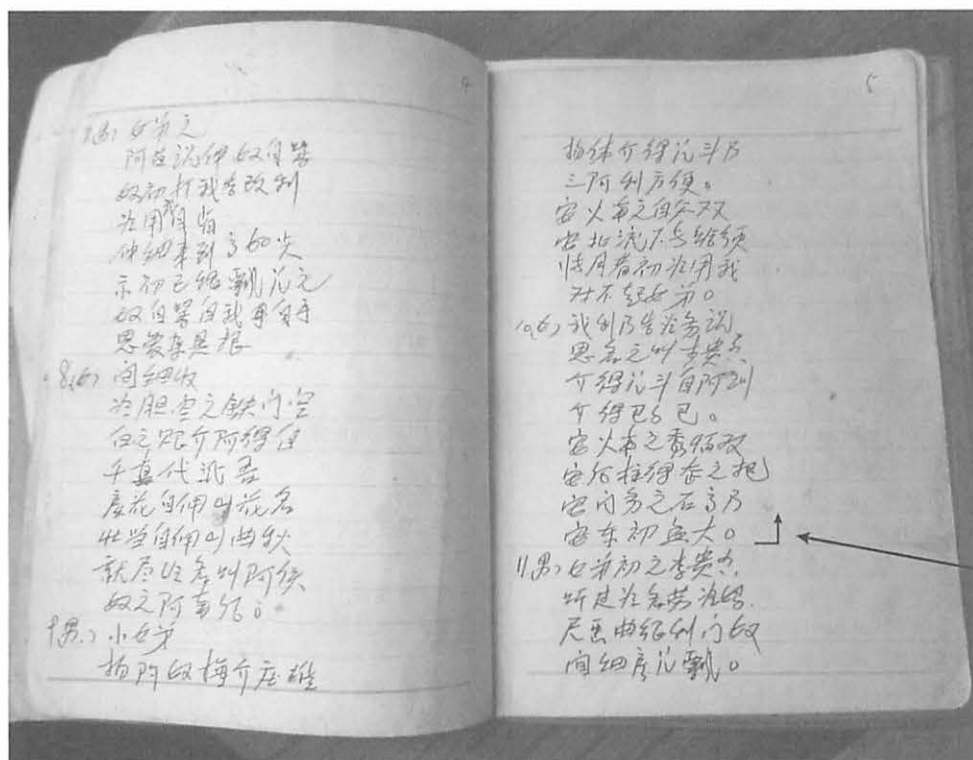
演唱：張明德

日本語訳：富田美智江



蘇貴氏所藏「月里桂花」





1) 男

1	处三月奴共便明 春三旺努构比埋 Cvnl sanl ngua nox go bil maid	三月布谷叫声声 三月カッコウがセイセイと鳴く
2	党很等花 开白 賤赫等后子克白 Dant het det hol zix kel baip	田野豆花香喷喷 野原は花がブンブンと香り
3	自父聞得花保香 沾蜂初得后榜兄 Zainl fvnl cul de hol band xionl	蜜蜂闻到花香味 蜜蜂が花の香りを嗅ぎつけやって来て
4	冬冬身海明。 唧唧司亥埋。 Dvl dvl sex hainl maid	不停叫嗡嗡。 オウオウと鳴き続ける。
5	见得得务处花开 得务遇后春后克 Ded ngvl yui hol cvnl hol kel	春花开放春意浓 春の花が咲いて春色が濃くなり
6	见得女弟之课秧 酣见英梯岩枯展 Hanl geinp yvnx tix ngaid kul zaind	薨秧妹子脸绯红 野良仕事をする妹の顔も真っ赤っか
7	有眼角之告口汉 仪温角子夏打酣 Jiet weinx gv zix ga dat hanl	斜着眼角偷一眼 横目でそっと盗み見る

II. ペー曲台本集成

8	手 奴 们 利 岩。 司 努 脉 利 岩。 Sex nox mai lil ngaid	醉情满心悻。 胸いっぱいであまく言えない。
---	---	--------------------------

2) 女

1	处 时 处 阶 处 便 冲 春 展 春 该 春 比 抽 Cvnl zaind cvnl gainx cvnl bil co	春风吹来暖融融 春風が吹いてユウユウと暖かくなり
2	真 父 口 党 关 花 土 沾 蜂 采 后 观 后 途 Zainl fvnl cait hol guainx hol tux	蜜蜂采花兴冲冲 蜜蜂が花摘みでチュウチュウと騒ぐ
3	小 细 鱼 之 须 其 处 沾 蜂 采 后 温 酣 干 Zainl fvnl cait hol weinx hanl ganl	采花入朝高处望 花摘む人は高所を仰ぎ見るが
4	尽 岩 深 处 么。 后 努 认 亚 朵。 Hol nox sen yaf dux	难见花真容。 花の姿は見えにくい。
5	真 父 戸 花 口 开 干 舍 背 务 曾 须 浅 处 Seit qiainl ngvl zex xuix qinx cvt	鳞鱼戏水水浅浅 魚は浅瀬で水遊びをしているのに
6	口 弟 花 奴 什 庄 堵 恩 勾 尽 岩 深 处 孟 Ngel gox jienl ngaid sainl cvt mo	哥入深水自找烦 兄さんはわざわざ深いところに行き
7	口 见 咨 大 冷 登 务 贝 儿 贝 担 俺 得 务 Bei jil bei danp ngal ded ngvl	摸来摸去我面前 私の目の前を手探りでかき回す
8	卦 爱 阿 口 奴。 挂 牵 阿 冈 努。 Gua qinl al saint nox	哥你冤不冤。 兄さんあなたに罪はない？

※蘇貫3句目「小细鱼之须其处」は剣川5句目「舍背务曾须浅处」に、蘇貫5句目「真父戸花口开干」は剣川3句目「沾蜂采后温酣干」に対応すると思われる。

3) 男

1	背 须 之 河 大 大 给 千 须 子 弓 担 担 革 Qiainl xuix zix gvnl danp danp ged	江水清清往回流 澄んだ川の水はぐるぐる回る
2	尽 说 金 鱼 之 河 很 管 刷 金 务 曾 苟 赫 Guaind sua jinl ngvl zex god het	总想金鱼海中游 金魚は海で泳ぎたいといつも思っている
3	扣 乃 很 之 小 细 鱼 弓 乃 赫 曾 舍 背 务 Gvnl neid het zex seit qiainl ngvl	谁知金鱼在水沟 金魚は堀にいと誰が知っているだろう
4	计 轨 直 田 很。 没 票 展 已 赫。 Mod pia zaind jit het	躲到田里悠。 田んぼに悠々と隠れている。
5	衣 衣 光 光 冷 便 衣 衣 光 光 干 勒 便 Yil yil guangl guanl ganl lex bil	高卷衣裤不犹豫 ズボンを高く捲りあげて躊躇せず

6	代 佣 斗 下 介 □ 得 待 拥 堵 特 盖 某 得 Dai yonx dvttel gai mot ded	赶紧下田四处搜 素早く田のいたるところを捜し
7	小 细 鱼 奴 介 庄 付 舍 青 务 努 盖 亚 苦 Seit qiainl ngvl nox gai ya kvf	小小鱼儿捉回去 小さい魚を捉まえて戻り
8	养 彦 花 园 很。 养 彦 花 园 赫。 Yant yin hual yuini het	花园里面收。 花園の中で飼いましょう。

4) 女

1	小 细 务 得 阶 冷 阶 舍 青 务 得 该 勒 该 Seit qiainl ngvl ded gainl lex gainl	鱼儿惊得四处游 魚は驚いてあちこち泳ぐ
2	扣 便 乃 也 告 又 观 口 边 口 主 戛 相 观 Kot binl kot zv ga xianl guainx	沿着沟边游不休 水際に沿って休まず泳ぐ
3	冷 南 来 得 调 鱼 □ 见 得 额 得 偶 务 银 Geinp de hhef de hhod ngvl yind	撒网人从那边来 網打つ人が向こうから来ると
4	心 空 是 得 是。 心 扣 赛 得 赛。 Xinl kox sai de sai	牵心又怕羞。 気がかりだし恥ずかしい。
5	□ 之 东 自 我 之 西 依 曾 冬 之 我 标 山 Not zex dvnl zil ngot bia seinl	你从东来我西避 あなたが東から来れば私は西へ避ける
6	□ □ 东 自 我 座 也 依 曾 冬 之 我 标 尔 Not zex donx zil ngot bia hhaix	你在上边我下如 あなたが上にいれば私は下を見る
7	说 死 调 鱼 吗 之 奴 刷 使 对 门 偶 务 银 Sua sit duip meid hhod ngvl yind	说给对面撒网人 向かいの網打つ人に言いましょう
8	吐 安 务 □ 法。 妥 俺 阿 闪 法。 Tul ngal al saint fai	难把我心留。 私の心をつかむのは難しいと。

5)

1	小 细 鱼 得 阶 冷 阶	
2	见 安 土 东 干 土 也	
3	安 之 虚 仲 安 之 □ 俺 曾 劳 咒 俺 曾 榜 Ngal zex lod zop ngal zex banp	哥非豺狼非虎豹 兄さんは狼でも虎でもありません
4	安 吃 奴 乃 洽。 俺 优 依 乃 淹。 Ngal ye not nail yainx	又没吃你肉。 あなたの肉を食べたりしません。

II. ペー曲台本集成

5	平 来 平 来 须 服 很 千 咒 妥 榜 阿 闪 法 Qiainl zop tul nel al saint fai	说啥难把你心留 あなたの心をつかむのは難しいと言うのなら
6	怕 心 破 大 共 彦 先 该 心 破 胆 苟 彦 下 Gainl xinl pot danx gop yin xiai	剖出心来漏一手 心臓を剖いてお見せしましょう
7	个 心 个 当 须 服 很	
8	标 杂 初 取 也。	
9	介 先 冲 用 □ 庄 付 更 下 达 恩 闪 亚 苦 Geil xiai da ngel saint ya kvt	今天与哥回家头 今日は兄さんと帰りました
10	安 □ 东 之 须 之 间 恩 吼 冬 曾 须 子 井 Ngel hat dvnI zex xuix zix jainx	我家水井好清幽 私の家の井戸水はとても清らかです
11	□ 奴 更 居 系 彦 □ 山 依 给 须 紧 温 吼 Sainx not gel xuix jient weinl hot	让你冷水换温水 あなたの冷水を温水に取り換えましょう
12	过 好 奴 彦 先。 欢 乐 苟 彦 下。 Huainl lul gop yin xiai	吃穿不用愁。 衣食の心配はいりません。

※剣川 1-2 句は蘇貴 5-6 句に、剣川 3-4 句は蘇貴 3-4 句に、剣川 5-8 句は蘇貴 9-12 句に対応させた。

6) 女

1	听 □ □ □ 奴 彦 先 依 咒 欢 乐 苟 彦 下 Not zop huainl lul gop yin xiai	说啥吃穿不用愁 衣食の心配はいらないと言うけれど
2	□ 安 心 空 是 得 是 千 克 利 觉 得 叟 法 Qiainl kex lil julde sot fai	你说此话羞不羞 そんなことを言っても恥ずかしくはないの
3	吗 之 奴 之 阶 南 后 吗 子 依 曾 阿 嘛 努 Mal zix not zex al ma nox	小子你家住那里？ あんたの家はどこにあるの？
4	少 共 安 讲 点。 刷 董 谁 学 皆。 Sua dond kuang xux jiai	话语欠温柔。 言葉に優しさが無い。
5	安 之 阿 □ 奴 □ 介 我 曾 阿 闪 努 银 该 Ngot zex al saint nox yind gainl	堂堂正正妹子身 わたしは正々堂々とした身の上です
6	千 奴 多 告 安 斗 边 千 依 逗 戛 俺 董 便 Qiainx not dol ga ngal dond biai	你去四鄰问原由 近所の人に尋ねてみてごらん下さい
7	白 之 我 骂 冷 奴 自 摆 子 我 呃 楞 努 之 Baid zix ngot e nel nox zil	惹我发火把你骂 私が怒ってあなたを罵ると

8	奴来说我口。 依勒刷我怪。 Not lait sua ngot guai	怕你心内疚。 あなたはやましく思うでしょう
---	--	--------------------------

7) 男

1	女弟之 英梯子 Yvnx tix zix	小情妹 妹よ
2	阿苗说仲奴自骂 阿妙刷咒依之呃 At mia sua zop not zil e	骂我你觉累不累 私を罵って疲れないかい
3	奴初打我告改利 依初柱我告拳利 Not cux zv ngot gaf quinl lil	就是几拳打过来 何発か殴られたとしても
4	冷用我自口。 楞佣我之克。 Nel yonl ngot zil kex	哥倍感欣慰。 兄さんはその倍喜びを感じるよ。
5	仲细来到干如尖 咒薪岩票干俗尖 Zo xinl ngaid pia ganl svnp jinl	砍柴已到高山顶 芝を刈って高い山の頂に着いた
6	示初己很口口之 赛初岩票俺吼婀 Sai cux ngaid pia ngal hot hhex	割草村后紧随妹 草を刈り村を後に妹にぴったり着いていく
7	奴自骂自我自手 努之呃之我之叟 Not zil e zil ngot zil sot	越骂越喜心越美 罵れば罵るほど好きになり美しくなる
8	思爱杂是根。 恩艾扎似根。 Ngel ngai zaf sil genx	再也不会退。 絶対引き下がらない。

8) 女

1	间细收 间心受 Jiainl xinl so	牵心索 心をつなぐ縄よ
2	冷胆空之铁门空 楞胆扣曾途门扣 Nel danx kox zex tux med kox	胆如土锅好快活 土鍋のような度胸でさぞ楽しいでしょう
3	白之口介阶得自 摆子俺吼见得之 Baid zix ngal hot geinp de zil	如被我家人看见 もし私の家の人に見つかったら
4	千真代派吾。 刺展代派乌。 Qiai zaind deip pail wux	把你皮子剥。 あなたの皮を剥ぐでしょう。
5	产花自佣山花名 采后之拥升后名 Cait hol zil yonx seinx hol miail	采花要加花脾性 花を摘むには花の性質を考えねばなりません
6	牡丹自佣叫曲秋 薄丹之拥配守优 Bop danl zil yonx pei sop yo	牡丹才能配芍药 牡丹にふさわしいのは芍薬です

II. ペー曲台本集成

7	就 尽 冷 名 叫 阿 口 究 竟 楞 名 唵 阿 闪 Jio jien nel miail el al saint	究竟你是何村人 結局あなたはどこの村の人
8	奴 之 阶 南 后。 努 曾 阿 嘛 侯。 Not zex al ma hox	是锣还是钵？ 銅鑼なの、それとも鉢なの？

9) 男

1	小 女 弟 舍 英 梯 Seit yunx tix	小情妹 妹よ
2	扬 阶 奴 梅 介 压 堆 工 梯 盖 弄 押 盖 端 Gonx tix gail nol yaf gai duinx	我俩邻村正好配 私たちは隣村でぴったりの組み合わせ
3	扬 休 介 得 口 斗 乃 盖 弄 盖 得 己 董 乃 Gail nol gai de jit dond neid	两村相隔半把里 二つの村は半里しか離れていない
4	三 阿 利 方 便。 商 安 顶 方 便。 Sanl anx dient fanl bin	相邀气不费。 行き来するにも都合がいい。
5	安 火 南 之 自 父 双 俺 吼 南 曾 之 夫 双 Ngal hot nad zex zil fvl suanl	村南棕树把园围 村の南はシュロの木で囲まれ
6	安 北 流 口 专 给 须 俺 吼 北 曾 种 革 须 Ngal hot be zex zond ged xuix	村北水清鱼儿脆 村の北の水は清く魚は美味しい
7	张 月 者 初 冷 用 我 张 月 斋 初 楞 佣 我 Zanx yuif zaix cux nel yonl ngot	哥名月斋张家子 兄さんの名は月斎、張家の者だ
8	对 不 起 女 弟。 对 不 起 英 梯。 Duib buf qit yvnx tix	对不起情妹。 すみません、妹よ。

10) 女

1	我 利 乃 告 冷 务 说 我 利 勒 告 楞 务 刷 Ngot lil lait ga nel ngvl sua	不好意思重开腔 ごめんなさい、また歌い始めて
2	思 名 之 叫 李 贵 口 恩 名 掺 唵 李 桂 香 Ngel miail cainl el lit guib xianx	阿妹名叫李桂香 妹の名は李桂香
3	介 得 口 斗 自 阿 訓 盖 得 己 董 之 阿 寻 Gai de jit dond zil at xuinp	相邻不过田半拢 田の半分より近い隣村
4	介 得 巴 子 巴。 盖 得 坝 子 坝。 Gai de ba zix ba	坝子那一方。 土手の向い側。
5	安 火 南 之 秀 口 口 俺 吼 南 曾 兄 柏 登 Ngal hot nad zex xionl bai denl	家南有片松柏树 家の南には松柏の木があり

6	安 后 柱 得 口 之 把 吼 嫻 种 得 整 子 邦 Hot hhex zvnp de zet zix bax	房后绿荫映霞光 部屋の後ろは緑が覆い陽の光を反射させる
7	安 门 务 之 石 干 乃 俺 门 务 曾 咒 缸 乃 Ngal meid ngvl zex zop ganl neid	门前石缸如标识 門の前の石甃が目印
8	安 东 初 孟 大。 吼 冬 初 闷 达。 Hat dvnl cux mel da	桑竹把家藏。 桑や竹は家の中。

5. 歌い手へのインタビュー集

5-1. 2011年インタビュー集

聞き手：遠藤耕太郎（無印）、岡部隆志（岡）、富田美智江（富）／通訳：張正軍

8/11 午前 楊正華：1956年生、大理市海東鎮向陽江上村、海東腔の歌い手

Q. 「梁祝」はどのような時に歌われるか？

A. 結婚式以外のあらゆる場面で歌われる。葬式の時に歌われることもあるが、葬式では祭文調という別のものを歌うことのほうが多い。

Q. どうやって歌えるようになったか？

A. 特に誰かに習ったということはない。子供のころ、牛の放牧時などに老人たちの歌をまねて歌うようになった。本は見えていない（放牧時に本は持っていかない）。

Q. 大本曲の台本はどこから写したのか？

A. 百冊ほど持っているが、四十冊は自分が創ったもの。その他は、覚えていたものを写したり、他の本から写した。

Q. 大本曲を習うときは、本から？ それとも口承？

A. 最初は口頭で習う。まずメロディーを学び、それから本を見る。本によってメロディーが異なるため。歌えるようになったら本を写す。本は忘れないようにするためのもの。

Q. 歌うと一冊でどのくらいの長さか？

A. だいたい3～4時間。

Q. 大本曲で使われている白文は、白族なら誰もが見て理解できるか？

A. 大本曲が歌える人にしか読めない。

Q. 大本曲の歌詞が他の歌に流用されているということはあるか？

A. 白族調や打歌にも取り入れられている。

8/11 午後 楊興庭：1938年1月生、大理市七里橋鎮大庄、南腔の歌い手

Q. 「梁祝」を全部歌うとどのくらいの長さか？

A. 4時間くらい。

Q. 「梁祝」はどのような時に歌われるか？

A. 今は結婚式でも歌われるが、文革前は家の中では歌われなかった。「梁祝」は悲劇なので、家では不吉だからだ。逆に「陳世美」は外では歌わない。

Q. 葬式では歌われるか？

A. 葬式では大本曲を歌う暇がない。葬式では死者の一生を芸人が歌う。「梁祝」中に出てくる祭文と基本的に同じ。祭文調には大哭板、小哭板、陰陽板の三種類があり、今回歌ったのは大哭板。

Q. 大本曲は誰から教わったのか？

A. 父の楊漢から習った。1953年に北京民族学院が調査のため楊漢を訪ねてきたことがあり、その時中学生だった自分も夏休みに北京から来た人と一緒に習った。文革後、また調査に来る人がいて思い出した。

Q. どのように習ったか？

A. 台本は見ずに、口承で習った。父は三線も上手だった。父は9歳で母を亡くし、貧しかったので学校に行っておらず、秀才だった父方のオジについて学んだ。歌は年配の芸人たちから習い、14歳から道師についた。昔は誰でも大本曲が歌えた。台本は、全部を暗誦するのは大変なので、その助けとして利用した。

Q. 台本を写すとき改変することはあるか？

A. 楊漢は台本を見ずに歌うときがあり、即興を混ぜるときもあった。台本を自分なりに理解して、付け加えることもあった。楊漢は1958年に、ペー族劇団の俳優をやっていた。

Q. メロディーは何種類あるのか？

A. 南腔は18種類、北腔は13種類。

Q. なぜ音仮名を使用するのか？

A. 書き手の中国語のレベルによるかもしれない。また、音仮名の方が見てすぐに発音が思い浮かぶからかもしれない。

Q. 対歌は歌うか？

A. 対歌を歌ったことはない。

Q. 大本曲はどこで歌うか？

A. 大本曲は上品なので、家の中で歌う。外で歌うのは俗なもの。

8/12 午前 趙丕鼎：1942年生、大理市喜州鎮作邑村、北腔の歌い手

Q. 盆に大本曲は歌うか？（この日の午後、趙氏が近隣の初盆に招かれていたため質問）

A. 盆に大本曲は歌わない。葬式の出棺の日に、死者の一生を大本曲のメロディーで歌う。ソーシンバオ（初盆）は、前年の農曆7月14日以降に亡くなった人がいる場合に行われる。朝に豚の生肉を供え、夜に客に食事をふるまう。客が帰った後、祭文を唱えながら紙銭を焼く。

Q. 家族も大本曲が歌えるか？

A. 一家みな歌える。

Q. 大本曲はどのように学んだか？

A. 父から台本を見ながら学んだ。その後、兄から「上関花」を学んだ。

Q. 台本がなくても歌えるか？

A. 物語が多いので覚えきれない。

Q. 小さいときは漢字が読めないのでは？

A. 小学校卒業後学び始めたので、漢字は読めた。父は漢字が読めず、台本を二冊暗誦していた。

II. ペー曲台本集成

祖父は漢字が読めたが、何故かは不明。祖父が残した台本は文革の時に燃やされた。

Q. 「梁祝」はどのような時に歌うか？

A. 葬式では喜ばれない。家でも喜ばれないので歌わない。葬式では祭文を大本曲のメロディーで歌う。芸人以外で歌える人はほとんどいない。

Q. この「梁祝」の台本はいつ写したのか？

A. 1993年。3回目か4回目の写本。その前に写した台本は没収された。

Q. 中国語表記と音仮名表記は、どのように区別して書いているのか？

A. その時の気分。書きやすさも影響しているかもしれない。読むときはどちらでも同じ反応速度で読める。

Q. 対歌は歌うか？

A. 録音のため、白族調の対歌に参加したことはある。昔は三月街などで大本曲を上演していたが、今はない。歌で結婚はしていない。

Q. 台本は中国語表記が混じっているが、全て白文（音仮名）で書くことはできるか？

A. それはできない。

8/12 午後 趙敏（大理学院教授）

大理学院が保管している、民国期の白曲台本（短曲残本）を見せてもらう。

伝統的な白族の民間情歌を民国期のある専門家（施廷富？ 白族）が記録したもので、手で写されており、裏に筆写した本人のものと思われる名前が書かれている（ただしその部分の画像は今回入手できなかった）。

施氏の白文にはルールがあり、民間で使われていた白文の規則で書かれていると思われるが、施氏独自の白文である可能性もある。

8/13 座談会（出席者：張錫祿（大理学院教授）、尹明挙（前天理市文化局長）、王鋒（中国社会科学院研究員）、岡部、遠藤、富田）

Q. 「您」の意味で使われる「利」は発音が「ni」で、「您」と発音がさほど違わないように思えるが、なぜわざわざ音仮名である「利」を使用するのか？

尹：「您」の字を知らないから「利」字で書いた。漢字の習得レベルが低いので、白語の発音に近い漢字を当てる。

王：「您」の白語発音は「nie」で、「ni」に近く間違えやすい。

・「保」＝「他（彼）」、「唵尼」（beni）＝「那位（あの方、三人称の尊敬語）」、「走」（o）、「杯」（be）＝「你来了（来る）」、「让」（za）＝「您来了（来るの尊敬語）」

Q. 白語の漢字表記方法の種別は？

①中国語と意味・発音ともに同じ

- ②中国語の発音を借りて、別の意味を表す（音読）
- ③中国語の意味を借りて、白語の発音で読む（訓読）

例)「太陽」(nipi)

漢字の下に丸がついていれば訓読、点なら音読

※尹氏はこのルールで筆写しているが、今回取材した台本の多くはそのような記号を用いていない。

ただ、大理学院所蔵の民国期の台本には、そういった特徴が見られるものもある。

- ④漢字の偏やつくりを借りて作る創作字

例)「吐」(no)

創作字にルールはないが、みな見て分かる。

助詞は主格・所有格・目的格によって発音が異なる。

Q. 音仮名にルールはあるか？

尹：白語が統一されないのは、音読・訓読が統一されておらず、各々勝手に読んでいるから。

どの音仮名を使うかは、村によって、また写し手によってくせがあり、一定ではない。そのため、別人の書いた白文は読みにくい。

王：まだ論文化していないが、それなりの基準はある。

- ① なるべく白語の発音に近いもの
- ② 白語の基本語彙にないもの
- ③ 画数が少ないもの

Q. 訓読にルールはあるか？

尹：二字以上の熟語が訓読になりやすい。

例)「眼泪」,「夫妻」

「眼泪」(miyi) だが、「眼」≠ mi, 「泪」≠ yi

山の上や洱海の東の人には尊敬語がない。尊敬語のある喜洲の言葉はみやびに聞こえる。

Q. 「人」の発音が二種類あるため、「閑人」と書くととっさに読み方を迷うから「暇尼」という音仮名表記を使うと説明した芸人がいるが、どう思うか？

尹：中国語は単音節だが、白語は複音節が多い。「人」=niga。

文脈の中なら「シャニ」だけで「閑人」の意と分かるが、通常は「シャニシャカ」で「閑人」の意味となる。

張：漢字習得レベルの高い人なら、「閑人」と書いて下に丸印をつける。

王：大本曲は7音 or 5音で構成されており、「シャニシャカ」では字が余るので、「シャニ」だけとし、音読ではなく訓読する。

II. ペー曲台本集成

Q. 白文に地域差はあるか？

尹：大理地域は歌い手の交流があるためだいたい同じだが、劍川など他の地域の白文は異なる。

Q. なぜ音仮名や訓読を混用するのか？

尹：地域によって白語の発音も異なるので、全部音仮名では意味が通じない。

漢字を借りることで、他地域との交流が可能になった。例えば周辺のチベットや彝族との交流に漢字を使用してきた。

王：全て音読（音仮名）表記にしてしまうと、発音が同じで意味が違う語の区別がつかない。

白語は現在7割が中国語だが、「水」を発音どおりに書くと「霽」になるが、「霽」は画数が多く、書くのが面倒なので「水」と書く。

「我」（ŋo）の発音は中国語にはないので、訓読するしかない。

尹：私（尹氏）が記録する場合、民間芸人の記録法・中国語・アルファベットを使用する。自分では読める。

中国語にない発音も多いが、ピンイン表記より、漢字を借りて書く方が便利。

Q. なぜ白文は統一されなかったのか？

尹：白族はおよそ200万人おり、南・中・北の方言がある。村によっても方言が異なるので、全部音仮名表記では交流ができない。

日本は大和民族で統一されているが、南詔時代は彝族が多く、白族が中心になったのは大理国時代から。白語が標準語にならなかったという歴史的要因のため、白族文学が生まれなかった。

張：南詔・チベット・中国（唐）の三つの勢力があり、南詔時代は100以上の民族がいた。南詔時代は河蛮の言語が標準語となっていた。

Q. 白文はどういうときに使われるのか？

尹：散文に白文を使うことはほとんどない。墓誌も韻文。南詔・大理国時代は全て漢文表記だった。統一された文字交流のために漢文が必要だった。

尹・張：発音の違う村々で大本曲を共有するために、白文で記録されるようになった。

尹：全唐詩の中に白文混じりの詩がある。

【白国因由】は文法が白語。

Q. 大本曲の意義は？

張：昔は仏教・儒教の布教に、今は政府の宣伝として大本曲が使われている。

王：対歌や祭文は個人的なものだが、大本曲は公共性があり、白語統一に貢献している。

Q. 白文で書かれた大本曲の台本をどうやって学ぶのか？

尹・張：漢字を知らなくても、大本曲の台本から学ぶ。

尹：字というよりは図案のような認識なのではないだろうか。

念仏会の老女たちも字は読めないが、経を見ながら唱えているのもそれと同様。

Q. 大本曲の歌手の社会的地位は？

尹：大本曲の歌手は先生と呼ばれ、社会的地位は高い。昔はかごにかつがれ、または馬に乗って招待された。

もともとシャーマンの存在だった可能性がある。

大本曲そのものにも、鬼払いなど呪術の効果がある。

例) 新築儀礼のときに「梁祝」を歌う。

いつシャーマンが大本曲の歌手になったのかは不明。

Q. 仏教と大本曲との関連は？

尹：大本曲の中には仏教故事もある。仏教文学と関連がある。

Q. 「山花碑」と大本曲との関連は？

尹：「山花碑」は白族文化の775を利用して書かれた文人作品。

張：「山花碑」は短い、大本曲は長い。

Q. 視覚障害者が大本曲を歌うことはあるか？

？：視覚障害者は三線引きや他の歌を歌うことはあるが、大本曲は歌わない。

8/14 黄世代：1949年生、沙溪鎮沙坪村黄花坪自然村、本子曲の歌手

蘇貴：1939年7月生、沙溪鎮東南村南門自然村、本子曲の歌手・三弦弾き

※剣川では「梁祝」は対歌の形式で歌い、登場人物の名前以外は白語だという。本子曲と対歌のメロディーは同じであった。歌ってもらったものは、登場人物の設定だけを梁祝とした対歌であった。

〈黄世代〉

Q. 本子曲と対歌の違いは？

A. 本子曲は決まった歌詞だが、対歌は即興なので難しい。

Q. 本子曲の歌詞を対歌に使うことはあるか？

A. 引用できれば、本子曲の歌詞を使うこともある。

Q. 本子曲はどのように学んだか？

A. 子どものころから好きだったので、本子曲をそばで聞き歌えるようになった。

II. ベー曲台本集成

専門的に学んだことはない。

字は読めない（学校は小学校2年まで）が、歌を一回聞いて本子曲の台本を見ればわかる。

ただ普段台本を見ることはしない。

蘇貴は字が読める（中学卒業）ので、台本を見る。剣川県文化館から台本を写した（今もあるかは不明）。

子どものころ本子曲を歌っていた人たちも台本を見ていなかった。

Q. 歌で結婚したか？

A. 対歌で知り合い結婚した。1959年？に入り婿。出身はフルー。

Q. 本子曲はどのような時に歌われるか？

A. 大理の三月街、めでたいとき。葬式では歌わない。

葬式では祭文を主催者が読む（歌うのではなく、読む）。

（字が書けないのだから、祭文も即興？）

Q. 今の子どもたちは本子曲が歌えるか？

A. 子どもたちは本子曲も対歌もできない。好きではない。

Q. 好きな本子曲は？

A. 「月里桂花」。(対歌にも出てきたことあり。)

Q. 覚え方にコツはあるのか？

A. 本子曲は後ろの部分だけ覚えればよい。

Q. 本子曲と対歌の韻は同じか？

A. どちらも同じ「三七一五」。

Q. 三線も弾けるか？

A. 対歌も本子曲も自分で三線を弾きながら歌ってもよい。

Q. 歌会で本子曲を歌うことはあるか？

A. ない。聞き手がいない。

Q. 大理の三月街で本子曲を歌っても、聞き手たちは理解できるのか？

A. 大理の人も聞いてわかる。だが、剣川に大本曲の歌い手が来ることはない。

Q. 大本曲と本子曲の違いは？

A. 内容は同じだが、メロディーが違う。

Q. 結婚式に対歌も歌うか？

A. 歌う。新郎代表、新娘代表で歌うこともある。

葬式では歌わない。

Q. 神話は歌えるか？

A. 神話は歌えない。

Q. 剣川に打歌はあるか？

A. 西山の人が竣工式に呼ばれて打歌をすることがある。

Q. 初めて女性に出会ったときに歌う歌詞は決まっているか？

A. 決まっていない。

相手が好きでないときに歌う無情調というものがあるが、普通は歌わない。歌うとすぐに別れる。

Q. 最長でどのくらい歌えるか？

A. 石宝山（石勝寺）の歌会で三日三晩歌ったことがある。17、8歳のときで、当時すでに結婚していた。相手も既婚。寝ず食わずで歌った。

Q. 昔は本子曲の歌い手は多かったか？

A. 子どものころも本子曲の歌い手は多くなかった。好きな人が本子曲を学んだ。

〈蘇貴〉

Q. 本子曲はどのように学んだか？

A. 台本を先に見て、分からないところは人に聞いた。

Q. どのような時に本子曲を歌うか？

A. 人に誘われたときに歌う。歌会では伝統的には歌わない。一部を引用することはある。

Q. 「月里桂花」の台本はどこから写したか？

A. 張明德（故人）の手書きの台本から写した。

〈張笑〉

●本子曲について

寺院では本子曲を歌ってはいけないことになっている。

（この日は、如来がまだ開眼していないので可とのこと。）

昔はテレビがないので、庭や広場で本子曲を歌った。

●石宝山朝山歌会（石宝山歌会の前身）について

元々は石勝寺で歌の掛け合いをしていたが、寺が国家文化財に指定されたので今の場所に移った。ここから35km離れた麗江の白族は、お参りのために27日に麗江から布団を背負ってやって来ていた。寺の周辺に泊まったので、寺の周辺で歌われた。

白族調も漢調も歌われるが、向こうの白族調はメロディーが異なる。

雨がよく降るので、屋根のあるところや木の下で歌う。

28日に麗江の人が帰り、洱源の人が来て一泊する。鍋を持参し、山で食事をする。

今は交通の便が良くなったので、日帰りが多く、山に泊まる人はほとんどいない。

今は政府が30万元（交通整理費用として）かけて歌会を開いている。

II. ペー曲台本集成

●漢調について

剣川にも漢調はあるが、多くはない。

鶴慶・喜洲・洱源のサンユエンに多い。

もともと四川・貴州から移ってきた人から始まったのではないだろうか。

5-2. 2012年インタビュー集

聞き手：遠藤耕太郎（無印）、岡部隆志（岡）／通訳：張正軍

●蘇貴氏（1939年7月生，沙溪鎮東南村南門自然村）・張文氏（1945年4月生，劍川県文化館）

2012・8・14 於劍川県沙溪鎮老馬客棧

1. 蘇貴氏の文化程度について教えてもらいたい。

（蘇）（張）普段ペー語で生活している。漢語の新聞も読める。小学校を卒業している。本人は500字と言ったが、張文氏は2000字程度の漢語を知っているのではないかとやっている。蘇氏の年代だと、男性の70～80パーセントは小学校に行っているが、女性はあまり行っていない。

2. 蘇氏が台本に書かれた音仮名を読めることはわかるが、訓読みはできるのか。たとえば、「眼泪 yan2lei4」を訓読み [mi⁴²ci⁴²] とペー語で発音することはできるのか。

（張）その文が全部漢文であれば、「眼泪 yan2lei4」と漢語読みするが、漢語が読めない人には [mi⁴²ci⁴²] とペー語で説明する。

3. 本子曲をなぜ一字一音の音仮名で書くのか。

こうした方法は唐代から行っていたものである。本子曲は清代まで遡れる。音仮名で書く理由の一点目は、ペー語には方言差があるので、他の地域の人と交流するために記録した。記録したものは紙で伝えられるからだ。もう一点は、記録したものはそれを歌うことによって理解できるから、たとえ漢字が書けない人がいても伝わっていくことになる。

4. （今回「月里桂里」をいったん声に出して読む練習をしてから歌っていたが）音仮名だけでは読みにくい漢字が出てくるのではないか。

だいたい記録の方法は決まっているので通じるが、すべてが統一されているわけではない。そのため書き手によって方法が違う場合があり、読めない場合もある。この台本は、張文が自分で手を入れたものなので、蘇貴が読みにくいところがあったのだ。

5. 張氏はなぜ読めるのか。

書き方は人によって異なる場合があるが、たくさんの台本を見ておくと理解できるようになる。その前提としては、読み手、書き手がある適度の漢語の知識を身につけておく必要がある。音仮名は統一されているわけではないが、ある程度の数に絞り込んでいる。たとえば、「あなた」[no]を表す漢字は、「農」「儂」「努」などである。もう一つは前後の文脈を見ると読める。こういう工夫によって90パーセントは読めるようになる。またもう一つの前提として、書き手はペー語がわかる必要がある。例えば「天」を、劍川では [hin]（鼻音）、大理では [he] と発音しているため、これを書くときに「天」と訓読みで書くことがある。方言が異なると書いたものを読むのは、それ

II. ペー曲台本集成

だけ難しくなる。また、新しい語の意味を書く時には漢語を用いてペー語読みする。

6. 音仮名を3~4字に絞り込んで、前後の文脈を見ることによって90パーセントが通じるというのはよくわかった。本子曲の台本のほかにこうした工夫をして読むものはあるのか。

祭文、仏教経典（阿舎利経）などがある。

7. 音仮名で書くことによって他の地域の人と交流できるというお話だったが、なぜ他の地域の人と交流しようと思うのか。

自分の作った詩を人に知ってもらいたいし、また同じ民族の中で伝え合うことによってペー族の文化を発展させていくことができるからだ。

8. 他の地域の人と、具体的にどのように交流するのか。

手書きで書写して他人に見せる。山花碑のように石に刻んで伝える場合もある。「鴻雁帶書」は手書きのものが残っているからこそ、それを見ることによって他の人と交流することができるのだ。蘇さんは覚えているから歌えるといったが、それでも年をとって忘れてしまわないように書くのだ。

9. 黄世代（小学校3年まで。漢字はほぼ読めない）が歌ったものと、蘇さんが文字を見て歌ったものとは、どのように違うのか。

文字が読めない人は、文字の読める人に聞いて一句一句覚えていく。その音声を聞いて暗唱するのだから、同じである。老婦人が念仏の経典を覚えるのと同じことだ。

10. 剣川の本子曲の歌い手が、大理の大本曲の歌い手と交流することはあるか。

本子曲と大本曲は書き方も内容も異なるから、台本を交換しても歌えない。ただ歌い手が相手に説明すれば理解はできるだろう。そういうわけで、あまり交流が多いとはいえない。むしろ、恋の歌、歌掛けの歌の方が交流は多い。聞いていておもしろいところがあれば取り入れることがある。

文革以前には、本子曲を演唱して国の政策を宣伝することもあった。それは歌舞団や文化局の人が行った。60年代には、剣川のそういう関係の人が大理に行ってそれを聞き、その表現をもとに自らの本子曲を作りかえるということもあった。大理との交流ということでいえば、文革以前のほうが多かった。

11. 大本曲は訓字や借字が多く、本子曲には音仮名が多いようだが、この書写方法の違いはどこから出てくるのだろうか。

方言が異なるので書き方も違う。剣川を中心とした中部方言と大理を中心とした南部方言は異なるので、記録の仕方も異なる。中部方言には古いペー語が残っているが、大理では漢語の影響が強い。**【古語を表記する音仮名】**大理の言葉は訓読みというよりは漢語そのものといってもよい。大理の

ペー族は40パーセントであるのに対して、剣川葉80パーセント以上がペー族である。たとえば「阿小妹」を、大理では漢語で呼び掛けるのに対して、剣川では[se you ti]とペー語で呼び掛けている。

12. なぜ「阿小妹」と書いて[se you ti]と訓読みしないのか。

日常使っているので[se you ti]と発音し、それを音仮名で表記する。訓読にしないのは「○○○」と書くのが習慣になっているからだ。

13. 本子曲はどのような時に歌われるのか。

人が集まればどこで歌ってもかまわない。

14. お金をもらって演唱することもあるのか。

ある。頼んだ人がお金を払えばよい。

15. 葬式の場合にも歌えるのか。

歌えるが、喜ぶべき時と悲しむべき時とでは雰囲気やリズムが違う。メロディーは一つであり、それは山歌から変化してきたものである。【実演あり】

16. 歌掛けと本子曲はどうかかわっているのか。

本子曲は一つの物語を歌って人に聞かせるものだ。歌掛けは即興で恋の歌を歌う。昔の有名な歌集はいろいろなリズムで歌えた。

17. (岡) 剣川では本子曲を掛け合いで歌えると聞いているが、どうか。

「月里桂花」は二人で歌う場合がある。

18. (岡) 「月里桂花」以外も問答で歌えるのか。

二人で問答式でうたう場合には、主人公は二人である。梁祝は主人公がたくさんいるので、二人の問答で歌うのは無理だ。「鴻雁帯書」は登場人物が二人なので可能だ。

また、「鴻雁帯書」のような本子曲は主人公の一人称で歌っていく。これに対して大本曲には主人公を三人称で叙述する部分がある。これも本子曲と大本曲との違いである。ただ、梁祝の場合は、本子曲でも三人称で歌う。

19. (岡) 登場人物が二人の場合には、男女の掛け合いで歌っていくということでしょうか。

そうだ。それは現代的な歌い方である。昔は一人で全てを歌っていた。

II. ベー曲台本集成

※ 8月15日昼食時、蘇貴氏の話

蘇貴氏は文革時、文工団（文芸交錯者団体）に所属して、本子曲によって共産党の宣伝をしていた。宣伝の映画を上演する際に本子曲を歌った。本子曲の一部に兵隊になることがよいイメージになるように入れたりした。政治スローガンそのものを歌うわけではなく、例えば「月里桂花」の男主人公が兵隊になっているなどと歌うわけである。なお、歌舞団は県レベル、文工団は州レベルである。蘇貴氏は1964年に、張明德に本子曲を習い始めた。蘇さんは自分で一曲創り張明德氏に認められて弟子入りした。張さんは劍川の人だが、各地を宣伝のために廻っており、劍川にやってきた時に習った。

●段昆雲氏（1959年5月生、劍川県弥沙郷文興村、本子曲の歌い手・三弦弾き）

2012・8・15 於劍川県沙溪鎮老馬客棧

1. 段氏はどのようにして本子曲を覚えたのか。

蘇貴氏と張文氏に習った。蘇さんは張明德氏に習っている。

2. 段さんの台本は誰のものを写したのか。

張文氏のを写した。

3. 蘇さんの台本は。

張明德氏のを写した。

4. 習うときには、やはり音で聞いて覚えてから文字にしているのか。

そうだ。聞いて覚える。その後、写して覚えていく。

5. 段さんの文化程度は。

小学校卒業だが、その後、文工団に入っているので中学卒程度だろう。文工団とは県の歌舞団のようなものだ。

6. 段氏は本子曲を、人びとに頼まれてその家に行って歌うということもあるのか。

ある。常にそうだ。結婚式にも葬式にもある。

7. ある程度の文字を知っていて、歌掛けのできる人であれば本子曲を歌えるのか。

それは無理だ。大卒でも無理だろう。先生について教わらないと本子曲は歌えない。

8. 自分が歌掛けで歌った歌を文字にすることはあるのか。

普通はしない。だが、特にすばらしい歌詞があればメモにすることもある。

●張文氏 (1945年4月生, 剣川県文化館)

2012・8・15 於剣川県沙溪鎮老馬客棧

1. 「梁祝」は全てが音仮名ではなく、借字や訓字がけっこう入っている。「月里桂花」, 「鴻雁帶書」は音仮名中心であった。その違いはどこにあるのか。

もともと漢民族のものが伝わってきたものなので、漢語でないと表せない部分があるからだ。

2. 「月里桂里」「鴻雁帶書」は土地の歌なのか。

そうだ。

3. 梁祝は葬式で歌えるのか。

歌わない。正月休み、農閑期など、人びとが集まるときや楽しみたい時に歌う。

4. 結婚式では歌えないでしょうね。

歌いません。楽しい時ですから。

5. 段昆雲氏は、張文氏のものに赤を入れ、歌いやすいように赤を入れ、歌いやすい自分の台本を作成した。どういうところに赤を入れているのか。

段さんが読みにくいところに赤を入れている。具体的には以下の通り。

①1ページ: 「言」→「言」(読みにくい字を丁寧に書いた。)

②1ページ: 「安(ア)ミド」→「堂(タ)ミド」(アミドもタミドも同じ意味だが、歌い手の癖として、張文氏はアミドが歌いやすく、段昆雲氏はタミドが歌いやすいということだ。口に載せやすい。「ア」も「タ」も互いに交流するという意味。「アミド」「タミド」はその否定形である。ニュアンスとして、「アミド」は互いに交流するチャンスがない。「タミド」は互いに隔てられたという意。)

③2ページ4行目: 「可有」→「可以」(「可」は読みにくい字の書きなおし。「有」は書き間違えを訂正。)

④「巨」→「巨のような字」(段氏の学力が低いため、「巨」を誤字と思い「巨のような字」に書きなおしてしまった。)

⑤段さんは一字一字このとおりに歌ったのではなく、ある程度、自分の癖に直して歌っていった。歌い手の自由がかなりある。むろん聞いてもわかるし、意味も同じである。

⑥168ページ: 「牛」→「wo」(訓読みを音仮名にした。ある程度の漢語の知識のある人は訓読みの方が都合がいいが、レベルが低い場合には音仮名にする。)

II. ペー曲台本集成

- ⑦「療把者」(「療」は同字の書きなおし。「把者」を「者把」としているが、文法的にはどちらも可能。「把」が動詞。「療者」が「これら」の意で目的語になっている。目的語の間に動詞がくる場合も、目的語の前に動詞がくる場合もあるということだろう。ともに音仮名。)
- ⑧「阿嘗」(音仮名を別の漢字で表記。多少発音は異なるが、歌い手の慣れによる。)
- ⑨ 175 ページ:「看」→「漢」(訓字の音仮名への書き換え。)
- ⑩(「聘」を同じ音仮名で簡単に書いている。)
- ⑪ 179 ページ:同字の書きなおし。
- ⑫「這」(音が同じ字への書き換え)
- ⑬ 180 ページ:「買」を旧漢字で表記。自分の学力に応じて。
- ⑭ 182 ページ:「坐」→「古」(訓字を音仮名に)。「哭」→「咒」(誤って直した。)
- ⑮「安」草書体が読みにくいので直した。

6. 大理の大本曲の梁祝はとても長いが、本子曲のそれが短いのはなぜか。

大理の方が漢文化の影響を受けており、本子曲で漢民族から移植されたものは「梁祝」しかない。劍川にはペー族自身のものが多い。

7. 梁祝は、漢民族から大理に入り、劍川に伝わったものか。

大本曲は、劇の台本に基づいて制作したものであるが、こちらの梁祝は台本に基づかず、物語のストーリー、あらすじによって作ったものだろう。

8. (岡) 劍川の歌い手が、そのあらすじをもとに台本にして長くするということがあるか。

それはない。大本曲は 18 里の見送りなど、漢族の劇に等しい。こちらはただあらすじだけであるが、生活に使われていることばやペー族独特の比喩がとても豊富である。「鴻雁帶書」と「月里桂花」は一人称で歌っていたが、梁祝は三人称と一人称が混ざっているという特徴がある。

9. (岡) 劍川の人は、「鴻雁帶書」と「月里桂花」が好きなようだが、梁祝も好んで歌っているのか。

「鴻雁帶書」と「月里桂花」の方が好きだ。

10. 「鴻雁帶書」や「月里桂花」が地元の歌であるならば、それを台本に書くというのは、大本曲の影響ということなのか。

歌掛けが本子曲に影響を与え、本子曲がまた歌掛けに影響を与えている。

11. 「月里桂花」の素材となるような歌を「書く」というきっかけが、本子曲という形式にあったのか。

先に歌掛けがあり、本子曲はその歌掛けの一部を取り入れたのではないか。本子曲は物語的存在であるから。

12. 歌掛けがなぜ記録されるのか。そこに本子曲という形式があるということなのか。

歌掛け歌を記録する人は普通はないが、優れた歌を記録するということはある。歌掛けは即興的であり、歌掛けは歌いっぱなしである。本子曲は文字化してから手をいれていくことがある。

13. (山) 口承の歌をみんなに歌わせるために「書く」ということはあるか。

それはある。記録する目的は人に伝えたいからだ。歌い手はこれを見て、また見ながら私がする説明を聞いてわかるようになる。記録によって伝えているわけだ。そうしなければ忘れてしまうからである。これをもとにすれば、あとあとまで交流できるのだ。

14. ある時に、剣川で本子曲を作ろうとした時に、地元の歌掛けの歌が集められたということはあるか。

優れた歌を集めるということはある。今の文化館もそういうものを集めて、テープにしたりして普及させている。

15. 大理で大本曲が流行っているのを剣川の人が見て、自分たちもこういう曲を作ろうと考えたときに、地元の歌掛けを取り込んで創ったものが「月里桂花」であるということはあるか。

それは不可能だ。昔の歌い手は山で歌って帰ってしまう。誰かがそれを記録するということはない。

16. (岡) 今、ある人が本子曲を創作するということはあるか。

国の政策を宣伝するために、特に60年代には新しい本子曲が創られた。

17. (岡) 「月里桂花」のような抒情的な歌も創作するのか。

する。施珍華がまさにそうだ。「石宝山・・・」は本子曲になっている。

18. (岡) そういう本子曲がまた歌い手(芸人)によって伝えられていくことがあるか。

政治的な歌は、その時代が終われば終わってしまう。またそういう歌は漢語で書く。

19. (岡) 施氏が創った本子曲は漢語なのか。

漢語もペー語もある。

20. (岡) 人びとに愛唱されている本子曲で、作者名がわかっているものはあるか。

Ⅱ. ペー曲台本集成

基本的にはわからない。文化人は「月里桂花」を誰が整理したかは知っているが、農民にそれはわからない。蘇貴氏も政治的な、計画出産の本子曲を創ったことがある。

21, 「月里桂花」はいかにも棺民族葬的な題目だが、なぜそういう題目になるのか。整理した人が、魅力があると思ってつけたのだろう。ペー族の人も、月の中に桂があるということは知っている。恋の歌には、「白い月、白い妹」という歌詞もある。

22, 張月齊齋, 李桂香は漢民族の名前か。
そうだ。

23, 漢族の山歌（恋の歌）が入ってきたという状況はないか。
それはあるかもしれない。劍川調のメロディーは弥渡のメロディーによく似ている。弥渡は漢族居住地である。昔、1000年以上も前にここには漢族が移ってきている。ペー族のメロディーは地域によって異なっている。【漢・ペー交流地区で恋歌が歌われている？】

24, 西山の打歌は有名だが、恋歌もあるのか。
ある。～アイヨという。大理は～アイヤ、～アヘヘだ。

○インタビューを踏まえてのまとめ（遠藤）

1, 訓字・借字+音仮名という伝統的な台本の表記の仕方は、大理中心部（洱海西岸）で確立し、血縁関係、師弟関係によって継承されてきた。【張錫祿 14, 張錫祿 15】こうした伝統的な表記方法は一定のリテラシーを身に付けることによって可能となるが、それが十分でない場合には、訓字とすべきところを音仮名で表記することが行われる。洱海東岸地域の音仮名の多さ、また劍川地域の本子曲の音仮名の多さの原因の一つである。【張文 5-⑥, ⑨, ⑮】

2, しかし、音仮名表記への傾斜の理由を、リテラシーの低さにのみ求めることはできない。まず、ことばの違いや作品の性質がそれを決定する場合もある。劍川県は大理に比べ古語、あるいはペー族独自のことばがまだ方言として残っているため、それを表記する場合には音仮名を用いる必要が出てくる。【蘇貴張文 11, 張文 1】また、漢字の音（つまり中国語音）にないペー語の音を表すためにも音仮名は用いられることになる。【王 8】

さらに、劍川県にあって、梁祝は比較的借字や訓字が多く用いられ、「月里桂花」「鴻雁帶書」には音仮名が多用される点から、作品の長さ、作品の質が関係していると考えられる。【王 3, 張錫祿 5】

3. 次に、伝承や継承のされ方の相違が、音仮名表記のあり方を決定することが考えられる。洱海東岸地域の大本曲や劍川の本子曲は、その継承のあり方が大本曲とは異なる。洱海東岸地域の大本曲は血縁や師弟関係による継承ではなく、洱海西岸地域の大本曲を聞きとって歌い手が整理したものである。そこに音仮名表記の現代性を見ることもできる。【張錫禄 14】今の心がかかなり自由に表現されるということで、これは実際に楊正華本がその表記をかかなり自由に歌っていることから理解できる。こうしたあり方は、劍川でも確認されるのであって、自民族語の音声だけを表す表記だからこそ、微妙なニュアンスを表現するために自由に言いかえられ書き換えられていくということも指摘できる。【張文 5-②・⑤・⑦、張錫禄 15】

一方、劍川の本子曲は、口承によって継承されたと考えられており（施珍華『白族本子曲』解説）、口承で継承されていく場合のメモとして、音声伝える必要性から音仮名が多用されるということも言える。【蘇貴張文 3、張文 7・13、張錫禄 1、王 2・6】なお、本子曲が地域の歌掛けや大本曲とどうかかわっているかはまだよくわからないが、民国 17 年の「鴻雁帶書」は大本曲と同じように訓字・借字+音仮名というスタイルを取っており、こうしたあり方が口承で継承されるということもあった。【張錫禄 4】

4. 次に、地域間交流、地域を越えた交流、交流するためのリテラシーといった側面から、音仮名表記を捉えることも必要だ。音仮名表記は地域の音声を表記するために、基本的には地域に閉じられている。しかし、それは書くことによって現場性（例えば石宝山歌壇といった）を越えるという性質をもっており、そこに一定（劍川であれば中部方言地域）の地域意識が生じてくるし、それは文芸性とも繋がっている。【蘇貴張文 3・7】

音仮名という文字を介して、現場を越えて交流するためには、音仮名表記のルールが確立されていなければならない。【蘇貴張文 4・5、段 7、張錫禄 7・12】さらに地域を越えての交流には音仮名表記は対応できず、そこで訓字が再び求められることになる。【蘇貴張文 5、張錫禄 8】

地域間交流のレベルは、地域の文化館のような行政機関によってなされることもある。が、これとて歌うための音仮名という意識があることが重要である。【王 2】そしてこうした表記の仕方は知識人を介して地域を越えて広がることになる。【張文 14、張錫禄 12】

さらに、こうした地域の文化館レベルを越えたところで享受される本子曲は、音仮名中心表記をやめ、漢語や訓字を用いた普遍性を獲得していくのである。【張文 17・19、王 2・7】

5. 最後に音仮名表記と口承の歌掛けについて。口承の歌掛けと大本曲は、「月里桂花」が歌掛けで歌われた例などから交流しあっていると考えられるが【張文 10・11】、口承の歌掛けを記録する場合にも、本子曲で確立された音仮名表記のルールは用いられる。【張 9】また、音仮名表記のできる芸人が歌掛けを記録することもある。【段 8】結局、台本は耳で覚えるという口承性が音仮名表記の原点にあり、それを基にして交流が可能になっているのである。

II. ペー曲台本集成

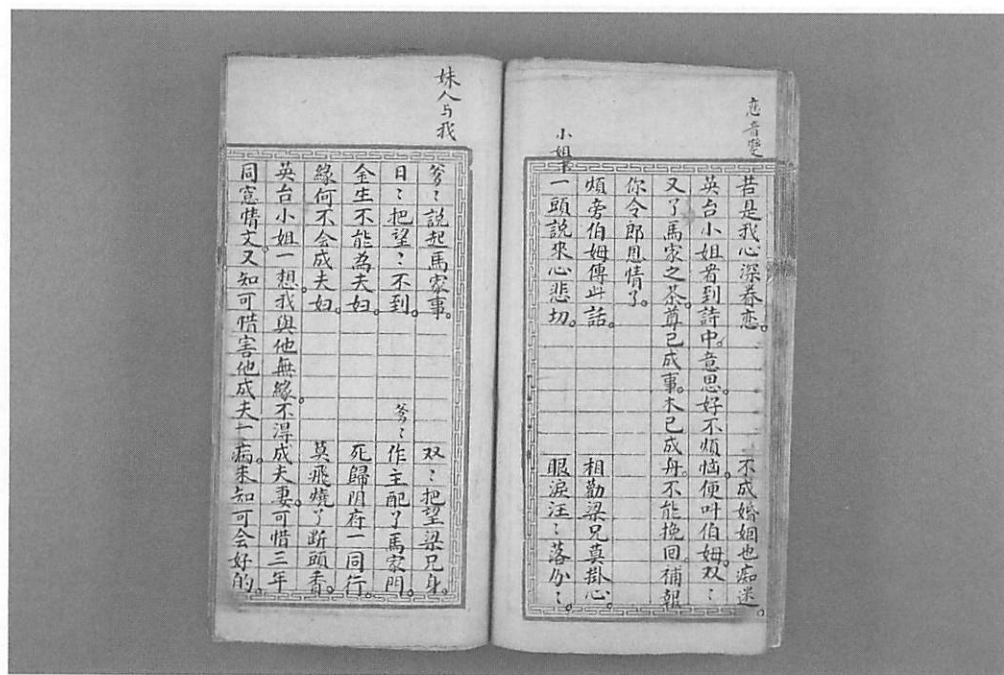
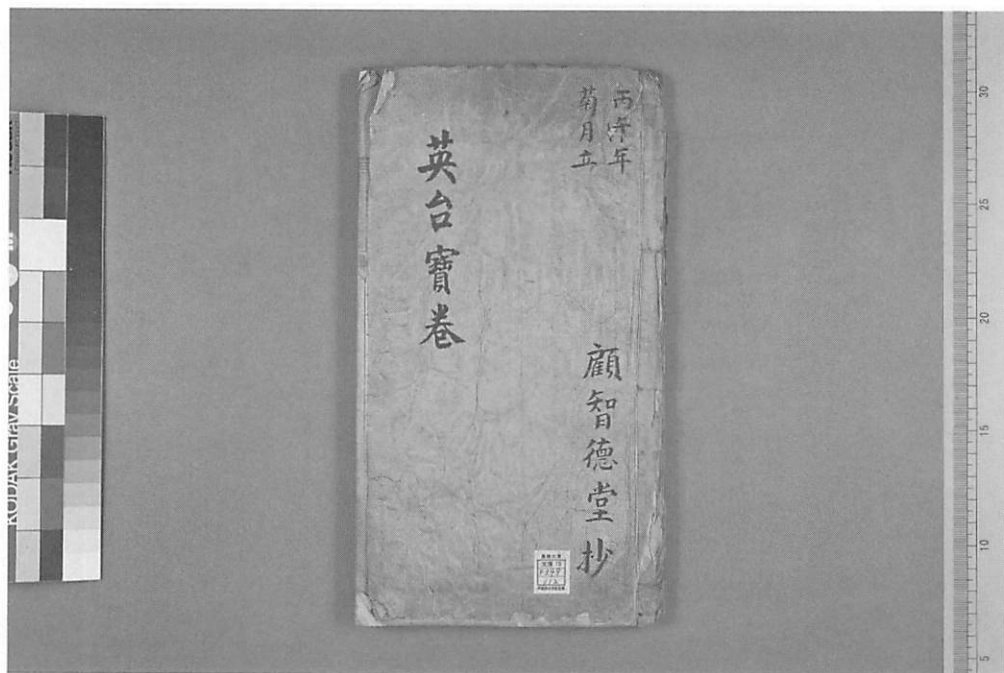
※ペー族社会の中心部で伝承される語り芸の台本は、自立語は音読み、訓読みで発音し、付属語は音仮名で表記されている。こうした表記法は血縁・師弟関係によって継承されており、その台本に忠実に語るスタイルが確立されている。台本に忠実なスタティックな語りである。

一方、中心部から距離を置いた周縁地域で伝承される語り芸の台本は、多くが一字一音の音仮名で表記されている。こちらは伝承に文字を介さない口承性がかかり入り込んでおり、その口承の音声を書きとめるメモ的なものとして台本が利用されている。メモであるから、音仮名はかなり自由に、山場をどう作るか、聞き手がどの程度漢語がわかるか、同じ意味を表す語でもどう言ったら言いやすいか、など、臨場的にかなり自由な変更が加えられ、さらにそれが新たなテキストとなっていく。台本を臨場的に自由に変えていくダイナミックな語りということだ。

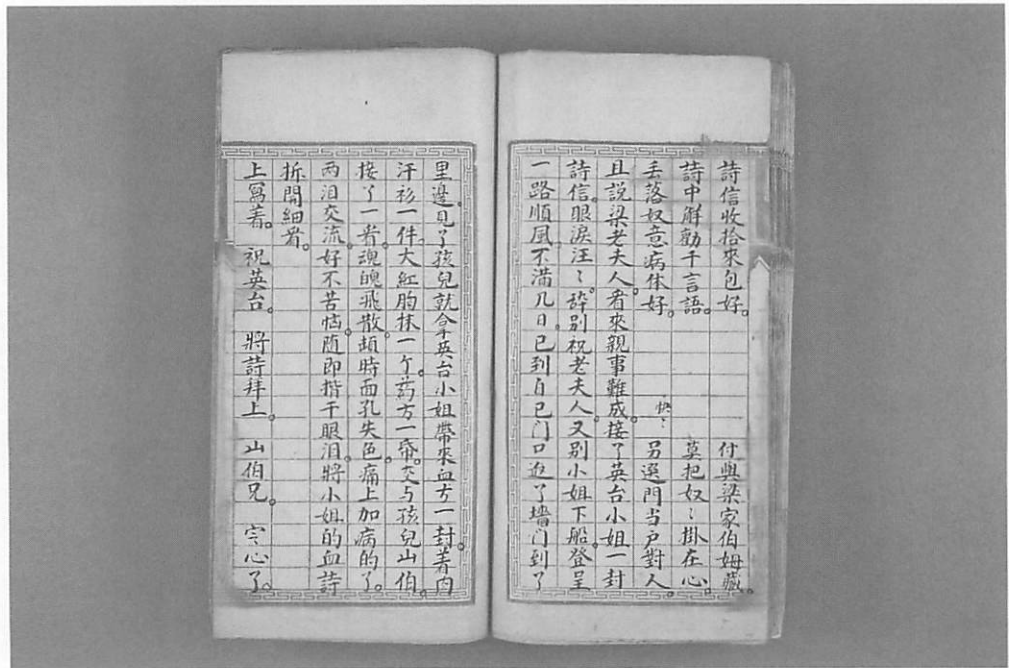
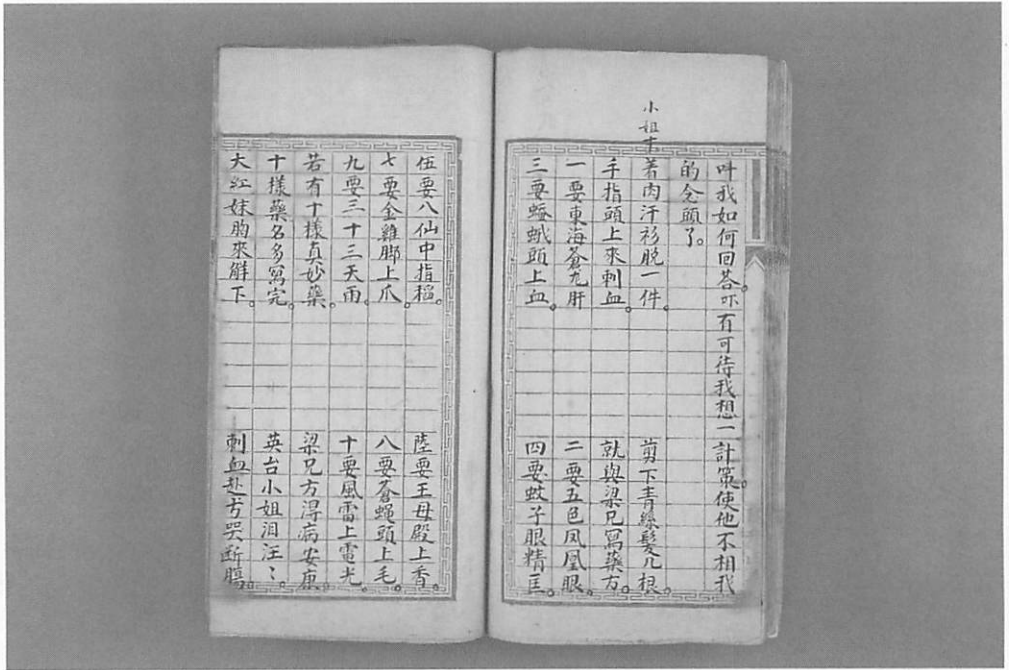
彼らの語り芸は、中心部でも周縁部でも、一字一字文字を追って覚えるものではない。いったん、耳で覚えて語れるようになってから、それを文字にするのである。相当に長い物語（長いものは3時間くらいかかる）をどうやって耳で覚えられるのかと聞いてみた。一首の終わりの決まり文句の部分を覚えていけばいいらしい。つまりスタティックな決まり文句に向けて、リズムに従って臨場的に語っていくことによって、物語は完成していくというのである。観客はストーリーを知っているから、ストーリーそのものが変わってしまってもはならないが、要所要所の決まり文句に到るダイナミックな盛り上がりとその都度工夫しているということだろう。

こうした口承性を基底に持った伝承をメモにした場合に、伝統的な音訓音仮名交じり文が比較的変更しにくいものに対して、音仮名中心の表記はそれが音声を書きとめるものであるからこそ変更しやすいということなのだ。そのどちらを選ぶかは、地域や個人のあり方、その関係性による。

付録 1. 英台宝卷 (早稲田大学図書館蔵)



(原裝書圖學大田讀學) 卷之三十一



付録2. ペー曲台本の音仮名率

ペー曲台本における音仮名使用率を大本曲、本子曲からそれぞれ一例を挙げて出した。表Ⅰ、Ⅱ及びグラフⅠ、Ⅱは大本曲「梁山伯与祝英台」中集・二「山伯染病思英台、英台開単救山伯」(『中国白族白文文献釈読』所収)全16段落、表Ⅲ及びグラフⅢは本子曲「月里桂花・相会」全10段落(『剣川県芸文志』所収)の音仮名率である。基本的に4句1首として計算した。

表Ⅰ：「梁山伯与祝英台」(首ごと)

段落	首	字数	音仮名数	音仮名率
1	1	26	13	50%
	2	25	10	40%
2	1	26	13	50%
	2	26	3	12%
	3	26	12	46%
	4	26	16	62%
3	1	26	4	15%
	2	26	8	31%
	3	26	0	0%
	4	26	0	0%
	5	26	11	42%
4	1	26	14	54%
	2	26	7	27%
5	1	26	12	46%
	2	26	8	31%
	3	26	22	85%
6	1	26	7	27%
	2	26	10	38%
	3	26	18	69%
	4	26	9	35%
7	1	26	10	38%
	2	26	8	31%
	3	26	8	31%
8	1	26	17	65%
	1	26	2	8%
	2	26	1	4%
	3	26	2	8%
	4	26	5	19%
	5	26	0	0%
	6	26	0	0%
	7	26	3	12%
9	8	26	3	12%
	1	26	13	50%
	2	26	12	46%
	3	26	9	35%
	1	26	11	42%
	2	26	8	31%
	3	26	2	8%
	10	1	26	11
2		26	12	46%
3		26	14	54%
4		26	9	35%

表Ⅱ：「梁山伯与祝英台」(段落ごと)

段落	唱者	字数	音仮名数	音仮名率
1	英台	51	23	45%
2	山伯	104	44	42%
3	四九	130	23	18%
4	山伯	52	21	40%
5	山伯	78	42	54%
6	梁母	104	44	42%
7	山伯	78	26	33%
8	梁母	26	17	65%
9	山伯手紙	208	16	8%
10	四九	78	34	44%
11	四九	78	21	27%
12	英台	104	46	44%
13	英台手紙	391	59	15%
14	山伯	598	146	24%
15	梁母	78	39	50%
16	山伯	78	5	6%
計		2236	606	27%

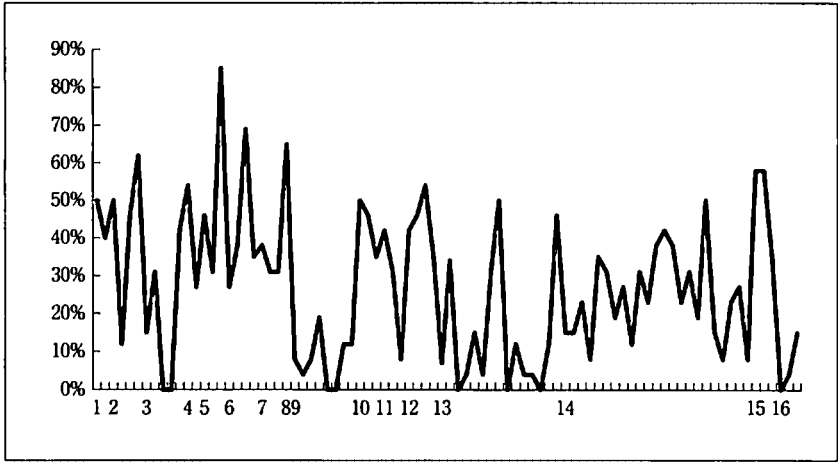
表Ⅲ：「月里桂花」(首ごと)

段落	唱者	首	字数	音仮名数	音仮名率
1	男	1	26	22	85%
		2	26	24	92%
2	女	1	26	18	69%
		2	26	23	88%
3	男	1	26	26	100%
		2	26	20	77%
4	女	1	26	20	77%
		2	26	22	85%
5	男	1	26	24	92%
		2	26	24	92%
6	女	1	26	26	100%
		2	26	23	88%
7	男	1	22	18	82%
		2	26	25	96%
8	女	1	22	18	82%
		2	26	15	58%
9	男	1	22	20	91%
		2	26	18	69%
10	女	1	26	17	65%
		2	26	24	92%
計			508	427	84%

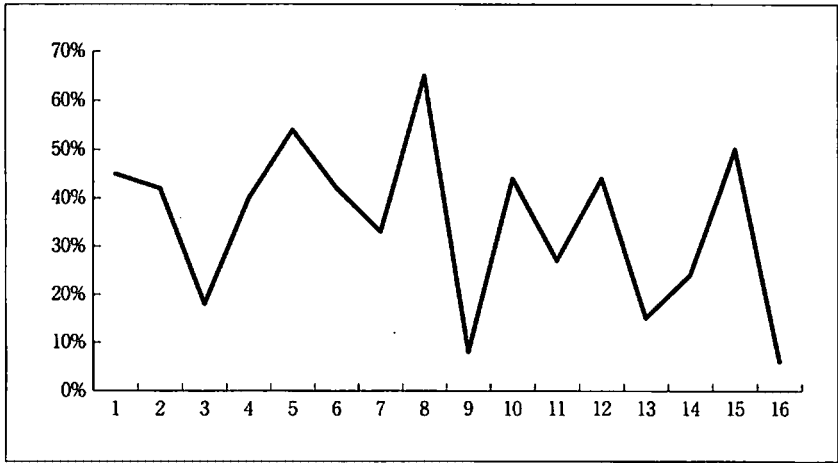
13	1	29	2	7%
	2	29	10	34%
	3	26	0	0%
	4	26	1	4%
	5	26	4	15%
	6	26	1	4%
	7	26	8	31%
	8	26	13	50%
	9	26	0	0%
	10	26	3	12%
	11	26	1	4%
	12	26	1	4%
	13	26	0	0%
	14	26	3	12%
	15	26	12	46%
14	1	26	4	15%
	2	26	4	15%
	3	26	6	23%
	4	26	2	8%
	5	26	9	35%
	6	26	8	31%
	7	26	5	19%
	8	26	7	27%
	9	26	3	12%
	10	26	8	31%
	11	26	6	23%
	12	26	10	38%
	13	26	11	42%
	14	26	10	38%
	15	26	6	23%
15	16	26	8	31%
	17	26	5	19%
	18	26	13	50%
	19	26	4	15%
	20	26	2	8%
	21	26	6	23%
	22	26	7	27%
	23	26	2	8%
16	1	26	15	58%
	2	26	15	58%
	3	26	9	35%
16	1	26	0	0%
	2	26	1	4%
	3	26	4	15%

Ⅱ. ペー曲台本集成

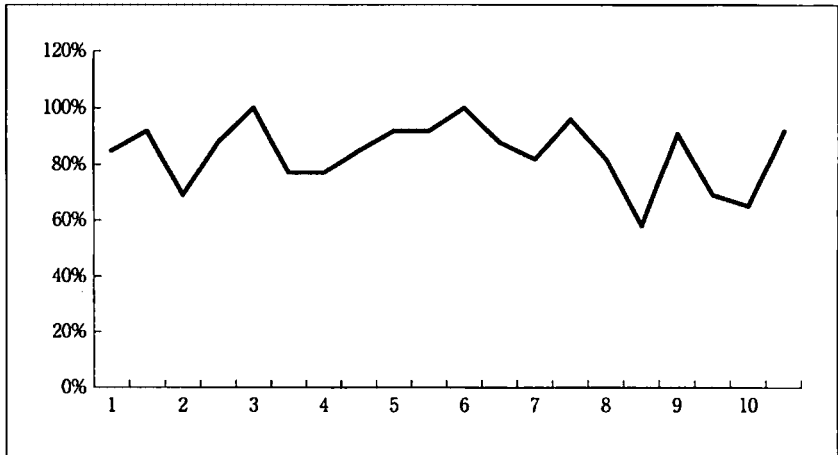
グラフⅠ：「梁山伯与祝英台」(首ごと)



グラフⅡ：「梁山伯与祝英台」(段落ごと)



グラフⅢ：「月里桂花」(首ごと)



(富田)

Ⅲ. 南詔徳化碑訳注

1. 南詔徳化碑概説（飯島奨・遠藤耕太郎）……………（188）
2. 南詔徳化碑訳注（古代の会編）……………（193）

1. 南詔徳化碑概説

南詔徳化碑は、『蛮書』によれば、第5代南詔王閣羅鳳が、766年太和城門に建立したものである。碑の高さは390cm、幅240cm。もとは3800字ほどあったとされるが、現在は大部分が欠損している。書体は楷書体。碑陽の行数は不明であるが、毎行約90字で、現在は211字が残存しているのみである。清・王昶^{おうちやう}『金石萃編』編纂時点では、800字ほどが残存しており、現在の南詔徳化碑研究はこれを基礎としている。碑陰は職官名簿で、41行、毎行の時数は不明、619字が残存している。

ところで「南詔徳化碑」とはいわば通称のようなものである。立石謙次はこれについて、次のように述べている。従来この碑文は閣羅鳳が仕方なく唐から離反する理由を述べ、南詔が唐の徳を慕うという意味で「南詔徳化碑」と呼ばれてきた。しかし、この碑文にそのようなことは書かれておらず、唐の不徳をなじり、唐のライバルである吐蕃の王（ツェンポ）を讃え、さらに唐に背いて吐蕃に帰順するという閣羅鳳の功績を讃えるために建てられたとして、これを「蒙国の大詔（南詔）の徳化が頌（たたえられている）碑」という意味を込めて「蒙国大詔徳化頌碑」という名称を用いている（『雲南大理白族の歴史ものがたり』雄山閣、2010年）。

たしかに碑文は、唐の不徳を批判し、唐と敵対関係にある吐蕃王（ツェンポ）を讃え吐蕃に与したいきさつが述べられ、その後は閣羅鳳によって南詔国内の統治が安定へと向かう様子が述べられていく。そこで本章は、南詔王の「徳」によって富に満ちて強盛な南詔があるという意でこれを解して「南詔徳化碑」と称した。

*

ペー語は元来、独自の文字を持たなかった。南詔時代766年に建立された南詔徳化碑は、すべて正式な漢文で表記されている。しかしその一方で、808年の南詔王尋閣勸と宰相趙叔達の贈答詩「星回節唱和詩」（『全唐詩』巻732）には、君主号や地名、動物名、動詞に音仮名表記が用いられ、また近年、漢字の仮借用法によってペー語を記した南詔・大理国時代の書写仏典が大量に発見されている。さらに元代には『白古通』、『玄峰年運志』という、ペー族先民の歴史を、漢字を利用してペー語を表記するペー文によって記した歴史書が存在したことが、明・楊慎『滇載記』序には記される。ペー文は、明代にはかなり洗練された山花碑（本書Ⅰ）の表記となり、清代以後にはペー曲の台本（本書Ⅱ）として、訓字主体表記と一漢字一音の音仮名名表記となって現代にまで続く。このように、南詔以後、現代にいたるまで、大理地方では正式な漢文だけではない、さまざまな表記のありようが、歴史書、韻文、仏典などのジャンルで用いられているのである。

工藤隆はペー族の文字表記には二つの流れ、——一つは歴史の表記の際にみられる漢文体の流れ、一つは韻文表記、例えば山花碑に見られるペー文体の流れ——があるとし、さらにこのように歴史的なものは漢文で書くという特徴は、沖縄や古代日本にも通じる特徴であると述べる。（『中国少数民族の掛け歌—ペー族—』『歌の起源を探る 歌垣』三弥井書店、2011年）。

南詔は、現在の雲南省大理地方において、唐との関係性のなかで建国された。7世紀中ごろより

唐朝に入貢，第4代皮羅閣（在位728?～48年）が大理周辺の諸国を統一し，738年，唐朝より雲南王に封ぜられた。その後，唐と吐蕃との緩衝材の役割を負って国家経営を行い，特に第6代異牟尋（在位779～808年）は王族や武将の師弟を成都に留学させ唐文化を大いに摂取した。続いて大長和国（902～28年）などの短命王調，さらに大理国（937～1254年）が建国されるが，元のフビライに滅ぼされる。こうした中国中原王朝との関係のなかで，ペー族はまざまな表記を創出しているのであるが，こうしたありようは，同時期に，隋，唐との関係のなかで古代国家を形成し，そのなかで漢字を受容し，漢文，変形漢文，一漢字一音の音仮名などを用いて，さまざまな文体を創出した古代日本の表記のありようや朝鮮半島のありようとパラレルな関係にある。（次頁年表参照）

したがって，南詔徳化碑が正式な漢文で表記されていることの意味は，東アジア規模での中国中原王朝と辺境（国家）との関係性のなかで捉えられるべき問題であると思われる。本章はその作業の前提として，とりあえず南詔徳化碑の内容を理解しておくところにある。

（飯島奨・遠藤耕太郎）

Ⅲ. 南詔徳化碑訳注

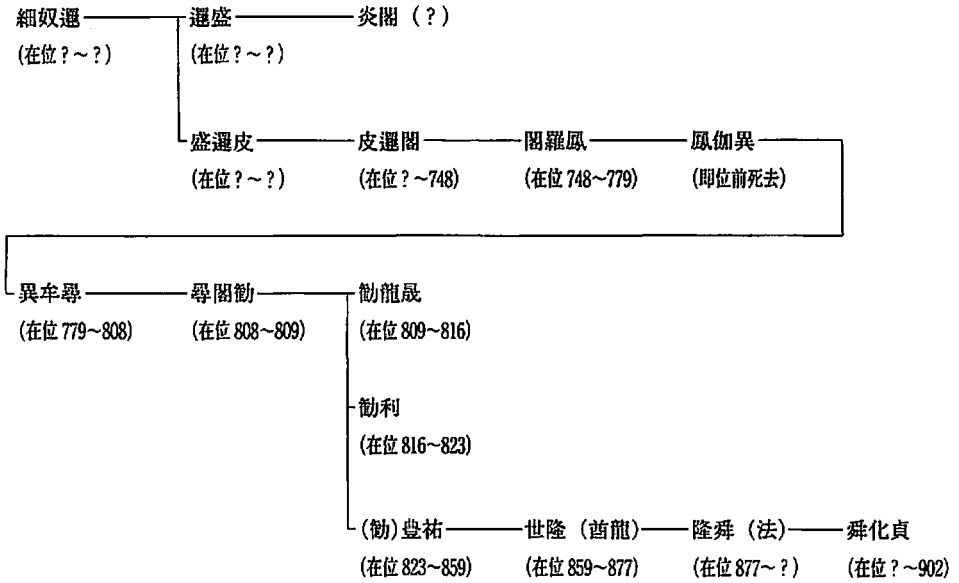
付録 1. 南詔・大理国, 中原, 日本列島関係史年表 (遠藤)

	大理地方 (西南夷)	中原	日本列島 (東夷)
前 109	漢武帝が滇王に「滇王之印」を下賜, 冊封される。		
57		後漢, 奴国に「漢委奴国王」印を下賜し, 奴国を冊封。	
239		卑弥呼, 魏より親魏倭王に冊封される。	
3・4世紀	洱海に白子国 (張氏政権・後に西洱河蛮と呼ばれる) が存在。		
413~502		倭の五王による朝貢, 冊封	
589		隋による中国統一	
600		遣隋使多利思北孤派遣	
607		遣隋使小野妹子派遣	
7世紀前半	白子国張子から蒙氏に主権が譲位。		
618		唐建国	
629			舒明天皇即位 (実質的な万葉歌の始発)
630		遣唐使犬上御田歊派遣	
7世紀半ば	蒙舍詔の細奴羅が唐に朝貢。		
663		白村江で唐・新羅の連合軍に破れる	
672		壬申の乱	
681			山名村碑文
701		遣唐使再開。留学生・留学僧らも渡唐。	
712			『古事記』
720			『日本書紀』
738	四代皮羅閣, 北部五詔を倒し洱海地区制圧。唐玄宗皇帝より蒙昶義の名を授けられ, 「雲南王」に冊封される。742年までに, 伎楽二部 (胡部・龟兹部) の楽人を下賜される。		
	劍南節度使・章仇兼瓊の失策を機に, 滇池周辺地域 (滇国) を制圧。		
739	太和城に遷都する		
748	皮羅閣卒し, 子の閣羅鳳が雲南王となる。		
750	五代閣羅鳳, 姚州都督・張虔陀の横暴を機に, 唐に反旗を翻す。		
751	唐は南詔討伐軍 (劍南節度使・鮮于仲通) 八万を送り, 太和城を囲むが, 閣羅鳳が多いにこれを破る。		
752	五代閣羅鳳, 吐蕃に臣従し, 「贊普鍾 (贊普 = 君主, 鍾 = 弟)」の称号を受ける。		
755		安氏の乱	
759			年代のわかる最後の万葉歌
774	閣羅鳳卒し, 孫の異牟尋が継ぐ。		
779	南詔・吐蕃の連合軍, 成都占領に失敗。		
794	六代異牟尋, 吐蕃を離れ唐に帰附し, 「南詔王」に冊封される。これより50年間, 南詔は毎年のように朝貢。成都の劍南西川節度使は南詔の高官の子弟を留学生として多数受け入れる。		

800	六代異牟尋、劍南節度使韋皋を介して「夷中歌曲」(南詔奉聖樂)を徳宗に献上する。		
801	南詔・唐の連合軍が吐蕃を大敗させる。		
804		第18回遣唐使派遣に最澄、空海、橘逸勢ら渡唐。	
809	尋閣勸、趙叔達が白文を用いた「星回節唱和詩」を贈答する。		
829	欲豊祐、唐との同盟を破り、成都占領		
838	第19回遣唐使派遣に円仁渡唐。円仁は遣唐使の席次が、南詔が一位、日本が二位であった。(『入唐求法巡礼行記』)		
875		黄巢の乱	
894			遣唐使廃止
902	漢人の権臣鄭買嗣のクーデターで南詔滅亡。		
907		唐滅亡、五代十国へ	
927	大長和国(鄭昊)が「転韻詩一章(有類擊樂調)」を後唐荘宗に献上。		
937	段思平が大理国を建国。		
960		宋(北宋)建国。	
1127		南宋建国	平清盛が南宋との私的貿易を行う。
1094	権臣高昇泰が段氏政権から王位を奪い、大中国建国。		
1096	段氏一族が復帰して、後理国建国。		
1117	二代段和替、北宋の徽王から「大理国王」に冊封される。		
1253	後理国、フビライ率いる蒙古軍に滅ぼされる。		
1271	元・明の一地域としての大理地方	蒙古が国号を元とする。	
1274		文永の役。日本軍は太宰府まで後退したが、暴風雨で元軍は大損害を受け退却。	
1279	元の政策として南宗禪が広められる。菱文に由来する宝巻が白文によって表記され、白曲として歌われる。	元(フビライ)による中国統一。	
1281		弘安の役。元軍は台風で退却。防塁を構築。幕府は南宋の僧を招来。蘭溪道隆は建長寺を、無学祖元は円覚寺を開く。	
1325		幕府は建長寺の再建費用を得るための建長寺船(私的貿易船)を元に派遣。	
1368		光武帝(朱元璋)が明を建国。	
1402		明は倭寇対策として足利義光に「日本国王」の称号を与え、再び冊封関係が始まる。	
1450	楊黼「詞記山花」(山花碑)。その他、現存しないが、楊黼には「竹枝詞数十首」があった。		

III. 南詔德化碑詁注

付錄 2. 南詔王系譜



2. 南詔徳化碑訳注 (古代の会編)

凡例

1. 本文は周祐『大理古碑研究』雲南民族出版社、2002年を底本とした。
2. 注釈にあたり次の文献を参照した。
 - ・万暦版『雲南通志』、1576年
 - ・〔清〕王昶『金石萃編』、1805年
 - ・向達『蛮書校注』中華書局、1962年
 - ・徐嘉瑞『大理古代文化史稿』中華書局、1978年
 - ・孫太初「南詔徳化碑箋証」『雲南古代石刻叢考』文物出版社、1983年
 - ・周祐『大理古碑研究』雲南民族出版社、2002年
3. 本文を適宜12段に分け、タイトル、訳文、注釈を施した。担当は以下の通りである。富田美智江(第1段～第4段、第12段)、遠藤耕太郎(第5段、第9段)、草山洋平(第6段、第11段)、飯島奨(第7段、第10段)、李莉(第8段)。

【1】南詔の起源

原文

恭聞清濁初分，運陰陽而生萬物。川嶽既列，樹元首而定八方。故知懸象著明，莫大於日月。崇高辨位，莫大於君臣。道治則中外寧，政乖必風雅變。豈世情而致，抑天理之常。我贊普鍾蒙國大詔，性業合道，智視未萌。隨世運機，觀宜撫衆，退不負徳，進不慙容者也。

訳文

かしくみ聞くところによると、清濁が初めて分かれた時、陰陽が動いて万物が生じ、山川が整った後、君主が起ち八方が定まったという。だから天空の明るいものに、日月より大きなものはなく、崇高さによって位を分けるものに、君臣より大きなものはない。道が治まれば内外は安定し、政治が(道を)外れれば必ず(詩の)風・雅が変化する。どうして世情が極まって、天理の常道を抑圧することがあろうか。我が吐蕃の弟分である蒙国大詔は、性質と行いが道に合い、その智慧はまだ起こっていない先のことも見通し、世の流に従い機に乗じ、時節を見て民衆をいたわり、退くときにも徳にもとるようなことはせず、進むときにも礼に羞じることはなかった。

注釈

- ・清濁～万物：『淮南子』天文訓に「静陽者簿靡而爲天，重濁者凝滯而爲地。……陰陽合和而萬物生」とある。
- ・懸象：天の現象。天象、天文。
- ・辨位：尊卑の位を別つこと。

Ⅲ. 南詔徳化碑訳注

- ・賛普：吐蕃の言葉で王のこと。『新唐書』吐蕃伝に「其俗謂彊雄曰賛，丈夫曰普，故號君長曰賛普」とある。
- ・鍾：吐蕃の言葉で弟のこと。『旧唐書』南詔蛮伝に「吐蕃令閣羅鳳爲賛普鍾，號曰東帝，給以金印。蠻謂弟爲「鍾」。時天寶十一年（752）也」とある。
- ・智觀未萌：『漢書』司馬相如伝に「明者遠見於未萌」とある。

【2】閣羅鳳の非凡さ

原文

王姓蒙，字閣羅鳳，大唐特進雲南王越國公開府儀同三司之長子也。應靈傑秀，含章挺生。日角標奇，龍文表貴。始乎王之在儲府，道隆三善，位即重離。不讀非聖之書，嘗學字人之術。撫軍屢聞成績，監國每著家聲。唐朝授右領軍衛大將軍兼陽瓜州刺史。

訳文

王の姓は蒙，字は閣羅鳳，大唐特進雲南王越國公開府儀同三司（皮羅閣）の長子である。靈に感應して生まれた内に徳を持つ傑出した人物で，額の角は非凡さを表し，龍の紋様は貴さを表している。はじめ王（閣羅鳳）がまだ太子の宮殿にいた頃，父子君臣長幼の道をしっかりと行い，国境防備の任に当たっていた。聖人の書以外は読まず，かつては民を養う方法を学んでいた。軍を率いればしばしば功績をあげ，国事を監督させればつねに王室の名声を世に知らしめた。唐は（閣羅鳳に）右領軍衛大將軍兼陽瓜州刺史の官を授けた。

注釈

- ・雲南王：『旧唐書』南詔蛮伝に「盛邏皮死，子皮邏閣立。（開元）二十六年（738），詔授特進，封越國公，賜名曰歸義。其後破洱河蠻，以功策授雲南王」とある。
- ・含章：美を内に含む，内に徳を蔵すること。
- ・挺生：傑出した人のこと。
- ・日角：額の中央の骨が日の形に隆起していることで，貴人の相。また相術家の語で左額のことを指す。
- ・儲府：「儲」は世継ぎ，世子のこと。
- ・三善：三つの善事。臣下が君主に事え，子が父に事え，幼者が長者に事えること。
- ・重離：「離」は「籬」に通じ，かきねのことか。
- ・撫軍：太子が君主に従って軍に赴くこと。
- ・成績：てがら。
- ・監国：国事を監督すること。
- ・陽瓜州：今の巍山彝族回族自治州（大理白族自治州の南部）の北部一帯。『蛮書』六詔に「長男閣羅鳳授特進兼楊瓜州刺史」とある。

【3】 洱河蛮・五詔の平定

原文

洎先詔與御史嚴正誨靜邊寇，先王統軍打石橋城，差詔與嚴正誨攻石和子。父子分師，兩殄兇醜。加左領軍衛大將軍。無何，又與中使王承君同破劍川，忠績載揚，賞延于嗣，遷左金吾衛大將軍。而官以材遷，功由幹立。朝廷照鑒，委任兵權。尋拜特進、都知兵馬大將。二河既宅，五詔已平。南國止戈，北朝分政。而越析詔餘孽于贈，恃鐸稍，騙瀘江，結彼兇渠，擾我邊鄙。飛書遣將，皆輒拒違。詔弱冠之年，已負英斷，恨茲殘醜，敢逆大隊。固請自征，志在夷掃。梟于贈之頭，傾伏藏之穴。鐸稍盡獲，寶物並歸。解君父之憂，靜邊隅之祲。制使奏聞，酬上柱國。

訳文

先王（皮羅閣）と唐の御史嚴正誨とが辺境の賊を征討しようと計画するに至り、先王は軍を率いて石橋城を攻め、王（閣羅鳳）と嚴正誨とを遣わして石和子を攻撃させた。父子は軍を分け、両方で凶悪な賊を殲滅した。（閣羅鳳は唐から）左領軍衛大將軍の官職を加増された。ほどなくして、また中使王承訓と一緒に劍川を破った。その忠勇なる功績は記録され称揚され、恩賞はその子にまで及び、官職も左金吾衛大將軍へと遷った。このように彼の官職は才能によって授けられ、功績は才幹によって立てられた。朝廷はそれを照らし見て、兵権を委任した。（閣羅鳳は）特進・都知兵馬大將を重ねて拝受した。洱河蛮を平定し、また五詔も平定した。南方は戦が収まり、北方では（吐蕃と）統治を二分した。越析詔の余孽于贈が、武器を頼みに瀘江を騙し取り、彼の地の兇悪な賊と結んで、我が国の辺境を荒らした。書を飛ばして将を遣わしたが、いずれも防がれてしまった。この時王は弱冠二十歳だったが、すでに英明果敢で、これらの悪党が大国に逆らうのを憎み、自ら出兵することを固く請い、賊を掃討平定することを誓った。于贈の頭をさらし、彼らが潜んでいた場所を潰した。鐸稍をことごとく獲り、宝物も一緒に持ち帰った。君主たる父の悩みを解消し、辺境の妖気を静めた。制使が唐の皇帝に上奏し、（閣羅鳳を）上柱國に任じてその功績に報いた。

注釈

- ・石橋城：龍尾城のことで、今の下関。『蛮書』六詔に「開元元年（713）中，蒙歸義攻石橋城，閣羅鳳攻石和」とある。
- ・石和子：今の鳳儀。
- ・中使：宮中からの使者のことで、多くは宦官。
- ・二河：洱河のこと。「二河既宅」とは、洱河蛮を平定したことをいう。あるいはその後大和城に都をおいたことも指すか。『新唐書』南詔伝「開元末，皮邏閣逐河蠻，取大和城」、『蛮書』六險第五に大和城、大蓋城、陽苴畔城，本皆河蠻所居之地也。開元二十五年（737）蒙歸義逐河蠻，奪據大和城」とある。
- ・鐸稍：「鐸」は戦鬨で鳴らすどら、「稍」は馬上で使う矛の一種だが、ここは『新唐書』や『蛮

Ⅲ. 南詔德化碑訳注

書」に于贈が所持していたと書かれている「鐔鞘」のことと思われる。後に異牟尋が唐に献上している。

- ・拒違：ふせぎたがう。
- ・残醜：伐ちもらされた悪者、悪者ののこり。
- ・制使：天子が遣わす使者、勅使。

【4】 変のきざし

原文

天寶七載、先王卽世、皇上念功旌孝、悼往撫存。遣中使黎敬義持節冊襲雲南王。長男鳳迦異時年十歲、以天寶入朝、授鴻臚少卿、因冊襲次、又加授上卿、兼陽瓜州刺史、都知兵馬大將。既御厚眷、思竭忠誠。子弟朝不絕書、進獻府無餘月。將謂君臣一德、內外無欺。豈期奸佞亂常、撫虐生變。

訳文

天寶七年（748）、先王（皮羅閣）が逝去した。唐の皇帝はその功績を思い孝を表彰し、亡くなった者を悼み残された者を慰め、中使の黎敬義を遣わし天子の使者として（閣羅鳳を）雲南王に冊封した。（閣羅鳳の）長男鳳迦異は十歳の時、天寶に元号が改まった（742年に）入朝し、鴻臚少卿の位を授かっていたが、今回世子に冊命されたことで、加えて上卿の位を授かり、陽瓜州刺史と都知兵馬大將をも兼ねることになった。（唐から）厚い恩寵を受け、（こちらも）忠誠の限りを尽くし、子弟は朝廷に絶えず書を送り、毎月進物を献上した。君臣が徳を一つにして、内外にいつわりがない状態だと思っていたのに、どうして奸佞の輩が正常な状態を乱し、暴虐によって乱が起こることを予期できたのだろうか。

注釈

- ・持節：天子から授けられた旗（節）を持つ、天子の使者のこと。
- ・天寶入朝：『新唐書』南詔伝に「天寶初（742年）、遣閣羅鳳子鳳迦異入宿衛、拜鴻臚卿、恩賜良異。七載（748年）、歸義死、閣羅鳳立、襲王、以其子鳳迦異為陽瓜州刺史」とある。

【5】 諸爨の乱

原文

初、節度章仇兼瓊不量成敗、妄奏是非。遣越嶲都督竹靈倩置府東爨、通路安南。賦重役繁、政苛人弊。被南寧州都督爨歸王、昆州刺史爨日進、梨州刺史爨祺、求州爨守懿、螺山大鬼主爨彥昌、南寧州大鬼主爨崇道等陷煞竹靈倩、兼破安寧。天恩降中使孫希莊、御史韓洽、都督李宓等、委先詔招討、諸爨畏威懷德、再置安寧。

其李宓忘國家大計、躡章仇詭蹤、務求進官榮。宓阻崩東爨、遂激崇道、令煞歸王。議者紛紜、人各有志。王務遏亂萌、思紹先績。乃命大軍將段忠國等與中使黎敬義、都督李宓、又赴安寧、再和諸

爨。

而李宓矯偽居心，尚行反間。更令崇道謀煞日進，東爨諸酋，並皆驚恐。曰，歸王，崇道叔也，日進，弟也，信彼讒構，煞戮至親。骨肉既自相屠，天地之所不祐。乃各興師，召我同討。李宓外形中正，佯假我郡兵，內蘊奸欺，妄陳我違背。

賴節度郭虛己仁鑒，方表我無辜。李宓尋被貶流，崇道因而亡潰。

訳文

初め、劍南節度使^{しやうきゆうけんけい}章仇兼瓊は成否を考慮せず、(唐の玄宗皇帝に)その是非を妄りに奏上した。そして越嶲都督竹靈倩を遣わして東爨に安寧城を置き、安南への道路を修築しようとした。賦役は重く繁多で、人民は苛政に疲弊していった。こうした状況のなか、南寧州都督爨歸王、昆州刺史爨日進、黎州刺史爨禎、求州爨守懿、螺山大鬼主爨彦昌、南寧州大鬼主爨崇道らは、安寧城の竹靈倩を陥れて殺し、また安寧城を攻め破った。天恩(唐の玄宗皇帝)は中使孫希莊、御史韓洽、都督李宓等を降し、先詔(皮羅閣)に委託して討伐を行った結果、諸爨の王たちはその天威を畏れ、また恩徳に靡き、再び安寧城を置くことになった。

その李宓は国家の大計を忘れ、章仇にいつわりに従い、出世や栄華を求めるのに熱心であった。李宓はひそかに東爨を煽動して安寧城の敷設を妨害させ、ついには崇道を刺激して歸王を殺させてしまった。その後、東爨では議論が紛糾、それぞれが思いを持つことになった。王(閣羅鳳)は努めて大乱が生じるのを押さえ、先人の業績を継承することを決意していた。そこで、大軍将段忠國等に命じて、中使黎敬義、都督李宓とともに安寧城に赴かせ、再び諸爨との和解を進めさせた。

ところが李宓は偽りを心に持っており、なお双方へのけしかけを行った。遂には崇道をけしかけて日進を殺させてしまった。東爨の諸酋は皆な驚き恐れて言った。「歸王は崇道の叔父である。日進は崇道の弟である。それなのに李宓の讒構を信じ、親族をも殺してしまった。親族同士がおたがいに殺し合うのを、天地がたすけてくれるはずはない。」そこでそれぞれが軍隊を興し、私に呼び掛けて共に戦おうと申し出た。李宓は外面では公正を装い、私の軍勢(南詔軍)を借り(乱を収めるふりをしながら)、その内面は奸欺を宿しており、私が和約に違反して出兵したことを妄りに奏上した。

そこで仁に厚い節度使郭虚己を頼り、私に罪がないことを上表してもらった。また李宓は調べられ、官位を下げられて流罪、崇道は逃亡してしまった。

注釈

- ・節度章仇兼瓊:「章仇」が姓、「兼瓊」が名。劍南節度使だった。劍南節度使は玄宗の開元5年(717)に10節度使の一つとして吐蕃や南方諸族に対峙するために益州(四川省成都)に司令部が置かれた。
- ・越嶲:地名。唐代の重要な辺防拠点で、越嶲都督府が設けられた。現在の四川省西昌市。(「古碑研究」)

Ⅲ. 南詔徳化碑訳注

- ・置府東爨：「置府通爨」とも作る。「東爨」は烏蛮種族で、今の曲靖、尋甸、師宗、弥勒から建水一帯にあたる。この地方は唐代には東爨烏蛮の居住地であった。碑文の「置府東爨」とは、現在の安寧にあたり、唐代は西爨白蛮の居住地であった。「置府通爨」とする方が正しいだろう。〔古碑研究〕章仇兼瓊が劍南節度使を務めたのは、『旧唐書』及び『資治通鑑』によれば開元27年(739)～天宝5年(746)のことであるから、章仇兼瓊が竹靈倩を遣わし安寧城を建てたのもその間であろう。〔箋証〕
 - ・通路安南：「安南」への道路を修築した。「安南」は今のヴェトナム、唐代には安南都護府が置かれた。〔古碑研究〕
 - ・南寧州：今の曲靖。唐の開元年間初めには「南寧州」と呼ばれた。〔古碑研究〕
 - ・昆州：「昆川」であろう。今の昆明のこと。〔古碑研究〕
 - ・梨州：今の江川県一帯。〔古碑研究〕
 - ・求州：今の玉溪。〔古碑研究〕
 - ・螺山大鬼主：「螺山」は、今の昆明城内の螺山。「大鬼主」とは大頭目(リーダー)、すなわち大部落の宗教的領袖であり政治的指導者である。〔古碑研究〕
 - ・煞：「煞」は「殺」と同じ意。
 - ・韓洽：「韓治」とも作る。〔古碑研究〕
 - ・宓：「宓」は「密」であろう。〔古碑研究〕呉音ではミツ。
 - ・先績：「先攢」とも作る。「先績」であろう。〔古碑研究〕
 - ・大軍將：南詔国の高級官位。地位は清平官(宰相)と同列。〔古碑研究〕
 - ・貶流：官位を下げて流罪とすること。
 - ・亡潰：敗れ去る、逃亡すること。
- * 『蛮書』名類第四に「無何、崇道殺日進、又陰害歸王。歸王妻阿姁、烏蠻女也、走投父母、稱兵相持、諸爨豪亂。阿姁私遣使詣蒙舍川(巍山盆地・蒙舍詔=南詔の勃興の地、かつての都)求投、歸義(蒙歸義=皮羅閣)即日抗疏奏聞。阿姁男守偶、遂代歸王爲南甯州都督、歸義仍以女妻之。又以一女妻崇道男輔朝。崇道内懷忿惋、外示和平、猶與守偶母子日相攻伐。阿姁又訴於歸義、興師問罪。行次昆川信宿而曲輒川潰散、崇道南走梨州。歸義盡俘其家族羽黨、并殺輔朝而取其女。崇道俄亦被殺。諸爨由是離弱」とあり、これと碑文を合わせ考えると、諸爨の乱はむろん章仇兼瓊や李宓らのけしかけ(挑撥離間)により引き起こされたものではあるが、蒙氏と唐王朝が諸爨を奪いあったことによることは明らかである。碑文はこの顛末を叙するのに偏りが無いわけではない。〔箋証〕

[6] 張虔陀事件

原文

又越嵩都督張虔陀、嘗任雲南別駕、以其舊識風宜、表奏請爲都督。而反誑惑中禁、職起亂階。吐蕃是漢積讐、遂與陰謀、擬共滅我。一也。誠節王之庶弟、以其不忠不孝、貶在長沙。而彼奏歸、擬

令問我。二也。崇道蔑盟構逆，罪合誅夷，而却收錄與宿，欲令警我。三也。應與我惡者，竝授官榮，與我好者，咸遭抑屈，務在下我。四也。築城收質，繕甲練兵，密欲襲我。五也。重科白直，倍稅軍糧，徵求無度，務欲蔽我。六也。

訳文

また越嵩都督の張虔陀は、以前雲南別駕の任についていたので、王（閣羅鳳）は彼が雲南の風土人情をよく分かっているものと思い、上奏して姚州都督へ推薦した。ところが彼が讒言でもって宮廷を迷わし、乱のもととなるとは誰が知るだろう。吐蕃は唐朝を代々の敵としていたのだが、張はその吐蕃とひそかに謀り、一緒に私を滅ぼそうとした。これが一である。誠節は王の異母弟で、不忠不孝のため長沙に追いやられていたのだが、張虔陀は彼を戻すよう奏上し、私から離反させようと企んだ。これが二である。崇道は盟約を蔑視し、争いの発端をつくり、その大逆不道は誅滅されるべき罪であったにも関わらず、張虔陀は彼を收容して彼とともに住み、私に復讐させようとした。これが三である。張虔陀は私と不和の者たち皆に官職を与え厚遇し、私と仲の良い者たちを圧迫した。私を陥れることが目的である。これが四である。張虔陀は城を築き、逆らう者どもを取り込み、武具を修繕し、軍馬を訓練し、密かに私を襲そうとした。これが五である。張虔陀は各種貨物の徴税を増やし、軍糧の徴収を倍にした。これは際限のない税で、私の領内を貧しくさせようとしたものである。これが六である。

注釈

- ・ 舊識風宜、表奏請都督：「舊識風宜」は「舊職夙官」「舊識風宜」とも作る。大意に基づけば「舊識風宜」が正しいだろう。「都督」は姚州都督を指す。〔古碑研究〕
- ・ 誠節王之庶弟：《蛮書・卷三》に「(皮羅閣)次男誠節，蒙舍州刺使」とある。閣羅鳳が即位した後、左遷された。〔古碑研究〕
- ・ 贬在長沙：この「長沙」は、実在の地名ではなく、漢の呉芮が長沙王に移封された故事を借用したものである。〔古碑研究〕

原文

于時馳表上陳，屢申冤枉，皇上照察，降中使賈奇俊詳覆。屬豎臣無政，事以賄成。一信虔陀，共掩天聽，惡奏我將叛。王乃仰天嘆曰，嗟我無事，上蒼可鑒。九重天子，難承咫尺之顏。萬里忠臣，豈受奸邪之害。即差軍將楊羅頰等連表控告。豈謂天高聽遠，蠅點成瑕，雖布腹心，不蒙衿察。管內首渠等皆曰，主辱臣死，我實當之。自可齊心戮力，致命全人。安得知難不防，坐招傾敗。於此差大軍將王毗雙・羅時・牟直等揚兵送檄，問罪府城。自秋畢冬，故延時序，尚佇王命，冀雪事由。豈意節度使鮮于仲通已統大軍，取南谿路下，大將軍李暉從會同路進，安南都督王知進自步頭路入。既數道合勢，不可守株。乃宣號令，誠師徒，四面攻圍，三軍齊奮。先靈冥祐，神炬助威。天人協心，軍羣全拔。虔陀飲醢，寮庶出走。王以為惡止虔陀，罪豈加衆，舉城移置，猶為後圖。即便就安寧再

Ⅲ. 南詔德化碑訳注

申衷懇。城使王克昭執惑昧權，繼違拒請。遣大軍將李克鐸等帥師伐之。我直彼曲，城破將亡。

訳文

当時我ら上表し、事の不当さを仔細に説明した。皇帝はこれを知った後、中使の買奇俊を遣わして詳しく調べさせ元に戻そうとした。しかし宦官とは法規など眼中になく、賄賂によって事実を捻じ曲げるものである。買奇俊は張虔陀の讒言ばかりを聞き、一緒になって皇帝の耳を塞ぎ、我々が反逆を企てると悪辣極まりない報告をした。この時、王は天を仰いで長歎して言った。「ああ、私はそのようなことをしていないと、天の神は見えて知っている。高みにおわす天子に、我は面と向かって弁明する術がない。(私は)万里離れた地にいる忠臣だが、どうして非道な陥穽に我慢できようか！」そこで軍將楊羅顛らを遣わし訴えを上奏させた。「天は高くても遠くを聞く」というが、蠅の糞が清らかな碧玉についただけでも、それは汚点となる。私は胸のうちを皇帝に進言してきたが、ついに察していただけなかった。領内の酋長や頭目たちは皆こう言っている。「主君が屈辱を受ければ、家臣は主君の為に死ぬべきだし、実際に我々はその責任を請け負うべきである。心を一つにあわせて協力し、自分の能力を尽くせば、領内の人民は守れよう。危険で防ぎようがないからといって、どうして座して滅亡を待てようか。」そこで大軍將王毘双・羅時・牟直らを遣わして、兵を挙げ、檄を送り、府城に向かって罪を問いただした。秋から冬が終わるころにかけてわざと出兵の時を稼ぎ、皇帝の命令を待ち、冤罪がすすがれることを期待した。そのころ鮮于仲通がすでに大軍を率いて南溪路を下り、大將軍李暉が会同路から進入し、安南都督王知が歩頭路から入ってきていると誰が知り得ただろうか。すでに兵馬は集まっている状況で、守りに入ることはもうできず、攻撃の時を待っていた。そこで命令を下し、人馬に告げ、四面を囲んで攻め、三軍が一緒になって奮戦した。祖先も陰ながら我々を守り、松明は私の威風を助け、神と人とが力を合わせて心を一にしたので、軍營郡城の全てを突破した。張虔陀は服毒自殺し、部下は四散した。王は悪いのは張虔陀のみと考えていたので、どうして民衆にまで罪を問うだろうか。城内の民衆を全て移動させ、後のことについてはまた改めて考えることにした。すぐさま安寧に行き再び心中の苦衷を訴えたが、城使の王克昭は深くだまされており、また権力を盲信していたので、度重なる請求を拒絶した。そこで、大軍將李克鐸等を遣わし兵を率いて討伐させた。我々の理は真直ぐで、彼らの理が曲がっていたので、城は破られ、將軍は身を滅ぼした。

注釈

・堅臣：宦官の蔑称。ここでは中使買奇俊を指す。([古碑研究])

[7] 吐蕃と同盟を結ぶ

原文

而仲通大軍已至曲靖。又差首領楊子芬與雲南錄事參軍姜如之齎狀披雪，往因張卿讒構，遂令蕃，漢生猜。贊普今見觀覺浪穹。或以衆相威，或以利相導。儻若蚌鶴交守，恐為漁父所擒。伏乞居存見

亡、在得思失。二城復置、幸容自新。仲通殊不招承、勁至江口。我又切陳丹款、至于再三。仲通拂諫、棄親阻兵、安忍吐發、唯言屠戮。行使皆被詆呵。仍前差將軍王天運帥領驍雄、自點蒼山西、欲腹背交襲。於是具牲牢、設壇墀、叩首流血曰。我自古及今、為漢不侵不叛之臣。今節度背好食功、欲致無上無君之討。敢昭告於皇天后土。史祝盡詞、東北稽首。舉國痛切、山川黯然。至誠感神、風雨震霈。遂宣言曰。彼若納我、猶吾君也。今不我納、即吾讐也。斷、軍之機、疑、事之賊。乃召卒伍、擱然登陴。謂左右曰。夫至忠不可以無主、至孝不可以無家。即差首領楊利等於浪穹參吐蕃御史論若贊。御史通變察情、分師入救。時中丞大軍出陳江口。王審孤虛、觀向背、縱兵親擊、大敗彼師。因命長男鳳迦異、大軍將段全葛等、於丘邏和拒山後贊軍。王天運懸首轅門、中丞逃師夜遁。軍吏欲追之。詔曰。止。君子不欲多上人、況敢凌天子乎。苟自救也、社稷無殞多矣。

訳文

この時、鮮于仲通の大軍は既に曲靖に至り、我が方は、再び首領の楊子芬と雲南録事參軍の姜如之を遣わし、書状で冤罪をすすごうと（次のように言った）。「以前から張太守（張虔陀）がデマをでっちあげ、我々を陥れ、蕃（南詔）と漢（唐）との間で猜疑を発生させた。吐蕃王は今、浪穹で、我々（南詔と唐）の争いを眺めており、ある時は兵を用いて威嚇し、またある時は利を用いておびき寄せようとしている。もし（南詔と唐が）ハマグリとシギのように相争うなら、おそらく漁夫（の吐蕃王）に捕えられることになる。我々（南詔）は真摯に希望する。それがあつた時にないことを思え。それを持っている時に失つた時を思え。唐は改めて安寧と姚州の二つの府城を設置してもかまわないので、我々が自ら悔い改めて生まれかわることを許して下さることを希望する」。（しかし）鮮于仲通はまったく相手にせず、まっすぐ江口に進軍した。我が方は再び痛切に心の内を陳述し、再三再四それを繰り返したが、仲通は（我々の）忠告を聞かず、親しい間柄である我々南詔を捨て、刀兵をもって我々をはばみ、残忍に何度も言ったのは、殲滅するぞということだけだった。派遣した（我々の）使者は全て大声でののしられ、また（仲通は）將軍の王天運を派遣して精銳の騎兵を率いて、点蒼山の西側から我（南詔）をはさみ打ちにしようとした。そこで我々は牛、羊、豚などのいけにえを準備し、天と地を祭る祭壇を設け、王が叩頭流血して言うには、「我々はいにしえより今に至るまで、漢を侵すことなく、反逆をしない臣下でした。今、節度使はよき関係に背き、戦功をむさぼり、我（南詔）に対して君主の命なき討伐をしようとしています。我々はこの状況をあえて天地に報告します」と言った。史官・祝官が上奏文を読み終えた後、みな東北に向かつて叩頭した。国中が慟哭し、山河も暗然として色を失った。最大の誠意が神靈を感動させたので、風雨がすぐに吹き荒れた。そこで、王は宣言して、「彼ら（唐）がもし我を受け入れるならば、やはり（唐は）我が君主である。今（彼らが）我を受け入れなければ、まさに我が仇敵である。果断は戦争の勝利のかなめであり、躊躇は事の失敗の禍根である」と言った。そこで、軍隊を召集し、奮然として（城壁の上の）胸壁に登り、左右の者に対して、「最も忠なるは、君主をなくさないことで、最も孝なるは、家をなくさないことである」と言った。すぐに首領の楊利らを浪穹に派遣して、吐蕃の御史論若贊ろんじやくざんに謁見させた。御史は当時の情勢を理解し、我々の苦衷を察し、兵力を分け

Ⅲ. 南詔徳化碑訳注

て助けに来た。当時、中丞の大軍は江口に並び、王は彼ら（唐の軍）が単独で深入りしているのを見てとり、人心の奥深くまで観察し、自ら兵を率いて出撃し、彼ら（唐軍）をおおいに破った。そして、長子の鳳迦異と大軍将段全葛だんぜんかつに命じて、丘遷和で蒼山の背後にいる唐の兵に抵抗させた。（唐軍の）王天運の首を役所の表門にぶら下げると、中丞（鮮于仲通）は（自分の）部下を捨ててその夜すぐに逃亡した。軍吏たちは追撃しようとしたが、王は、「やめよ。君子は他者の優位に立つことを望まない。天子を侮るなどもつてのほかである。もしわが身を振り返って自分の過ちを責めとがめ、国家が減びさえしなければそれで十分ではないか」と言った。

注 釈

- ・齋状披雪：書状を持って冤罪を雪ぐこと。（〔古碑研究〕）
- ・浪穹：六詔の一つ。今の洱源一帯。（〔古碑研究〕）
- ・丘遷和：蒼山の後方にある。南詔語で「坂」を「和」という。（〔古碑研究〕）

原 文

既而合謀曰、小能勝大禍之胎、親仁善鄰國之寶。遂遣男鐸傳、舊大酋望趙佺鄧、楊傳磨侔及子弟六十人、齋重帛珍寶等物、西朝獻凱。屬贊普仁明、重酬我勳効。遂命宰相倚祥葉樂持金冠、錦袍、金寶帶、金帳牀、安扛傘、鞍銀獸及器皿、珂貝、珠毬、衣服、馳馬、牛纓等、賜爲兄弟之國。天寶十一載正月一日、於鄧川册詔爲贊普鍾南國大詔、授長男鳳迦異大瑟瑟告身、都知兵馬大將。凡在官僚、寵幸咸被。山河約誓、永固維城。改年爲贊普鍾元年。

訳 文

その後、皆と相談して、「小国が大国に戦勝するのは禍のもとだが、仁徳のある人に親しみ、隣国とよい関係を築くことは国家の宝である」と言った。そこで、王子の鐸伝と旧大酋望趙佺鄧、楊伝磨侔、及びその子弟60人を派遣して金、銀、縞子と緞子、宝物などを持って、西向して吐蕃に謁見させ、吐蕃に戦勝を知らせた。ちょうど贊普（吐蕃王）は仁徳があり、聡明で、我々の功勞を重ねて賞し、宰相倚祥葉樂に命じて金の冠、綿の袍、金の宝帯、金幕のベッド、安扛傘、鞍銀獸及び器皿、くつわ貝、玉毬、衣服、よく馳せる馬、牛皮の靴などを持たせ、それらを下賜し兄弟の国となった。吐蕃王は天寶11年正月1日、鄧川で王を贊普鍾南國大詔として冊封し王の長子鳳迦異に大瑟瑟告身、都知兵馬大將の位を授けた。およそ各級の官吏たちはみな寵愛を得た。永遠の誓いを立て、長く続く垣を固めた。（南詔は）改元して贊普鍾元年とした。

【8】南詔再び唐を破る

原 文

二年、漢帝又命漢中郡太守司空襲禮、内使賈奇俊帥師再置姚府、以將軍賈瓘爲都督。僉曰。漢不務徳、而以力爭、若不速除、恐爲後患。遂差軍將王丘各絕其糧道、又差大軍將洪光乘等、神州都知

兵馬使論綺里徐同圍府城，信宿未逾，破如拉朽。賈瓏面縛，士卒全驅。

訳文

贊普鍾2年，唐朝はまた漢中太守司空襲礼，内使賈奇俊に命令し，兵隊を率いて再び姚州府城を設置し，將軍賈瓏を姚州都督にした。皆，「唐朝は道理に背き，武力によって争う。迅速に徹底的に取り除かなければ，恐らく将来の災いになる」と言った。すぐに軍將王丘各に命じて唐兵の糧道を遮断し，また大軍將洪光乗らを差し遣わし，神州都知兵馬使論綺里徐と一緒に姚安城府城を包囲させ攻撃した。その日のうちに，枯れ枝をへし折り，朽ち木をひしくようにたやすく府城を攻め落とし，賈瓏は縛られ押し出され，兵士はすべて追い出された。

注釈

・軍將王：南詔武官。地位は大軍將に次ぐ。([古碑研究])

原文

三年，漢又命前雲南都督兼侍御史李宓、廣府節度何履光、中使薩道慇遜，惣秦、隴英豪，兼安南子弟，頓營隴坪，廣布軍威。乃舟楫備修，擬水陸俱進。遂令軍將王樂寬等潛軍製造船之師，伏屍遍毘舍之野。李宓猶不量力，進逼邛川。時神川都知兵馬使論綺里徐來救，已至巴躡山。我命大軍將段附克等内外相應，競角競衝。彼弓不暇張，刃不及發。白日晦景，紅塵翳天。流血成川，積屍壅水。三軍潰削，元帥沉江。詔曰。生雖禍之始，死乃怨之終。豈顧前非而亡大禮。遂收亡將等屍，祭而葬之，以存恩舊。

訳文

贊普鍾三年，唐朝はまた前雲南郡都督兼侍御史李宓、広府節度使何履光、中使薩道慇遜に命令し，秦隴兩地の英傑を集め，安南の子弟を加え，洱海東岸の山の斜面に部隊を駐屯させ，唐兵の名声と権威を幅広く宣揚し，さらに船を建造し，水陸を同時に推し進めるようにした。そこで，軍將王樂寬などに命令し，造船の軍隊を奇襲し，死体は野原に放棄させた。李宓はそれでも己の力量を知らず，兵を率いて鄧川の近くに迫った。この時，神州都知兵馬使論綺里徐は兵を率いて援護し，巴躡山に着いた。私は大軍將段附克等に命令し，彼らと相応じて，互いに争って勇ましく戦い，唐兵は弓を張る間もなく，刀を抜く間もなく，(白昼にもかかわらず)白昼の色が失せ，紅塵が太陽をさえぎり，流れた血が河になり，積んだ死体が水をふさぎ，三軍は壊滅し，元帥は大きな川に沈んだ。王はこの情景を見て，「生は災いの始まり，死は怨みの終わりだ。ただ過去の非だけを見て，大礼を忘れてはいけない」と言った。そして，戦没した軍人の死体を集め，弔いをして埋葬し，かつて唐朝が南詔に示した恩情に報いた。

注 釈

- ・頓營隴坪：軍隊が山間の平地に駐留すること。「頓」は駐留の意。〔古碑研究〕
- ・毗舍：洱海東岸、具体的な地は未詳。〔古碑研究〕
- ・鄧川：現洱海県の鄧川。〔古碑研究〕
- ・巴躡山：現洱海と鄧川の間にあり、神州都督の援軍の行路にあたる。〔古碑研究〕
- ・祭而葬之、以存恩舊：現下関大唐天宝戦士塚（俗称：万人塚）は当時の遺跡。〔古碑研究〕

【9】越嶲・尋伝の統治

原 文

五年、范陽節度使安祿山竊據河、洛、開元帝出居江、劍。贊普差御史贊郎羅于惹結齋勅書曰。樹徳務滋長、去惡務除本。越嶲、會同謀多在我、圖之此爲美也。詔恭承上命、即遣大軍將洪光乘、杜羅盛、段附克、趙附于望、羅遷、王遷、羅奉、清平官趙佺鄧等、統細于藩從昆明路、及宰相倚祥葉樂、節度尚檢贊同伐越嶲。詔親帥太子藩圍逼會同。越嶲固拒被僇、會同請降無害。子女玉帛、百里塞途、牛羊積儲、一月館穀。

訳 文

贊普鍾5年、范陽節度使安祿山が河南を盗据し、開元帝は四川に出走した。贊普差御史贊朗羅が詔書を齎して言うことには、「徳務を立てれば必ず長久し、悪務を去れば必ず除根す。越嶲と会同の二地は漢族が常に我々を謀計する地である。思うにこの地を奪取するのに、今はもっともよい時である。」王は恭しく命を奉じて即座に大軍將洪光乘、杜羅盛、段附克、趙附于望、羅遷、王遷、羅奉、清平官趙佺鄧らを差遣し、細子藩を統率して昆明路より出兵させ、宰相倚祥葉樂、節度尚檢贊に共同して越嶲を討伐させた。王は自ら太子藩を率い会同を包圍した。越嶲は頑なに抵抗し屠城（城内のものを皆殺しにする）され、会同は降伏を請い害を受けなかった。こうして得た子女玉帛百里の道を埋め尽くし、牛羊、倉庫に貯蔵してある物資は、軍隊の一カ月の食糧を賄うのに充分であった。

注 釈

- ・范陽節度使安祿山窃据河洛：「安祿山」は胡人。唐玄宗の時、范陽節度使となり、平蘆、范陽、河東三鎮（現在の河北、山西一帯）の節度使を兼ねる。後に反乱を起こして長安を陥とし、自ら雄武皇帝を称する。玄宗は四川に逃げてこれを避けた。その後、安祿山は子の安慶緒に殺された。「河」「洛」は、黄河以南、洛水流域にあたり、古く「河洛」と称した。唐代には河南道、役所は洛陽にあった。〔古碑研究〕
- ・開元帝出居江劍：開元帝は玄宗のこと。安祿山の反乱のために玄宗は四川に避難したのである。「江劍」は四川にある。唐代の劍南道であり、そのため「江劍」と称した。〔古碑研究〕
- ・細子藩：「細于藩」とも作る。「藩」は「幡」であろう。南詔は旗幡の色によってその軍隊を区別

していた。「細子潘」の「細」と「大子潘」の「大」はまさに対応している。おそらく「細子潘」は地方軍の名称であり、従って大軍将や清平官が統率するのに対して、「大子潘」は南詔王が直接管轄する国王軍であり、従って南詔王が自らこれを領導するのであろう。〔古碑研究〕

- ・大子潘：南詔軍の名称。上記「細子潘」の注参照。〔古碑研究〕
- ・一月館谷：『左伝』僖公28年に「晋師三日館谷」とある。「館谷」とは敵陣の軍営に住み、敵の軍糧を食べること。ここの「一月館谷」は、南詔が唐の軍営を占領した、そこで唐兵が残した軍糧を一ヶ月間食べたことを表す。〔古碑研究〕

原文

六年、漢復置越嶲、以楊庭璠爲都督、兼固臺登。贊普使來曰。漢今更置越嶲、作援昆明。若不再除、恐成滋蔓。既舉奉明旨、乃遣長男鳳迦異駐軍瀘水、權事制宜。令大軍將楊傳磨侔等與軍將欺急歷如數道齊入。越嶲再掃、臺登滌除。都督見擒、兵士盡虜。於是揚兵邛部、而漢將大奔、遍旆昆明、傾城稽顙。可謂紹家繼業、世不乏賢。昔十萬橫行、七擒縱略、未足多也。

訳文

贊普鍾6年、唐朝は再び越嶲郡を設立し、楊庭璠を都督とし、台登を固く守らせた。贊普の使臣が来朝して言うには、「漢族は今日、また新たに越嶲郡を設立し、昆明を援助しようとしている。もしこれを取り除かなければ、きっと蔓延して禍患となるだろう。」上に趣旨を奏上したところ、長子鳳迦異を派遣し瀘水に駐兵させ、総督軍務権を授けた。大軍将楊伝磨侔らと軍将欺急歴如に命じて、数本の道から一斉に侵攻させた。越嶲は再び掃平され、台登はきれいに洗浄された。都督は生け捕りにされ、兵士は尽く捕虜となった。こうして邛部に揚威し、漢族は大敗逃走し、(南詔軍は)昆明に戻り全ての城は皆跪拝した。このように言えるだろう。王室の勲功を継承するための賢材は、代々十分にそろっている。昔、十万の甲兵を率いて天下に横行し、七擒七縦の謀略を展開した人も、今以上であるとは言えない。

注釈

- ・台登：現在の四川省冕寧県一帯。〔古碑研究〕
- ・瀘水：現在の金沙江。〔古碑研究〕
- ・楊傳磨侔：欺急歴如：「楊傳磨侔」はペー族、姓楊、名伝磨侔。「欺急歴如」、この四字の名はイ族か。〔古碑研究〕
- ・邛部：現在の四川省越西。〔古碑研究〕
- ・昆明：現在の四川省塩源。〔古碑研究〕
- ・稽顙：額を地に触れる拝礼を稽顙という。「顙」は額。〔古碑研究〕
- ・七擒縦略：諸葛亮の「七擒七縦」の故事を用いる。〔古碑研究〕「横行」とともに諸葛亮への悪口となっている。

原文

爰有尋傳，嶠壤沃饒，人物殷湊。南通渤海，西近大秦。開闢以來，聲教所不及，羲皇之后，兵甲所不加。詔欲革之以衣冠，化之以義禮。十一年冬，親與寮佐兼總師徒，刊木通道，造舟爲梁。耀以威武，喻以文辭。欺降者撫慰安居，抵捍者繫頸盈貫。矜愚解縛，擇勝置城。裸形不討自來，祁鮮望風而至。

訳文

尋伝という地域は、土地肥沃にして物産豊富であり、人びとは慇懃である。南は渤海に通じ、西は大秦婆羅門国に接近している。天地開闢以来、内地の声威教化は届かず、伏羲が民に漁労を教えて以来、いまだ戦争に遭ったことはない。王は衣冠をもってその地の状況を改革し、礼儀をもってその地の人びとを開化させようと考えた。賛普鍾 11 年冬、王は自ら近臣の僚佐と、兵馬を領導し、木を伐り道を開き、船を造り橋を架け、武力をもって威力を輝かせて侵攻し、文辞をもって諭し教えた。誠心にして投降したものは慰撫し安居樂業させた。頑なに抗するものは、首を縄で縛りそれを貫いて地に繋いだ。王は彼らの無知蒙昧を憐れみ、彼らを繋いだ縄を解き、よき地を選んで城池を建築させ彼らをそこに住ませた。ここに裸形蛮は討伐を加えずとも自ら降伏し、祁鮮人もまた威風を望んで帰順した。

注釈

- ・尋伝：阿昌人或は峨昌人。唐代には現在の雲龍、騰沖一帯に居住していた。碑文中の「西開尋伝（西は尋伝を開く）」は、地望は現在の瀾滄江以西、イワラジ河以東、北緯 24 度から 28 度の間をさす。〔古碑研究〕『蛮書校注・六詔第三』蒙舍詔：「西開尋伝，南通驃国。」又『名類第四』：「尋伝蛮，闍羅風所討定也。」又『山川江源第二』：「高黎貢山在永昌，下臨怒江。…河賧賈客在尋伝羈離未還者，為之謠曰『冬時欲歸來，高黎共上雪。』」又『雲南城鎮第六』：「越禮城在水昌北，……」按ずるに、尋伝大川城と呼ばれる所は水東、即ち麗水の東にある。麗水は即ちイワラジ河である。尋伝蛮の居住する所は、現在の徳宏傣族景頗族自治州西部及びミャンマー東境であろう。伯希和『交廣印度兩道考』が尋伝蛮はイワラジ河上流にありとしたが、信ずるべきである。正徳『雲南志』に記載されたところによると、尋伝蛮は又の名を峨昌蛮或は阿昌蛮といい、北勝、雲龍、騰衝諸州に居すという。即ち、現在の阿昌族である。〔箋証〕
- ・南通北海：「北海」は「渤海」にも作る。広く南方海域を指すものであり、実際の地名ではない。〔古碑研究〕
- ・渤海・大秦：渤海は現在の暹羅湾、大秦は現在の印度を指す。〔箋証〕
- ・西近大秦：この「大秦」は大秦婆羅門国の省称。大秦婆羅門国は天竺にあった。「西近大秦」とは西はインドに接近するの意。（参照『新唐書』地理志）〔古碑研究〕
- ・裸形：『蛮書』巻四に「裸形蛮在尋伝西三百里爲窠穴，謂之野蛮。多女少男，無農田，無衣服，

唯取木皮以蔽形。閣羅鳳既定尋伝、而令野蛮散居山谷」とある。〔古碑研究〕

- ・ 祁鮮：祁鮮は裸形と同じく尋伝付近の少数民族部落。『蛮書』巻七に「自銀生城，拓南城，尋伝，祁鮮以西，蕃蛮種并不養蚕…」とあり，祁鮮と尋伝居住地が隣接していたことが知られる。〔古碑研究〕

原文

且安寧雄鎮，諸蠻要衝。山對碧雞，波環碣石。鹽池鞅掌，利及牂，歡，城邑綿延，勢連戎，夔。乃置城監，用輯攜離。遠近因依，閭閻櫛比。

訳文

また偉大な城鎮である安寧は，かつては諸蠻の要衝であった。山は碧鶏に対し，水は碣石を圍繞している。盛んな塩井があり，その利は遠く牂歙に達し，城邑は連綿と連なりその勢いは戎，夔に達する。そこで，この地に城監を設置し，離心離徳の民衆を招撫した。遠近の人びとは帰附し，民の家は整然と密集することになった。

注釈

- ・ 碧鶏：山名。現在の昆明碧鶏関。〔古碑研究〕
- ・ 鞅掌：『詩経・小雅』に「或王事鞅掌」とある。馬瑞辰『伝箋通釈』に「人之事多曰鞅掌」とある。ここでは「繁榮」の意。〔古碑研究〕
- ・ 牂歙：地名。現在の貴州省遵義一帯。〔古碑研究〕
- ・ 戎夔：古く戎州が夔道を治めた。現在の四川省宜賓。〔古碑研究〕
- ・ 用輯携離：親附していないような人びとを集める。「輯」は「集」と同じ。「携離」は離心離徳の人。〔古碑研究〕

【10】閣羅鳳の内政

原文

十二年冬，詔候隙省方，觀俗恤隱。次昆川，審形勢，言山河以作藩屏，川陸可以養人民。十四年春，命長男鳳迦異於昆川置柘東城，居二詔佐鎮撫。於是威懾步頭，恩收曲靖。頒誥所及，翕然俯從。

訳文

贊普鍾十二年（763）冬，王は時あらば各地を巡察して回り，民の生産状況や風俗習慣を見て，生活の苦しい者たちを慰め救済した。（王が）昆川に至った時，この地の地勢を詳しく観察して言うには，「この地は山河が天然の要塞のように藩屏をなし，土地は民を養うことができる」と。

そこで，贊普鍾十四年（765）春，王の長子鳳迦異に命じて昆川に柘東城を造り，彼を副国王の身分とし，国王を助けてかの地を鎮撫させた。ここにおいて王の声威は歩頭を震え上がらせ，（王

Ⅲ. 南詔德化碑訳注

は) 恩を施し、曲靖を手に入れた。(王の) 告示の届くところは全て、喜んで服従した。

注 釈

- ・十二年冬：贊普鍾 12 年は、唐代宗広徳元年、763 年。
- ・十四年春：贊普鍾 14 年は、唐代宗永泰元年、765 年。
- ・拓東城：今の昆明城の東部。
- ・居二詔、佐鎮撫：「二詔」とは副国王。

原 文

我王氣受中和，徳含覆育。才出人右，辯稱世雄。高視則卓爾萬尋，運籌則決勝千里。觀釁而動，因利興功。事叶神衷，有如天啟。故能拔城挫敵，取勝如神。以危易安，轉禍爲福。

訳 文

我が王は中和の靈氣を受け、徳は天地を一つに合わせ、才は常人よりはるかに超えていて、方策は当代にはっきりと表れた。頭を挙げると、万丈の高さまで望み見ることができ、兵を用いれば、千里の外まで勝敗を決めることができる。敵の弱点が目に入ればすぐに動き、有利な形勢で成果をあげる。事を成すことは、神の心に符合し、まるで天の導きがあるかのようなのである。それ故、城を攻め、敵をくじくことができ、勝利を得るのは、神のようである。危機的的局面を安全(な局面)に変え、禍を転じて福と成す。

注 釈

- ・氣受中和：「中和」とは山峰名で、天蒼山の主峰である。
- ・辯稱世雄：「辯」は一つには「辨」に作り、意は同じ。判別の意。ここでは判断、決策。

原 文

紹開祖業，宏覃王猷。坐南面以稱孤，統東偏而作主。然後修文習武，官設百司，列尊叙卑，位分九等。闢三教，賓四門。陰陽序而日月不愆，賞罰明而奸邪屏跡。通三才而制禮，用六府以經邦。信及豚魚，恩霑草木。庀塞流潦，高原爲稻黍之田。疏決陂池，下隰樹園林之業。易貧成富，徙有之無。家饒五畝之桑，國貯九年之廩。蕩穢之恩，屢沾蠢動。珍帛之惠，遍及耆年。設險防非，憑隘起堅城之固。靈津蠲疾，重巖湧湯沐之泉。越賤天馬生郊，大利流波濯錦。西開尋傳，祿邨出麗水之金。北接陽山，會川收瑟瑟之寶。南荒濟湊，覆詔願爲外臣。東爨悉歸，步頭已成內境。建都鎮塞，銀生于墨指之鄉。候隙省方，駕憩于洞庭之野。

訳 文

祖先の大業と輝かしい王室の勲功を絶えることなく広げる。南面して「孤家寡人」と称し、東部

を統一してその主人となる。そして、文治を重んじ、軍備を強化し、百官を設け、序列の高低を定め、官位を分けて、九等とした。三教を説き広め、四門にて異国の客をもてなす。陰陽は正しく、故に日月も秩序正しくなったので、賞罰ははっきりし、邪悪な者は後を絶たれた。三才に通じて礼楽を制定し、六府を用いて国を治める。誠心は豚や魚でさえ感じさせ、恩恵は草木にまであまねく及んだ。山津波をふさぎ、高原を穀物を栽培する棚田に変える。沼沢の水はけをよくし、湿地を美しい園林に変えた。貧を富に変え、(物を)有るところから無いところに移し、家々の周りには五畝の桑園があり、国には九年分もの食糧が備蓄されている。禍乱を掃討し、恩恵は民に何度も利益をもたらし、宝玉、布帛の下賜品は、あまねく全ての老人たちに及んだ。難所を設け、非を防ぎ、要害によって堅固な城郭を造る。霊水は病を去け、巨岩から病を治せる温泉が湧き出す。郊外に於いて越賅の駿馬が成長し、大利の清流は錦綉を洗うことができる。

西面は靈伝が開き、禄郷の麗水は砂金を産出する。北面は陽山に接し、会川はこのような宝を取める。

南方の沿岸部諸国は、南詔の臣属となることを望んだ。東囊^{とうなん}は全て(我が方へ)帰順し、歩頭は既に内地となった。都を造り、辺境の要衝を守り、白銀が黒嘴の地面から出た。時間があれば各地を巡り、(民の)風俗を考察して、洞庭の原野で休息した。

注 釈

- ・三才：『古事記』序には「伏して惟ふに、皇帝陛下^{すめみこと}(元明天皇)、一を得て光宅し、三に通じて亭育したまふ」とある。「三」について、小学館新編全集『古事記』の頭注は「天・地・人の三才」、岩波思想大系『古事記』は「全宇宙」とする。
- ・信及豚魚：『周易』中孚の条に「信及豚魚也」と載る。そこでの意は「誠心有らば豚や魚のような微賤なものや幽隠なものも、汝を相心すと」ということである。([古碑研究])
- ・疏决波池、下隠樹園林之業：『万葉集』巻19・4260番歌に、「大君は神にしませば赤駒の腹這ふ田居を都と成しつ、右一首大將軍贈右大臣大伴卿作」そして、巻19・4261番歌に、「大君は神にしませば水鳥のすだく水沼を都と成しつ [作者未詳]、壬申年之乱平定以後歌二首、右件二首天平勝寶四年二月二日聞之即載於茲也」と見える。
- ・五畝：『詩経』国風、幽風七月の条に「爰に柔桑^{じゅうそう}を求む」と見え、その注に「五畝之宅樹之以桑」とある。
- ・靈津：靈泉、すなわち温泉。
- ・越賅天馬生郊：越賅は怒江の西側を指す。今の雲南省騰中。天馬は駿馬。
- ・大利流波濯錦：定かでないが「大利」は地名とすべきで、おそらく今の大理であろう。
- ・禄郷出麗水之金：「禄郷^{ろくきょう}」は怒江の西側で、麗水の東岸。麗水はイラワジ川。南詔時代、男女が罪を犯すと麗水一帯に送られ砂金さらいをさせられた。([古碑研究])
- ・北接陽山、會川收瑟瑟之寶：「陽山」は陽蓬峰。「会川」は今の四川省の会川。「陽蓬峰」については『新唐書』地理志劍南道劍南採訪使嶺州越嶲郡の条に「陽蓬峰、北は嶺州との境なり。其の

Ⅲ. 南詔徳化碑訳注

南は南詔との境なり」とある。

- ・墨翁之郷：「黒嘴」は未詳。或いは、今の景谷と西双版纳一帯か。
- ・洞庭之野：『蛮書』巻2碧鷄山条に「水中有碧鷄山，石山有洞庭樹」とある。ここでの洞庭とは今の滇池地区を指す。〔古碑研究〕碧鷄は【9】にも有り、そこでは現在の昆明碧鷄関を指す。

原文

蓋由人傑地靈、物華氣秀者也。於是犀象珍奇，貢獻畢至，東西南北，煙塵不飛。遐邇無剽掠之虞，黔首有鼓擊之泰。乃能驥首邛南，平睥海表。豈惟我鍾王之自致，實賴我神聖天帝贊普德被無垠，威加有截。春雲布而萬物普潤，霜風下而四海颯秋。故能取亂攻昧，定京邑以息民，兼弱侮亡，冊漢帝而繼好。

訳文

すべて、優れた人物と地霊の気によるのだろう。それ故、サイや白い象、真珠などの珍しい物産は、全て（我が国に）貢献される。東西南北（の地）は再び戦争が起こることはなく、（国の）遠近で略奪の憂慮がなく、百姓は鼓楽の歓楽があり、（王の）才は擡頭して遠く邛南を望み、目を水平に国外に向ける。このようなことは、我が鍾王（吐蕃王の弟である南詔王）の能力だけであろうか。我が神聖なる天地、贊普（吐蕃王）の恩恵の広がり、（我が国の）威厳際限なく国外に広がるなかで得られたのである。春の雲はすまなく広がって万物を潤し、秋の風は吹いたとたん全世界が清涼を感じるに至る。だから、禍乱を平らげることができ、愚頑を攻め破ることができる。都や村をつくり、民を休息させる。弱小で侮蔑される無知（な者ら）を併呑し、唐の皇帝に知らせ（彼らと）関係改善を継続した。

注釈

- ・邛南：邛崃^{らい}の南、今の四川省西部一帯の地方。〔古碑研究〕【9】に「邛部」と有り。
- ・威加有截：詩経に「海外有截」とある。ここでは「威加海外」（威を国外に加える）の意。〔古碑研究〕

【11】録して後世へ知らす

原文

時清平官段忠國、段尋銓等咸曰。有國而致理，君主之美也。有美而無揚，臣子之過也。夫徳以立功，功以建業，業成不紀，後嗣何覩。可以刊石勒碑，志功頌徳，用傳不朽，俾達將來。蠻盛家世漢臣，八王稱乎晉業，鍾銘代製，百世定于當朝。生遇不天，再罹衰敗。賴先君之遺徳，沐求舊之鴻恩。改委清平，用兼耳目。心懷吉甫，愧無贊於周詩，志効奚斯，願齊聲於魯頌。紀功述績，寔曰鴻徽。自顧不才，敢題風烈。其詞曰。

訳文

この時清平官段忠國・段尋銓等は皆こう言った。「国が大いに治まるのは、君主の美德である。美があるのに称揚しないというのは、臣下の過失である。徳があることによって功績を立て、功績があることによって業が建つ。業が成ったのに記載しなければ、後世の人はどうやってそのことを知るのか。石に刻んで碑を立て、功績を記して徳をたたえ、これを永久に伝えて朽ちさせないようにし、後の世まで明らかにしよう。」蛮盛は代々中原王朝の臣下で、王を姓とする八人の祖先は晋の時代に名が聞こえ、鍾に銘文を刻み、百代にわたって封爵を受けて、当代にまで至った。生きていけば不測の風雲に遭い、また衰え敗れることもあるが、幸いにも先人の遺徳によって、我が王の厚恩を受け、改めて清平官に任じられ、(王の)耳目を兼ねることとなった。(周代の賢臣)尹吉甫を思い、(尹吉甫の功績が歌われている)周詩のようにはとてもいかないことを恥じ、(春秋時代に魯の新廟を建てた)奚斯の志に倣い、(その廟の建立が謡われている)魯頌を歌い(我が王の功績と徳を称え)たいと願う。功績を記述して、それを大いなる標とする。不才ではあるが、敢えて我が王の赫々たる名声を題す。その詞に言う。

注釈

- ・蛮盛：石碑に「蛮」の字はない。『蛮書』巻五(太和)には「城の中に大きな碑あり。閣羅風清平官王蛮利の文」とある。向達注は王蛮利、鄭蛮利とも言い、碑文の作者は鄭回である。ただ、二つの作者の序文には作者の姓が王とある。([古碑研究])
- ・八王稱乎晉業：「八王」これ王の八つの姓を指す。即ち、祥、王衍、王綏、王澄、王敦、王導、王戎、王玄。彼らは魏晉時代の有名な人物である。([古碑研究])

【12】詞

原文

降祉自天，福流後胤。瑞應匪虛，禎祥必信。聖主分憂，遐夷聲振。襲久傳封，受符兼印。
 兼瓊柔節，貪榮構亂。開路安南，攻殘東甕。竹倩見屠，官師潰散。賴我先王，懷柔伏叛。
 祚不乏賢，先猷是繼。郡守詭隨，貶身遐裔。禍連虔陀，亂深豎嬖。殃咎匪他，途豕自殫。
 仲通制節，不詢長久。徵兵海隅，頓營江口。矢心不納，白刃相守。謀用不臧，逃師夜走。
 漢不務德，而以力爭。興師命將，置府層城。三軍往討，一舉而平。面縛羣吏，馳獻天庭。
 李宓總戎，猶尋覆轍。水戰陸攻，援孤糧絕。勢屈謀窮，軍殘身滅。祭而葬之，情由故設。
 贊普仁明，審知機變。漢德方衰，邊城絕援。揮我兵戎，攻彼郡縣。越嶺有征，會同無戰。
 雄雄嫡嗣，高名英烈。惟孝惟忠，乃明乃哲。性惟溫良，才稱人傑。邛邛一掃，軍郡雙滅。
 觀兵尋傳，舉國來賓。巡幸東甕，懷德歸仁。碧海效祉，金穴薦珍。人無常主，惟賢是親。
 土寧克開，煙塵載寢。穀擊犁坑，輯熙羣品。出入連城，光揚衣錦。業留萬代之基，倉貯九年之廩。
 明明贊普，揚干之光。赫赫我王，實賴之昌。化及有土，業著無疆。河帶山礪，地久天長。
 辯稱世雄，才出人右。信及豚魚，潤深瓊玖。德以建功，是謂不朽。石以刊銘，可長可久。

訳文

福德は天から降り、子孫にまで及ぶ。祥瑞は偽りではなく、めでたいしるしは必ず信ずるに値するものである。聖主は憂いを分かち合い、遠方の異民族は勢力を振るう。代々爵を襲い封を受け、兵符の大印を合わせて賜ってきた。

兼瓊は節度使となり、栄達を求めて乱の元を作った。安南への道を開き、東巽^{とうさん}を攻め疲弊させた。竹倩（越樹都督竹靈倩）は殺され、官軍は散り散りに逃げた。我が先王を頼り、懐柔することによって叛乱を取めた。

幸いなことに賢才に不足せず、先王の業績を継承した。郡守は善を行わず、その身を辺境に置くことになった。禍は虔陀（越樹都督張虔陀）にも及び、乱は嬖臣が原因だった。災難は他でもない、泥にまみれた豕自身が招いたものだ。

仲通（節度使鮮于仲通）は軍を率いたが、長久の計を謀ることができなかった。海の近くで徴兵し、江口に駐屯した。戦意を納めることをせず、白刃で相対した。計略が悪く、軍は夜を継いで敗走した。

漢（唐）は徳をもってせず、武力で相対してきた。軍を動かし將軍に命じ、府を置き城を造らせた。（王は）三軍を率いて（漢を）討ち、一挙に平定した。官吏を捕らえ、天庭（吐蕃）に馳せ献じた。

李宓は軍を率いたが、前者の轍を踏むがごとく（同じ失敗を繰り返した）。水上で戦い陸地で攻撃し、孤立した者を援助して食糧が無くなった。形勢は不利になり、計略も行き詰まり、軍は破られ自分の身も滅ぼした。祭祀を行い（敵兵を）埋葬したのは、先人の恩恵に報いるためである。

（吐蕃の王である）贊普は仁智にすぐれ、状況の変化を詳細に察知した。漢（唐）の徳はちょうど衰えはじめ、辺境には救援がなかった。我が軍を指揮し、漢の郡県を攻撃した。越樹は征伐し、会同では戦がなかった。

雄々しい嫡子は、名声が高い。忠孝の徳を備え、明哲である。性格は温良で、その才能は人傑と称えられている。邛部瀘江を一掃し、軍営・郡城を二つともに滅ぼした。

尋伝で閱兵を行うと、諸国がこぞってやって来た。東巽を巡行すると、（人々が）仁徳を慕って帰順してきた。沿海からは宝物が献上され、金穴からは珍宝が献上された。人には決められた君主というものはなく、ただ賢徳ある人に親しむのである。

土地は安寧よく開墾され、戦火は止んだ。車が打ち合うほど人が集まり、土地は犁で深く耕され、万物が和らぎ楽しんだ。都市に出入りする人々は列をなし、錦を着ていっそう輝きを増す。国は万世の基となる業を留め、倉庫には九年分の食糧が備蓄されている。

英明なる贊普は、干戈の光（ともいうべきすぐれた武功がある）。赫赫たる我が王は、その贊普の威光に頼っている。教化は保有する国土に及び、業は限りないほどすぐれている。河を帯とし、山を砥石とし、天地はどこまでも長く久しく続いている。

当世の英雄と称えられ、才能は人より抜きんでている。その誠実さは豚や魚にまで通じ、その恩

沢は瓊や玖といった美玉にまで深く及んでいる。徳によって功績を建てる、これを不朽という。石に銘を刻み、(このことを)永久に伝える。

注 釈

- ・福流後胤：「胤」字は『蛮書校注』は「孕」字に作る。
- ・郡守詭隨：『詩』大雅民勞に「無縱詭隨，以謹無良（詭隨を縦^{ゆる}すこと無く，以て無良を謹む）」とある。「詭隨」とは善を誹謗し悪に従うこと。
- ・途豕自殪：「途」字は『蛮書校注』は「塗」字に作る。句義は未詳。『周易』睽「見豕負塗，載鬼一車（豕の塗を負うを見，鬼を一車に載す）」からきている可能性もある。睽は反目の意で，目をそらせば見るものも異なる。一方では豕を見，一方では鬼を見る。張炭陀らが欲に目がくらみ，自ら滅亡の道を歩んだことを喩えているのかもしれない。（〔古碑研究〕）
- ・土寧克開：「寧」字は『蛮書校注』は「宇」字に作る。
- ・揚干之光：「干」字を「于」字に作るものもあるが，「干」字が正しいであろう。『詩』大雅公劉に「弓矢斯張，干戈戚揚（弓矢斯^こに張り，干戈戚揚）」とあり，「干」は盾のこと，「揚」は鉞のことである。ここは贊普の武功を称揚している。（〔古碑研究〕）

IV. 論考編

1. ペー曲から古事記を考える I—歌謡の表記— (遠藤耕太郎) … (216)
2. ペー曲から古事記を考える II—訓注の表記— (遠藤耕太郎) … (226)
3. 「山花碑」から万葉集を考える (遠藤耕太郎) …………… (233)
4. 白族の表記文字「ペー文」における声 (音) あるいは歌
(岡部隆志)…………… (244)
5. 中国古代の文字と『詩』
——ペー文表記法の事例を通じて (富田美智江) …………… (255)

1. ペー曲から古事記を考える I —歌謡の表記—

遠藤耕太郎

はじめに

古事記歌謡はすべて一字一音の音仮名で表記され、その文字遣いは原則として一音節一漢字に統一されている。そこには全体として編纂者太安万侶の意図が働いているとしてよい。しかし古事記歌謡は古事記編纂の時点で初めて文字に記されたわけではない。古事記の編纂にあたっては、帝紀・先紀・帝皇日継、本辞・旧辞・先代旧辞と称された種々の記録が参照されており、歌謡についても、雄略紀「小武羅の岳」歌謡(75)がその歌詞中に「一本」として異文を載せていることから、それ以前に歌謡が文字によって伝承されていたことが推測される¹⁾し、古事記歌謡と日本書紀歌謡の間に、本文を異にする類歌が五十首あまりも存在することからは両書に共通する原資料があったことが推定されている²⁾。

本稿では古事記編纂の材料となった資料のうち、特に歌謡に関する資料を「古事記歌謡の原資料」と呼んで論述を進めようと思う。むろんある特定の資料における表記を具体的に指摘することは不可能であるが、自民族語の韻文を漢字を用いて表記することの意義やその具体的方法などを明らかにすることによって、多様な表記のあり方についてのおおよその推察を得ることは可能だろうと考えている。

1. 古事記歌謡の原資料の表記

古事記歌謡の原資料の表記のありようについて、従来、音仮名主体表記説、訓字主体(音訓交用)表記説が主張されてきた。

まず音仮名主体表記説を概観する。つとに太田善磨³⁾は、古事記歌謡の使用字母に旧字種と新字種の違いを認め、それが天皇段ごとに異なっているところから、それぞれの天皇段ごとにまとめられていた古事記歌謡の原資料の表記が現行の古事記に残されていることを指摘した。徳田浄⁴⁾は、歌謡表記は原資料の姿を保存し、地の文は安万侶が撰録したと述べる。これらは最終的に安万侶による字母の統一がどの程度加わっているかについての見解を異にしつつも、一字一音表記そのものが古事記歌謡の原資料を踏襲しているとする点で共通する。

また近年は、陸続と出土する韻文を記した木簡の表記のありようを踏まえたところで、特に国語学からの発言が有力になっている。犬飼隆⁵⁾は、韻文は本来語形を表示するために簡便な一字一音の音仮名中心表記(麩の表記)で記されていたが、古事記編纂に当たって安万侶はそれらを統一された音仮名表記(晴の表記)に「精鍊」したのだと述べる。木簡に見られる簡便な一字一音の音仮名中心表記が「難波津」歌謡の記載を主としていることから、沖森卓也⁶⁾は、語形を明示する

ことが「伝承歌謡」の表記の特色であったとする。逆に乾善彦⁷⁾は古事記歌謡の原資料は韻文の記された木簡の表記と多く重なるものであり、それは当時かなり広い範囲で流通していた「基層の仮名体系」に基づいたものであり、古事記はそれを前提にしているとした。

木簡に見られる簡便な一字一音表記と古事記歌謡の表記との差をどの程度認めるかについての差はあるものの、木簡の表記(褻の表記、「伝統歌謡」の表記、基盤の仮名体系)が古事記以前の歌謡の表記としてかなり広く行われていたとする点でこれらの説は共通し、その主張は韻文の書かれた木簡の出土という確かな証拠をもつ。ただし、このことは「古事記歌謡の原資料」が一字一音の音仮名主体表記で記されていたことを直接示すものではない。

*

次に、古事記歌謡の原資料の訓字主体表記説を概観する。春日政治⁸⁾は、記紀歌謡の音仮名による一字一音表記は、「純国語」として地の文(漢文・変体漢文)と区別されるべく学者が用いた方法であり、それは漢訳仏典の陀羅尼の文体を学んだものであるとしたうえで、「記・紀の如き散文の中に入つては一音一字式歌謡が成立つてゐても、歌謡を単独に写す人々の為には、尚音訓交用体が常用されたものではなからうかと思ふ」と述べている。

亀井孝⁹⁾は、八千矛歌謡「曾邇奴棄字弓」(記)の「棄」が一般的な「伎」ではなく「棄」であるところに注目し、古事記歌謡の原資料においては「曾邇脱棄而」と訓字主体表記されていたと推定し、訓字主体で音仮名を交えるような平俗な表記や借訓による高度な訓字表記がさまざまに用いられていた状況を推定している。亀井論を承けて工藤力男¹⁰⁾は、「歌謡は形式の固定には到らなかったが、五七音を基本としたので、句の切れ目を利用して語形が捉えやすかった。そこで、意字・訓仮名・音仮名も含む表記がなされていた」と推定した。

同じく亀井論を承けて瀬間正之¹¹⁾は、記紀歌謡の、本文を異にする類歌を分析し、例えば「八雲立つ」歌謡(記1、紀1)における「妻ごみに」(記)と「妻ごめに」(紀)の表記の違いは、それが本来「妻籠」という訓字で表記されていたからだ想定し、「歌詞の一部に異同のある歌の考察から、助詞・助動詞・活用語尾を表記しない訓字表記主体の記紀共通の原表記が見えてきたことも確かである」と述べる

以上、古事記歌謡の原資料の表記に関しての、音仮名主体表記説及び訓仮名主体表記説を概観してきたわけだが、古事記歌謡の原資料には、両者を中心としたさまざまな表記法が並存していたと考えざるを得ない状況にある。結局のところ古事記歌謡の原資料についても、乾善彦¹²⁾が当時多様にありえた書記法はそれぞれの内容や用途によって使い分けられており、その位相差に注目すべきだと述べるところに落ち着くのである。

*

ここで問われなくてはならないのは、歌謡が一字一音の音仮名主体で表記されること、あるいは訓字主体で表記されることの意義である。しかし従來說がこうした点を十分に解明してきたとは思えない。音仮名中心表記説を強力に主張している犬飼隆¹³⁾は、「口頭でうたわれたのなら、まずは発音に忠実に書いたと考えるのが自然である。それには万葉仮名による一字一音式表記がふさわ

IV. 論考編

しい」と述べ、沖森卓也¹⁴⁾も民間から採取した歌謡の歌詞、「特に難し言葉や意味の取りにくいものを音仮名で表記するなかで」語形を明示する「伝承歌謡」の表記法としての一字一音音仮名表記が形成されたと述べる。ここには、一字一音で語形を表すことが歌詞を正確に伝承することになるという認識がある。これは訓字主体表記説を採る工藤力男が「おりおりの思いを吐露した歌」を「ことばの形で忠実に伝える」ためには、仮名にたよらざるをえなかったと述べるどころと重なっている。こうした認識は、本居宣長（古事記伝一之巻、文体の事）が、

但し歌と祝詞ノリトと宣命詞ノミコトノツゴトバと、これらのみは、いと古へより、古語のまゝに背キ伝へたり、これらは言コトに文アキをなして、麗ウルハシくつゞりて、唱え挙て、神にも人にも聞キ感カしめ、歌は詠ナガめもする物にて、一字も違ヒトモジひては悪アシかる故に、漢文には書カキがたければぞかし、故ユ、歌は、此記と書紀とに載れる如くに、字の音のみ仮カてかける、これを仮字カナといへり、（傍線筆者）

として、音仮名表記の向こうに漢文以前の幻想的古代を見ようとしたところを、さほど抜け出しているわけではない。こうした認識のもとには訓字主体表記は文字の文化であり、一字一音の音仮名表記は声の文化を写すものであるという、かなり素朴な認識がある。

ここで注目しておきたいのは、亀井前掲書が古事記歌謡の原資料が訓字主体表記で記されていたことを推定した際、「たゞ、当時においては文章のうへで難訓のすがたを呈してゐたものも、記憶の伝承によつて、それをよみとくことは、いまだ、たやすかつたであらう」と述べるところである。亀井は「記憶の伝承」があれば、訓字主体表記であってもその発音を伝承できると述べているのである。

以下、声の伝承（亀井の言う「記憶の伝承」）と文字の伝承が交差する地点で、音仮名中心表記と訓字主体表記によって韻文が表記されることの意義を考察することによって、古事記歌謡の原資料の表記の意義、さらに現行古事記歌謡の表記の意義を考えたいと思う。

2. 中国少数民族ペー族の語り芸

声の伝承と文字の伝承とが交差する地点において、音仮名中心表記と訓字主体表記によって韻文が表記されることの意義を考察するにあたって、筆者がここ数年フィールドワーク¹⁶⁾を行っている中国少数民族ペー族の「大本曲」、「本子曲」という文字テキスト（台本）によって伝承される語り芸を取り上げたいと思う。

ペー族は雲南省大理を中心に暮らすチベット系少数民族で、人口は160万人弱。言語（ペー語）はチベット・ビルマ語系と言われるが、語順は漢語に近く、また漢語からの借用語（借詞）も多い。大理は8世紀から13世紀にかけて、南詔・大理国の首都であり、ペー族の祖先はこの国家の構成員であった。ペー語は独自の文字を持たず、すでに南詔時代には漢語の仮借用法によって自民族語を記す方法（音仮名表記）を持っており、南詔王と宰相の贈答詩には、音仮名表記が地名や動物名などに用いられている¹⁷⁾。明代には、音仮名、訓字、借詞（音読み）、新字（国字）を交えた詞が在地知識人によって創られ、碑文に刻された¹⁸⁾。

こうした漢字による自民族語表記は現在でもさまざまに行われており、その一つが本稿で取り上

げる語り芸「大本曲」、「本子曲」の台本である。これらの語り芸には、訓字主体表記の台本と一字一音の音仮名中心表記の台本があり、両者が地域性をもって並存している。また、それを伝承する人への直接の取材も可能であり、それぞれの表記の意義やその具体的な方法や効果を現場で調査することが可能である。

なお、漢字を用いたペー語表記システムについて、本稿では、現在のところペー語研究者に広く支持されている4分類法に則って、以下の術語を用いることとする¹⁹⁾。

- ①音仮名〔音〕…漢字の音によってペー語の意味を表す。(万葉仮名のような用法)
- ②訓字〔訓〕…漢字の意味に従ってペー語の音で読む。(訓読み)
- ③借詞〔借〕…漢字の意味、音を直接漢字から借りる。(音読み)
- ④新字〔新〕…漢字の筆画を増減して新たなペー文字を作る。(国字)

「大本曲」、「本子曲」²⁰⁾は、漢民族の宝巻や戯曲がペー族居住地域に流入し、ペー族化した語り芸であるが、その成立は不明な点が多く、唐代、宋代、明代の各説が主張されている。現存するもっとも古い台本は、清・光緒年間(1875~1908)に書写された『柳蔭記』(漢民族の梁祝伝説を題材とした語り芸)、「陳世美不認前妻」などである。

「大本曲」は、「大きな台本(「本子」)の曲」である。一本の台本は演唱に2~3時間を要する長大なもので、現在、148話が確認されている。「大本曲」の演唱の仕方は、三つの流派——洱海西岸の大理古城以北の「北腔」、古城南部の「南腔」、洱海東岸の「海東腔」——に分けられるが、なかでも洱海西岸「北腔」、「南腔」が中心をなしている。演唱は漢民族伝来の語り芸のそれを踏襲し、「詩」、「白文(散文)」、「唱詞」の部分からなる。「詩」、「白文」は全くの漢語で語られ、「唱詞」のみがペー語によって歌われるが、これに対応して文字テキスト(台本)も、前者は漢文であるが、後者は漢字を用いたペー語表記——基本的には借字・訓字・音仮名を組み合わせた訓字主体表記——によって記される。

一方、大理の周縁に位置する劍川の「本子曲」は、「大本曲」に比べ演目数も少なく、一話の量もあらずじのように短いものが多い。また、演唱の仕方も、「詩」、「白文(散文)」はなく、すべて「唱詞」からなり、そのほとんどが歌会(歌垣)などで用いられる曲調——ペー族調——で歌われる。台本の表記は音仮名が極端に多い音仮名中心表記によって記される。また、石宝山の歌垣(歌会)などで掛け合われる歌の一部にも組み込まれたり、問答形式で歌われる場合があるなど、文字を介さずに流通している口誦の歌との交流も大きい。

3. 訓字主体表記と口誦性

洱海周辺のペー族の語り芸「大本曲」の文字テキスト(台本)は基本的に訓字主体表記で記され、その中心部(洱海西岸の北腔、南腔)では訓字表記が多く、周縁の洱海東岸(海東腔)では訓字主体表記とはいいながら音仮名使用率がかなり高い。さらに周縁に位置する劍川の「本子曲」は音仮名主体表記である。

このような台本の表記の差はあるが、語り芸の継承はまず先達の語りを耳で聞いて覚えて、

IV. 論考編

文字テキスト（台本）を書写するという形で行われることは共通している。筆者の質問に対して、訓字主体表記の台本を用いる楊興庭氏（南腔）は「大本曲は父（楊漢）に習った。まず本を見ずはどう歌うかを覚える。文字にするのは正確に歌うためのメモである。」（2011年8月11日聴き取り）と述べ、訓字主体表記ではあるが音仮名率のかなり高い台本を用いる楊正華氏（海東腔）も「大本曲はまず口頭で習う。言葉を身に付けた上で、台本を見て歌う。台本は歌う際のメモだ。」（2011年8月11日聴き取り）と述べた。また音仮名主体表記の台本を用いる剣川「本子曲」の歌い手、段昆雲氏も「まず聞いて覚える。その後、写して覚えていく」（1012年8月15日聴き取り）と述べている。訓主体表記も音仮名主体表記も、ともに音声による記憶が前提となっているわけである。

前述したように、亀井は、古事記歌謡の原資料が訓字主体表記で記されていたことを推定したうえで、それは「記憶の伝承」によって読み解かれていたとしたが、ペー族語り芸のあり方は、訓字主体表記だけでなく、音仮名主体表記も「記憶の伝承」（声の伝承）によって継承されることを示している。音仮名主体表記について、我々は一字一字を見てそれを音声として再現し、その音によって未知の内容が出現するとイメージしがちだが、そしてそうイメージするから音仮名表記が語形として歌の細部や囃し言葉や意味のとりにくいものを正確に伝え得ると考えるのであるが、ペー族の一字一音の音仮名表記のありようは、そういう声の伝承のあり方を度外視した音仮名表記の見方への再考を迫るものである。

*

声による伝承を前提として訓字主体表記で記したものを、再音声化するにあたって困難なことは、ある漢字を借詞と見て漢語音で発音するか、訓字と見て訓読みで発音するかの判断にあるという。その判断には漢語によってペー語を表記するための一定のルールへの慣れが必要である²¹⁾ののだが、それを身につけるには師匠についての相応の訓練が必要であるという。楊興庭氏は有名な歌手であった父、楊漢から「大本曲」を習ったが、それを「歌は年配の芸人たちから習い、14歳から導師についた。全部を暗誦するのは大変なので、台本は、その助けとして利用した。」（2011年8月11日聴き取り）と述べている。その訓練の実際を、現地で大本曲を実際に学んでいる立石謙次²²⁾は、「テキストをインフォーマントに読んでもらう際、白語で読むべき箇所を漢語で読んだり、またはその逆に読んだりしてしまうことがある。彼らは「間違えた」と認識し、読み直す。私がテキストを読み上げ、漢語と白語の発音を取り違えた場合も確実に指摘される。彼らにとってこの読み替えはきわめて重要な違いと認識されている」（白語はペー語のこと）と述べている。意味としては漢語音で読んでも訓字としてペー語音で読んでも理解可能であるにもかかわらず、彼らはその読みにこだわるのは、そこに声によって立ち上るような情調があるからだろう。

稗田阿礼の「誦習」の現場がここにはある。記憶された声の伝承を再音声化するための技術として「誦習」はあり、その再音声化は師弟関係における厳密な「声の教授」によって支えられているということだ。そういう意味で、訓主体表記は口誦性に支えられた表記なのである。

こうした「声の教授」がテキストに記される場合もある。大本曲【柳蔭記】趙丕鼎本（2.2）²³⁾

に、

「弟格閑人双」[ti⁵⁵ker³⁵ca⁵⁵ni²¹sua⁴⁴]

とある。「弟」は音仮名で「また」の意。「格」も音仮名で「心配する」の意。「閑人」は借詞で「関係ない人」の意。「双」は音仮名で「噂する」の意。一句は「また、関係ない人に噂されるのが心配です」という意である。この「閑人」はここでは訓読み [ca⁵⁵ni²¹] しているが、同じく趙丕鼎氏の別テキスト²⁴⁾ (12.3.2) ではこの部分が「暇尼」と音仮名で表記されている。この違いについて、楊興庭氏は「閑人」と記すと、「人」を [rèn] (借詞) と発音するのか、[ni²¹] (訓字) と発音するのかで迷い、歌の発声に時間がかかる。それで、うまくない人は「暇尼」と音仮名で記すと答えてくれた。

訓字は厳密な音声による再現を求めているが、そうした声の文化に基づいたりテラシーが充分でない場合には、それを音仮名によって示すことがある。音仮名表記は、一面でこうした機能をもって訓字主体表記を支えているのである。

*

別稿²⁵⁾ ではこうした「声の教授」が音仮名によって表記されるあり方をモデルとして、太安万侶が、声の伝承によってこの文字列を訓む稗田阿礼の音声聞きつつ、それを文字の側で再現しようとするにあたって、阿礼の「声による教授」を、字書や音義木簡の文体を借りて訓注として表記することにしたということ考えた。

歌謡の表記に関しても同様のことが言えそうだ。すなわち、古事記歌謡の原資料が訓字主体表記で記されていた場合、声の伝承を持たない太安万侶はその漢字の文字列を即座に音声化することはできなかったろう。それを担っていたのは「誦習」によって声の伝承を前提としてそれを音声化する技術を身につけていた稗田阿礼であった。安万侶は文字の伝承の側にいたからだ。そこで安万侶は、韻文を音仮名で記す陀羅尼の文体を借りて、訓字主体表記の歌謡を一字一音の音仮名で表記したのだと。そういう機能を認めつつ、しかしこれは音仮名表記の側面であり、音仮名表記にはより積極的な機能があった。

4. 音仮名主体表記と口誦性

洱海西岸が「大本曲」演唱の中心地であるが、その周縁に位置する洱海東岸にも「大本曲」の流派「海東腔」が存在する。その台本は、西岸の訓字主体表記に比べ、音仮名表記率が高い。さらに周縁の劍川県の「本子曲」の台本は、ほとんどが音仮名表記である。この表記の違いは、語り芸の継承のあり方との関わりが深いと思われる²⁶⁾。

「大本曲」演唱の中心地の歌い手楊興庭氏は父(楊漢)を師匠としており、趙丕鼎氏も黒明星を師匠としている。いずれも有名な歌い手である。一方、海東の楊正華氏は誰かに習ったわけではなく、歌っている人の大本曲を聞いて、自分でメモをとって整理して台本を作っており、その語り方は師匠から伝わってきた伝統的なものではないという。つまり、厳格な師弟関係のもとで継承される台本は訓字主体表記となり、師匠による厳格な「声による教授」がない地域で、自分なりに自由

IV. 論考編

に台本を作ろうとする場合には音仮名主体表記となるということである。それは一面で、前節に述べたような訓字を正確に再音声化するリテラシーの低さに起因するということもできようが、しかしそれとは別に、音仮名表記で記されたテキストは、それを再音声化する際に、その場の状況に合わせてかなり自由な改変が許容されるという機能に起因してもいる。

大本曲【柳蔭記】楊正華本²⁷⁾(3.3)に、

「三汝悪玉毛旺領」[sa³³zy³¹ɔ³⁵jy⁴²ma²¹ua⁵⁵nju³²]

とある。「三」は借字。「汝」は「用いる」の音仮名。「悪玉」は「鼈魚(大亀)」の音仮名。「毛」は「毛」の訓字。「旺領」は「数本」の音仮名。一句は、「第三に数本の大亀の毛」といった意味である。この最後の「領」字はペー語の数量詞[nju³²]を音仮名で表記したものだが、歌い手はこの台本を見ながら[tsu³¹]と発音している。王鋒氏²⁸⁾よれば数量詞[nju³²]も[tsu³¹]も「～本」の意であり、意味的には変わらないという。つまりここでの音仮名表記は厳密な再音声化を求めて記されているわけではないということだ。

また、大本曲【柳蔭記】楊正華本(8.1)には、

「梁兄脳者死別恨」[lia⁴²ɕiou⁴⁴no³¹tser²¹ci³³pie³⁵xu⁵⁵]

とある。「梁兄」は借字。「脳」は「あなた」の音仮名。「者」は[tser²¹]と発音する「もし～ならば」の音仮名。「死」は「死ぬ」の訓字。「別」は「～てしまう」の音仮名。「恨」も「～た(完了する)」の音仮名。一句は、「梁兄さんがこの世を去ってしまうなら、」の意である。ところが歌い手は、原文「脳」を[ni³¹] (漢語「你」)、「者」を[zuo⁵⁵] (漢語「若」)、「死別恨」を[sɿ³¹xou⁵⁵] (漢語「死后」)と発音している。つまり歌い手は、音仮名を見て漢語で発音しているのである。おそらくこの演唱の聞き手がペー語のわからない我々であったことが影響していると思われるが、歌い手はそれが音仮名表記であれば、聞き手を意識してかなり自由に改変することができるのである。

*

さらに音仮名主体表記の台本を用いる剣川「本子曲」で「柳蔭記」を演唱してもらった際、歌い手の段昆雲氏は地元剣川県文化局の張文氏がかつて書写した台本(張文本)に赤を入れ、自分が歌いやすいように改変を加えて歌っている。書写の際に加えられた改変のほんの一部を掲載する。

① 汉阶劳利安迷朵→汉阶劳利堂迷朵

② 牛处壁标壁牛→额处壁标壁牛

③ 天天日看山伯得→天天日汉山伯得

①で段氏は、張文本の「安迷朵(アミド)」を「堂迷朵(タミド)」に改変した。「ア」も「タ」も互いに交流するという意味であり、「アミド」、「タミド」はその否定形である。ニュアンスとして、「アミド」は互いに交流するチャンスがない。「タミド」は互いに隔てられたという意で微妙な違いがある。その改変について張文氏は、歌い手の癖として、張文氏自身はアミドが歌いやすく、段昆雲氏はタミドが歌いやすい、口に載せやすいということで改変が行われたと答えてくれた(2012年8月12日)。また、②の「牛」から「額」への書き換え、③の「看」から「汉」への書き換えはともに、訓字を音仮名に改変したものである。

音仮名表記による再音声化は、訓字表記を再音声化する際のリテラシーの低さに起因するだけでなく、より積極的に、「歌い手の癖」、「口に載せやすい」といった歌い手の身体的なありように基づいてさらに新たなテキストを作っていくことになるわけである。

こうしたありようは、剣川で盛んに行われている歌垣の歌の口誦性²⁹⁾にも通じている。有名な「本子曲」の曲目に「月里桂花」があるが、実際に1997年の剣川石宝山での歌垣で、その一部が歌垣歌として歌われていたことが、工藤隆、岡部隆志の現地調査³⁰⁾で明らかになっている。また、この歌垣によく参加していた有名な歌い手、黄世代氏は、本子曲を台本を見ずに（字が読めない）歌うことができるといった。が、実際に歌ってもらうと、それは本子曲の設定を多少意識しつつも、かなり即興性が入った歌垣での誘い歌になっていた（2011年8月14日）。

音仮名表記は口誦性に支えられた表記とすることができるが、しかし、それは一字一音を正確に再現するといった意味での口誦性ではなく、歌垣に通じるようなその場や自分の身体性に応じた改変をかなりの程度で許容していくという意味での口誦性である。

*

このような音仮名表記の機能もまた、古事記歌謡の原資料に用いられていると思われる。記紀歌謡のあいだで本文が微妙に異なる類歌が五十数首あることはすでに触れたが、たとえば「都麻碁微爾（ツマゴミニ）」と音仮名表記されたものを見て、その「ゴミ」が上二段であるところが古い形で口に載せにくく、それを現代風な下二段「ゴメ」と再音声化したり、さらには「ツマゴメニ」と書き換えるといったことも起りうるのである。そこに、癖や口への載せやすさといった歌い手の身体的ありように基づいて自由に改変が加えられる音仮名表記の特質がある。

律令国家の整備を推し進める天武朝以来、礼楽思想に基づいて諸国の歌謡が楽府などの宮中の音楽機関に収集され、伝習されていた。それらは書かれたものであると同時に歌われるものでもあった。声によって歌われるという性質が、場や歌い手の身体的ありように基づく自由な改変を許容する音仮名表記を選択させた結果、古事記歌謡の原資料にはさまざまな類歌が生まれることになった。稗田阿礼はその一つを誦習し再音声化したのであり、あるいは剣川の段昆雲氏が自らの歌いやすい台本を作成して歌ったように、誦習において阿礼は自らの古事記歌謡の原資料を作成して歌ったことも考えられる。それを安万侶はほぼ統一的な音仮名で表記しなおしたのである。

おわりに

古事記歌謡の原資料は、訓字主体表記されたものと音仮名主体表記されたものが並存していたと思われる。両者はともに、声の伝承という口誦性を前提とした表記法であった。ただし、訓字主体表記の口誦性が、「声の教授」によって正確な音声を継承するのに対して、音仮名主体表記の口誦性はさまざまな改変を許容する口誦性であった。

古事記歌謡の原資料が訓字主体表記で記されていた場合、太安万侶はその漢字の文字列を即座に音声化することはできなかった。そこで安万侶は、韻文を音仮名で記す陀羅尼の表記法を借りて、訓字主体表記の歌謡を全て音仮名で表記した。一方、古事記歌謡の原資料が音仮名主体表記されて

IV. 論考編

いた場合、それらは癖や口への載せやすさといった歌い手の身体的ありように基づいて自由に改変が加えられた。稗田阿礼はその一つを誦習し、あるいは自らの歌いやすい歌謡資料を作成して、再音声化した。それを安万侶はほぼ統一的な音仮名で表記した。

声の伝承と文字の伝承の交差する地点に立つ稗田阿礼と太安万侶は、音仮名表記のもつ多様な機能を利用することによって、多様な古事記歌謡の原資料を再音声化、文字化し、現行の古事記歌謡の表記として完成させたのである。

注

- 1) 尾崎知光「古事記の表記と安万侶の撰録」『古事記年報 19』, 1977
- 2) 亀井孝「古事記はよめるか—散文の部分における字訓およびいはゆる訓読の問題—」『古事記大成 3』平凡社, 1957, 『亀井孝論文集 4』吉川弘文館, 1984 所収
- 3) 太田善磨「古事記歌謡の原本について」『歴史と国文学』, 1941 年 7 月
- 4) 徳田浄『古事記研究』桜楓社, 1969
- 5) 犬飼隆『上代文字言語の研究』笠間書院, 1991, 『木簡から探る和歌の起源』笠間書院, 2008
- 6) 沖森卓也『日本語の誕生』吉川弘文館, 2003
- 7) 乾善彦「記紀のウタと木簡の仮名」『国文学』第 51 巻 1 号, 2006 年 1 月
- 8) 春日政治『仮名発達史序説』岩波書店, 1933, 『春日政治著作集 4』勉誠社, 1984 所収
- 9) 注 2) に同じ。
- 10) 工藤力男「古事記は人麻呂歌集に後れたか」西條勉編『書くことの文学』笠間書院, 2001 年所収
- 11) 瀬間正之「記紀歌謡の原表記」『上智大学国文学科紀要』, 2012 年 3 月
- 12) 乾善彦『漢字による日本語書記の史的研究』塙書房, 2003
- 13) 犬飼隆『木簡から探る和歌の起源』笠間書院, 2008
- 14) 注 6) に同じ。
- 15) 稲岡耕二『万葉表記論』塙書房, 1976, 『人麻呂の表現世界』岩波書店, 1991
- 16) 「大本曲」「本子曲」の調査は、2010 年～12 年度にかけて、中国雲南省大理市及び劍川県で行った。本稿はそのインタビューや資料化した文字テキスト（台本）の一部を使用している。資料の全体が本書Ⅱ「ペー曲台本集成」である。
- 17) 遠藤「アジア辺境国家の君主像—南詔国王の「星回節唱和詩を読む」—」『新しい漢文教育』53 号, 2011 年 11 月
- 18) 「アジア辺境国家の歌表記—中国雲南省ペー族「山花碑」と万葉和歌の比較を通して—」『日本文学』60 巻 1 号, 2011 年 1 月, 「アジア辺境国家の七五調—ペー族の五七音数律を遡る—」岡部隆志, 工藤隆, 西條勉編『七五調のアジア』大修館書店, 2011 年 2 月
- 19) この分類法が完全ではないことは、注 18 遠藤「アジア辺境国家の歌表記—中国雲南省ペー族「山花碑」と万葉和歌の比較を通して—」に指摘した。
- 20) 「大本曲」「本子曲」についての概要は、楊政業主編『大本曲簡志』雲南民族出版社, 2003, 董秀団『白族大本曲研究』中国社会科学出版社, 2011, 施珍華他訳『白族本子曲』香港天馬圖書有限公司出版, 2003 によった。
- 21) 一定のルールについては遠藤「東アジアにおける「声の伝承」と音仮名表記—古事記の訓注に即して—」『古代文学』52 号, 2013 年 3 月予定（本書Ⅳ, 2 に再録。）に述べた。
- 22) 立石謙次「中国雲南省大理白族の「大本曲」の概説と紹介—テキストを中心に—」『國學院雑誌』第 112 巻第 9 号, 2011 年 9 月

- 23) 2011年8月の現地調査で写真に収めた趙丕鼎氏所蔵の『柳蔭記』。本書Ⅱ, 4-1。
- 24) 張錫祿・甲斐勝二主編『中国白族白文文献釋読』広西師範大学出版社, 2011収録「梁山伯与祝英台(中巻)」
- 25) 遠藤「東アジアにおける「声の伝承」と音仮名表記—古事記の訓注に即して—」『古代文学』52号・2003年3月予定。(本論Ⅳ, 2に再録。)
- 26) こうした考えは、2010~12年にかけての現地調査の際、現地研究者段伶氏、張錫祿氏、王録氏らとの対談のなかで具体化したものである。
- 27) 2011年8月の現地調査で写真に収めた楊正華氏所蔵の『柳蔭記』。本書Ⅱ, 4-3。
- 28) 2011年~12年にかけて採集した台本を資料化するにあたって、王録氏に注を施してもらった。
- 29) 遠藤『古代の歌—アジアの歌文化と日本古代文学—』瑞木書房, 2009, 工藤隆『雲南省ペー族歌垣と日本古代文学』勉誠出版, 2003, 岡部隆志『古代文学の表象と論理』武蔵野書院, 2003等参照。
- 30) 工藤隆・岡部隆志『中国少数民族歌垣調査全記録1998』大修館書店, 2000

(付記) 本論は、「古事記歌謡の表記と口誦性—中国少数民族ペー族の語り芸をモデルとして—」と題して、『國語と國文学』2013年5月号に掲載予定である。

2. ペー曲から古事記を考えるⅡ—訓注の表記—

遠藤 耕太郎

はじめに

古事記は訓字主体の変体漢文で記されているが、固有名詞、普通名詞の一部、呪文や定型的な句、歌謡、訓注には音仮名表記が用いられている。音仮名表記は、漢字の音読みを利用することによって日本語の発音を再現しようとする。したがってそれは稗田阿礼の「誦習」と無関係ではありえないと思われるのであるが、近年の研究の傾向は、音仮名表記を「誦習」と切り離し、撰録者太安万侶による、古事記という書かれたテキスト内に限定された書記システムの解明というところで精密化しているように思われる。

そもそも音仮名表記は、東アジアの辺境民族（国家を樹立した場合もある）が中国中原王朝における漢字の仮借用法を輸入し、自民族語の発音を表記する方法として用いたところに始まる。すなわちそれは、声と文字（漢字）との相互的な交流のなかで用いられ始めたのであった。本稿では、古事記の音仮名表記の一端としての訓注を取り上げ、これを声と文字とのかかわりという視点から論じてみたい。

1.

古典中国語を表記するための文字——漢字——によって、それとは文法も語順もまったく異なる日本語を表記する方法は、5世紀には始まっていた¹⁾。それは漢字の音読みを用いて日本語の固有名詞を表記する方法から始まったが、これは漢字の音を借りて（中国からみた）外国語を表記する方法、すなわち仮借の用法によっていた。仮借は、中国における漢訳仏典における陀羅尼（古典インド語の呪文を唱えるために、それを漢字の音で表音的に書いたもの）や、史書における固有名詞（例えば『魏志』東夷伝倭人条の「卑弥呼」など）の表記に見られるところである。こうした中国での仮借の用法が東アジア各地の古代国家に輸入されたのだが、古代日本における音仮名表記もその一環としてあった。埼玉県稲荷山古墳出土の鉄剣銘（辛亥年=471）は正格の漢文で記されているが、その中に漢字の仮借の用法によって「乎獲居（ヲワケ）」、「意富比塊（オホヒコ）」、「獲加多支鹵（ワカタケル）」ら9人の人名、「斯鬼（シキ）」の地名が記されており、5世紀後半には仮借の方法が広く日本で行われていたことが知られる。

一方、漢字の訓読も5~6世紀にはよく使われる字に限って行われていたようだ。同鉄剣銘の「臣」が「オミ」と訓読された確証はないものの、滋賀県大津遺跡、徳島県観音寺遺跡出土の、字訓を辞書のように音仮名で示したいわゆる音義木簡が示すように、7世紀後半には訓読が全国的に普及し、大規模に整備されていた。

この二つの条件、すなわち仮借用法によって日本語の固有名詞を表記する方法の輸入、及び漢字の訓読の普及と整備を基盤として、7世紀には日本語文を音仮名を交えた訓字主体表記で書き表す方法が確立する。法隆寺薬師仏光背銘(歳丁卯=607年)は、日本語の語順で補助動詞を交えた訓字主体表記で記され、また山名村碑文(辛巳歳=681年)には、日本語の語順で補助動詞を交えた訓字主体表記のなかに、固有名詞が音仮名表記によって記されている。訓読の普及・整備が、逆に日本語を漢字の訓で書くことを可能にし、その際に表記できない固有名詞が仮借の用法、すなわち音仮名によって表記された。

こうした日本語文表記の工夫のうえに、古事記の文体はある。古事記は、漢字の訓を並べて日本語の文をあらわす訓字表記のなかに、日本語の発音を音仮名によって表記する部分を挿入する文体で記されている。その音仮名表記の一部に、訓注がある。

2.

訓注は、小松英雄²⁾が言うように、書かれた漢字に付けられて、複数ありうる訓読みの一つを指定したり、訓を示すことによって前後の構文を示唆する機能を果たしていると、ひとまずは言うことができる。小松によれば、上巻冒頭「高天原」に付された訓注「訓高天下云阿麻下效此」は、高の字の下の天はアマと訓むことを示しているのであるが、ここには「高天」の「天」は「あめ」ではないことと、「たかあま」が「原」の連体修飾語であることが示されている。また、キミ二神の「二柱神立天浮橋而」の訓注「訓立云多々志」は、「立」字を下二段他動詞タツではなく、四段自動詞タツで訓むべきことを示すことによって、「天浮橋」を「立」てたのではなく、「天浮橋」に「立」ったのだという文脈を正しく理解させようとしたものである。小松はこうした指摘を積み重ねつつ、訓注を、「漢字をつらねた字面によみとる際に、意味のきれめをとりちがえて、撰録者の意図したところが誤解されやすいような部分に、文字のきれつづきを明示する目的で、くわえられたものがおい」と述べている。小松を承けて久田泉³⁾は、「訓注は所与の字脈が意図した読解を導く条件として十分でない場合——即ち【辞理】【意況】の【見え置き場合】——に施されるのだ」と述べる。

要するに、訓注は訓みを特定することによって意味を明確にするために付されるということである。これを神野志隆光⁴⁾は、古事記は「よむ」(意味として理解する)ことはできるが、「ヨム」(一定の日本語の表現に還元する)ことは完全にはできない形で書かれたものであるという亀井孝⁵⁾を承けつつ、訓注は、「よめる」ことが十分に保障されないところを「ヨミかた」を指示することによって理解可能を保障するものであったと述べている。

久田や神野志の見解を承ける形で山口佳紀⁶⁾は、訓注を分類・考察し、「訓注は「ヨミ」を示すものではあるが、目的は、それによって「よみ」を明らかにする所にある。訓注の存在によって、我々は、撰録者が「ヨミ」そのものにこだわっているかのように思いやすい。そこから、訓注による古語の保存というような見方(たとえば、吉田留「古事記の訓注に就いて」國學院雑誌47巻1号、一九四一年一月)も出て来る。しかし、撰録者の狙いがそうした所にあると見るのは、皮相な

IV. 論考概

捉え方である。」と述べている。

が、果たしてそうだろうか。安万侶は「ヨミ」(音声)そのものに本当にこだわっていないのだろうか。現行の古事記の文体は、稗田阿礼によるそれ以前の原資料の「誦習」を介して創出された。後述することになるが、「誦習」とは原資料の多様な表記を見て、その音声を再現する技術である。「誦習」の現場にむろん原資料の文字列はあったが、それは阿礼による再音声化によって、つまり音声として初めてその場に理解しうるものとして立ち現れたのである。

訓注を、「誦習」とそれを受けての「撰録」の現場から捉え返そうというのが本論の目論見である。

3.

「誦習」と「撰録」の現場を具体的に知る手がかりとして、中国少数民族ペー族の「大本曲」という、文字テキスト(台本)によって伝承される語り芸を取り上げる。「大本曲」の台本は訓字主体表記で記され、なかに音仮名表記が挿入されるという古事記と近似する文体であり、同時にそれが語り芸という「声の伝承」と密接にかかわっているという点で、古事記の表記のありようを考えるにあたって、有効なモデルとなると考えられるからだ⁷⁾。

「大本曲」は中国雲南省大理地方に居住する少数民族ペー族のあいだに広がる、台本(文字テキスト)を伴った語り芸であり、歌い手と三弦の伴奏者との二人一組で演唱される。農閑期の娯楽として、また結婚式や新築儀礼の際に演唱者が招かれて行われる。

その成立は不明な点が多く、唐代、宋代、明代の各説が主張されている。現存するもっとも古い語り芸の台本は、清・光緒年間(1875~1908)に書写された『柳蔭記』(漢民族の梁祝伝説を題材とした語り芸)、「陳世美不認前妻」などであり、少なくとも清代末には存在していたことが確かめられる。これらは、漢民族の宝巻や戯曲が流入し、この地でペー族化したものである。

演唱は漢民族伝来の語り芸のそれを踏襲し、「詩」、「白文(散文)」、「唱詞」の部分からなる。「詩」、「白文」は全くの漢語で語られ、中心となる「唱詞」がペー語によって歌われるが、これに対応して文字テキスト(台本)も、前者は漢文で、後者は漢字を用いた訓字主体表記に音仮名を挿入するペー語表記によって記される。なお、唱詞は7775音で一句をなす韻律によっている。

漢字を用いたペー語表記システムについて、本稿では、現在のところペー語研究者に広く支持されている四分類法に則って、以下の術語を用いることとする⁸⁾。

- ①音仮名〔音〕…漢字の音によってペー語の意味を表す。(万葉仮名のような用法)
- ②訓字〔訓〕…漢字の意味に従ってペー語の音で読む。(訓読み)
- ③借詞〔借〕…漢字の意味、音を直接漢字から借りる。(音読み)
- ④新字〔新〕…漢字の筆画を増減して新たなペー文字を作る。(国字)

4.

語り芸の中心地、洱海西岸地域の台本は訓字主体表記が顕著である。歌い手は、まず先達の語り

を耳で聞いて覚えたいので、文字テキスト（台本）を書写するという。「大本曲は父（楊漢）に習った。まず本を見ずにどう歌うかを覚える。文字にするのは正確に歌うためのメモである。」（楊興庭氏、2011年8月11日聴き取り）。「大本曲はまず口頭で習う。言葉を身に付けた上で、台本を見て歌う。台本は歌う際のメモだ。」（楊正華氏、2011年8月11日聴き取り）。つまり、訓主体表記は、音声による記憶を前提にして筆記され、それが再音声化されるわけである。

その際、困難なことの一つに、ある漢字を借詞（漢語音による音読み）で発音するか、訓字（訓読み）で発音するかの判断があるという。その判断には一定のルールへの慣れが必要である。例えば、大本曲『柳蔭記』趙丕鼎本（1.4）の、

「聴燈阿哥利登病」[cheɹ⁵⁵tu⁴⁴ a³¹ ko⁴⁴ ni⁵⁵ tu⁴⁴ peɹ³¹]

は、「兄さんが病気になったと聞き」という意味であるが、「聴」字を借詞として漢語音で発音するのか、訓字としてペー語音で発音するのかが問題となる。この場合は、直後の「燈」[tu⁴⁴]が「～できる」の意の付属語を音仮名で表記していることから、この一句がペー語文脈と判断されることによって、「聴」字も訓読みされることになる。これは、同じ趙丕鼎本（5.3）の、

「十様如葉找得全」[ɕj³⁵ja⁵⁵ zy³⁵jo⁵⁵tsɔ³¹teɹ³⁵tshue⁴²]

において、「～できる」の意の「得」が音仮名ではなく借詞（漢語）になっていることから一句が漢語文脈と判断され、直前の「找」が漢語音で発音されるのと同じルールによっている。ある漢字を漢語音で発音するのかペー語音で発音するのかを示すために、その句が漢語文脈なのかペー語文脈なのか判断されねばならないが、それを決定する一つの要素として付属語の表記が関わっているということである。こうしたルールに慣れていないと、「声の伝承」は、意味は理解できても発音はできないということになる。

こうしたルールを身につけるには相応の訓練が必要である。楊興庭氏は有名な歌手であった父、楊漢氏から「大本曲」を習ったが、それを「歌は年配の芸人たちから習い、14歳から導師についた。全部を暗誦するのは大変なので、台本は、その助けとして利用した。」（楊興庭氏、2011年8月11日聴き取り）と述べている。同様のことを、現地で大本曲を実際に学んでいる立石謙次⁹⁾は、「テキストをインフォーマントに読んでもらう際、白語で読むべき箇所を漢語で読んだり、またはその逆に読んだりしてしまうことがある。彼らは「間違えた」と認識し、読み直す。私がテキストを読み上げ、漢語と白語の発音を取り違えた場合も確実に指摘される。彼らにとってこの読み替えはきわめて重要な違いと認識されている」（白語はペーのこと）と述べている。意味としてはどちらで読んでも理解可能であるにもかかわらず、彼らがこだわるのは、そこに声によって立ち上るような情調があるからだろう。

「誦習」、¹⁰⁾「撰録」の現場がここにはある。記憶された「声の伝承」を再音声化するための技術として「誦習」はあり、その再音声化は師弟関係における厳密な「声の教授」によって支えられているということだ。

さらに、こうした「声の教授」がテキストに記される場合もある。大本曲『柳蔭記』趙丕鼎本（2.2）に、

IV. 論考編

「弟格閑人双」[ti⁵⁵keɾ³⁵ɕa⁵⁵ni²¹sua⁴⁴]

とある。「弟」は音仮名で「また」,「格」も音仮名で「心配する」,「双」も音仮名で「噂する」の意であり、一句は「また閑人に噂されるのが心配です」という意である。この「閑人」はここでは訓読み [ɕa⁵⁵ni²¹] されているが、同じく趙丕鼎氏の別テキスト¹⁰⁾ (12.3.2) ではこの部分が「暇尼」と音仮名表記されている。この違いについて、楊興庭氏は「閑人」と記すと、「人」を [rən] (借詞) と発音するのか, [ni²¹] (訓字) と発音するのかで迷い、歌の発声に時間がかかる。それで、うまくない人は「暇尼」と音仮名で書くと答えてくれた。師弟関係による「声の教授」がテキストに反映するということだ。意味的にはどちらでも通じるが、そこに意味を越えた情調を抱えているからこそ、それを音仮名表記することによって「声の教授」を越えた一定の普遍性(むろん方言の地域を越えることはできないが)をもって書き記す必要があるのである。

5.

天武天皇の勅語によって「帝王の日継」および「先代の旧辞」が稗田阿礼によって「誦習」され、天皇の死を経て26年後に、安万侶が「稗田阿礼が誦める勅語の旧辞」を「撰録」したものが古事記である。

「誦習」とは、西宮一民(新潮古典集成『古事記』)のいうように、「帝王の日継」および「先代の旧辞」(帝紀・旧辞)を解説し口誦する(声に出して言う)意であろう。阿礼は古事記の原資料を解説し口誦する能力、つまり「目に度れば口に誦み、耳に払れば心に勒す」(目で見ると口で暗誦し、一度聞くと心に記憶する)能力を持っていた。こうした能力は西郷信綱¹¹⁾が強調したように、シャーマニックな能力と繋がっている。大本曲の語り手は葬儀においては自ら祭文をペー語表記し、それを朗唱する。こうしたシャーマニックな力が文字とのかかわりにおいても重要なのであった。ということは、こうしたシャーマニックな能力がなければ、古事記の原資料は声に出して読むことはできなかったということである。古事記はそもそも「声の伝承」のあり方を抱え込んでいるのであった。当時(西宮は天武14年(685)6月と推定する)、稗田阿礼は28歳であった。

そして26年後、再び「稗田阿礼が誦める勅語の旧辞」が安万侶によって記述された。稗田阿礼は54歳であるが、「元明天皇から命を受けた太安万侶は、稗田阿礼を側につけて鋭意撰述を始め」(新潮古典集成『古事記』)たのだらう。目の前にあるテキストは、声の文化に連なる阿礼なくしては音声としても意味としても、それを越えた情調としても立ちあがってこない。稗田阿礼の誦みは記憶された「声の伝承」に支えられた誦みであったからだ。それを聞きながら安万侶はさまざまに漢字使用の工夫をしながら「声の伝承」に頼らない日本語文として記したのである。

山口佳紀¹²⁾は「古事記において、訓注が加えられている場合のその訓注は、その文字からは容易に想到できない訓という訳ではない。むしろ、二つの訓みが容易に考えられてしまう場合に、そしてそれが意味の理解を左右する場合に、一定の方向に導くべく、訓注が施される」という。山口が言うように、「集御刀乃手上血、自手候漏出」に「訓漏云久伎」という訓注を施すことによって、その血は、意志なき物体のようにこぼれ落ちる(モル)のではなく、みずからの意志によってくぐ

りぬけた(クク)ことが示されるのである。安万侶は、稗田阿礼の「声の教授」にしたがって、原資料の「モレ」とも「クキ」との発音できてしまえる「漏」に、「クキ」という訓注を施したのではなかろうか。それは「声の教授」、「声の伝承」を越えた一定の普遍性を備えた方法であった。

阿礼の誦習と安万侶の筆記の差異のなかに、訓注の発想は出現した。阿礼の誦みを聞きつつ、安万侶は訓字主体の原資料を読もうとしている。これは「声の伝承」として記憶に支えられた厳密な訓みを要求する文体であった。つまり「声の教授」を必要とする文体なのである。阿礼は声の文化に生きる者として、記憶された「声の伝承」に従ってこの文字列を訓むことができたのだが、安万侶にはそういう能力はない。訓み間違えることも多々あったろう。阿礼はその都度、そうでない旨を教授しただろう。その教授はしかし「声の伝承」の側にある。安万侶はこれをどうにかして文字の側で再現せざるをえなくなった。「声の伝承」とは異なる文字のレベルでそれを再現する必要があるからだ。こういう「撰録」の現場で、安万侶は阿礼の「声による教授」を、字書や音義木簡の文体を借りて訓注として表記することとしたのではなかったらうか。

おわりに

安万侶による訓注は、「声の伝承」のなかで師の「声による教授」を、字書類の注の文体を用いることで文字化したものであると考えた。訓字は厳密に音声による再現を求めており、音仮名はそれを示すことができる。音仮名表記の機能にはこうした側面がたしかにある。

しかし、音仮名表記はそこに留まらない別の機能を持ってもいる。それは音仮名表記するからこそ、自由な改変が可能になるという、いわば自由性であり、音仮名表記のこうした機能が用いられているのが、歌謡や本文の定型的な句であると考えている。音仮名表記の機能は一義的ではないということだが、この点については別稿¹³⁾にて考察することとしたい。

注

- 1) 本節の記述は主に、犬飼隆「漢字の日本語への適応」北原保雄監修・林史典編「朝倉日本語講座2 文字・書記」朝倉書店、2005。神野志隆光「漢字と非漢文の世界——八世紀の文字世界」東京大学教養学部国文・漢文学会編「古典日本語の世界 漢字がつくる日本」東京大学出版会、2007を参考している。
- 2) 小松英雄「国語史学基礎論」笠間書院、1973
- 3) 久田泉「『古事記』音読注・訓注の施注原理—「下效此」の場合—」『国語と国文学』60巻9号、1983年9月
- 4) 神野志隆光「古事記の達成—その理論と方法」東京大学出版会、1983
- 5) 亀井孝「古事記はよめるか—散文の部分における字訓およびいはゆる訓読の問題—」(『古事記大成3』平凡社、1957、『亀井孝論文集4』吉川弘文館、1984所収)
- 6) 山口佳紀「古事記の表記と訓読」有精堂出版、1995
- 7) 「大本曲」の調査は2010年~12年度にかけて、中国雲南省大理市及び劍川県で行った。本稿はそのインタビューや資料化した文字テキスト(台本)の一部を使用している。全体の資料は、本書「Ⅱ. べー曲台本集成」を参照願いたい。
- 8) この分類法の問題点については、遠藤「アジア辺境国家の歌表記—中国雲南省べー族「山花碑」と万葉

IV. 論考編

和歌の比較を通して」「日本文学」2011年1月に指摘した。

- 9) 立石謙次「中国雲南省大理白族の「大本曲」の概説と紹介—テキストを中心に—」「國學院雜誌」112巻第9号, 2011年9月
- 10) 張錫祿・甲斐勝二主編『中国白族白文文献釋説』広西師範大学出版社, 2011所収「梁山伯与祝英台(中集)」
- 11) 西郷信綱「稗田阿礼」『古事記研究』未来社, 1973
- 12) 山口佳紀『古事記の表記と訓読』有精堂出版, 1995
- 13) 遠藤「古事記歌謡の表記と口誦性—中国少数民族ペー族の語り芸をモデルとして—」「国語と国文学」2013年5月掲載予定(本誌IV, 1に再録)

(付記) 本論は、「東アジアにおける「声の伝承」と音仮名表記——古事記の訓注に即して——」と題して、「古代文学」52号, 2013年3月, に掲載予定である。

3. 「山花碑」から万葉集を考える

遠藤 耕太郎

1. 辺境国家としての南詔・日本

雲の南には南詔があり、東海の果てには倭国（日本）があった。円仁『入唐求法巡礼行記』によれば、838年の遣唐使派遣の際に唐に朝貢した五カ国のうち、南詔が第一位、倭国（日本）が第二位の席次であり、その他の使節は冠をつけず、背中は曲がり容貌は醜く、獣の皮や荒布を身につけていたという。

南詔（8世紀前半～902年）は、日本が隋や唐との関係性のなかで古代国家を形成する時期に、現在の中国雲南省大理地方において、同じく唐との関係性のなかで建国された。7世紀中ごろより唐朝に入貢、四代皮羅閣（在位728?～48）が大理周辺の諸国を統一し、738年、唐朝より雲南王に封ぜられた。その後、唐と吐蕃との緩衝材の役割を負って国家経営を行い、特に六代異牟尋（在位779～808）は王族や武将の子弟を成都に留学させ唐文化を摂取した。続いて大長和国（902～28年）などの短命王朝、さらに大理国（937～1254年）が建国されるが、元のフビライに滅ぼされ、以後、その中心民族であった人々は中原王朝の支配を受けつつ、現在の中国少数民族ペー族となった。

南詔中期には、南詔支配者層が漢字を仮借的に用いる音仮名を用いて詩を記していたことが、『玉溪編事』、樊綽『蛮書』等の諸記録により明らかになっている。このように南詔期より開始されたペー文表記（漢字を利用してペー語を記す表記）は、その後も大理国、元代には広く用いられたと考えられており、元代には『白古通』、『玄峰年運志』という歴史書を作り上げたことが諸々の記録から推定されている。しかし、明、清代の文化統制政策によりペー文表記は衰退を余儀なくされた。ただ、現代においても、ペー文表記はペー曲（祭や葬儀の際、民間の専門的歌人が台本を読みながら歌い聞かせる長篇歌謡）の台本として、あるいは民間宗教者の祭文として、広く使用されている¹⁾。

文字を持たなかったペー族先民は、南詔以来、漢字の音読み、訓読み、仮借による仮名表記、変形漢字の作成を通して、自民族の歌を表記する工夫をしてきた。その多くは明代の文化統制政策によって焼失したとされるが、幸い、南詔・大理国のペー文表記を継承した詞「詞記山花」が、明代初期（景泰元年＝1450）の銘をもつ石碑に刻されて現存している。この詞をふつう「山花碑²⁾」と称している。

山花碑には「詞記山花 詠蒼洱境」という題のもと、520字の正統漢字及び変用漢字（この用語については後述する）が、楷書で刻されている。この詞は、7775音を1段とする20段からなり、第1段の第1、2、4句末及び第2段以降第20段までの第2、4句末に[u] [v]音の脚韻を踏む詞

IV. 論考編

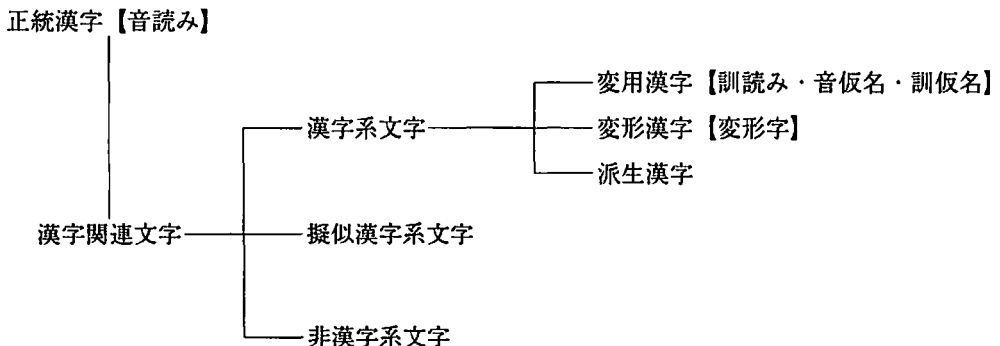
形式によっている。ある文字をどう読むかによって解釈は分かれるものの、おおよそ、第一段落（第1段～第8段）には作者の生地であり隠棲の地でもある大理地方（蒼山洱海）の風景を描写し、第二段落（第9段～第17段）ではこの地に息づいてきた祖先の徳を偲び、第三段落（第18段～第20段）では作者の修得した空の理論が展開される。

一方、隋・唐との関係のなかで、日本の支配者層もまた漢字を受容し、音読み、訓読み、仮借による仮名表記、変形漢字の作成を通して、日本の歌を表記してきた。現在の日本人とペー族との違いは、日本は海路によって大陸と隔てられており、元の襲撃時にたまたま神風が吹いたことのみ起因する。そして古代国家形成期の日本においても、漢字を受容しさまざまな工夫をして自らの歌を表記していく試みが行われたのであり、その一つの集大成として万葉集はある。

本稿は、山花碑の表記の工夫を具体的にとりあげ、万葉集の表記の工夫と比較検討することによって、アジアの辺境国家の歌のあり方の一端として、自民族の歌を漢字で表記することについて考える。

2. 漢字による自民族語表記システムの概要

唐の周辺に位置した南詔・大理国、そして日本において、漢字によって自民族の歌を表記するという試みが同時並行的に行われたわけだが、なにもこれは両地域に限った現象ではなく、東アジア規模で起った現象であった。本論は、山花碑や万葉和歌に見られる表記の工夫が、東アジア各地域の表記の工夫に通じる普遍性をもつものであるとの見通しをもっている。それを証するには、今後、東アジア地域のさまざまな民族の同様の試みについての具体的な調査検証が必要となるが、そのためには、まず漢字によって漢語以外の民族語を表記するシステムを東アジア規模で概観できるような枠組みが必要である。本論は、西田龍雄³⁾や吉池孝一⁴⁾による東アジア規模の表記システムを参考にして、以下のような統一的枠組みをまず提示する。



「正統漢字」は、漢語を表記するために造られた文字であるが、時代・地域とともに字形と字数は変遷を重ねた。発音は各地域の発音【音読み】でなされる。「正統漢字」に対して「漢字関連文字」として、「漢字系文字」・「擬似漢字系文字」・「非漢字系文字」が置かれる。

「漢字系文字」は、さらに「変用漢字」・「変形漢字」・「派生漢字」に分類される。

「変用漢字」は、正統漢字の字形を表音的に、或いは全く別の音価や意味を与えて使う文字であり、正統漢字の字形と字音を利用したもの【音仮名】、字形と字義を利用したもの【訓読み・訓仮名】がある。ペー族には訓読み・音仮名・訓仮名があり、万葉集にも同様に訓読み・音仮名・訓仮名がある。東アジア的に見れば、中国西南部の少数民族ハニ族、トン族、リス族でも変用漢字は用いられている。

「変形漢字」は、正統漢字の偏・旁・冠などを自己の言語形に適合させて組み改め、変形した漢字である。ペー族にも万葉集にもあるほか、中国西南少数民族チュワン族の方塊字やミャオ族のミャオ文字、さらにベトナムのチュー・ナム（字喃）などがこれにあたる。

「派生文字」は、正統漢字の字形をもとに、それをくずして新しい字形を造り出した文字で、平仮名、片仮名や中国湖南省の女書がこれに相当する。

以上の漢字系文字に対して、「擬似漢字」⁵⁾、「非漢字系文字」⁶⁾があるが、ペー族と万葉の表記システムを扱う本論には、ひとまずは関係しない。

なお、ここで確認しておかねばならないのは、ペー族の表記システムに関する中国人研究者（主にペー族出身者）の「音読み」、「訓読み」概念と、本論の用いる概念との相違である。

大理地方は新石器時代より中原と関係を持ち、漢代には洱海地区に郡県が置かれるなど中原王朝との密接な関係を持っていた。そのためペー語の基本語彙の六割は古漢語を受け入れているという⁷⁾。しかも両語はともに孤立語であり、基本的にSVO構造をとる点においても共通する。要するにとても近い言語関係にあるのであり、例えばペー語で「白豆花」は[pe:44 tu:31 xuo:35]と発音されるが、これは現代漢語[bái dòu huā]と非常に近い音であるにもかかわらず、ペー語として認識されることになる。そのため、中国人研究者はこれを「訓読」（漢字の意義に基づいてペー語音で発音する）と分類している。ところが日本語の場合、漢語と日本語の関係は薄く、漢語音と日本語音には「ハクトウカ」と「しろまめはな」という違いがあり、日本語ではこちらを「音読み」、「訓読み」としている。

仮に、全体の六割に達するという古漢語を受け入れた基本語彙を、中国人研究者のいうように「訓読み」とした場合、ペー語で[tian]とも[xe:55]とも発音する「天」⁸⁾はともに「訓読み」となり区別ができなくなる。また日本語の「ハクトウカ」も「しろまめはな」も「訓読み」になってしまう。漢字で自民族の歌を表記するための工夫を、東アジア規模で捉えようとする本稿の性質上、この差は無視できない。そこで、むろん[pe:44 tu:31 xuo:35]も「ハクトウカ」もそれぞれペー語であり日本語ではあるが、これを「正統漢字」の地域的な発音の変化としての「音読み」に統一することにした。

3. 山花碑を表記する工夫—万葉和歌の表記との比較—

3-1. 音読み

山花碑の音読みは、音読みと変換音読みとに分けられる。

IV. 論考編

音読みはすでに述べたように、ペー語そのものが漢語と近いために、すでにペー語音であるという感覚があり、中国人研究者はこれを訓読みとしているほどである。が、音読みのなかでも特に漢語と意識されるもの（中国人研究者が音読みに分類するもの）があり、それらは儒・仏思想にかかわる用語が多い。例えば、

- (1) 菩提達磨^{だま}知音【菩提達磨を知音とし】(12-3)⁹⁾
- (2) 迦葉^か師主【迦葉を師主とする】(12-4)
- (3) 慈悲^ひ治理衆人民【慈悲によって多くの人民を治め】(13-3)
- (4) 才等^{さい}周文武【周の文王・武王に比せられた】(13-4)

などに顕著である。

儒・仏思想にかかわる用語に音読みが多いのは、万葉集とも共通し、万葉和歌でもたとえば「餓鬼^が・力士^{りきし}・仏^{ぶつ}」などは音読みされている。

だが万葉集はそれ以外の音読みを極力排除することによって歌をなすところに特徴がある。日常語では、特に上層階級者の周辺では外来語としての漢語がかなり使われていたであろうが、歌の中に持ち込まれることは珍しかった¹⁰⁾のであり、歌は和語、つまり訓読みだけで詠むのだという意識があった。そういう意識を可能にしたのは日本語における訓読みの豊富さであったのだが、それは純粋に言語学上の日本語と中国語との距離の速さに由来するということだ。ペー語のように、基本語彙の六割が音読みであれば、日常語とは異なる歌のことばを作ろうとしたとき、そこから音読みを排除することはできないのである。

そこで、そのような言語学的な状況のなかで、ペー族は詩を表記する工夫として、音読みそのものを発達させていったのだと思われる。音読みのなかに、次のような読み方があるのに注意したい。

- (5) 龍関^{りゅう}龍王^{りゅう}宿【龍関には龍王が住む】(4-4)

この「王」は〔yo31〕と発音するが、〔yo31〕は「后」の音読みである。古漢語では王を「后」と称することがあったが、ペー語は古漢語の読みを保持していた¹¹⁾。つまり、同じ音読みでも、日常語とは異なる古い音読みを使用しているのである。この場合、「王」を「后」に変換して、その音読み〔yo31〕によって発音しているのであるから、本稿はこれを変換音読みと称することにしよう。この意識は、万葉和歌が日常語的な音読みを排除したり、あるいは鶴を「たづ」と表現するような歌語のあり方と近いと思われるが、和語がそれを多様な訓読みによって行うのに対して、山花碑では音読みを発達させて行っているのである。

- (6) 大夫^{だいふ}在處^{ざい}栽松栢【大夫は居所に松栢を植え】(10-3)
- (7) 君子^{くんし}種^{くさ}梅竹【君子は梅竹を植える】(10-4)

(6) (7) は連続した対句であるが、(6)「栽」と(7)「種」はともに [tsy42] と読まれる。[tsy42] は「種」の音読みであるから、「栽」を [tsy42] と読むのは変換音読みということになる。ここには、一首のなかでの同漢字の重複を避けようとする意識が働いているだろう。このような意識は万葉和歌にも確認できる。

- (あ) あさがりにいまたすらし 朝蕨尔今立須良思 ゆふがりにいまたすらし 暮蕨尔今他田渚良之 (1-3)
 (い) つくよよしかはのおときよしいざここにゆくもゆかぬもあそびてゆかむ 月夜吉河音清之率此間行毛不去毛遊而将帰 (4-571)

(あ) では、対句における漢字の重複を避けるために二度現れる「立つ」を、訓読み(正訓字)と音仮名の違いで表記している。また(い)では、「行く」が「行」「去」「帰」によって表記されている。いずれも訓読みを用いての工夫であるが、同漢字の重複を避けるという意識が、訓読みの発達している和語においては訓読みを用いての表記によって追及され、一方、音読みの発達しているペー語にあっては、変換音読みによって追及されているわけである。

3-2. 訓読み

山花碑の訓読みは、まずは基本的な名詞や動詞、及び付属語で行われる。

- (8) 三塔侶你穿天腹【三塔は天腹を貫き通す】(4-2)
 (9) 夏雲佐玉局山腰【夏の雲が玉局山の腰に(帯のように)巻き付き】(5-1)
 (10) 風与阿觸、【一陣の風雨が花を濡らす】(5-4)
 (11) 度生死病老【生死病老に思いをいたす】(9-4)
 (12) 看公案語録【公案語録を読む】(11-4)

(8)の「天」について、山花碑に「天」は七例あるが、基本的には [xe55] と訓読みされる。ただし、「得堯天法度」【堯天舜日の道德基準を得る】(16-4)のように儒教用語の場合には音読みされている。(9)の「夏」は [yo31]、(10)の「風」は [pi35]、(11)の「生」は [xei55]、「老」は「[ku33]」と訓読みされる。また(12)「看」も [xa55] あるいは [a33] と訓読みされる。このような基本語彙を訓読みする方法は、万葉では正訓と呼ばれ、その表記法の中心を占めている。それに対して、山花碑において訓読みは非常に少ないのだが、これはペー語そのものが漢語と近く、訓読みが発達しなかったことに由来しよう。

また、付属語を訓読みするという意識も見られる。

- (13) 金鳥駈散天上星【金鳥は天の星を蹴散らし】(8-1)
 (14) 玉兔打開霄面霧【玉兔は空の霧を押し開く】(8-2)

IV. 論考編

- (15) 雲窓下拈大乘經【雲窓で大乘經を唱え】(11-3)
 (16) 有去在威儀模草【また茅が繁茂する地に赴く】(17-2)

(13) (14) は、「天の星」と「空の霧」が対になっている。(13)「上」は訓読み [no33] [no1] で、「～の」という意の助詞を表す。(14)「面」は読み方に諸説あるところだが、[no1] と訓読みする説に従えば、「～の」という助詞を漢字の重複を避けて別の漢字によって表記したということになる。(15)「下」も訓読み [e133] [e1] されるが、「～で」を表す助詞。また (16)「在」は、[tu44] と訓読みして「～に」を表す助詞とする説と、[pie1] [pia1] と訓読みして「～している」を表す助詞とする説に分かれる。漢語「上」「面」「下」「在」には、いずれの意味もあり、ペー語と漢語の言語上の近さが感じられるが、その一方で、付属語は訓読みするという意識は注目される。万葉集にも、「夢に見^み乞^こ」「我に与^か経^こ」「住吉の岸に家欲^か得^も」「雲にも欲^か成^も」のように、願望の助詞を訓読みによって表意的に表すことが行われている。これら万葉の例は義訓によって気持ちを表す高度な工夫であるが、そもそも訓読みの発達していないペー語表記においても、山花碑にはその萌芽があることに注目しておきたい。

また、次の変換訓読みのような工夫もある。

- (17) 補東^み洱^る九曲【洱海の東の九つの湾に流れ込む】(2-4)
 (18) 勝^か姮^こ娥^お入^い宮^{みや}伽^か舞【(その姿は) 姮娥の月宮での美しい舞に勝る】(6-2)

(17) の「洱」には、[ko21] と訓読みする説と [er1] と音読みする説がある。「洱」[er1] は洱海の固有名であるが、地元では洱海を「河」[ko21] というのだろう。「洱」[er1] を [ko21] と読むのは、訓読みではあるが、意味と音の対応関係のなかに「洱」[er1] を「河」に変換し、そのうえで「河」の訓読み [ko21] で読むという過程が含まれている。先の変換音読みと対応させて、「変換訓読み」と称する。

また、(18) の「伽舞」については、音読み [tə33 u33] とする説と、変換訓読み [da3 gol] とする説とがある。[da3 gol] はペー族によって現在も行われている古体を残す歌舞の名称であり、「伽舞」を現在の歌舞の名称に引きつけている。つまり「伽舞」の義に注目した一回的な訓読みであり、その意味では万葉の義訓に近いとも言える。

このような変換訓読みは、漢字の意味に注目した一回的な読み(義訓)によって、漢字の義が表わす普遍的な意味を自らの生活の場や文化の側へ引き寄せて説明しようとする工夫であるだろう。

訓読みに関して、最後に一点補足しておかねばならない。

- (18) 蟬吟^{せみ}聲^{こゑ}、【蟬の鳴く声、ジージーと】(7-4)

山花碑は一字一音節の漢字によって、7775 音(字)形式によって詞を記している。ペー語は漢

語と同じく、基本的には一字一音節であるために、7775音(字)という詞形式に乗せた場合、これを自民族の音節で発音することができた。それは音読み訓読みにかかわらず、一字一音節になる場合がほとんどであるために可能であった。ところが「𪗇」は訓読みで [ta21pi21] と二音節で発音する例外的な存在であったため、そのまま読むと漢字は四字で済んでしまうことになり、一字一音の詞形式からずれてしまうことになる。そこで作者楊黼は工夫して、この句の漢字を五字にするために、「吟」という「聲」と重複する字を置いて字数を合わせているのである。いわば置き字である。

和語の場合、言語学的にはほとんどの字は訓読すれば複数音節になるために、仮に自民族の歌を絶律や詞の形式に乗せたとしても、それを訓読してしまえば音数は全く異なることになる。そのため、万葉集では、字数に注目して訓読するという意識は育たなかったのである。それを意識したのは、訓読みによってではなく、第3期以降の音仮名中心の表記によってであった。

3-3. 音仮名

山花碑における変用漢字でもっとも多いのが音仮名である。音仮名は地名などを表す基本的な用法から、副詞的な語や擬態語を表す用法、中心となる音読みや訓読みを補助的に補う方法、音仮名は表意性を帯びた音仮名を用いることで詩的イメージを深める方法など、万葉の音仮名のあり方と重なるような多様な方法によって、歌を表記している。

まず地名を表記する例から挙げていく。

(20) 鳳_𪗇山高鳳_𪗇風栖 【鳳_𪗇山は高く、鳳_𪗇が栖み】(4-3)

「_𪗇」は「翼」の異体字で、地名 [v31 ji35] を「鳳_𪗇」と表記している。地名を音仮名で表記することは、南詔時代よりおこなわれるところであった。『玉溪編事』(五代・撰人不詳)には、七代南詔王尋閣勸(在位八〇八～〇九年)と清平官(宰相)趙_{ちようしゆくたつ}叔達による五言詩の応報が残されているが、そこには、地名のほか、役職名、虎や馬といった動物名などが音仮名によって記されている。いうまでもなく古代日本においても、音仮名は地名や役職名、人名を表記する際の中心的な方法であった¹²⁾。

次に、山花碑における音仮名が、副詞的な語や、擬態語を表記する例を挙げる。

- (21) 造化工迹在阿物 【天地創造の跡はいたるところにある】(1-2)
- (22) 曾登位守道結庵 【ここで仏道を守り庵を結び】(9-3)
- (23) 阿部逢_{あへ}劫_{あへ}催浪秃 【ある時は災難に会って悪路を進む】(18-2)
- (24) 風与阿觸、 【一陣の風雨が花を濡らす】(5-4)
- (25) 黄鶯白鶴阿双、 【黄鶯と白鶴は群れを成し】(8-3)

IV. 論考編

(21)「阿物」は [a31 yu33] と発音し、ペー語の「たくさん」の意、(22)「曾登位」は [tsu31 tu44 ue55] [zen1 dou2 wei4] と発音し、ペー語の「ここで」の意を表す。(23)「催浪秃」は漢語「趨難途」([cui2 lang4 tu1]「急坂の悪路」)を音仮名 [tɕeɪ35 na55 tʰu33] によって表記したもの。ペー語では「でこぼこ道」などを表している。音仮名は、漢字に対応する語彙がない、あるいは対応する語彙があってもそのニュアンスが異なるような副詞的な語に使用されることが多い。また、(24)「阿觸觸」[a31 tsu44 tsu44] はいつとき雨が降る様子(一陣の雨)を表し、(25)「阿双、」[a31 sy35 sy35] は群れを成す様子を表す擬態語である。

また、音仮名は、次のように中心となる音読みや訓読みを補助的に補う働きもする。

- (26) 蒼洱鏘旣不飽【蒼山洱海の地は賞美しきれない】(1-1)
 (27) 五華侶你罽霄充【五華楼は天空に突き刺さり】(4-1)
 (28) 跳仙人出克遊遊【跳ね踊る仙女がここに現れ出て遊び】(6-1)

(26)「境」は音読みで「場所」という意を表し、「鏘」(現代中国語では [qiang1], 金属物が触れ合うチャリンという擬音語)は音仮名でそれを補っている。(27)「侶你」は [tɕou31 ne31] と発音して、「まるで~のようだ」の意であるとする説に従えば、「侶」は「似」の異体字で「似る」という意の訓読み、「你」は音仮名でそれを補うということになる。同じく(27)「霄充」は [kʰy55 tsʰy31], [ku2 chu3] と発音し、「霄」は訓読みで「空」という意を表し、「充」は音仮名でそれを補う。(28)「出克」については、音読み [tsʰy44] (出) + 音仮名 [tsʰy] とする説と、訓読み [bei1] (出) + 音仮名 [qi1] (去) とする説があるが、いずれにしても「克」(「充」の略字)は音仮名で、その直前の「出」を補っている。このように、中心となって意味を表す音読みや訓読みに、補助的に付加される語を音仮名で記すというあり方は、万葉集の中心的な表記である「正訓字+音仮名」の表記にも近い。

さらに、万葉との比較において注目しておきたいのは、表意性を帯びた音仮名が使用されるということである。表意性を帯びた音仮名というのは、万葉集では次のようなものである。

- (う) ^{かすがやまかすみななびきこみくく}春日山霞多奈引情具久照月夜尔獨鴨念 (4-735)
 (え) ^{ぬぼたまのいぬにはもとなあひみれとたごにあらねほこひやますけり}奴婆多麻乃伊米尔波母等奈安比見礼騰多太尔安良袿婆孤悲夜麻受家里 (17-3980)
 (お) ^{たまがづらはなのみあきてなうごるはながいならめあはこひおもふを}玉葛花耳開而不成有者誰恋尔有目吾孤悲念乎 (2-102)
 (か) ^{よろづよにかたりつげとこのなげにひれかりけらしまづ通羅佐用嬪面}余呂豆余尔可多利都夏等之許能多氣仁比例布利家良之麻通羅佐用嬪面 (5-873)

(う)は大伴坂上大嬢が家持に贈った歌である。「寝む」を「念」と表記するが、これは音仮名であると同時に、相手を思って寝られないという意を表しており、この文字によって独り寝の寂しさが視覚的に表現されることになっている¹³⁾。(え)は「恋」を「孤悲」と表記することによって、逢えない相手を偲ぶという恋の本質を伝えているが、さらに(お)の巨勢郎女が大伴宿禰の求婚に

繰り返す歌では、相手の恋を一般的な「恋」として、それと対比的に自らの恋を「孤悲」と表記することで、相手の恋を口先だけの恋であると貶していくことになる¹⁴⁾。(か)では松浦佐用姫の「姫」を、女官の意をもつ「嬪」と、その「面」によって表すことで、夫との別れに臨んで領巾を振る佐用姫に、その雅かな容姿までをも重ねようとしている。

これらの音仮名に表意性をもたせるのは、一首が視覚によっても味わわれることを前提とした表記の工夫であるが、同様の工夫は山花碑でも行われている。

(29) 漂散成地獄【あつという間に地獄になる】(18-4)

(30) 四季色花阿園、【四季を通じて山花はあちこちに咲き】(5-3)

(31) 有去在威儀模草【また茅が繁茂する地に赴く】(17-2)

(29)「漂散」は「片響」(現代漢語で [piàn xiǎng], 「ほんの少しの時間」の意)の音仮名であると同時に、この表記には、現実が雲散霧消するイメージが重ねられており、音仮名の表意性が詩的イメージを膨らませる。(30)「色花」について、「色」([se35] [shéi] [séi])を「山」を表す音仮名とする説と、「色鮮やかな」を表す音読みとする説があるが、ここも、実際には音仮名として「山」を表しつつ、そこに「色(色鮮やかな)」の意を持たせているということだろう。(31)「威儀」[ue35 ji44] [wéi ní]は「葳蕤」(現代漢語で [wéi ruí], 草の繁茂する状態を表す)の音仮名であるとともに、草の勢いよさを、まるで威儀を正していると表記することによって、今は雑草に覆われている大理国荒都への追懐の情が立ち添ってくるのである。

3-4. 変形漢字

最後に、自民族の歌を表記する工夫として、変形漢字の作成について述べる。

山花碑の変形漢字はおよそ十例ある。およそというのは、それが正統漢字の異体字、俗字である可能性があるからだ。

(32) 屏面西澗十八溪【屏風のように蒼山の西から雪解け水が十八筋の溪流となって】(2-3)

(33) 五華倡你鬪霄充【五華楼は天空に突き刺さり】(4-1)

(32)は蒼山の西から流れて洱海にそそぐ幾筋もの溪流の描写である。「澗」は形声による変形漢字で、「雪」の音 [sua35] [xue4] で読まれ、「水が高きから低きへ流れる」という意の「澗」を表す音仮名として使われている。しかし、「雪」は単に音を表しているだけでなく、その流れが清冽な雪解け水であることをも表している。音仮名に表意性を持たせつつ、新たな変形漢字を創ることでさらに深い詩的イメージを広げているのである。(33)の「鬪」も同じく形声による変形文字で、「歴」の音 [ni44] で読まれる。[ni44]は「入る」という意であり、それを「リ」をつけた変形漢字を創り表記することによって、五華楼が天空に突き刺さる様子が視覚的に表現されること

になった。

このような変形漢字が、山花碑を離れて継承されるかどうかはわからないが、固有の詞における一回的な表現であったのではなかろうか。ここには表意性を帯びた音仮名を表す漢字を、形声の原理によって創出することによって、さらに深化した視覚的イメージを重ねる働きがある。

万葉集にも変形漢字はある。ふつう国字と呼ばれるものだ。たとえば「鞆」は会意によって「革」と「丙」を合わせたものである。弓を射るときに左ひじにつけるあてがわのトモの形が「丙」の字形に似ているからと言われる。万葉において「鞆」は、「鞆乃音為奈利」(1-76)のように、訓読みで用いられ、さらにはその音声のみを取り出して「花散鞆」(7-1259)、「土者踏鞆」のように訓仮名として用いられるなど、一首の意味と離れて広汎に使われる安定性を持っている。山花碑のような一回的な詩的イメージを創出するための造字ではなく、訓読みの発達のみで安定化した変形漢字となったものである。

4. 自民族の歌を漢字で表記する工夫

ここまで、周辺民族が、自民族の歌(詞・詩)を漢字によって表記する際の工夫を、山花碑と万葉集を比較しながら具体的に見てきた。

これを大きく書式という面から捉え返せば、次のように言えるだろう。万葉集の書式は、大きく見れば、歌詞を一字ずつ表音的に書いていく方式(音仮名中心書式)と、漢字の表意性を訓読みによって活かしながら、一部に表音的な仮名を交える方式(訓読み+音仮名書式)とに分けられる。一方、山花碑は、漢字の表意性を音読み(及び訓読み)によって活かしながら、一部に表音的な音仮名を交える方式(音読み+音仮名書式)によって書かれている。

その差は、古代中国語とペー語が極めて近い関係にあったことにより、ペー族は自民族語を表記するために、訓読みではなく音読みをさまざまに発達させてきたことに起因する。だが、そのような言語学的な差があるにもかかわらず、山花碑と万葉和歌は、漢字によって自民族の歌を表記する工夫において多くの共通点をもつのである。以下、ここまで具体的に見てきたことを整理しておく。

- ① 日常語とは異なる歌のこぼを創り出すために、万葉集は訓読みを中心として音読みを排除し、山花碑は音読みの方法を発展させた。
- ② 一首のなかでの同漢字の重複を避けるために、万葉ではそれを訓読みと音仮名の違いで表記し、山花碑では音読みと変換音読みの違いによって表記する工夫をした。
- ③ 漢字の普遍てきな意味を自民族の生活や文化に引き寄せて説明するために、万葉集も山花碑も、付属語を訓読みしたり、漢字の義に注目した一回的な訓読み(義訓)をするなどの工夫をした。
- ④ 和語は言語構造上、ほとんどの訓読みが複音節になるため、字数に注目して訓読みすることはないが、山花碑は複音節の訓読みの場合には置き字をするなどして字数を揃える工夫をした。
- ⑤ 中心となって意味を表す語と補助的な語を区別する場合、万葉では「訓読み+音仮名」で表記するという工夫をしたのに対し、山花碑では「音読み+音仮名」で表記するという工夫をした。

- ⑥音仮名は意味を棄ててその音を利用する用法だが、万葉も山花碑も、表意的に音仮名を用いて音以外の詩的イメージを重ねる視覚的な工夫をしている。
- ⑦万葉の変形漢字は一首を離れて広汎に安定的に利用されるが、山花碑は表意性を帯びた音仮名を表す変形漢字を一時的に造字することによって、詩的イメージを深める工夫をした。

注

- 1) 王鋒「方塊白文的歴史発展和現状」『中国民族古文字研究』第4輯・天津古籍出版社、1996
- 2) 「山花碑」研究は、1940年代に開始され、既に多くの注釈書が刊行されている。それらを集めたものが本書「I. 山花碑注釈集成」である。
- 3) 「東アジアの文字」西田龍雄編『講座言語第5巻 世界の文字』大修館書店、1981、『アジア古代文字の解説』中央公論新社、2001（『アジアの未解説文字』大修館書店、1992）
- 4) 吉池孝一「中国周辺の漢字関連文字」『KOTONOHA』48号、2006年11月
- 5) 正統漢字の字形または構成原理を模倣して、新しく創造した文字であり、10世紀から12世紀にかけて、東アジア北方地域で国定の文字として造られた遼の契丹文字、西夏の西夏文字、金の女真文字などがこれに相当する
- 6) 正統漢字とは文字の系統を異にするが、文字組織のいずれかにおいて、漢字の影響を受けたり逆に漢字に何らかの影響を与えたりした文字であり、ソグド文字、バスマ文字、ハングルなどがこれに相当する。
- 7) 『白族文化大観』雲南民族出版社、1999
- 8) 以下、ペー語の発音表記は(2)に記した諸注釈による。
- 9) 以下、山花碑の句を例示する場合、以下のように統一する。この句では「菩提達磨做知音」が山花碑原文、【菩提達磨を知音とし】が日本語訳、(12-3)は、山花碑全20段のうちの第12段第3句を表す。
- 10) 日本古典文学全集『万葉集』解説
- 11) 趙楨『白文《山花碑》訳釈』雲南民族出版社、1988
- 12) 尋閣勳と趙叔達の贈答詩は遠藤「アジア辺境国家の五七調」岡部隆志・工藤隆・西條勉編『アジアの七五調』大修館書店、2011に掲載し日本語訳した。
- 13) 小川靖彦『万葉集 隠された歴史のメッセージ』角川選書、2010
- 14) 佐佐木隆「書記法の発達(1)」『朝倉日本語講座2 文字・書記』朝倉書店、2005

(付記) 本論は「アジア辺境国家の歌表記—中国雲南省ペー族「山花碑」と万葉和歌の比較を通して—」と題して、「日本文学」2011年1月号に掲載されたものの一部である。

4. 白族の表記文字「ペー文」における声（音）あるいは歌

岡部隆志

1. 白族文化における声と文字の出会い

10数年前から、中国少数民族文化と日本古代文学の比較研究のための研究会を続けていた。4、5年前から雲南省白族の資料を読んでみようということになり、白族歌文化の貴重な資料である「山花碑」を解説することとなった。

「山花碑」は白族の文化人が、漢字を利用して白語を表記するペー文と呼ばれる表記法によって書かれた歌（詩）である。南詔国の時代漢字を用いて白語の詩を表記したことがわかっている。従って、ペー文表記はかなり古い時代から試みられており、元代には広く用いられペー文による歴史書も書かれたらしい。が、結局、このペー文表記は、日本の漢字仮名交じり文の表記のように、白語を表記する民族独自の表記文字として普及することはなかった。ただ、韻文の表記としてペー文表記は生き続けた。その一つの証拠が明代初期に石碑に刻まれたペー文による詩「山花碑」である。そして、このペー文による韻文表記は、現在でも白族の芸能者や歌手によって歌われ実演される「大本曲」「本子曲」という語り芸の文字表記に受け継がれているのである。

文字を持たない白族が漢字を利用して自民族の歌（詩）を表記したことは、文字を持たなかった日本語が漢字を利用し工夫しながら独自の日本語表記を作り上げてきたことと同じである。従って、ペー文について調べることは、中国という漢字文化の周辺に位置した文字を持たない文化が、漢字を借りながらどのようにして自民族の声の言語を表記していったかの具体的な様相を知ることへとつながる。そこで「山花碑」の次は、ペー文で表記された「大本曲」や「本子曲」の一つを細かく読んで見ようということとなった。そこで選ばれたのが、中国で広く知られている「梁山伯と祝英台」の物語であった。「梁山伯と祝英台」はいわゆる梁祝伝説として中国各地に古くから伝承されている物語である。もともとは漢民族の伝承であると思われるが、白族もその伝承を取り入れ多少のアレンジを加えながら白族の言語による歌曲物語として歌い伝えてきたのである。

調査の過程で、「梁山伯と祝英台」を伝承している白族の芸人や歌手にインタビューをし、実際に彼らが作製したり、また受け継いでいるテキスト（台本）を見せてもらい、声の芸能がどのように文字化されているのか、その現場を見ることが出来た。そのことは、声の伝承をどのように文字化しているのか、その声と文字の出会いの様相を具体的に見ることが出来たということであり、日本の古代文学における声と文字の出会いを考えるうえでいろいろと参考になった。

例えば、当初、われわれは白族における声と文字の出会いを、白族という民族の大きな括りの範囲で見てしまっていた。つまり、日本語を日本の国や日本民族といった大きな括りで見てしまうようにである。だが、すぐにそういう括り方が間違いであることがわかってきた。同じ白語を話す地

域でも方言差があり、歌文化も同じではない。そういった地域の違いによって、同じ「梁山伯と祝英台」の物語でも、その文字化の様相に違いが出るのである。このようなことは、実際に調査してみないと見えてこない。民族という括り方は便利ではあるが、ある意味で恣意的であり、おおざっぱすぎて地域の具体的な様相を見えなくしてしまう危うさを持つ。調査のなかで、白族の諸地域において声と文字とが出会う出会い方が違う、ということを知り得たことは、例えば、日本古代文学における声と文字の出会いにおいても、その出会い方が均一でなかったことを推測させるのである。

日本の古代文学の発生において、声と文字の出会いについての考察は欠かせないが、それを論じるほとんどの論が文字資料をもとにしている。声の資料などあるわけがないので、それは当然であるが、その結果として、文字によって書く、ということに文学の発生を見る見方がどうしても支配的になる。むしろ、「書く」ことに表現の価値の発生を求めることは、文学の本質の問題に届かず議論だとしても、声による表現が持つ意味についてほとんど論じられないままでは、やはり、日本の古代文学研究を不完全なものにしていると思わざるを得ない。

当該研究が白族文化における声と文字の出会いを研究課題としたことは、白族文化の解釈というテーマの設定であると同時に、日本の古代文学における声と文字の出会いの問題の考察を意図したということでもある。日本古代文学研究において決定的である声の資料の欠落は、少なくとも、現在の、白族における声と文字の出会いの具体的な様相の調査によって、ある程度補えると思われる。むしろ、その補い方にはそれなりの手続きが必要であろうが、白族における声の文字化資料は、日本古代文学における声と文字の出会いを考察するための重要な資料となりえるはずである。

ペー語における声と文字との出会いの具体的な様相については当該研究の研究報告によってかなり詳細に見ることができる。本稿では、当該研究報告を踏まえて、ペー文における声と文字との出会いについて考えたいのだが、そのてがかりとして、ペー文における借詞、訓字、音仮名といった表記の意味を考え、それらの表記が、声（音）あるいは歌を表記していかざるを得ないことについて論じていきたい。

2. 「山花碑」について

「山花碑」は、明代初期に白族の学者であり詩人である楊黼が作った詩であり「詞記山花」という。この詩が石碑に刻まれ現在にまで残っており、その碑を「山花碑」と呼んでいる。「山花碑」の特徴は、漢字を利用した白語表記によって書かれていることである。日本で言えば万葉仮名に近い。そしてもう一つ注目すべきなのは、この詩が、当時の白族の、声で歌われていた歌謡の体裁で作られているのではないか、という説のあることである。「山花碑」は、漢詩の定型スタイルではなく、7・7・7・7・5の定型となっている。白族の多くの研究者は、この音数律は当時の白族の民間歌謡の音数律であったろうと推測している。その推測によれば、明代初期の白族の人々が歌っていた声の歌のスタイルが楊黼によって記録されたということになる。「山花碑」のこの音数律は、現在でも白族の人々が歌の掛け合い等で歌うときの音数律であり、この音数律を白族調と呼んでいる。ただ、この説には異論もある。

IV. 論考編

当該研究の研究者である遠藤耕太郎は、民間の歌の音数律は現在は7・7・7・5だが、古い歌の形式を残す西山地区の歌の形式が7・7・7・5でないこと、また7音5音の音数律による詩の形式は、中原王朝の南東に位置する周辺民族に古くから見られることなどから、当時民間のレベルで7・7・7・5という決まった音数律は持っていなかったのではないかと、むしろ、この音数律は、「南詔文人が詞の流行の中で考案した南詔独自の歌の形式」であったとしている¹⁾。つまり、この音数律は、南詔国当時の知識人たちが、国家を背景にした文化的アイデンティティの一つとして生み出した詩の形式であり、その形式が継承されて「山花碑」に残され、さらには白族調の歌の形式として民間に降りていったのではないかと、ということである。

7・7・7・5の音数律の発生については遠藤の推測が説得力を持つ。日本における万葉集の5・7・7・5の音数律の成立は、7世紀から8世紀にかけての律令国家の成立を背景として、漢文化の影響を受けた貴族や官人たちが、大和文化のアイデンティティ様式として確立していったものだとする見方はすでに定着している。東アジアの一方の辺境で、日本と同じように、南詔国でも漢詩形式ではない詩の形式への模索が行われていた、という推測は十分に成り立つだろう。

ただ、問題なのは、民間レベルにおける声の歌との相関である。例えば日本では、東歌は5・7・5・7・7であるが、恐らくは大和文化の歌の形式であった音数律が東国にも伝わったものと考えられる。つまり、5・7・5・7・7の定型は、東国を含め広く民間レベルに流行していた声の歌の形式であったものが中央の歌文化に影響を与えたということではなく、大和の貴族、官人たちの手になる短歌の形式として民間にも伝わっていったということであろう。

同じことは白族の歌の音数律にも言えるだろう。その成立に南詔国の知識人たちもかかわったと思われる7・7・7・5形式の音数律は、やがて民間の中に浸透し、白族調の声の歌の音数律として定着していったということである。ただ、問題はそれがいつの頃なのかということである。楊黼が「山花碑」を創作した明代初期にはすでに民間レベルの音数律としてあったのか、それともこの歌形式が民間に降りるのはもっと後の時代なのか、それはよくわかっていない。

ただ、仮にすでに明代初期に民間レベルでこの形式の歌があったとすれば、楊黼は声の歌の伝承をかなり意識してそれを文字に記したのだと思われる。そうでないとすれば、つまりもっと後の時代に民間レベルに浸透したものとすれば、楊黼は、すでに詩の形式として知識人に継承されていたこの7・7・7・5の詩形を、おそらくはこれも南詔国の時代に試みられた漢字を利用した白語記述の方法(ペー文)の伝統にのって「山花碑」を書いたということになる。遠藤は後者であるにとらえているが、そうだとすれば、楊黼が、声の歌をまったく意識していなかったかどうか、そこをどう評価するかが問われる。7・7・7・5形式が当時の声の歌の様式だったと断定は出来ないにしても、やはり、声の歌を楊黼は意識せざるを得なかったのではないかと。何故なら、白族文化は圧倒的な声の文化のもとにあったはずだからである。

ペー文で書かれた「山花碑」は、万葉仮名で書かれた万葉集がそうであるように、変体漢文で書かれている。そこには異国の文字を利用して、声の言語たる母国語を表記しようとする工夫の跡がある。この工夫は楊黼独自の工夫ではなく、先人たちの工夫の蓄積を楊黼が踏襲したと見るべきで

あろう（むろん楊龔個人による工夫も一部にあると思われるが）。そのように考えれば、楊龔が当時の声の伝承としての歌を意識してそれをどう文字化するかという強い意識で「山花碑」に取り組んだ、と読み取るとは確かに妥当ではない。ただ、それが文字の歌の表記であれ、どうしても声の歌は響いてきたはずだ。それを事後のものとする見方もあろうが、やはり、書くという行為に不可分に働く力としてあったということを当該研究課題である「山花碑」の解読に当たって留意しておきたい。

3. 「山花碑」における声（音）

「山花碑」から声と文字の出会いを読み取るとは出来るのだろうか。確かに、「山花碑」創作時の現在の出来事として、声と文字との出会いを期待することは出来ないだろう。ただ、かつてその出会いによって作られたペー文が、日本の漢字仮名交じり文のような安定して誰もが使える表記体系を獲得していれば、その出会いはすでに過去のものになっていたと言えようが、ペー文がそのような安定を獲得していたとは言えそうにない。現在の白族の研究者でも「山花碑」の読みや一部の解釈に違いがあるのはその証左であるが、特に、ペー文が現在、主に韻文（歌曲や劇の台本）の表記に用いられ、いわゆる実用的な散文の表記に用いられていないことを考えれば、安定した文字の表記体系を作り上げることをしなかった、もしくはできなかった、ということであろう。元の時代にペー文表記で歴史書が書かれたが読みづらいので漢文で書き直されたと言われている。また、仏教の布教にもペー文が用いられたとも言う²⁾が、それらの散文表記の試みが白族社会に広がる表記とはならなかったのである。

歌は様式性を持つ非日常的な表現であって、その表記が一般に通用しなくても許容される場所があるが、散文表記は、日常的な言語の用法として意味のレベルでの共通理解が求められる。つまり、意味を伝達する表記として安定したものでなくてはならない。漢字がアルファベットのような表音記号であれば、それはそれで仮名文字のように徹底することで、安定した表記となるが、漢字は、それ自体表意記号であると同時に表音記号でもあり得る。その表記記号としての複雑さの前で、ペー文は、意味を安定的に伝達できる表記体系を作れなかったということである。

一方で、「大本曲」「本子曲」の表記において用いられるということは、少なくとも、その声（音）の伝達においては有効であるとする認識があったからだと思える。「大本曲」「本子曲」の表記は、意味の理解も当然求められるとしても、何より音の再現が優先されたはずだからである。

ここで「山花碑」の表記法について見ていこう。「山花碑」に用いられる漢字の用法の違いは次のようなものである。漢字の意味と読みをそのまま用いる正統漢字（借詞）、漢字の字形と字義を利用し訓みはペー語の音で訓む漢字（訓字）、漢字の字形と字音を用いてペー語の音を直接現す漢字（音仮名）、漢字の一部を作り替えて新しく創り出した文字（新字）にわけられる。これは基本的に日本語の和文を漢字で表記する場合の用法の分け方と同じである。

「山花碑」は520字の漢字及び変形漢字が使われている。この520字のうち、圧倒的に多いのが、漢字の音と意味をそのまま借りた正統漢字（借詞）である。徐琳・趙衍蓀『ペー文《山花碑》釈

IV. 論考編

読] (1980) の分類に従えば³⁾、借詞は 328 字、実に 63 パーセントである。次に多いのが訓字で 90 字、17 パーセント、次が音仮名 49 字で 9 パーセントである。

借詞が多いのは、白語が中国語と近い言語であるということがある。どちらも、単音節で成り立つ言語であり、日本語が漢字を訓で読む場合複数音節の音を用いるが、白語にはほとんどそのようなことがない。つまり、漢字一音を白語一音の意味と音として利用できるということであり、それが全体の 63 パーセントを占めるのであるから、白語と中国語の親近性がよくわかると言えよう。ただ、現在の漢字の中国語的発音をそのまま白語の発音として受け入れたのかどうかはよくわからない。漢字の古い発音は現在の中国語の音と同じとは考えられないし、また白語の発音にも地域差があったはずである。とすれば、現在の漢字や白語音の発音の基準で、借詞か訓字かの区別は出来ない、という見方も当然出てくる。取材での聞き書きにおいて、白族の歌文化研究者段伶氏は、当時の白語の発音がわからない以上、音読漢字と訓読漢字の区別はもちろん音仮名漢字との区別も不可能であると述べている。

遠藤は上記の分類に従い「山花碑」を「漢字の表意性を音読み（及び訓読み）によって活かしながら、一部に表音的な音仮名を交える（音読み＋音仮名書式）によって書かれている」とし、また、漢字の視覚的イメージも重視された詩的表現も見られることから、「読まれる」ことを意識した表記であると述べている⁴⁾。基本的には遠藤の分析の通りであろう。

尹明挙は、ペー文の表記は昔から今に至るまで、六、七十パーセントが直接漢字からの音・意味を借用している「純借漢字」であり、その「純借漢字」、ここでいう借詞は、中国語に精通していなければわからないとも述べている。一方で、直接漢字を借りた「純借漢字」でさえ白語の音位系統に従って読むしかない、だからペー文は「精読できない」のだと述べている⁵⁾。

「山花碑」は借字と訓字を併せると約 80 パーセントになる。その意味で言えば「山花碑」は表意的な漢字を利用した表記と言えるが、しかしそれは、中国語に精通していないとなかなか読めないということである。一方で、中国語に精通していても白語に精通していなくてはペー文は読めないということでもある。つまり、結局は中国語に精通した白族の知識人にしか読めないのだと尹明挙は述べているのだ。

繰り返すが、漢字は表意記号であると同時に表音記号にもなり得る。ペー文はそれを同時にいかして自民族の白語を表記しようとした。おそらく、中国の漢字を利用して自民族の表記文字を作ろうとした中国周辺に属する民族は、白族と同じ問題を抱えたであろう。日本もそうである。日本では、漢字仮名交じり文を創ったが、それは、漢字の表意性と表音性の両方を取り入れ、独自に発展させた表記体系である。だが、白族は、誰にでも使えるというレベルでの安定した白語の表記体系を作れなかった。漢字の表意性と表音性の両方を利用して独自の体系を持つ言語を表記するのは簡単ではないのである。その困難さを克服してわかりやすい表記へと普遍化するよりも、中国語に精通した白族の知識人レベルにわかる範囲での表記体系に留まってしまったのがペー文表記であると言えようか。

見方を変えて、表記された言語は、厳密に（意味として正確に）読めなければならないというこ

とを必須とすれば、ペー文は中途半端な表記である。借詞が六、七十パーセントあるということは、中国語である漢字の意味と音で自民族の白語表記のほとんどをまかないたいという発想があろう。それは、それだけ近い言語であるということもあるが、一方で、それは漢字文化の内部で白語の表記を可能にしようという、白語とにある言語の差異そのものを曖昧にして、その差異そのものの克服、別の言い方で言えば異なる文化的差異を飛び越える飛躍（困難に満ちた努力）を省略することでもある。

伊明拳は、ペー文が厳密に読めないのは、表記された漢字が借詞か、訓字か、音仮名漢字かその使い分けにきちんとしたルールが見いだせないで判別出来ないことがあるからだとも述べている。言い換えれば、借詞、訓字、音仮名を区別してその区別の上に立ったそれぞれの規則性に沿った組み合わせによって独自の表記体系（日本の漢字仮名交じり文のように）を創らなかつたということであるが、それは結局、両語の差異そのものを苦心して克服する表記言語創出の必要性にそれ程迫られなかつたということである。

川田順造はかつてアフリカのモシ族文化を紹介し、その際モシ族のような文字を持たない社会を「無文字社会」と名付けたが、そのことを反省し、むしろ「文字を必要としなかつた社会」と呼ぶべきで、その方が「これらの社会における、豊かな音や身体の図像における伝え合いの実態を表すのにふさわしい」と述べている⁶⁾。このことは白族のペー文についても言えることであろう。安定した文字の表記体系を作らなかつたのは、それを作る必要がなかつたからだ、ということである。

白族の知識人はだいたい漢文を書くことが出来、また読めたわけであるから、厳密な意味を求める文章が必要なら漢文でよかつたのである。つまり、白族の社会は、厳密な意味を求めるほどの「文字を必要としなかつた」社会なのである。

日本では、漢字を用いた日本語表記は、歌の表記だけではなく、多量の木簡出土でよくわかるように律令国家を支える文字としても機能していた。歌の表記から税の記録等までその用途は広範であった。だからこそ表意性がより重視され、漢字が日本語の表意文字に変換されて日本語文を形成するようになったのである。

白族は、元代以降中国王朝の支配を受け、行政的には中国官人の支配のもとにあった。従って、公的に使用される文字、あるいは実用性を持った文字は漢文であり、日常言語もまた中国語が浸透しつつあった。ペー文が白族社会を広範な実用性によって支える機能を持たなかつたのは、そのような歴史を背景としているからであり、それは、ペー文が安定した表記法にならなかつた理由でもある。

自民族の言語の文字表記を、国家の運営、政治支配、もしくは社会生活上の実用性において「必要」とすれば、当然、漢字を支配言語としている中国王朝による他民族への政治支配方針に抵触する。漢字は意味の優位性を特徴とする文字表記であることによって、多言語的な中国諸国家もしくは諸民族を統合する働きを持っていた。その漢字による支配圏に組み込まれている白族が、独自の意味性優位の文字言語を作ることは、公的にはまず無理であつたらうと思われる。

また、実際、被支配文字である漢字を利用して自民族の文字表記を作れば、漢字の意味性を重視

IV. 論考編

する表記になればなるほど、それなら漢文表記にすればいいということになり、ペー文はそういったジレンマを抱え込んだ文字表記なのである。

が、それなら、何故ペー文は作られ続けているのか。それは、やはり、声（音）の問題、つまり声（音）を表記する必要性を感じていたからだと思われる。意味を重視した表記を追求すればするほど、表記の「必要性」をなくしていくというジレンマの中で、表記が「必要」とされたとすれば、それは「意味」によっては表し得ない何かを表記する、というところへ向かうのはある意味で必然ではなかったか。

その意味でペー文は散文表記ではなく韻文表記に向かうしか無かったのだと思われるが、それは、詩的な表現に向いていた、ということではないだろう。詩的表現価値もまた漢字支配による意味の優位性の側に属しているからだ。白語を漢字で表記しようとした知識人が、漢字の意味性にとらわれまいとすれば、白族の豊かな歌（声）文化に向かわざるを得ないだろう。意識的とは言えないにしても、漢語による支配に屈せず、自分たちの文字のない言語を文字で表記したいという欲望に方向を付けようとするれば、それは、やはり声（音）があらわし得る何かに向かうしかないということである。

ペー文の背景にはやはり豊かな歌（声）の文化がある。その豊かな歌の文化に漢字文化が接しているという白族の状況そのものが、それほど「文字を必要としていない」にもかかわらず、声（音）を文字表記するきっかけがいつ起きてもおかしくないように準備していたということである。

「山花碑」を表音という観点から見ると、「純借漢字」たる借詞は、白語の発音を引き出す。音仮名は白語の音を優先した表記である。問題は訓字だが、一般的には訓字はその音より字義を優先したものである。ただ、ペー文の場合、訓読みの漢字は日本語と違い一字一音（例外がないわけではないが）で対応している。そして、訓読みであるとする判断は、字義を優先した場合、その漢字の発音とその字義にあたる現在の白語の発音とが違うということを根拠としている。が、すでに述べたように、実は当時の白語の発音は漢字の古音に類似するといわれている。とすれば、漢字の字義とその音の読みが違うという判断は不可能で、結局、借詞と訓字の判別が難しい。ただこうは言える。借詞でも、字義と音は同時に了解される。訓字であっても、字義と白語の音はそれほどの時間差なく再現される。何故なら、基本的に一字に一音対応だからだ。日本であれば、訓は漢字一字に対して複数の音節が対応することが多く、その読みも一定するわけではない。つまり、ペー文の訓字もまた表音性を失っていないということである。

このように考えていけば、ペー文は、表意漢字を多く使用しつつも、定型音数律の歌（声）表記を可能にする表音記号的な性格もまた持つ、ということである。むろん、だから、歌表記を意識しているとは言えないにしても、そのことは、少なくとも、ペー文が白族の中で消えないで残りつづけている一つの理由であるように思われる。

「山花碑」の表記には、遠藤が指摘するように視覚的に意味が理解出来るような表意性の工夫がかなりある。楊黼による、漢詩を白語の詩として作ろうとする試みの結果である。一方で、白語の表音性はしっかりと確保されていると思われる。このことは、楊黼が表音性を意識したからだとい

うより、ペー文そのものが、白語の歌（声）の表記に向かう必然を抱え込んでいることのあらわれ、として理解するべきだろう。楊黼は、漢詩の向こうを張って白族の詩を創作しようと試みた。が、その詩が漢詩の水準に近づけば、漢語による漢詩で詩をかけばいいというジレンマにとらわれる。ペー文がそういったジレンマを回避すべく歌（声）に向かう必然を抱え込んでいたとすれば、「山花碑」もまたそういった必然を抱えていなかったか。ここではそれを具体的に論証することは出来ないが、その可能性を指摘しておきたい。そして、「山花碑」には、おそらくは、文字を持たない白語と漢字との出会い以来の声（音）の働きが、楊黼自身の身体にも刻まれているはずであって、それが「山花碑」の表記にあらわれているはずだと思っている。

4. 「大本曲」「本子曲」の表記における音仮名

現在でも、白族の人々に親しまれている「大本曲」「本子曲」の表記は、その表記に表現としての価値を求めるためのものではなく、むしろ、声で謡われる曲の記録、備忘録であり、また、それらの曲を広く共有するためのものである。従って、詩としての表現的な美を実現しようとした「山花碑」とは違って、実用的な表記と言ってよい。また、表記者も、知識人が関与する場合もあるが実際の歌い手が記す場合が多い。歌い手は特に教養人と呼ばれる知識人ではないが、中国語も話すし中国語の読み書きもある程度出来る人たちである。

ペー文は、表音性が確保されていて、歌（声）表記に向かう必然を抱え込んでいると述べてきたが、その必然を、現実化したのがまさに「大本曲」「本子曲」の表記であると言える。

「大本曲」「本子曲」の性格、あるいはその由来について、また表記の実際については、当該研究報告書に詳しくかかれているので参照されたい。ここで注目しておきたいことは、「山花碑」の表記に比べて、音仮名の割合が圧倒的に多くなっているということである。

これは、ペー文表記が陥っていた表意漢字を多く利用すればするほど表記の必然性を失っていくというジレンマから脱しているということである。つまり、音仮名を中心に表記することで、漢字の表意性に縛られることがそれほどなくなった。言い換えれば、漢字支配から少しばかり自由になれたということだ。一方、それは、漢字の意味と音の両方を利用する借詞のような面倒な漢字利用からも自由になることである。

だとするなら、ペー文は何故最初から音仮名中心ではなかったのかという疑問が湧くが、これは日本の文字表記とも共通するように、表意性の強い漢字を利用して自民族の無文字言語を表記する場合、最初から音仮名のような表音文字として漢字を利用するのは無理があるからである。漢字の表意性をいかしながら表音漢字も使うといったところから漢字利用の工夫は始まった。そのあらわれが、ペー文における借詞の多さであり、また日本の和文における訓字の多さであろう。そういった工夫の中で、やがて音仮名中心表記の役どころが見出されたということだ。それが、ペー文の場合「大本曲」「本子曲」だったのである。

借詞や訓字の表記は漢字の表意性も確保されねばならず、その意味では音仮名よりは高度な漢字の知識が必要となる。音仮名はとりあえず白語の発音に変換されるその漢字の音の読みさえ出来れ

IV. 論考編

ばいいのである。従って、中国語に精通した白族の知識人レベルではなくても、ある程度の漢字の知識を持つ白族の人であれば、音仮名中心のペー文であれば使いこなせる。「大本曲」「本子曲」を表記する人たちは多くは芸人や歌い手であり、楊龔のような知識人ではなかった。詩的に表現する必要もなく、記録するという実用性を重視する表記であったため、音仮名は当然多くなったということである。

借詞あるいは訓字と音仮名との違いを述べたが、その違いは、「大本曲」「本子曲」との間の違いとしてもまた指摘出来る。

「大本曲」は、かつて都があった洱海周辺の、人口も多く開けた地域で流通しているが、一方「本子曲」は地方のやや閉ざされた地域である劍川で盛んである。調査によってわかったことは、白族社会でも白族の文化的中心とも言える洱海地域の音仮名の割合と地方の劍川での音仮名の割合に違いがあり、劍川地域の「本子曲」の音仮名の割合が圧倒的に高いのである⁷⁾。

このことは、劍川よりは、開けた洱海周辺の方がリテラシー能力の高い人たちが多く、その人たちがペー文表記に関わっているから、ととりあえずは言えるのだが、実は、このことは、何故表記するのか、という問題にかかわっている。

「大本曲」「本子曲」の歌い手は、曲目をすでに声として覚えている。曲を覚えるにも声で聞いて覚えるのであって書かれた台本を読んで覚えるのではない。従って、表記された台本がなければ歌えないということはない。その表記の目的が、詩的な文字表現を目的としたものではなく、実用的なものであることはすでに述べたが、「大本曲」を伝える芸人に取材したところでは、表記することの意義とは、伝承すること、そして、地域を越えて「大本曲」を共有していくこと、ということであった。

現存する「大本曲」「本子曲」の表記テキスト諸本の成立はそれほど古くはない。ほとんどは中国国家が成立した革命以降である。むろん、遡れば清代に表記されたテキストもあるが、ほとんどは近代以降に集中している。そのことは、近代化による社会の変化によって、声によって継承されていたこれら歌曲の伝承に不安が生じ始めたこと、また、教育の普及によって漢字の読める白族の人たちが増え、漢字表記によるテキストの実用性の度合いが高まってきたこと、そして、伝統継承への危機意識とともに、歌曲を白族社会でより広く共有しようとする意識が高まってきたこと、があげられるだろう。

以上のような気運を背景に、白族の文化遺産とも言える「大本曲」「本子曲」を、白族内に広く普及したいとする意識をより多く持つかどうかの違いが、白族地域内での音仮名の割合の違いに結びついている、ということなのだ。調査による聞き書きでは、劍川より訓字の多い洱海周辺地域で、何故訓字を使うのかと聞いたところ、白族の地域では方言が多く音仮名では意味が伝わらないことが生じるから、という答えが返ってきた。つまり、劍川より訓字を多く用いる洱海周辺では、「大本曲」を表記する理由に、地域を越えて普及させたいという思いがあることがわかる。これは、ある意味では普遍性への欲求であり、声を文字化するということの原理的な要請だと言える。

だが、劍川の「本子曲」の歌い手たちには、地域を越えて普及させたいという意識は見られなか

った。あくまでも記録を重視した実用的なものであった。つまり、剣川という地域内での表音を優先する表記であって、その白語の声（音）から意味が分かるならばそれでいい、というのが剣川地域での表記の考え方なのである。

特に興味深いのは、剣川地域では「本子曲」を問答で演ずる場合があることである。「大本曲」も「本子曲」も、本来、叙事的な物語の語り芸であるから、基本は一人の朗唱者によって語られあるいは謡われる。が、それを二人の歌い手が問答で掛け合うスタイルで演じるのは、剣川独特のスタイルであり、洱海周辺には見られない。これは、「本子曲」が、掛け合い歌の歌詞にもなり得る、という受け入れ方をしているからだと思われる。例えば、「本子曲」の一部が、剣川で行われる歌垣での掛け合い歌のなかに取り入れられて歌われている⁸⁾。物語歌としてばかりでなく、男女の掛け合い歌に転用がきく、という剣川の「本子曲」受容のありかたは、即興性を重視した抒情的な歌の世界にかなり引き寄せようとする意識があるとみていい。そのことが、剣川地区における音仮名の多さの一つの理由になっていると考えられるのである。

剣川の「本子曲」の表記は、地域を越えた普遍性をあえて意識したものになっていない。時に問答態として歌われる形式をとることは、その表記は声（音）の再現がかなり重視されている、ということである。問答は、言わば歌による会話である。「本子曲」を問答で演じるのは、登場人物の会話で物語をすすめていく、ということになる。従って、自ずと物語によっては問答態で演じ易いものと演じにくいものとに分けられる。当該研究の研究対象になった「梁山伯と祝英台」は問答態では演じられない。その理由を聞くと、登場人物が多いので問答ですすめるには無理があるということであった。理想的なのは一組の男女の登場人物によってストーリーが展開する場合である。

このように、会話的な表現に併せて、その表記が声（音）を重視する音仮名中心になっていくことは自然なことである。

ただ、この剣川の例を、声と文字とが始めて出会ったような初期的段階のモデルとしてとらえることは適切ではないだろう。楊黼のような、中国語に精通した白族の知識人によるペー文表記の工夫の歴史があって、その歴史の上で可能になった表記であると考えべきである。が、そうであったとしても、声の伝承文化の担い手である剣川の歌い手が音仮名表記を選択したことは、彼らがやや閉じられた地域に居住していること、また、声（音）への依存度の高い文化を持つこと、によるということである。このような表記法選択の具体相を事例として確認出来た意義は大きい。

日本で音仮名表記の具体例は、記紀における歌謡の表記や、万葉仮名における非略体歌の表記例である。それらを通して見えてくるのは、例えば、音仮名が多いか少ないかの問題を、表記を通して文学的価値を表すかどうかの違いといったことで、それらの表記がどのような社会的条件のもとで成立したかの、具体相はなかなか見えてこない。

が、当該研究によって、実際に、地域による社会的文化的条件の違いが、音仮名表記の多少にかかわるという事例を知り得たことは、日本の文字表記に対する考察の幅をより広げられると思われる。

IV. 論考編

注

- 1) 遠藤耕太郎「アジア辺境国家の七五調—白族の五・七音数律を遡る」岡部隆志・工藤隆・西條勉共編『七五調のアジア』大修館書店、2011所収。
- 2) 本書Ⅱ—2「ペー曲の起源」p. 107
- 3) 本書Ⅰ—3「山花碑注釈集成」参照
- 4) 本書Ⅳ—3「『山花碑』から万葉集を考える」p. 233
- 5) 尹明挙「從楊鷗的《山花碑》看白族文字与白語詩歌格律」趙寅松主編『白族文化研究 2007』民族出版社、2008
- 6) 川田順造『コトバ・言葉・ことば』青土社 2004
- 7) 本書Ⅱ—付録2「ペー曲台本の音仮名率」p. 185
- 8) 工藤隆・岡部隆志共著『中国少数民族歌垣調査全記録 1998』大修館書店、2000

5. 中国古代の文字と『詩』——ペー文表記法の事例を通じて

富田美智江

はじめに

中国の文字の歴史は古い。ところが草創期においては文字の使用は非常に限定的であったため、どの段階で声による伝承が文字による伝承に取って代わられたか明確にしがたい。あらゆる文字記録の中で最も声による伝承が最後まで重視されたのは、中国最古の詩集『詩』だろう。戦国時代にはすでに相当なレベルまで『詩』は文字化されていたことは明らかだが、声による伝承と文字による伝承の並存と移行の段階を考えた時、春秋から戦国秦漢にかけての『詩』はどういった状況のもとにあったのだろうか。『詩』の伝承と文字の関係を、現代の中国少数民族の一つペー族の漢字を利用した自言語表記法の事例を通じて考察することが本稿の目的である。

1. 中国古代の文字——その共通語としての機能

中国の文字の歴史は、殷代（前13～前11世紀）の甲骨文字に始まる。甲骨文字より早い時期のものと思われる墨書された文字や、丁公陶片のように甲骨文字とは別系統の文字らしきものもあるにはあるが、ある程度の資料数があり、系統立てて論じることができるものは、現時点では甲骨文字である。

甲骨文字とはその名の通り、亀の甲羅や牛の肩甲骨などに刻まれた文字である。殷代では、雨が降るか、収穫が多いかといったことや、出かけるのによいか、敵を討つのによいか、祭祀に用いる犠牲はなにをいかにどの政治判断から日常生活にいたるあらゆる吉凶が王によって占われた。その占いに使われたのが甲羅や動物の骨であり、その占いの内容や結果をそこに刻み記したものが甲骨文字である。

占いの主体者は殷王であり、甲骨文字を刻んだのは貞人と呼ばれる人々だった。殷代では祭祀は殷王に集約されており、それこそが殷王の権力の源でもあった。祭祀権を独占した殷王は、その祭祀を記録するために用いられた文字も独占していた。

その殷を倒したのが周（西周：前11～前8世紀）である。殷の中心が今の河南省北部であるのに対し、周は今の陝西省の辺りを本拠としていた。つまり周は殷よりだいぶ西よりの人間集団による国家ということになる。殷を倒した周は、殷の文字技術をほぼそのまま踏襲した。殷のように甲骨に刻むということは少なくなったが、代わりに青銅器に銘文を鑄込み、それらを諸侯に下賜するようになった。

殷と周の使用言語が全く同じであったとは、両者の距離からいっても考えにくい。しかし青銅器などに鑄込まれた周代の金文は、明らかに殷の甲骨文字の系譜を引いている。当時の文は多少の言

IV. 論考輯

語の違いは超越する文章語であったといえよう。先に、殷代では文字は祭祀とともに王権の象徴であり、殷王が独占していたといったが、実は殷を倒す前の周から周原甲骨と呼ばれる文字が出ている。そこに書かれた文字はかなり小さいものの、殷墟等で見つかった甲骨文字とほぼ同じである。ただその中には殷の先王である成唐（湯王）らの祭祀について問うものがあるなど、果たして周が独自に殷の甲骨文字を学ぼうとしたのか、殷に服属していた周に殷から貞人が派遣されたのか現時点では判断しかねるが、殷末期にはわずかなりとも文字が流出していたということはいえよう。

専ら占辞に用いられ、基本的に殷王に独占されていた甲骨文字とは異なり、周では銘文が鑄込まれた青銅器が盛んに封建諸侯たちに下賜された。西周時代の青銅器銘文を西周金文というが、西周後期になると長文のものも増え、現存する青銅器の中で最長の銘文をほこる毛公鼎の字数は500字近い。こうした流れを受ければ、当然の結果として文字に触れる層は広がりをみせる。周王室も殷に倣い、文字や青銅器の製造技術を独占しようとはしていたが、しだいに諸侯の中には自ら青銅器を鑄造し、文字を鑄込もうとする者が現れてくる。だが彼らが用いた文字は、周王室が使用するものの範疇を出るものではなかった。文字文化圏は広がりを見せ始めたものの、依然統一は守られていたのである。

周王室の権威が弱まり諸侯が台頭した春秋時代（前8～前5世紀）に入ると文字文化はますますの広がりをみせる。山西省の侯馬で発見された侯馬盟書は、春秋末期に晋の趙氏を中心に会盟した卿大夫たちによる誓約文で、それは石片や玉片に朱書きされていた。春秋時代までの出土資料は青銅器銘文やこうした盟書など祭祀性の強いものがほとんどで、史家が書き残した記録というようなものが出土した例はほとんどないが、それでもそれらは残されていないだけで、それぞれの国で時事の記録と集約はなされていたのだろう。孔子が著したとされる魯の編年体の歴史書『春秋』は、そうした記録が編纂し直されたものと考えられている。春秋時代の説話を豊富に含んだ『春秋左氏伝』に載っている、殺されても殺されても「崔杼、其の君を弑す」と君主殺害の事実を記載し続けた大史兄弟の話は、そうした歴史記録の習慣が存在したことを物語っている。

戦国時代（前5世紀～前221年）に入ると、近年大量の竹簡類が毎年のように発見・報告されているように、急激に文字記録の資料が増加する。その内容は、法令集、『老子』などの諸子百家の書、『尚書』に類するような歴史書から、日常の占いに用いたと思われる日書など多種多彩である。竹簡が朽ちずに残るための環境的な要因も影響して、出土する竹簡は南方の長江流域を中心とする、かつて楚と呼ばれた地域のものが大半だが、楚以外の地域にも同程度、あるいはそれ以上の文字文化が広がり、成熟を見せていたことは疑いない。

この時代、文字文化がごく一部の上位為政者階級から、かなり下の階層にまで降りてきたことは確かである。少なくとも行政の伝達に文字は必須の道具となっており、下級官吏クラスもある程度の文字の習得を必要としたことだろう。そして文字文化の拡大は文字の地方差も生んだ。秦と、秦以外の楚を含む東方六国の字体の違いは相当なレベルまで進んでいる。秦の始皇帝の統一によって秦が使用していた篆書に文字が統一されるまで、複数の国が並存していた戦国時代の文字教育は国ごとに違っていたのだろう。ちなみに平勢隆郎は、春秋末期の侯馬盟書の段階ですでに各国で独自

の文字教育が行われていたことが、侯馬盟書の内容表現や用字の差異からわかると指摘している¹⁾。しかし字体の変化はあっても、文章レベルではどの地域のものもさほどの差は見られない。殷の甲骨文字から発展した文章語は、大小の言語差が存在していたであろう各地域において依然として共通語としての役割を果たし続けていたのである。

さて、殷代に文字を管轄していたのは貞人集団だったが、西周時代に文字を専門に扱っていたのは「史」と呼ばれる人々だった。史はただ文字を扱い記録するだけでなく、祭祀で周王を補佐したり、冊命儀礼の際に周王に代わって命書を読み上げるなど、重要な地位にある人々だった。殷王朝ほどの祭祀国家でないとはいえ、西周時代も祭祀は依然重要なファクターであり、史と並んで祭祀で重要な役割を果たす「祝」、祭祀に欠かせない音楽を掌る「師」は、いずれも高い地位にあったと考えられる。ところが政治に占める祭祀の重要性が低下すると同時に、こうした人々の地位も低下していき、春秋戦国時代には特殊技能を持つ一職能者へと転落していく。

2. 音の伝承と「詩」の盛衰

文字が発達したとはいえ、文字を伝達媒体とする一方で声による伝承も存在し続けたはずである。現に前漢初期の呂后期（前2世紀前半）の法令として名高い、湖北省の張家山漢墓から出土した漢簡『二年律令』の史律によると、「能く五千字以上風書せしもの、乃ち史と為るを得」とあるのに対し、祝は「能く七千言以上誦せし者、乃ち祝と為るを得」となっている²⁾。「風」は「諷」に通じ、読み上げるという意味になる。つまり史は五千字以上読み書きできることが求められていた。五千字といえば、後漢の許慎によって著された中国最初の字書『説文解字』に取められた字のおよそ半数である。対して祝の条件は「七千言」以上「誦」することのできる者である。「誦」には「諷」と同じく文字で表されたものを読み上げる意もあるが、史と対比させればここはただ読み上げると解釈するのではなく、抑揚ないしはある種の節をつけて唱える、あるいはそらんじる意とする方がいいだろう。文字文化がかなりのレベルで成熟した漢代にあっても、声が重んじられる場は存続していたのである。

史や祝と並んで、過去の事例をよく知る見識深い賢者として尊ばれたのが楽師である。先述のように春秋時代にはその地位は著しく低下してはいたが、それでも『春秋左氏伝』などでは晋の師曠などの楽師が時には国君を諫めることもある賢者として登場する。楽師が歴史を熟知していたのは、神話伝説から歴史に至る過去の記憶が、文字だけではなく歌も媒体として語り継がれていたからだろう。ところで中国古代では楽師たちは一般に視覚不自由者だった。となれば当然文字による伝承は望めず、声と耳を頼りとした伝承が数百年に渡って続いたと考えられる。

儒教の中核的経書である五経の一つ『詩経』は、もともとただ「詩」とのみ称されてきた。『詩』は現在約三百篇余りだが、『史記』孔子世家によると、もともと三千余篇あった詩を孔子が刪定して三百五篇にしたのだという。この頃のものはいわゆる孔子に結びつけてその成立が語られているので、『詩』が本当に孔子の手によるのか否かは論じたいが、孔子の活躍した春秋末期に、それまで流伝していた古い詩がある程度まとめられたのは確かだろう。だが一度で完全に今の形に

IV. 論考編

なったのではないことは、戦国時代の文献や出土資料に今の『詩』にはない詩が『詩』として引用されていること、それどころか前漢の武帝（在位前141～前87年）の詔にさえ今の『詩』にはない逸詩が見えることから、しばらくは若干の入れ替えがあったことが予想される。おそらく『詩』が確定したのは、漢の武帝が儒学を国学と定め、五経博士が立てられて後のことだろう。

さて『詩』も詩歌であり楽の一種であるから、その主たる伝承の担い手は楽師だっただろうし、『詩』には祭祀に強く関わると思われる詩も多く含まれることもそれを裏づける。ところが『春秋左氏伝』には、特に春秋の中後期にかけて、主に外交の場で『詩』を用いて歌を掛けあう賦詩場面が散見する。異なる地域の人々が集う場の歌に古詩である『詩』が好んで用いられた背景には、単に『詩』が古典として権威があったというだけでなく、言語に差異がある人々にとって『詩』が共通語的な役割を果たしていたのではないかというのは、以前拙稿で指摘した通りである³⁾。

春秋時代には『詩』は楽師から卿大夫階級にまで教養として広まっていた。しかし孔子の時代には逆に『詩』は衰退しかけていた。『春秋左氏伝』でも、先述の賦詩場面は魯の襄公昭公年間をピークに減少し、孔子の時代の定公哀公時代になるとほとんど見られなくなる。孔子はそうした状況を憂い、『詩』を重んじる発言を繰り返したことが『論語』にも載っている。そのために『詩』は重要な経書として後世に残ることができたわけで、そういう意味では孔子は『詩』を中興させた功労者ともいえるだろう。だが、それ以降の『詩』は古典として詩句を引用されるのみで、春秋時代のように歌われる場面は戦国時代以降記録されていない。

『詩』の衰退には社会的要因もあるが、『詩』が文字だけでなく音声による伝承を必要としたという点も大きな原因の一つと考えられよう。文字であれば、文章語として口語と別個に確立していれば、多少言葉が異なる地域でも共通語として通用するが、声に出して発音しなければならない『詩』の伝承は、文字一つ一つの発音が全地域で全く同じでもない限り、文字のみによる伝承は不可能といってい。『論語』述而篇には「子の雅言する所は、詩・書・執礼、皆な雅言す」とあり、この「雅言」とは標準語のことと考えられている。この時代の標準語とは周の都のある畿内の発音を指すと思われるが、孔子がわざわざ『詩』『書』に限って「雅言」したということは、他は「雅言」以外の、おそらく孔子の地元である魯方言を使っていたということであり、さらにいえば、孔子のこうした行動が特筆されるということは、他の人々は思い思いに自分の方言で読んでいたということの意味している。

孔子以前も『詩』は卿大夫の教養であったことは先に述べた通りであり、『国語』楚語には、太子に教えるべきものの一つとして『詩』が挙げられている。そうした中で、ただ意味さえ伝わればよいものたちとは異なり、その音も正確に伝える必要がある『詩』を、それでも文字化しようとする動きはあったはずである。それが一箇所であつたのであればまだしも、あちらこちらでその動きがあつた場合、いったいどのような現象が起こりえたであろうか。それについて考える前に、まず現代の中国少数民族ペー族の声の文化とその文字化の現状について見てみたい。

3. ペー文表記法の現状

ペー族は雲南省の大理ペー族自治州を中心に居住する民族で、2000年の人口調査によればその数およそ185万人である。大理の洱海周辺には、唐の時代には南詔（8世紀半～902年）、宋の頃には大理国（938～1253年）があり、元の侵攻によって大理国が滅んだ後は明に支配されることとなり、そのまま現在では中国の55ある少数民族の一となっている。

ペー族は固有の文字をもたないとされてきた。少なくとも、周辺の少数民族のイ族やナシ族ほど特徴的な文字は持っていない。しかし彼らも漢字を利用して、あるいは漢字を改変創作して自らの言語ペー語を、特に歌などの声による文化を、ペー族独自の表記法であるペー文で記録してきたことが近年徐々に明らかになってきた。

ペー族は中国の少数民族の中でも漢化の進んだ民族であり、その言語のおよそ6～7割が漢語由来の言葉とされている。とはいえペー語を表すのに、異民族の言語である漢語を表すために発達した漢字漢文をそのまま用いるのは難しい。しかも意味だけでなくその発音も重視されている場合はなおさらである。早くから漢文化に親しんできたペー族は、意味だけであれば文章語で、すなわち漢文を書くことができた。南詔を構成した民族がペー族先民といえるかどうかは定かではないが、南詔と唐との抗争の顛末、及び時の南詔王閣羅鳳の事績称揚を中心的内容とするいわゆる南詔徳化碑も、文を書いたのが中国からの帰化人であるとはいえ、完全な漢文で記されている。そんなペー族でも、音を正確に残す必要のある詩歌の類の記述には漢文をそのまま用いることはせず、漢字を漢文の枠から離して独自に表記する方法を編み出した。明代の詩人楊勳の「詞記山花、詠蒼洱境」（いわゆる山花碑）もそうしたペー文表記が使われた詩であり、現在でも大本曲や本子曲といった語り芸（いわゆるペー曲）の台本の記述などに利用されている。

漢語由来の語が多いとはいえ、ペー語は漢語とは異なる発音をするものも少なくない。漢語と同じ発音であれば、漢字を漢語と同じように用いるし、漢語と違う発音であっても、漢字を見て迷わずペー語で発音できるようであればやはり漢語と同じ使い方で漢字を用いる。本研究では前者を借詞（借字）、後者を訓字と呼ぶことにした。日本式に言えば前者は音読み、後者は訓読みに該当するわけだが、この区別は非常に難しい。声調がわずかに違うだけでも、ペー族にとっては「これは漢語読み」「これはペー語読み」と区別されている場合があるからである。借詞と訓字の別はペー族に聞くよりないわけだが、ペー語自体の言語研究がそこまで進んでないという現状があり、人や地域によって発音や解釈が異なるのではと疑われるケースもままある。またペー語は漢語由来のものが多く、流入した時期が古い漢語はペー語に溶け込み、現在ではペー語として人々に認識されているものも相当数あると考えられる。流入時期による発音の違いは日本語でいう漢音と呉音のようなものといえるかもしれないが、日本では漢音も呉音も等しく音読みとされているのに対し、ペー族の人が考える「借詞」とはあくまで「現代漢語の発音」で読む字のことであり、「古代漢語の発音」で読む字も全て「訓字」に含まれてしまう。つまり日本語でいうところの「音読み」は、ペー語式に言えば本当は「訓字」の一部なのである。将来的には訓字を、日本語でいうところ

IV. 論考編

の「音読み」と「訓読み」、すなわち漢語由来の語とペー族独自の語とに分けたいところだが、先に述べた通りペー語研究が進んでいない現在ではそれらを区別することはほぼ不可能であり、漢語圏と地続きのため日本語と違って不断に漢語の影響を受けてきたペー語が、果たして日本語と同じように音読み訓読みを分けることができるかどうかは現時点では不明である。

漢語とは違う発音で、かつ漢字を見ただけではなんと発音してよいか迷うようなものは、漢字の音のみを利用して1語1音でペー語の音を表すという手法がとられる。これを本研究では音仮名と呼んでいる。漢字の意味は無視し音のみを利用する方法は、日本の万葉仮名に匹敵する。その他、漢字の偏や旁を多少改変してペー語独自の字を作ったり（自造字）、漢字そのものは漢語に存在するが、意味も音も全く違えてペー語独自に用いたりする例もあるが（特定意義字）、全体として数はそう多くない。

ペー語独自の語を音仮名ではなく訓字を用いて表す場合、この漢字はペー語のこの語にあたるという共通認識がある程度なければ文を共有することはできない。それはペー語に限ったことではなく、漢字文化を受容した周縁諸民族に等しく起こる問題であり、当然かつて日本語にも起った問題だろう。また音仮名も、個々が好き勝手に当て字しても、その漢字が示す発音さえ正しければ音は伝わるが、それでも音仮名表記法の乱立は読み手の混乱を招く。音仮名を使うにしても、類出の語にはこの音仮名を使うとある程度定まっていた方が便はよい。中央集権的な存在が文字表記法と標準的発音を定め、それを一元的に広めることもあれば、自然発生的に複数乱立した表記法が時間とともに次第に集約されていくこともあろう。では現在のペー文はというと、まだ地域ごとに表記法が乱立している状態で、決して無秩序ではないが集約されているともいいがたい。集約しようという一部知識人の動きが出始めた段階といえようか。

論者は2011年に大理地方と劍川地方のペー曲調査を行った。大理は南詔や大理国が都を置いた地であり、ペー族の中でも特に漢化の進んだ地方でもある。そのため大理の人々は大理方言をペー語の中でも洗練された雅な言語であると思ひ、一方劍川の人々は大理方言は漢語かぶれたペー語であり、劍川方言こそペー語本来の姿をよく残していると自負している。その是非はともかく、互いが互いに「向こうとは違う」と思うほどペー語内でも地方差があるのである。実際にその文字表記法をそれぞれ見てみると、大理地方の大本曲の台本と劍川地方のある歌の文字化の音仮名使用率には大きな違いがある。『中国白族白文文献釈読』所収の大本曲「梁山伯与祝英台」中集第二幕の音仮名率を調べてみると約30%にとどまるのに対し、劍川の蘇貴が書写した「月里桂花」の音仮名率は優に8割を超える⁵⁾。「梁山伯与祝英台」は漢族から流入した説話であり、「月里桂花」の方はペー族歌謡であるとはいっても、相当な差である。

「月里桂花」のみの表記法を見てみてもそれは決して一定ではない。『劍川県芸文志』所収の「月里桂花」は張明德から採集したものなのだが、聞いてみると蘇貴もまたこの歌を張明德の手書き本から写したという。ところが両者の表記法は全くといっていいほど異なっている。その第一句を例として見てみよう。発音の参考として、現代漢語のピンインを上振った。

蘇貴本 : 处 三 月 奴 共 便 明
 劍川県芸文志 : 春 三 旺 努 构 比 埋

劍川県芸文志によると、意味は「三月布谷叫声声（三月カッコウがセイセイと鳴く）」である。ペー語は陽転陰とって漢語の発音語尾の「n」や「ng」が消えることが多い。それを踏まえた上で両者の発音を見てみると、「三」以外漢字は全て違うが、発音はだいたい同じになるだろうことが見て取れる。

「月里桂花」は即興の歌の掛け合いの際にもその詩句が利用されるほど人口に膾炙した歌である。その歌の表記がこれほど違うということは、それも両者が全くの無関係ならまだしも、一方はもう一方から伝えられたにも関わらずこの有り様ということは、他の歌の状況は推して知るべしである。これは個人の備忘用のメモ書きの範疇を出ないレベルだともいえよう。

4. 音仮名と通仮字

劍川地方の音仮名率の高さ、及びその表記法の不統一さは、異民族の文字を自国語表記に利用しようとする初期段階ではないかと思われる。ここで再び中国古代に目を向けてみよう。もし音の伝達が重視される詩歌の類の記述が地方地方でばらばらに始まったとしたら、詩歌の代表的存在であった『詩』の表記も地方ごとにてんでばらばらとなったであろう。ところが、現在確認できる『詩』は、出土資料を含めて所々文字の異動はあるものの、総じてそこまでの違いは見られない。もっとも確認できる『詩』の資料が戦国時代以降のものに限られている現段階では、表記法が最初から統一されていたのか、それとも長い時を経ることによって次第に一本化されたのかを断じることとはできないというのが正直なところである。

中国古代の表記法を考える上でもう一つ注意したいのが通仮字である。特に中国古代の文献では解釈に苦しむ字が出てくると、偏旁の省略ないしは添加された別字、あるいは音が同じ別字を持ち出してきて、その別字の意味によって解釈する、ということがまま行われてきた。それは近年大量に出土している出土文献を解説する際によりいっそう多用されている。古屋昭弘は通仮の状況を戦国楚簡を例にとり次のように分類している⁶⁾。例の前字は出土文献の字体、後字は前字と通仮すると解釈されている字である。

		例
I 異体		頌一容
II 通仮	a 字体の上で関連のないもの	句一後、由一逐
	b 字体の上で関連のあるもの	考一孝、通一踊
III 偏旁	a 同音と推定されるもの	勿一物、胃一謂
	b 非同音と推定されるもの	古一故、可一何
IV 誤字		沸一涕、大一天

IV. 論考編

通仮にも一定のルールがある。古屋の言葉を借りれば、「声母と韻部が全く同じでも通仮できない場合もありうるし、反対に一定の条件を満たせば全く異なるかに見える声母を持った字同士の通仮もありうる」のである⁷⁾。

通仮のルールについては専論に譲るが、音による通仮はその文字の意味とはらず音のみを利用しているという点で、本研究でいうところの音仮名と非常に近い存在であるといえよう。音仮名は漢語を借りた周縁諸民族の表記法にだけでなく、漢語自体にも存在したのである。漢語もその成り立ちを見ると、殷が使用していた文字を異民族の周がそのまま借用したところから始まっており、その後も各地域の言語差を超越して用いられた文字であるということが、通仮字の頻出に影響しているのではなかろうか。

さて古屋は出土資料の増加により従来からの知見からでは理解しにくい通仮が多く見られるようになったと指摘し、『詩』召南の「殷其雷〔雷〕」の三字が、安徽省の阜陽から出土した漢簡『詩経』では「印其離」と書かれている例を挙げ、「雷」と「離」の通仮は「理解に苦しむ例という他ない」と言う⁸⁾。

上古音の復元は、その大半を韻文である『詩』の押韻例に拠っている。つまり一字につき一種類の音しか考えられず、文字の発音自体に地域差が生じることは想定されていない。考えようにも典拠とすべき資料がなかったわけだが、しかしこうしたルールに当てはめることのできない通仮が出てきたからには、漢の統一により表記法が一元化されていく以前の、各地の方言差を背景とした多様な表記法の存在を念頭に置くべき時にきたのかもしれない。

5. 山花碑と漢代の『詩』

明代初頭（15世紀）のペー族の詩人楊籬がペー文で書いた詩を石碑に刻んだものが山花碑である。山花碑はペー文資料であるというだけでなく、現在でもペー族歌謡の基本句形の一つである7775形式の最も早い資料でもあり、そのため7775形式は山花体とも呼ばれる。ペー曲の多くもこの7775形式である。しかし山花碑は純粋な民間歌謡ではなく、あくまで高い漢文素養を備えた教養人によって書かれた詞であり、先に詩歌がありその詩句を文字化したペー曲台本とは違い、山花碑は先に文字ありきで生まれた作品だろうということには気をつける必要がある。

2010年に大理で山花碑調査を行った際に期待したことは、楊籬の時代から山花碑を声で今に伝える人物の存在だった。山花碑に文字と口誦の二つの伝承が存在していれば、口誦伝承と文字伝承の端境期における『詩』の伝承の実態を考える上での一つのモデルケースになりうるのではないかと考えたためである。文献研究で常に問題となるのが伝写の誤りだが、その点山花碑は碑文のためその心配はしなくてよく、発音と字義解釈に注力できる。

ところが残念ながらそのような人物は発見できなかった。山花碑が建てられていた聖元寺の近くに住み、山花碑を代々伝えているとして紹介された人物も、実際に話を聞いてみると、小学校教師をしていた彼の伯父が独自に山花碑を研究し、それを彼に教えたにすぎなかった。つまり先行する

注釈書を含め現在提示されている山花碑の音と解釈は、全てここ数十年の研究の成果によるものでしかなく、山花碑が作られた楊黼の時代とは完全に断絶していたのである。

さて、そう考えると次は別の問題が見えてくる。各注釈は完全に文字と現代ペー語からのみ復元を試みている状態なわけだが、その発音・解釈は注釈者の数だけあるといっても過言ではない⁹⁾。今後の研究の進展によりこれらはある程度まとまりを見せるだろうが、この解釈の乱立状態は漢代の『詩』を取り巻く環境を彷彿とさせる。『詩』は声による伝承を必要としたため、文字文化の拡大と成熟のスピードについていけず一度は亡びかけた。孔子の尽力によって『詩』は生き残っただけでなく、結果として大いなる権威を持つ古典となったとはいえ、音による伝承は衰退し、漢代にはその楽曲のほとんどを失っていた。また『詩』はかの有名な秦の始皇帝の焚書の対象となり、文字化された『詩』さえも一旦は廃棄を余儀なくされた。しかしこの時も伝承は完全には途絶えなかった。秦による統一が短期間に終わったことも救いだったかもしれない。ともかく、漢代に入ると『詩』を伝える者として魯の申培公、齊の轅固生、燕の韓嬰が現れ、それぞれ魯詩、齊詩、韓詩としてそれぞれの解釈を主張した。この三家詩の後、さらに毛亨が伝えたとされる毛詩が登場する。後漢の鄭玄がこの毛詩に箋をつけたことにより、毛詩が主流となり他の三家詩は減びてしまうことになるわけだが、現在の山花碑研究は、三家詩と毛詩の並立していた漢代の詩経学の状況とまさに同じといえるのではなからうか。山花碑が作られてから現在までおよそ600年、『詩』が作られてから漢代までの年数もほぼそれに近い。誰が山花碑の「鄭玄」となるか、それが判明するにはまだしばらくかかりそうである。

山花碑がどのような旋律の楽曲を念頭に置いて作られたかは不明だが、7775の句式は、大本曲など現在でも歌われているペー曲のリズムにのせて歌うことが可能であり、これは楽の復元がすでに不可能な宋詞などに対し、山花碑研究進展の大きなアドバンテージである、とは2010年の調査で協力を仰いだ段伶の言である。また段伶は、発音の復元は韻律規則を重視すべきであると主張する。傾聴すべき言であるが、懸念がないわけでもない。古代漢語を例にあげると、発音を復元できるのは韻書の残る隋唐の中古音以降で、それ以前の上古音、とりわけ先秦時代に関しては、基準となっているのは前節で述べたように『詩』である。『詩』をもとに他の文字資料の音を考えるのはいいが、では『詩』の音を復元しようとする、参照できるのは『詩』自身しかなく、他に典拠を持っていないというのはなはだ心許ない状況である。発音の違いは解釈の違いにつながる。逆に言うと、解釈の違いが発音の違いを生んでおり、段伶の韻律に従うべしとの言はそれを牽制してのことであるが、その基準となるのが山花碑自身のみでないことを祈るばかりである。

おわりに

本稿は『詩』の文字化の過程を考えるにあたり、現代少数民族の事例を引き合いとして初歩的な検討を試みた。両者の間には2000年もの時が横たわっているが、声と文字の関係性とその発展段階を考えれば、両者は十分比較・参考の対象となりえよう。

戦国時代の『詩』の文字化はかなりのレベルまで進んでおり、資料によって文字の異同があると

IV. 論考編

はいえ、ペー文表記の現状と比較して考えると、ほぼ文字のみでの伝承が可能な段階だった、ということは逆にいえば音の文化としての『詩』は衰退していたと思われる。春秋後期の孔子は「(詩)三百五篇、孔子皆なこれを弦歌」(『史記』孔子世家)していたわけだが、共通語として音の共有を必要とするような『詩』の伝承は、それ以後重視されなくなっていった。とはいえ、音仮名と性質が類似する通仮字が多く見られるという状況は、声の文化が完全に消滅していたわけではないことの証左となりうるかもしれない。

最後に韻文について触れておく。声と文字の伝承の問題を考える時に、一つのメルクマークとなるのが韻文だろう。韻文の重視は、声(音)の重視でもあるはずだからである。声(音)の伝承がくれば、韻文は韻文たりえなくなる。白川静は、西周金文に『詩』と共通する韻文が含まれると指摘する。漢文は共通語であり文章語であったが、西周では史祝が文字で記録された命書を読み上げるのも祭祀儀礼の重要な要素の一つであった。

しかしそれら文字の読みが固定され、文章が定型化されれば、正しく読み上げることができなくても韻文を作ることは可能である。日本人が唐代の韻書を片手に確立された漢詩規則にきちんと則れば、たとえ漢語が発音できなくとも正しく韻を踏んだ漢詩が作れたのと同じである¹⁰⁾。

程少軒は、甘粛省の放馬灘から出土した秦簡『日書』の「康於黔首心」や「以政下黔首」は本来「康於民心」、「以政下民」という四字句だったと指摘する¹¹⁾。秦は民のことを黔首と呼んだ。そのため、それまで「民」と書かれていた語を無理に「黔首」に書き換えるという事態が起こった。その結果「民心」という熟語すら破壊し、字数も韻も合わないという齟齬が発生したというのである。この説が正しければ次の二点を指摘することができる。一つは日書という古い卦辞にも四字一句で押韻する韻文が用いられていたということ、そしてもう一つは、そうした韻文を破壊してもすでに問題とはならなかったということである。韻文が優先されないということは、すでに伝承の媒体が声から文字に完全に移行していたということの表れだろうか。これについては今後の課題とし、今回はここで擱筆したい。

- 1) 平勢隆郎『春秋晋国侯馬盟書字体通覽』東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター、1988年
- 2) 張家山二四七号漢墓竹簡整理小組編著『張家山漢墓竹簡〔二四七号墓〕(釈文修訂本)』文物出版社、2006年
- 3) 富田美智江「『左伝』賦詩と春秋時代の『詩』」『史学』第77巻第2・3号、2008年12月
- 4) 従来の説では南詔の支配者層は現在のイ族系統の民族であるとの説が有力である。
- 5) 本書Ⅱ「ペー曲台本集成」付録2「ペー曲台本の音仮名率」参照。
- 6) 古屋昭弘「上古音の開合と戦国楚簡の通仮例」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第2分冊54巻、2009年2月
- 7) 古屋前掲論文
- 8) 古屋前掲論文
- 9) 本書Ⅰ-3「山花碑注釈集成」参照。
- 10) 金文京『漢文と東アジア——訓読の文化圏』岩波書店、2010年
- 11) 程少軒『放馬灘簡式占古佚書研究』(中国)復旦大学博士学位論文、2011年

2013 (平成 25) 年 2 月 22 日 印刷

2013 (平成 25) 年 2 月 28 日 発行

総合文化研究所紀要 第 19 号 (3-2)

編 著 者 遠藤 耕太郎

発 行 共立女子大学・共立女子短期大学総合文化研究所

発行責任者 半 沢 幹 一

〒101-8437 東京都千代田区一ツ橋 2-2-1

TEL 03-3237-2598 FAX 03-3237-2668

E-mail soubun@kyoritsu-wu.ac.jp

印 刷 所 (株)理想社

Bulletin of Center for Interdisciplinary Studies of Science and Culture
Kyoritsu Women's University & Junior College.
No.19 (3-2)